女子文壇

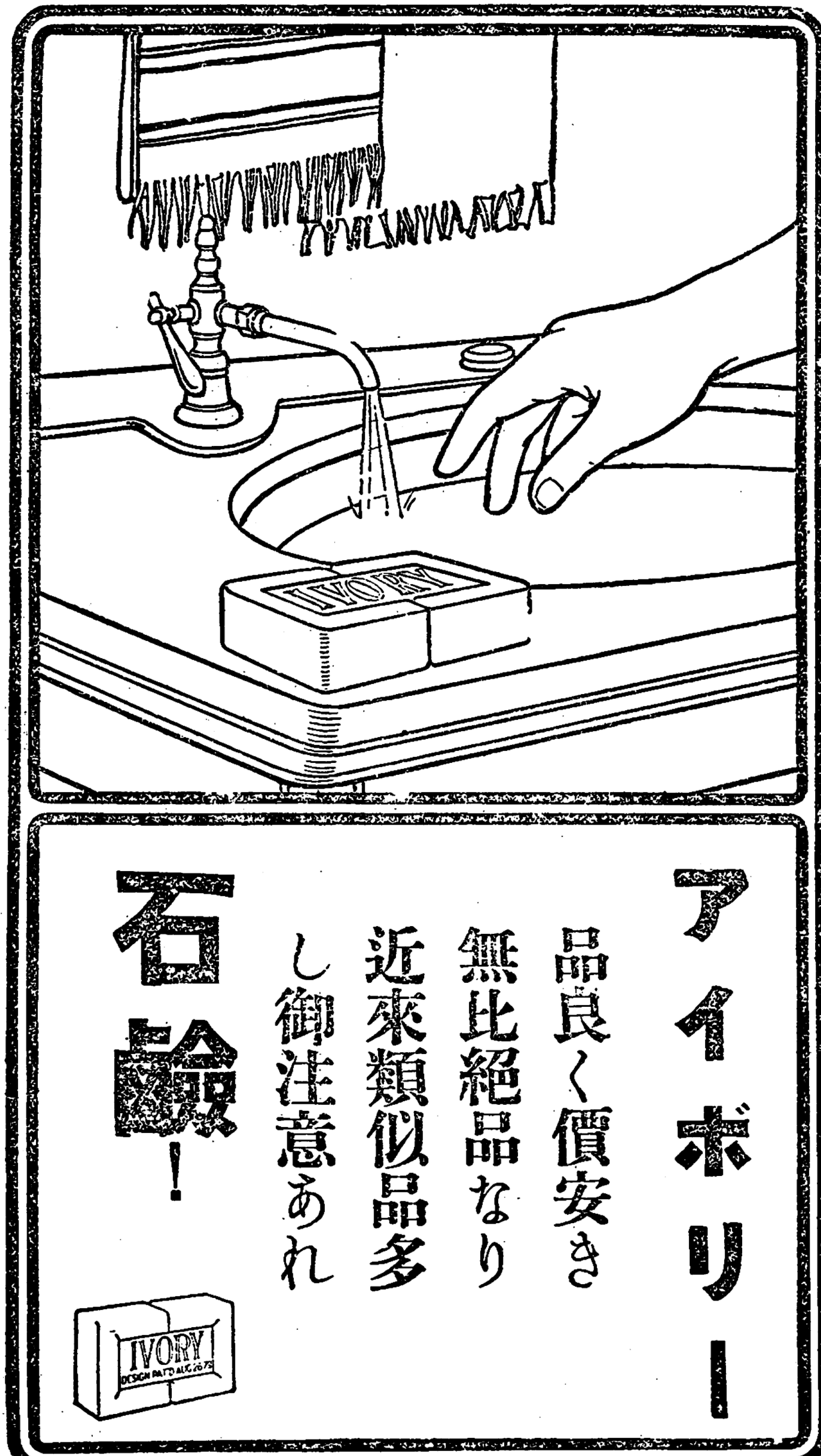
明治四十三年八月廿五日印刷納本
（毎月一回二十五日印刷納本）

九月號

第六年第十二號

明治三十七年十二月十九日
第三種郵便物認可




IVORY
アイボリー
品良く價安き
無比絶品なり
近來類似品多
し御注意あれ
石鹸！
IVORY

女子文壇 九月號（第六年第拾貳號）目次

【卷頭口繪】

【本欄】（一—五六）

武州多摩川の秋



大下藤次郎筆

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

專賣特許 エンゼル香油

田原藥學博士の實驗御證明

清浦子爵 高山 三上兩博士の實驗有効御證明東京美術學校千頭教授の實驗有効御賞賛狀其他大家より多大の高評を以て迎られたる特許エンゼル香油は毛髪を黒化漆の如き光艶を出し且毛根を養ふ偉大の特効ある最新發見の高等香油にて殊に本品には目下歐米にて最も流行せる『ヘリオトロープ』『バイオレツト』『ホワイトリリー』等の高雅なる芳香を有し御使用後は馥郁として長時間保ちます故別に他の香水等御用の必要は有ません又くせ毛の方はB號エンゼル香油御使用有れば如何なる天性ハ縮れ毛にても自然に矯正する不思議の特許品で有升

紳士貴婦人御用高等香油



見よ!!

◎實價は小罐六十錢中罐壹圓大罐壹圓八十錢と天性難毛用特製三圓五十錢の四種で送費は市内は何れも七錢內地は小中罐迄は十一錢大罐及び特製十五錢です

東京市本郷區東片町十五番地

エンゼル商會

電話下谷二五六九番
振替東京二〇七四三番

石鹸一個の代金を節して本書を熟讀實行せば最幸福なる根本的の美人たるを得べきなり

最新美人法

一冊送料共金廿七錢 振替送金は金廿八錢 切手代用は三錢を十枚

本書は醫學上藥學上の學理實際と幾多令孃令夫人の實驗とより成り然も何人にも實行しやすきを本旨として記述せしもの也。乞ふ世の雜書と同一視する勿れ。

白色法 醫學上より見たる白色法●色白くなる飲み藥●色白くなるつけ藥●實驗有功の白色法●色白くなる簡單なる方法●キメを細かにする法●日にやけるを防ぐ法●手の色を白くする法其他種々

美髪法 髪の毛を美しくする法●髪の毛をやわらかにする法●つやをよくする法●毛のぬけるを止める法●毛をのばす法●ふけをとる法●ちゞれ毛くせ毛うす毛赤毛白毛等をなをす最良法其他種々

美顔法 愛嬌と愉快●顔を洗ふ最良の方法●油の多過ぎる顔と油のたらぬ顔●赤すぎる顔と青き顔との療法●顔を醜くする食物●しわのよらぬ法●歯を白くする法●ニキビそばかすホクロの療法等

治療法 やせる法こえる法●鼻高くする法●聲をよくずる法●おしろいやけイボあざシモヤケわきがヒゼン田虫タコなまず等の最良療法●毛をはやす法●赤鼻眉毛のさかさ毛手のあれを治する法●其他

養生法 根本的美人となる平素の養生法●食物と美人との關係●充分に睡眠せよ●寝る時の心得と寝具●運動はかくの如くすべし●醜婦も此の如く常に注意せば亦美人に優る●婦人病と顔色の關係

化粧法 入浴中行ふべき美人法●此の如き化粧品は反つて恐るべき結果を來す●化粧品の選擇法●おしろいのつけ方●鼻高く見する法●目を大きく見する法●唇をうすく又は厚く見する法其他種々

服裝法 ●服裝を美しくする法●衣服の材料●衣服の洗濯●衣服の色●衣服の縞●呉服店にて染色縞柄を見る秘訣●此の如き模様と縞柄とは甚しく美人を醜婦とす●帯のしめ方●前のあわせ方等種々

これ目次の大略のみ、眞に婦人の寶典也。眞に少女の必讀書也。御身の幸福を得べく一日も早く本書を讀め。

發行所 東京神田錦町三ノ二 振替東京一六一八番 學友社

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



向嶋百花園



東京錦石堂石印

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

賀陽宮邦憲王第一王女由紀子女王殿下





男爵九條良致氏夫人武子

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

悪筆は一生の損

習へば直ちに上達すること全く機械的なり

▼新專賣特許を得て大改良大發展を企つ▲

舊 專賣特許

舊 實用新案特許

新 專賣特許

今同新に得たる專賣特許を從來の二特許と組合はせたるを以て頗る嶄新奇拔なる最大速成法となれり

▼此際入會者に大特典を與ふ

▼男子部小學部書者

稻川雲谿先生

玉木愛石先生

▼女子部の書者

小野鵞堂先生

外講師……大家數拾名

▼見本詳細會則無代進呈す

帝國習字速成學會

東京本郷區大學正門前

電話下谷 三〇壹壹番

電話下谷 三貳壹〇番

『注意』 近來本會と類似の者多し故に本會名稱と所在地に御注意を乞ふ

新輸入 美容 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體純白色に變化し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ實に奇効顯著の美容新劑價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服藥 サーサパリラ

價壹劑貳圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる清血劑にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒瘡毒リウマチス等の病毒及び男女體内の惡血毒血惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を純白艶美ならしむる奇効顯著の内服水劑なり（注意）從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり（今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候）色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個一函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は世界第一等の良品にして化粧品の大王なることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薰るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉瓦混同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む）

以上三種專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

有効保險 前代未發 秘傳奇術

全壹冊正價郵税共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

（目錄大要）神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰〇の爛れを治する法●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香料製法●美顔クリーム製造法●音聲を清良にする法●歯痛即治並製法●髪の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髪必生法●臭汗治法●白髪を染る法●髪毛の光澤を美にする新藥●歯磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室内を爽涼にする法●紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず饑ゑざる法●拔毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盗人を見顯はす神術●女に〇れらるゝ藥法●硬き毛髪を柔軟にする法●思ふ女を〇〇す藥法●堅き女の氣を〇〇す藥法●陰〇を長大にする藥法●そばかす必治法●女を〇〇にて泣す神藥●直に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する法●閨中の秘藥●即座に男精を増す法●毒蟲に螫れたる時腫ぬ特効藥●避姙の仙術●神速に精力を強む法●即座陰身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顔赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治す妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を〇せしむる法●記憶力を増進する法●女孕みの仙術●男女檢毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黒子役光の奇術●老人終身取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする内服劑新法●寶丹の藥法●腹痛速治法●疥癬病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●脹滿を治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じたるを治する法●痳病の治法●月經の不順を治する法●淋病の妙劑●歯痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る最新法●頭髪を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒の必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法●シャクリ即治法●聲を能くする新術●白髪豫防新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを拔く新法●乳の出る妙藥●陰部の諸瘡治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齡により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艶美ならしむる法●毒酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏消子洗濯新法●髮の汚染を落す新法●新しき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顏術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す合計壹百四十法あり代金即刻送本す

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館商店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

九月一日發行の

第十巻第拾壹號

女學世界

どんな事が

書いてありませう?



こんなことが書いてある

その體裁は 洋裝菊判紙數二百八頁石版寫眞口繪は大に振つたものである

その價は僅かに 一册廿錢郵稅二錢である



（は／四）



子爵毛利元秀氏令妹　政子
（學習院女學部在學）



金澤素封家西永薫氏令孃喬子



男爵東久世秀雄氏及夫人小六子と愛兒

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

父「暑くはあるし
水害後の流行
病騒はあるので
生水は實に危險だ

母「シトロンは蒸溜水で
調製してありますから
安心して飲めます

姉「シトロンは
私しおいしくてヨ

弟「僕も大賛成ダ



梅毒根治新發

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の

ばい毒根治特効

新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓つて根治**することと確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。

藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

生殖機病特効新劑……（獨逸新輸入藥）

内服 ヨヒンビン

拾錠入壹劑 藥價送料共壹圓九拾錢 郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授博士スピーゲル氏の發見に係る男女**生殖機不能**即ち**陰萎病**。**腎虛**。**神經衰弱**。遺精。夢精し早漏、過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖虛弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不妊娠。冷症。發育不全等に用ひ天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力を增進**し生殖器を強健ならしめんと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**世にありふれたる無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顏赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質過多質脂肪の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓廿錢着金即刻送藥す

世界唯一 痳病消渇の根治新藥

痳滅（りんめつ）

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して**痳病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より**根治**するを確證す

但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割增しの事

わきが 腋臭 全治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても忽**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦腦を脱せよ

價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓參拾錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は獨逸醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視することと勿れ

特別製分 金五圓三拾錢
大瓶貳圓卅錢
中瓶壹圓廿錢

以上六藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

第四回 新學期開始本月限り入會金免除

▲東京時事新報曰く　日本女子大學校が教育擴張の大運動第一着手として毎月二回發行する物は本講義なり成瀬校長の實踐倫理學、福來博士の心理學、大澤博士の生理學、浮田博士の應用社會學を初め**家事**料理及び**裁縫**等にも一に專門の大家に依つて叮嚀に講述せらるゝを以て**地方在住**の諸孃は本講義に依り高等の學術を修得するの便あり

▲東京朝日新聞曰く　四十二年四月開講以來非常なる發展をなしたる**女子大學講義**は**眞摯**と**熱心**なる**講義**振り大に女子の歡迎を受け居るが十月より第四回新學期を開始して新入會者の便宜を計りつゝあり

女子大學講義

日本女子大學校櫻楓會編輯

どうぞ見本を請求して下さい　端書にて申込次第進呈す

講義錄と實益　徒に學理の研究のみに止まらず實用を旨とし殊に賢母良妻に必要なる育兒家事料理裁縫等の實科目を適切に講義せり

講義錄と程度　普通學科を平易に解釋し女學校卒業程度にて十分に解釋出來得るやうに編輯せり六づかしからんと思ふは誤解なり

婦人雜誌家庭　會員には毎月婦人雜誌家庭を無代に配布せり本誌は櫻楓會を中心とせる現代の女流記者が毎月熱心に編輯する物也

發行所　東京小石川區久堅町百八番地　**精美堂**（電話番町九三二）

肺病新藥

私儀明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り各地の醫藥は勿論妙藥なりと聞く毎に諸種の賣藥を服し東京市内有名大家諸先生の診斷服藥し猶ほ横濱獨逸病院長(ドクトル)の藥劑も其効なし豆州熱海相州箱根上州草津温泉何れも兩三年入浴するも異狀なく其外鍼灸限なく療養したるも効驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々咯血して皮膚青白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳痰甚しく骸骨同樣に成り最早此上は致方無之只死を待の外なし然るに私は病中臥蓐の内と雖ども常に書見するの癖あり一日家藏の古書を點見する中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議に爽快を覺え尚續て服するに益々快方に趣き四週間餘りにて全く根治したり既に死期に臨みたる大患を斯くも容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此の嬉さの餘り爾來肺病患者と聞く毎に其實を告げ試藥せしもの五十四人皆共に全治せざるものなし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て寧ろ之を世に公にして數萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名づけ内務省の御檢査を蒙り弘く世の肺患者に發賣する事となれり然る處本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尚ほ淺きにも不拘内地は勿論既に**米國紐育市タイヤーガ商會**及び**印度パタビアヒイアエーテス社**等へ續々輸出し專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に四千六百餘に達せり然るに此奇藥を知らず種々に迷ひ病苦に惱める人士なきにもあらじ天壽を完ふせんと欲せば速に本劑を服して難病根治の一大幸福を得よ

藥價……七日分弐圓●十四日分四圓●廿一日分五圓●卅五日分七圓五十錢●七十日分十四圓遞送料十錢●爲替局名は大森局宛取組の事

主治効能●肺結核●肺炎●氣管支加答兒●肋膜炎●肺炎加答兒●たん咳等肺病一切より起る諸病を根治する偉功あり
用法及び詳細は本能書にあり但し本舗へ直接御注文の時は病狀の模樣を詳細に記入申込を乞ふ

東京府下荏原郡入新井村字不入斗二百十四番地

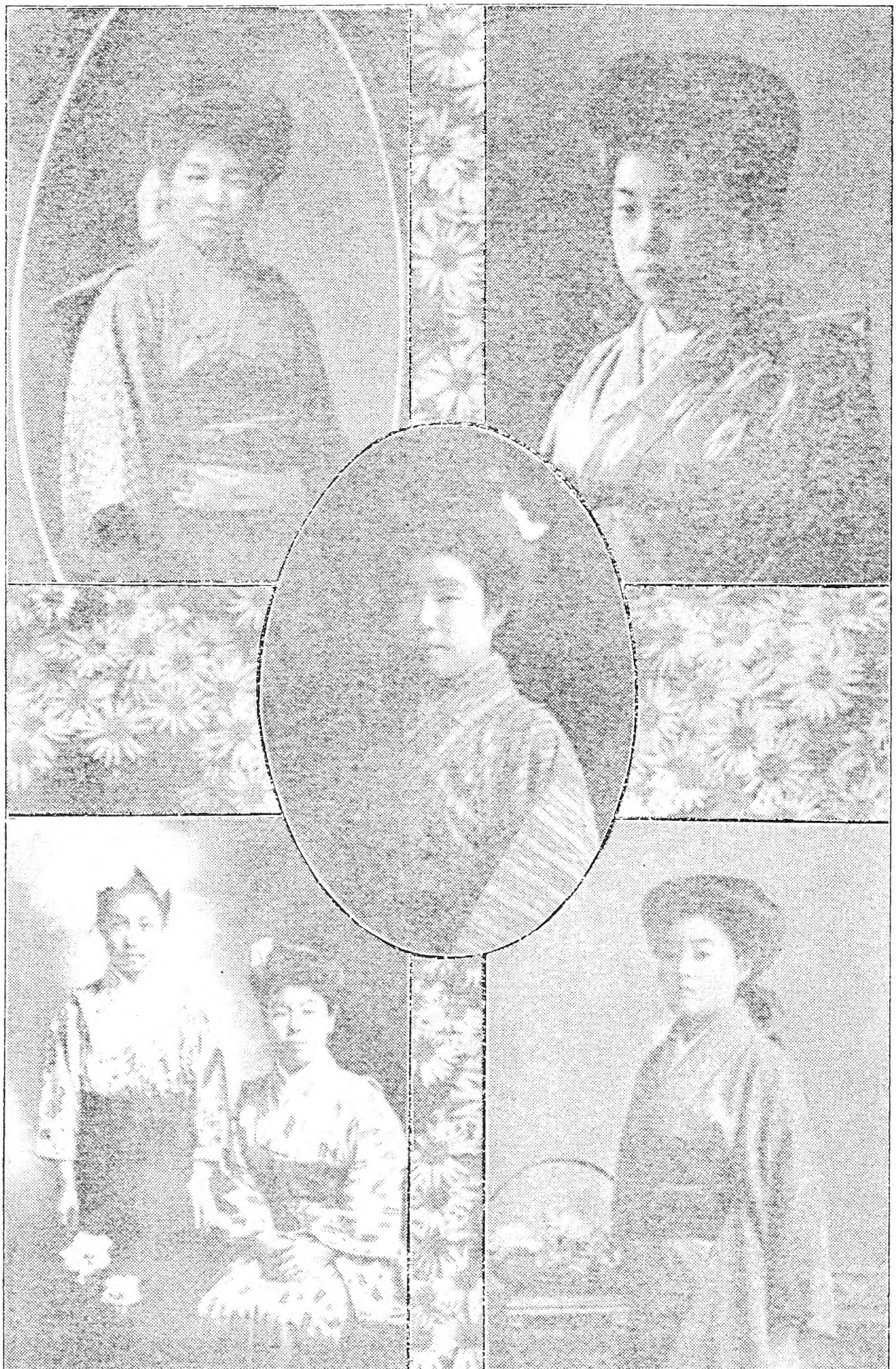
調劑本舗　川名助次郎

(電話大森六九番)

東京神田區花房町二番地　山崎帝國堂
東京淺草並木　遠山藥店
横濱吉田町二丁目都橋際　永井永進堂
東京銀座一丁目　佐々木玄兵衛
東京神田區橋本町二丁目　福井甚藏
靜岡市七間町　市川商店
北海道函館辨天町　國領平七
埼玉縣熊ヶ谷町　櫛田金造

肺治散特約店
東京銀座二丁目　岸田吟香
東京銀座三丁目　松澤八右衛門
東京神田區鍛治町　大木合名會社
東京日本橋通　中田清兵衛
東京日本橋區本石町　守谷萬次郎
東京日本橋區瀬戸物町　玉置金八
東京日本橋區本町　大橋博愛堂
東京日本橋通　大野傳兵衛支店
東京兩國米澤町角　吉田安五郎
東京日本橋區上槇町　安川晃榮堂
東京兩國米澤町　大木口哲本店
大阪堺筋伏見町　谷同春堂
大阪西横堀舟町橋西詰賣藥部賣株式會社
越後國長岡市　藤井卯吉
長野市大門町　小林傳兵衛
廣島西南部町　賣藥會社
相模横須賀汐入町　茶本商店
(全國到る處の有名なる藥舗にて販賣せり萬一無之地は本舗へ申越次第特約す)

名士の令孃



實業家土田政次郎氏令孃米子（學習院卒業）

敎育家藤田文藏氏令孃勝代子（成女校卒業）

法學士石井常英氏令孃喜久子

向て右バチエラー、オブ、アーツ北村美那子女史令孃英子（女子學院在學）

故陸軍少佐小藤亨藏氏令孃

滿子（お茶水高女卒業）

名士夫人



伯爵酒井忠篤令嗣忠良氏夫人萬千子



陸軍大尉力石實雄氏夫人冬子



醫學士曾矢精太郎氏夫人三千代子



理學士大築佛郎氏夫人初枝子

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ



らい病根治新劑

藥名……レプロイス

藥價送料共壹劑分五圓拾錢特別製分拾圓拾錢

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治することは到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ。輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を遂ぐ。

美き聲の出る新藥

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

發聲藥は古來甚はだ多し然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし獨り本劑の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり本劑は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑也何程音聲惡しき方又聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發することを確證す

腦病を根治し記臆力を増進する靈劑

腦記臆増進丸

(藥價)七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢(送料各拾錢宛)

本劑は獨逸大醫スクリーボワト氏の新處方に基き醫學的の元理に徴し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記臆力大に増進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に増進すること誓て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絶顯著なる奇効を知れ

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速に安全に快通に

流下ずる特効あり本劑參劑分を服すれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を連用せば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず安全に流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及び惡血毒血を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効なる類似偽藥は頗る用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまず、いぼは拾日目に必ず美麗に除去すること保險附

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛に除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へ全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割増し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす)着金即刻小包郵送す

以上五藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

夢二畫集



夏の巻 五版 定價五拾錢 送料八錢

旅の巻 三版 定價七拾錢 送料六錢

春の巻 六版 定價五拾錢 送料八錢

花の巻 四版 定價四拾錢 送料四錢

秋の巻 近刊

發行所 東京麹町二丁目二番地 振替東京二〇九一四番 洛陽堂

(は ノ 四)

實業家夫人



東京電力會社取締役立川勇次郎氏夫人かほる子

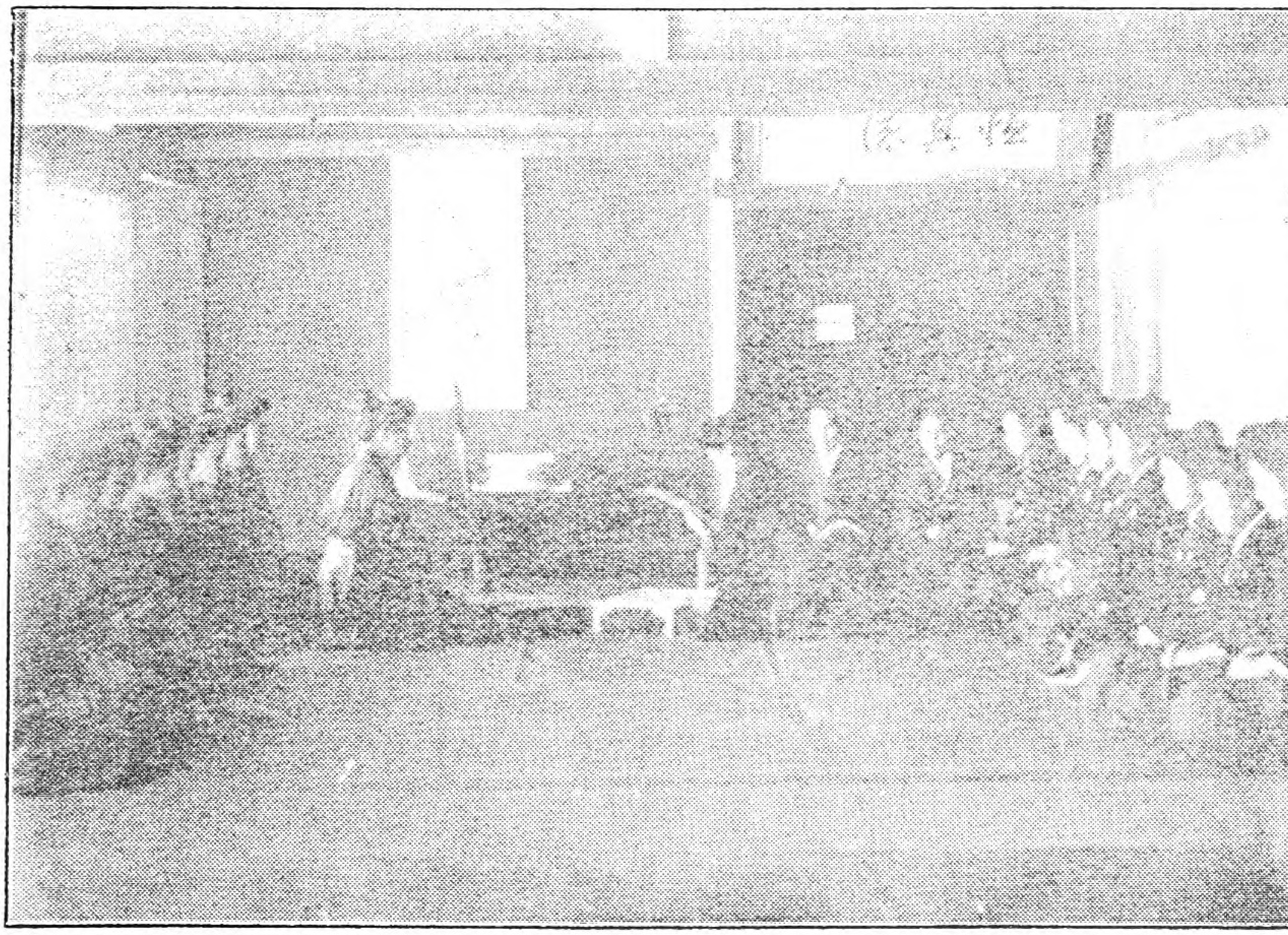


三井銀行取締役三井守之助氏夫人楢光子



帝國冷藏會社專務取締高橋虎太氏夫人及令孃

石川縣立高等女學校紀元節歌合



(金澤ゆふもや女寄)



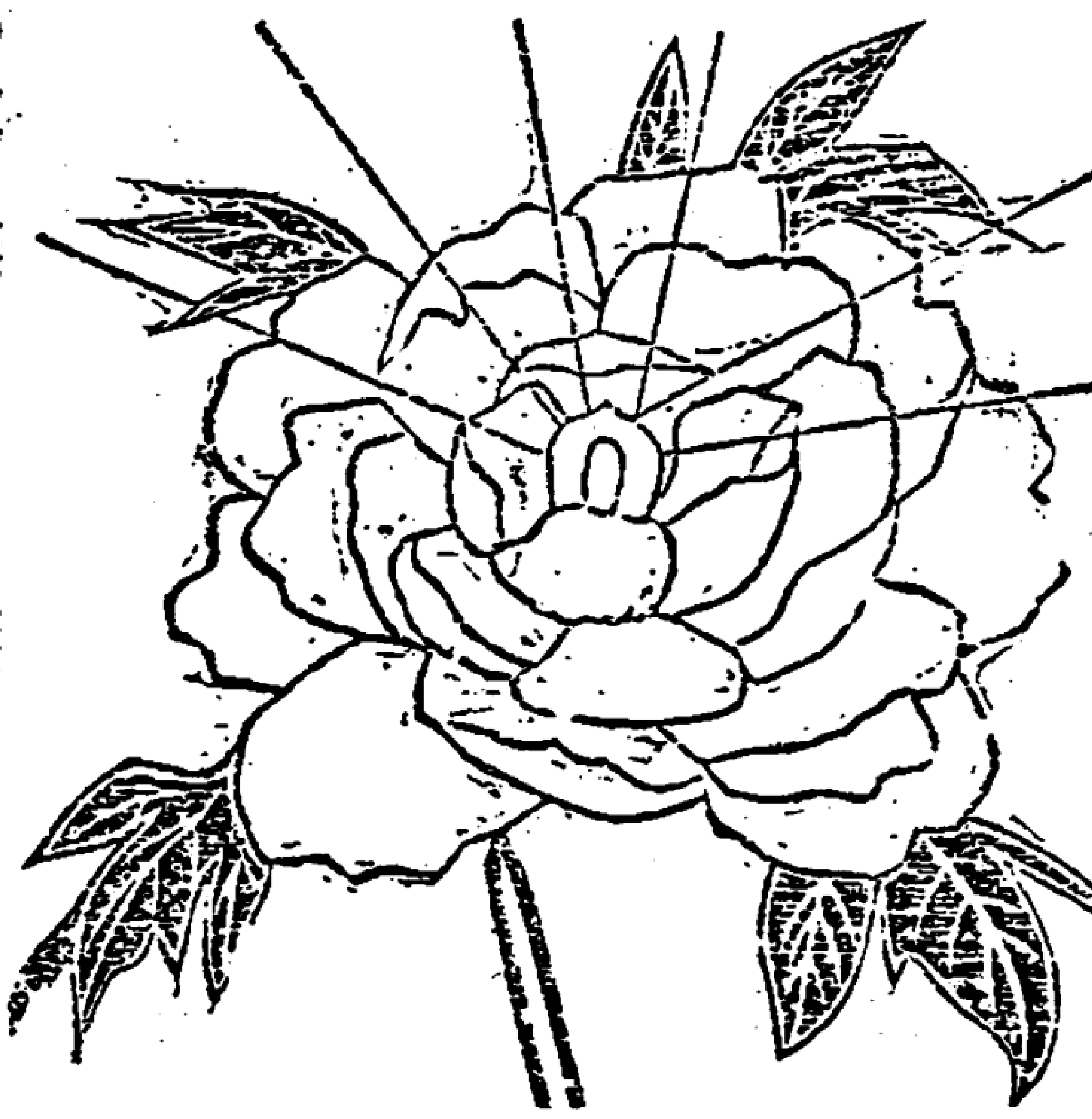
栗原裁縫所 (肥前佐賀郡久保田村所在)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

婦人の美容を遺憾なく現はすは電氣簪にあり

電氣簪は高尚優美なる造花に、最も巧妙なる電氣を裝置し、夜間是れを使用せば、花心より美麗なる電光を發し、優色四邊を照らして、眞に美の極を現出し、又晝間の使用には、輝々たる電球花心を飾りて、他の簪の遠く及ばざるの美を添ふるものなり。

電氣花簪



電球は永年の使用に堪ゆるを以て造花のみ替ゆれば各自好みの簪を得るに容易に尚電光は明滅自在に行はれて些の危險なきものなり

定價表

甲號 貳圓八拾錢
乙號 壹圓八拾錢
小包送料 拾貳錢

御注文の節は御好みの花、及色合、其他御好みに應じ御申越下され候は丶適當の品を見計らへ直に發送仕るべく候

本社附屬工場の製出に係る電氣花簪は電池を美麗なるサックに納め造花は通常の花簪に劣らざる最も優良の原料を以て製造したるものなり

◉金屬特製電氣簪 本品は全部金屬製にて堅牢無比最も優良なる模樣種々あり 甲 參圓 乙 貳圓 送料十二錢

◉新案電氣襟止 本品は男子のネキタイ及び婦人の帶止等に兼用なし得 甲 參圓 乙 貳圓 送料十二錢

東京市神田區西小川町貳丁目九番地

製造賣發元 （振替口座東京六〇四五五番） 盛文社電氣部

●御卸部開設 取次販賣希望者は返信券添へ御照會下され度候

懷姙避姙自由自在器

子のできる器及子のできない器

（▲兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自療器）

醫學得業士 齋藤乙吉先生發明

實用新案登錄特許

アトシア atocia

（膣內挿入小器具）

[illegible]

世界一手專賣元

（東京市神田區五軒町十九番地 電話番號下谷五百四十六番）

日新館藥房

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

婦人画報

九月一日發行 九月の巻 一冊 廿五錢 郵税二錢 六冊税共壹圓五拾錢 十二冊税共二圓八拾八錢

◉色なる水 彩色美人畫 井川洗厓筆
◉婦人富士登山 下より頂上迄
◉夕陽丘高女と女學生の小鳥飼養……
◉清水谷高女校長の訓話と女生の園藝……
◉いろくな女の手振……
◉面白き夏の幼稚園 ◉京の花賣女……
◉女子高師講習生の洗濯としんし張り

畫報

東宮同妃兩殿下御避暑……
山階宮女王殿下と香川家令分孃
東伏見宮御避暑
別邸に於ける九條岩倉兩公分孃

◉梅田高等女學校生徒の裁縫と遊戯……
◉金蘭會高女の理化教室と體操……
◉小兒の表情いろく
◉避暑地に於る小園、笠原伯、高木男、近藤、松村諸氏一家
◉ダリヤ展覧會と朝顔◉櫻蔭會の集合
◉園田、大津、村井諸氏の別邸◉分孃鑑
◉仲好き姉妹の一日
◉富山の製藥所◉新郎新婦……

讀物

應接振から見た現代の貴婦人
京都大阪の女學校
西洋料理と日本料理 手塚かね子
忠婢おさん 遠山稻子
情死せし人 三宅花圃
食卓上の教育 高師教授 乙竹岩造
婦人の理想は何 法學博士 穗積陳重
英國女權擴張と我家庭 法學博士 阪谷芳郎
婦人の虚榮心 文學博士 元良雄二郎
老人と孫と妻と子 海老名彈正
文明と婦人 文學博士 高楠順次郎
子供のいたづら 文學士 倉橋惣三
樂み無き土耳其婦人
洗濯の仕方 宮川すみ子 ▼東京名物
好ましからぬ避暑地土產 醫學博士 弘田長
惡魔の手に囚はれし糸さん 尾島菊子

東京麴町區飯田町四丁目四番地 東京社 電話番町二三三九 振替口座一八一八

本誌ノ名譽賛助員ハ當

模範

は一家の主人細君子女婢僕にも讀むべく眞に家庭の和樂雜誌なり

毎月一回定期雜誌

第壹號

九月十日發行

模

◉現代社會に於ける模範の意義……大隈伯爵

◉蓄財散財論……澁澤男爵

▼應接振りに就て外國人に學ぶ可き事……林伯爵

▽ナイチンゲール孃の永眠……赤十字副社長 小澤男爵

▼大國民としての我國民の缺點……法學博士 菊池武夫

▽實業家には斯の如き資金融通機關あり……勸業銀行貸付課長 水野勝興

▼農村救濟問題と青年會の覺悟……農學博士 横井時敬

◁人物月旦▷

統監寺內大將

名士の名士觀

◉大隈伯 ―― 澁澤男爵

◉澁澤男 ―― 大橋新太郎

發行所 東京神田旅籠町一 文光堂

代ノ知名大家ヲ網羅ス

範 三

定價

一冊郵稅共 金拾六錢五厘

半年分六冊 金九十三錢

一ヶ年分十二冊 金壹圓七十三錢

◉壹年の純益二萬圓の綠茶行商……力行會長 島貫兵太夫

▼グラツトストーン夫人を想ふ……島田三郎

◉我國結婚の改良意見……佐治實然

▼自働車製作の苦心……芳賀技師

◉華族が家を治むる方針……松平伯爵

▼金一圓で家運を挽回した一少女……一記者

◉永年召使を勤續させた實驗……大佐夫人 富永延子

▼青年會の發展と其傾向……井上王山

◉私の家庭と西洋風……棚橋絢子

▼日に焦けたのを療す法……遠藤はつ子

○婦人は家を治れば澤山字……山祿子

○模範會社參觀記……一記者

○一青年珍木を發見す……

○何處の家にも長所あり……河井醉茗

○盲啞教育に就て……小西町田校長

○關根彌次郎(講談)……一龍齋貞山

○哀れなる我が發明界……林理學士

○定五郎橋と其由來……記者

○少壯工業家の奮闘實歷談……

○小供の熱誠大人の風紀を矯む……守屋東子

模範

模範は一般の社會を通じて總ての人に趣味及智識を與ふ

口畫及び內容は每頁悉く精巧なる寫眞版を挿んで錦上花を飾る

振替口座東京一九五五

賣捌 東京堂○東海堂○北隆館○良明堂○上田屋○至誠堂 其他有名書店



女子文壇

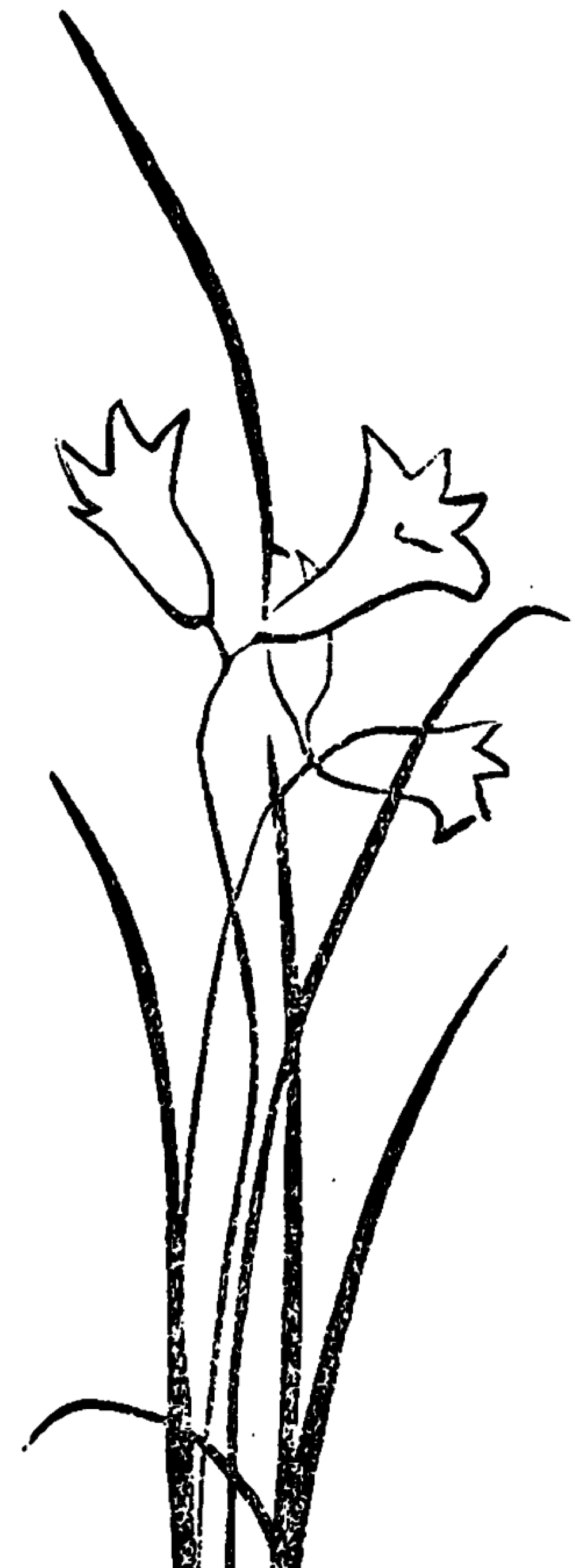
第六年第拾貳號

明治四十三年九月一日發行

新秋

秋が來た
稻の熟する時
櫻の葉の落つる時
水の澄む時
露の白き時
燈火の懷しき時
栗の甘き時
女郎花の黄なる時
男の力を想ふ時
草の葉の病む時
鳥の音の鋭くなる時
家庭の溫くなる時
武藏野を歩く時
大風起り雲飛ぶ時
蜻蛉來る時
女の襟もとの正しき時
睡眠足りて夢に驚く時

『新らしき女に』就いて



文學博士　坪内雄藏

今度關西で、私が講演した所謂『新らしき女』の筆記が、大阪の新聞に載つたのを見たと言つて、昨日も河井君が轉載をさせて呉れとの、お話しであつたが、あれは困る。一度も目を通さない、甚だ疎略な要點を逸した筆記であつて、間違が多い、のみならず、略々筋丈けを傳へてゐる場合にも、言ひ表しが私の言つたのとは、まるで違つてゐるやうな事もあつて、誤謬に近い。神戸の新聞に載つたのは一枚も讀まぬから知らぬが、大阪のは『毎日』のも『朝日』のも、ほんの二三度五六行宛見てさへ其の通り、中には獨逸の著者の名を發音をも誤まつた上に、どう云ふ心算か、英吉利の著者として書いてあつたのもある。讀めばつい正誤が申込たくもなり、其れを始めれば四日(八時間)に亙つたんだから際限が無い、其れ故わざと讀まぬ事にした、あれを御轉載は困る。

折角のお需めだから、何かの御參考にもならうから

右の講話の大意丈けを述べませう。

私は最初に「新らしき」と言ふ語に二樣の意味がある一つは現下目前盛んに流行して居ると言ふ意、二は今漸く成り出でつゝあると言ふ意だと說いて、二者共に褒貶の意を含まず、善惡利害に關はらぬものである、と辯じ、私の所謂「新らしき女」も其の意味で、第二者に屬すと言つた。それから新人に二種あつて、破壞的と建設的で、願はくは二者を兼ねた新人を得たいが其れは存外稀であつて、別々に成り易いといふ事、及び其の見分けの存外容易で無い事を說き、それから文明の進步は善い意味で言ふ新人の力であると前提して四五の歷史的實例を引き、ロマンチシズム時代の新人の特質を評し、一時アイデヤリスト型といふのが、獨逸を中心にして歡迎せられ、追々他國に傳播し、就中露西亞に浸潤して、ツルゲネフの作に根深く現はれ、其れが一轉して、大反動の結果、リヤリスト型又は實際家風など名づくべき新人が起つた事を說き、此二種の性格を分析的に紹介した。それから更らに、近年に近づいては、其眼中に社會とか國家とかを有たない現實主義者卽ちリヤリスト型の變態ともいふべき絕對自分本位の新人が、種々の分派を爲しつゝ現はれた事を說いた。其の例として所謂デカダン風の、能ふべくんば太く長く且つ濃やかにライフを樂まうとする新人を紹介した。

其れから轉じて、「新らしき女」に移り、新らしき男は、近時の內外の小說に明白だが、新らしき女は存外小說には多く見えない、寧ろ脚本に見えて居ると說き其の理由を辯じ、それから劇と人生とは相因果するものと言ふ自說を前提として、最初は劇にのみ見えた女が、今は現實界に輩出しつゝあると說き、更らに轉じて「女子問題」の過去現在の大要を語りました。卽ち例のウオルストンクラフトの「女權辯護」出版以來、英米を先達として、女子問題が長足の進步を爲した經路に就いて語り、最近の女子問題と、過去の男女同權論との相違を說き、「女は須らく女らしかるべし」と言ふ輿論的訓戒の內容を分析解剖し、轉じて近世劇に現

はれた、「反撥し背反し自立せんとする女」の代表を擧げんとして、其れに先だつて、所謂新らしき女に三類あることを說き、「人形の家」の女主人公ノラ、「故鄕」の女主人公マグダの如きは、敎育と待遇との爲めに、誤られて寧ろ止むを得ず反撥したるもの、卽ち激成せられて新らしき女とならしめたる女であると言ひ、右二脚本の筋を語り、同時に女主人公の性格を、可及丈け具體的に解剖し、心理的兼倫理的（訓戒的の意義ではない）批判を試みました。

第二類の女は、時間が足らぬのと、二つには今度の講演の目的には、必ずしも必要が無かつたので省き、第三類の「生來の新らしき女」へ移り、其の標本として「ヘッダ、ガブラー」の女主人公ヘッダと、「ウオーレーンが妻の職業」の女主人公ヴィヴィとを、前と同じき方法で、心理的兼倫理的に分析批判して紹介した。卽ち二人共に西洋に於いてすら、二十年以前には殆んど全く見出し難かつたタイプであらうと評し、二者共に女丈夫型なれども、如何にも智慧に於いて秀でたる處あつて、つまり自意識の强烈な二十世紀前後に於いてのみ見出し得らるべき女たることを論じ、且つ二者共に在來の俗の所謂女らしき性を破壞せんとする傾向を有すると言ふ點に於いて相一致すると辯じた。しかし一は空想家的にして、消極的にして破壞的であり、一は實際家的にして、積極的にして建設的である。又一はロマンチストであり、一はリヤリストである、一は貴族的であり、一は平民的であると言ふ風に辯じた

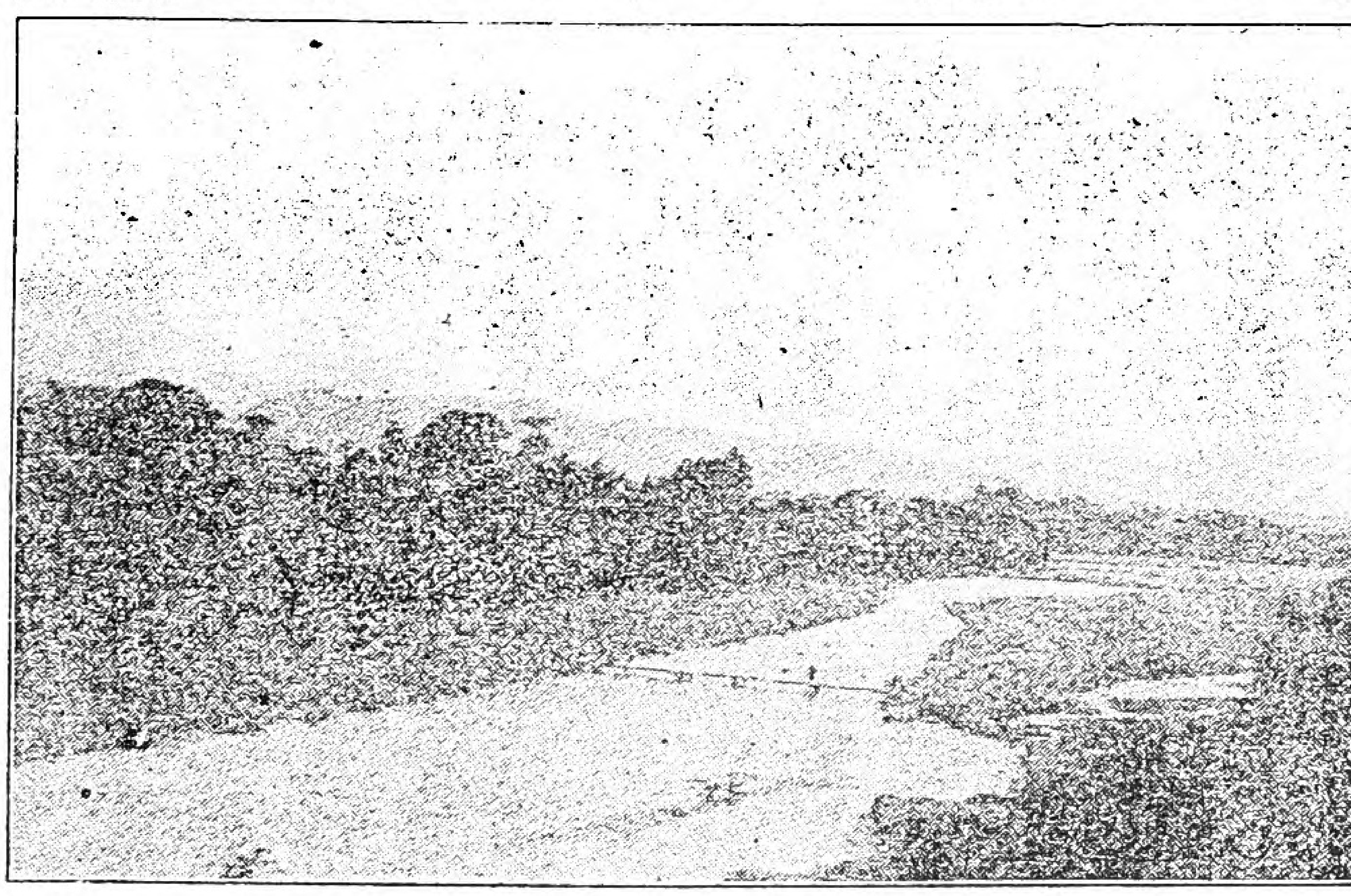
最後に、ヴィヴィの作者の意は、寫實にあるか、訓戒にあるかと云ふ事に論じ及んで、其の寫し出した結果を見れば、確かに寫實的の價値をも有つて居れど、作者の本意は、所謂文明の食傷に反動して、精神的治療を施さんとするにあるや明らかであると論じて、物質的文明の弊に劣らざる精神的文明の弊を聊か論じヘッダやヴィヴィの如き女が、果して將來の理想的女なるや否やは、云ふまでもなく大疑問であると言ひ、併し解剖分析の結果によると彼等の性格の缺點は略々明らかであると說き、併しながら世を擧つて人々の自意

識が進歩し來つたる以上は、かゝる女の追ひ〳〵輩出することは、免れざる順序であると說き、よしや女は飽くまでも男とは資格天職を異にせざるべからざるにもせよ、卽ち女は長へに或る意味にて「女らしさ」を具へざるべからざるにもせよ、其の所謂「女らしさ」は、在來の「女らしさ」とは全く內容を異にせざるべからざるものであらうと結んだ。此論の序に、在來の所謂女らしい女は、男の都合上から馴致したものであつて、自然のまゝの女ではない、女の都合上から見れば寧ろヴィヴィの如くにしてこそ、*joy of life* を全うするに近い、所謂美人は *degenerate* であると說き、社會進化の歷史を見れば、女子全權時代もあり、男女同等の時代もあつた、要するに女子の待遇法は其の國の文明の尺度であると說いた。

　惟ふに、古來、內外共に、怖しく人間の心を支配した三大說がある。其の一つは地球中心說である、其の次が人間中心說、第三が男性中心說である。此の中第一は、ルネーサンス時代に、コパルニカスの地動說で破れ、第二は十九世紀に、ダーウィンの進化論で壞れ始めた。第三は今猶ほ內外に勢力を維持して居るが、早晚壞れないを得ないであらうと云ふ理を略說して、女は前にも言ふ如く、何か男の爲し得ざる天職を有してゐるのであらうと思ふが、其れを明らかに知る爲めには、先づ十分に自由を與へて、男子の爲す限りの、あらゆる仕事を勤めさせて見るが必要である、勿論之が爲めには幾らかの犧牲を生ずるでもあらうが、其れは止むを得ない、何事にも弊は伴ふ、或る一代の損害や危險を多少忍んで、次々の時代の安寧や幸福の種を蒔く法を取らざるを得ない時機がある。さりとて之は無論粗忽にすべき事ではない、愼重なる攻究と試驗とに待つべきである事は勿論である。

　外國では既に、女國會代議士をすら、十數人も出してゐる國がある、市長や郵便局長を出して居る英國の如きものもある。それは日本では未だ〳〵遠い話し。しかし今の日本の男子が、斯かる自由や權利を女子に與ふるを躊躇するは、必ずしも男子中心主義の私情か

らばかりではない場合も多い、時としては社會公共の爲め、時としては婦人達の現在の爲めを思ふ餘りである事もある。しかしながら、人聖賢にあらざる以上は、當人の爲めを思ふと言ひ、社會の爲め國家の爲めと唱ふる間にも、私情の纏綿するを免かれざる以上は、當の婦人達が誤解して、僻み怨み反撥する事もあらう。要するに將來は男女に關はらず、何事も當人の自覺と自營とに打任すより外は無いやうになりゆくであらう、干渉は往々にして有害無益、過失せしめて苦き辛き經驗をさせ、それに依て自ら悟らしむるに若くはなし、いや、それより外に仕樣のない場合が生じ易からう。經驗は眞の知識、活ける教訓である、無分別や放埒の應報を味はしめて、自業自得の理法を合點させるが宜しい。



群馬縣富岡町切淵の橋

さうするのは親として、夫として、又は師として、兄として乃至姉として、忍び難い場合も多いのだが、是非に及ばぬ。尤も突き放すに先つて、好意の干渉や忠告は十二分して見るべきである。而して突つ放すに當つて、決して復讐的の惡意を含めてはならぬ、後に蹉跌し失敗して哀を乞ふ場合に、「そら見たことか」と言ふが如き心を持つてはならぬ。イブセンの作「海の女」の男主人公の態度は參照に値する。あの作は理窟の作であり、空想的であつて、決してあの通りな事があり得べきではない、作としては寧ろ失敗の作に近いが、而も其の根柢に横はれる思想には、一分の強い眞理が在る。

猶ほ終に臨んで言つた事もあつたが、其れは今語る必要も無し、大分話しが管々しく長引きましたから、是れで止めます。（談）

結婚は正當なる目的

山脇高等女學校長　山脇房子

◎男子は事業、女子は結婚

別段深く研究した上で申上げるのではありませんが此間一寸新聞で見ましたことで、ある人の云ふには、若い女が結婚といふことにばかり、自分の目的も希望も置いてかゝつて居るのは慨はしいことである。自分の考へるには、女も矢張り結婚にのみ目的や或は希望を置かずして、人間の一員として處して行く道を考へたら如何だらうと思ふ、といふやうなことが書いてありました。さうして徒らに婚期を過した女を、嘲笑ふやうなことを言つて居りましたが、併し私の考へますには、女も同じく人間の一員として考へればこそ、自づと結婚に就て目的も希望も置かれるのだらうと思ひます。

つまり男の人が大學なら大學を出て、有爲な快心な一個の事業を求めるのと、女が結婚するに當つて、より宜いところをより好いところをと望む心情と、男と女の性が違ふと同樣に其目的物の性質こそ違へ、目的や希望の軌道と歸着點は同程度だらうと思ふのでございます。

◎婚期を過しても恥るに足らぬ

人間が普通教育を受け終りますと、大抵は自分の目的といふものが決るものでございます。女ならば或事業或職務の爲めに獨身で立たうとか、または女並に結婚の用意をしようとか、確とした其意志が定まりまし

た以上、結婚に就ての或希望を持つのは、正當なことでもあり當り前のことでもあるだらうと思ひます。

夫婦といふものがあればこそ初めて社會が成り立ちます。女が皆獨身で事業のやうなものにのみたづさはるやうになりましたならば、困るのは寧ろ女ではありますまい。境遇とか、または身體上とか、特別な場合の外は、女は人の妻となるのが人間の踏むべき道だらうと思ひます。さうして不幸にして良縁がなかつた場合に徒らに婚期を過した人と後指をさしたり、また自分からも羞恥の念に隱れるやうな傾きがありますのはこれは新らしい婦人として改めて頂きたい態度でございます。

◎女の出世も實力次第

また女は氏なくして玉の輿とか言つて、不相應な結婚をけなす向きもございますが、大學を一番で出た方が一向實社會に出て働けなかつたり、やう〳〵卒業しとたいふやうな人が、意外にも有用な位置に坐つたりすることは珍らしくございません。皆それ相當な適任に當るのでございますから、あながちに排斥すべきことではないだらうと思はれます。

たゞ正當でない虛榮――無論夫の人格を第一の要件とします、次いで位置、財産となつて來べきものでせうが、それを其人の位置財産をのみ目的として、結婚の何ものたるかを顧みないやうな、虛榮の心に驅られる希望ならばそれは戒めねばなりません。

◎誤れる貞女

昔はよく許婚の夫が死んで、それが爲め若い女が髮を切り、一生獨身で念佛三昧に終つたなぞといふ話しを、さも貞女のやうに持て囃して來たものですが、其許婚の夫其人のみの世間なら兎も角、人間として社會に生存して居る以上、其生存に對する相當な報酬を我我は心掛けねばなりません。それを小さく限られた唯一人の爲めに、爲すこともなく手を束ねて惘然として暮すなどとは、いはゞ東洋的な道德ともいふべきもの

で、大に皆様も考へられて然るべきだらうと思ひます。も少し心を展いて、廣く意義ある態度を取つて欲しいと思ひます。

◎身分相應の生活

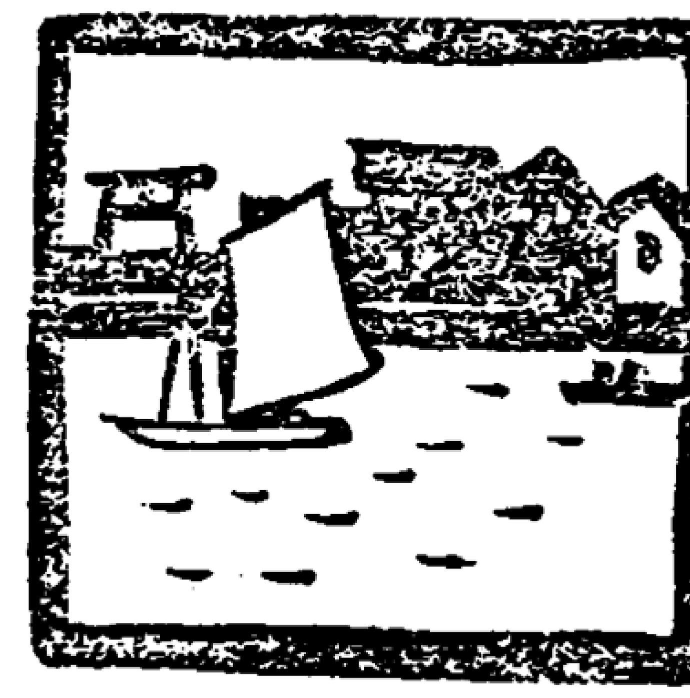
猶あらためて申上げますが、何處其處の華族の奥様はゴム輪の車をお止めになつたとか、絹の着物はお廢しになつたとかと、とかくそれを豪らさうに申しますけれど、私はあまり感心も致さないのでございます。すべてものには上下がありますし、それに因つて社會の秩序といふものも保たれて行きます。其人それ相當な品位を保ちますのに、何も奢つて居るといふことは謂はれません。身分不相應な着飾りをしてこそ初めて驕奢とも言はれませうけれど、絹の着物を着られ得る人が、たゞ貯財の爲めに綿布を纏ふて體面を省みないやうなのは如何かと思はれます。

假令ば私の家にしてからが、夫婦二人が住むだけのことならば、六疊一間で澤山な筈でございますけれどさう實利的にばかりして居ましては社會の體裁が保てません、殖産の重要な一つの生絲の需用、これがまた絹布に包まれ得る人があればこそ盛んにもなつて來るのでございます、勿論慈善事業の爲とか公共事業の爲めとかならば、それは確かに稱賛に價するのでございます。

たま〳〵氣が付きましたから申上げますが、日本の家庭では、殊に夫が素行上に就て、缺點があります場合、妻がそれに對して一言でも言ひ及びますと、直ぐに嫉妬と一圖に言つてしまはれます。さうかと思ふと妻の行に一寸でも指摘する個所がありますと、散々に夫から責め拔かれますが、さう思へば女は誠に損な立場に生れて來たものでございます。

良い事にも、不良い事にも、服從して來た習慣が、未だ除けないのでございませう、男子も其れで宜い事にしてゐるのでございませう。

こんなことは是非改めて、お互に完全な人格をつくりたいものでございます。



洪水に浸されたる跡見女學校

跡見女學校學監　跡見李子

◎浸水、床上を越す

凡そ水火の災害ほど慘酷なものはありません、此れのみは天災で、人力を以て避けることも出來ず、只平生から其爲し得る丈の防備を爲し、避け得るだけの道を求めて置きたいものです。

此度の洪水は誰も云ふやうた、實に近年に稀な大洪水であつて、被害者も調査後でなければ知ることが出來ませんが、大多數であると思ひます。

校長の住居の方は、床上一尺ほど浸水し、校舍は僅かに床上を越す位で、幸ひに大したこともなかつたので喜んで居ります。

十日の夜、出入人が手傳に來て呉れましたので、階下はそれぞれ片附け、梅田式の改良竈と、米、水、炭、醬油、卵などを階上に揚げて、避難して居りました、此所彼所に避難者の轉々たる狀、實に見るも氣の毒でした。

暗の濁流を右に左に、提灯をかざした小舟の、大路小路を棹さしてゆくやら、暗愁の火は二階の窓から、瀨をなす流に落ち、何處となく悲鳴を傳へて來るやら實に悽慘の想に堪へませんでした。

◎洪水の時の心得

浸水準備として、米、炭、醬油、水などが第一であるが、皆さんの氣のつかないのは便所です、これはきんかくしを取のけて板をのせ、重石を十分にして置く

ことを忘れてはなりません。

火鉢や爐の炭を取り出して置くこと。

糠味噌を取り出して置くこと。

提灯や蠟燭を多く用意して置くこと。

夏休みで寄宿生なども、一人も居りませんので、寄宿舍の方は、私と召使だけであつたものですから、そんなにさわぎもせずに避難しました、宿生でも居つたら、それこそ大變で、避難はしても食事にどんなに苦しむかと思ひます、なにしろ百二十人からの人數の食事ですから、幸ひにそんな心配もなくて濟みました。

天氣になり次第に、床を取り外して大掃除する積りですから、反つて後が清々すると思ひます、こゝは表裏の門を閉切ると、外より一切流れ物が侵入しないので誠に好都合でありました。

掃除をして惡いと言ふ事は、何時如何なる所でもないから、此度の大掃除は、先づ客間や書齋などよりも眞先に、一番に丁寧にする所は臺所であります。雨後の衛生は何より先きに、食物に注意しなければならぬ時でありますから、其れを料理する臺所は充分に、否十二分に注意して清潔にしないと思はぬ害毒を招く事になります。

◎見舞物を近所に配る

十一日は水見舞として、すし、五もく、握り飯、いなりずし、お菓子、卵、サイダー、鑵詰、乾物、漬物、お料理、中にも家人の數だけ、草履を下さつたのは中々思ひつきだと思ひました。

家内は召使を加へて二十餘名、手傳人が十五六名、都合四十名のものが、すしなどは食べ切れないので、それかと云ふて殘して置くと惡くはなるし、小使に、重箱に入れ頭に結ひ附けて、腰部を越す所を、近所の小供や、老人の居る避難者へ配らせました。

◎花蹊女史の唱名一萬遍

校長は、よく知人や、生徒達が病氣に罹つて居ると其人の爲めに、一週間、二週間、又は三週間或は一箇

月間は、願を懸けて、南無阿彌陀佛と、一日に一萬遍唱へることにして居りますので、丁度十二日まで、矢張或る人の爲めに願をかけてありましたのですが、十日の夜に後の二日分の唱名を、一度に唱へ盡して、新らたに、洪水の少ないやうに、天候の囘復するやうに幾日かの願を懸けたさうでした、誠に正直で、熱心なことは私どもとても眞似が出來ません。

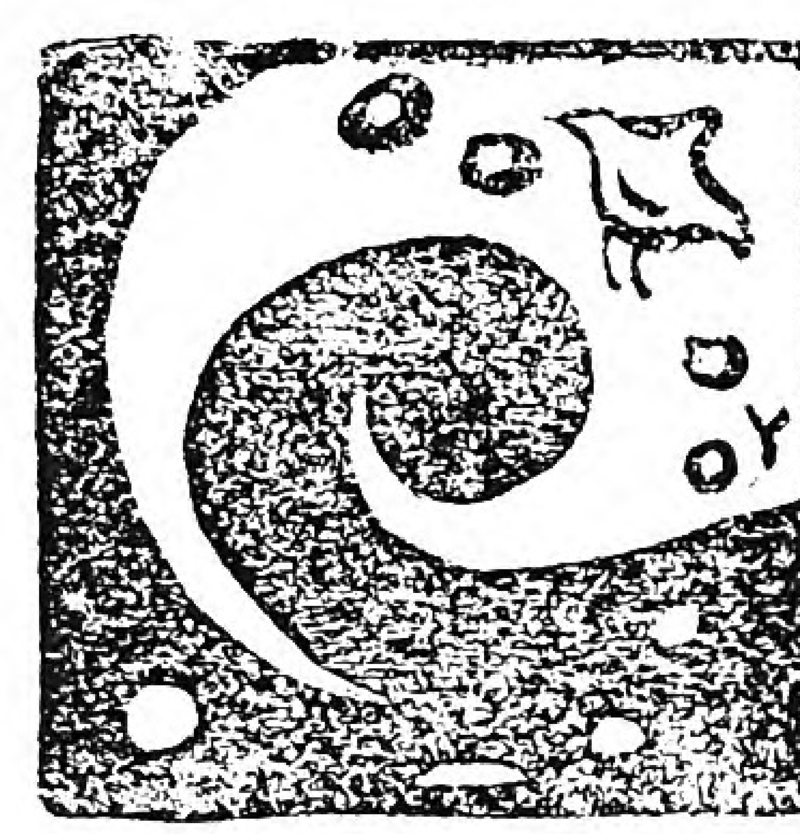
◎校長の平生と訓戒

七十一歳の今日まで、格別大病にもかゝらず、至つて丈夫で、食事は一同と共に、食卓に向はれ、食物は家族も、寄宿生も、下婢も、一切平等で校長であるからと云つて、別に御馳走を食べる樣なことはしません。朝食を濟ますと、毎朝の規定として法華經の半枚を字劃を正しく楷書で淨寫されるのは、どんなに多忙であつても決して怠ることはありません。

授業の前に各教室を一巡して、生徒の服裝檢査をされるので、姿勢の整はぬものや、頭髮の亂れて居る者衣服袴等の折目正しくないものに注意を與へられる。校長は常に生徒に「外貌は内心を表はすと共に、外貌の調ふて居ると居ないとは、内心に大なる影響を及ぼすから、華美な風をしたり、頭髮を亂したり、衣服袴等の折り目正しくないものを着用してはならぬ」と、訓戒されるのは常でございます。

跡見女學校は小石川區柳町にあります、折柄今囘の洪水に、其邊も一帶に浸水して、學校のお庭などは一時腰部以上の水が漫々と瀰つて來たさうです、減水の後、お見舞をかねて參上いたしましたら、校長跡見花蹊先生の代りに、學監の跡見李子先生がお會ひ下さつて、いろ〳〵お話がございました、右の一文は即ち其お話の大要でございます。（婦人記者）

附けて言ふ、東京の各女學校は、大抵、山の手方面の高臺にございまして、今囘の出水には、害を受けて居りません、あつた處が二三の女學校に過ぎません幸ひ夏期休暇中で、女學生の勉強にも障害を與へなかつたのは宜しうでございました。



英京倫敦より

男爵九條良致氏夫人　九條武子

記者曰、左の通信文は大谷伯令妹武子姫が九條男と新婚の後ち、今春歐米漫遊の途に上られ、英國倫敦に滯在中、其師東京女學館教授藤崎つね子女史に寄せられたる最近の手簡にして、特に本誌に發表することを許諾されたるものなり。

御なつかしき我師の君に。

五月末出の御ふみ、六月二十七日たしかに拜見いたし候、かれこれ日本はなれてより早半年餘と相成り候此頃はしきりに古郷のたよりのみまたれ候を、ことに先生よりの御玉章取り出しては、御なつかしう拜見致し居り候、梅雨晴れてよりは、殊に暑さも增し候はんと、御察し申上居り候折柄、御機嫌ようゐらせられ候や、承はれば四月末頃より、しばし病院の人とおなり遊ばされ候よし、其後御快く御座候や、はやくむかしの御つらさを語りぐさにして、御たのしさ、御めでたきお話を、歸朝の上は屹度伺はれるものとたのしみ居り候、どうぞ此上とも御養生專一に遊ばされ候やう願上候。先生なればこそ私の身のこと、御こま〳〵と大事にするよう注意せよとの、仰せ、實にうれしく存じ居り候。

當地はながの喪がひらき候てより、さすがに此頃はいろめき、店のかざり目さむるまで、いづこのstoreも夏もの賣出しにて盛なることに候。旅人の身でさへ近頃はかしここゝと訪はれつ、訪ひつ、かなりいそがしく暮らし居り候。私ども此月の中頃より、二週間ほどスコットランドの方に遊び、再び倫敦に立もどり、ま

もなく大陸の旅をいたすつもり、かへさはsiberiaに定め候ゆゑ、豫言とは早く御目にかゝれるやも知れず候。九條はつゞけて滯在いたし居り候、倫敦の見物も大かたいたし候、先達よりこちらの女學校、小學校及び幼稚園など、大學を卒業されし英國婦人と親しく相成りしを幸ひにて案內をたのみ、見せてもらひ候。官立、私立、御寺の慈善になりしもの、もとより立派なるもの、お麁末なるもさまぐ\に候。小學校などはよほど日本の方が秩序だてるやうにおもはれ候、最も英國の方が家庭的とみれば、さうかとも合點され候へども、せまき〱目にては餘りうらやましくも思はれず候。ある富豪のみの女學校に參り候へば、下級生の授業數まことに少く、不思議におもはれ、きけば大かたは田舍に行つたのだと申候。ロンドンの中流以上の紳士は、この四月から六月末までの交際期が終るや、おの〱countryの別莊や、今一つ上流の貴族樣は御自分のお城などに夏を過すのが一般の由ゆゑ、學校ゆきのお孃樣がたも學校はすてゝ、その方に行かれるものとおもはれ、一寸日本人の考へにては、學校はなんだか娘さんがたのひまつぶしか何かのやうに思はれ候尤もかゝる家庭には、よきガバーネスがあるに相違なかるべく候。こちらの婦人は見聞もひろく、話（なにげなき）も世界的にて交際は申までもなく上手に御座候どうして學校の敎育と家庭の連絡がほどよくとれてをるものやら、立入りて聞いてみたくも思はれ候へどもまだ交はりて日もあさく、そこまでくはしく知ることも不得、のこり多く御座候、一日east-endに孤兒院をみにまゐり候——此倫敦は大阪のやうに、東西南北と區がわかれをり候、西區と申せばkingの宮殿を初め一番上品な地、この東區（俗にeast-endの貧民窟と申候）は、テームス河の下流にて、ロンドンにもこんな所があるかと思ふほど、人の目つきも恐ろしく町もきたなく、昔より世界の犯罪者が流れ込んだ所、世界からいやしまれ、つまはぢきされるジユデヤ人もこゝには多く流れ込みをり候、未だに橫町などは晝でもおそろしい出來事があるとか、さすがに大通は、それでも

電車だの乘合モートルカーなど不便にないだけはかよひをり候。横町の店もなき長屋の細道などゆくには、御坊さんについてゆくか、巡査の二三名保護でなければ、實際危ないやうに候、只今は續々オックスホードやケンブリッヂの大學卒業の紳士がたの魔窟に身を入れて、おひ〱に善風を沁み込ませるやうに致しをり候とか——

私のたづね候孤兒院は、ある慈善家の寄附によつてたてられ候もの建築はなか〱大きなものに候、幾室にも別れ、各々職に從事いたしをり候、裁縫部は足を失つた者が多く



俗にイギリス病（セムシのやうです）とか申候不具者などが從事いたし居り候。殊にあはれなるは、生後四週間ほどの赤ん坊すてるまでにはどんな深い涙の歴史がひそんでゐるやら、折角生をうけて人の世に生れながら、親を親とも知らねば、子ともよばれず、涙ある人の手に育てられて、もの心ついた折には、人しれず不運の身を泣くさうともしらずに養ひのたらぬ青い小さな顔を、各々ベッドにうづ〱まつて、何を夢みてるか、なきもせぬいた〱しさ、この室はたすけられてまだ間がないのだと看護婦

は話しをり候。何だか胸が一杯になつて、夢中で門を出候、この院の子供は大抵カナダの移民に送つてゐる由、盛んに經營致し居り候。また大きな病院などが、大概慈善家の手になつてをるのは、富んだ國とはいへ感心いたし候。

博覽會は引つゞき盛んに開から居り候、此頃は一寸參らず候、京都の出品のうち、實家の座敷を小さくして其まゝたてられをり候、何だかこればかりなつかしく存じ候。仰の園田米子樣（兒玉樣と仰られ候）ときをり御目にかゝり候。まことに倫敦の氣候は定まらずこの一週間ほどは、冬衣を着込みをり候ほど少しも日光を見ず、夏らしくは一寸もおもはれず、つい日も月も忘れはて、夢の世界に居るやうな時がこれあり候。まことに亂筆其上ところ〳〵インキにて汚がし候亂雜何卒御許し遊ばされ度、且御はんじ願上候。くれ〴〵も御身御大切に、若しも miss squire に御會ひ遊され候御序もあり候はゞ、よろしく御つたへ願度候。まづ右御返事まで。

ロンドンにて、夏寒き夜　九條武子

秋の草花

醉君

▲女郎花の黄なるは、男郎花の白きより眼に立つ、姿としては男より女の眼に立つ如し。

▲桔梗の紫はこまやかなる情あるに似たれど、白きは淋しくしてすげなし。

▲朝顏の花の朝に〳〵小さくなりゆくは、外の花の小さくなるよりも、あはれなり。

▲ダリアの黄なるは、眼覺めたる現代の若き女に似たり、折れやすきを痛む。

▲百日草、千日草など、永き花に優れたる想なし、永く生きんは要なき業なり、人も、花も。

▲薔薇の葉の病めるは好し。

▲夕顏の花の白きは、田舍の小娘の拔けるばかりに色の白きを想はしむ、瓜の花は凡て野に咲く色と、姿とを持てり。華族の小間使など望むは僻事なり。

▲雨多く、花少く、秋風西より吹いて、花壇の草ことごとく靡き伏す、秋海棠獨り何の嬌媚ぞ。



火事と強盗に遭つた經驗

子爵足利於菟丸氏夫人　足利簡子

昔から地震、雷、火事、親父は恐ろしいものとして數へられてでございますが、先年小石川久堅町に居りました時に、其恐ろしい一つの火事に罹りました。

時は三月一日の夜、主人が十時過ぎに歸宅し、食事を濟し、十一時に寢床に入り、下女が十二時過ぎに何れも床に入りました。此當時に未丁年の書生が居りましたのが、其日は外出し夜の十一時頃に歸宅して、之れも床に入りましたが、まもなく火事だ、火事だとさわぎ出し、目をさますと早や臺所一面火になつて居りますので、夢中で家財を取出す猶豫もなく、たゞ家人に怪我なきやうにと注意しながら、主人も私も四人の子供を連れて外へ出ました。今思ひましても身毛が立つ程で、皆な寢衣一枚のまゝ、何一つ持出したものはありませんでした。こんな悲慘なことは恐らく世の中にはないと思ひました、方丈庵のあるじのいたく恐ろしく書いたのも無理もございません、幸に屋敷が廣かつたものですから、他家に燃え移るやうなこともなく、我家だけで濟みまして不幸中の幸でございました。

此の出火の原因は不思議なんで、今でも時々噂することがあります、常々火の用心して居りました上に、其の前年、宅の裏に在る女子師範の寄宿舍から出火して大さわぎし、幸に免れたことがあつたものですから、一層火の用心して居つたのに、どんな間違ひが原因になつたか分らないのでございます。前申しました書生は福岡のもので、火事のあつた二三日前から、歸

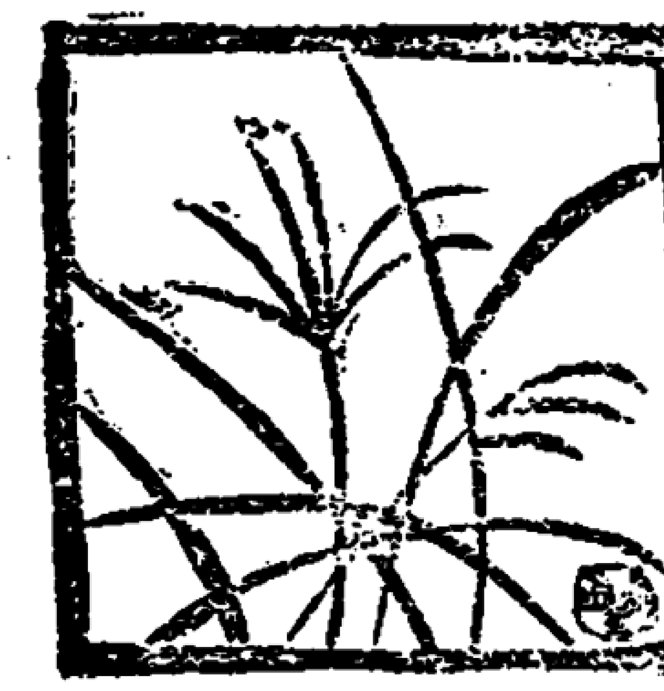
國すると云ふので、其日にも暇をやる筈にして、出火後に歸國しました。警察の方で嫌疑者として福岡警察でお調べになりました、ところが思ひがけもないこと私の金時計や指輪を歸國してから質に入れてあつたんです、後でそんな品物は手許に戻りました、何んでも六ケ月とか入獄したのでございます、宅に居りました時に、いろ〳〵と胡魔化したものと思ひます、出火の原因に付ては證據不充分の爲めに放免されましたが、公言は出來ませんが書生が放火したのかと思ひます、それからと云ふものは書生も下女も恐ろしくなつて、うつかり頼みませぬ。

またこんなこともありました　出火の二年前十一月の或る夜二時頃、强盜が兇器を持つて忍び入り、主人の枕元に座つて、金を出せと申ので、在金四十八圓を出してやりますと、小さいのもくれと云ふて立ち去りません、此時小さいのがなかつたものですから、ないと云ふと、何にかもつと出せと云ふので、主人が何んでも好なものを持つて、早く逃げないと汝の爲めにならんと云ふと、强盜は出がけに、このことを警察に訴へると承知しない、放火すると捨言葉を殘して戶外に出ました、すぐ警察に電話をかけました、非常線を張られた道を、警察の方へとたどつて行つたものですから、忽ち逮捕され、金は戻つて參りました、そんなことなどがあつたものですから、或はその强盜が出獄後に放火したかとも思ひますが、警察でも又辯護士の方などでも、强盜はそんなに後々までも附まとふものでないと申されました。

宅では何にかと悲慘なことが續いたものですから、出火後に、一時氣忘れに京都に居りましたが、子供の敎育には、どうしても東京に限ると思つて、また東京に參りました。只今三人とも學習院に參つて居ります

乳屋のむすめ
心は夢み
朝の小みちを
あゆみくる
素足の白き
露風





今日は他の身の上、明日は我身の上

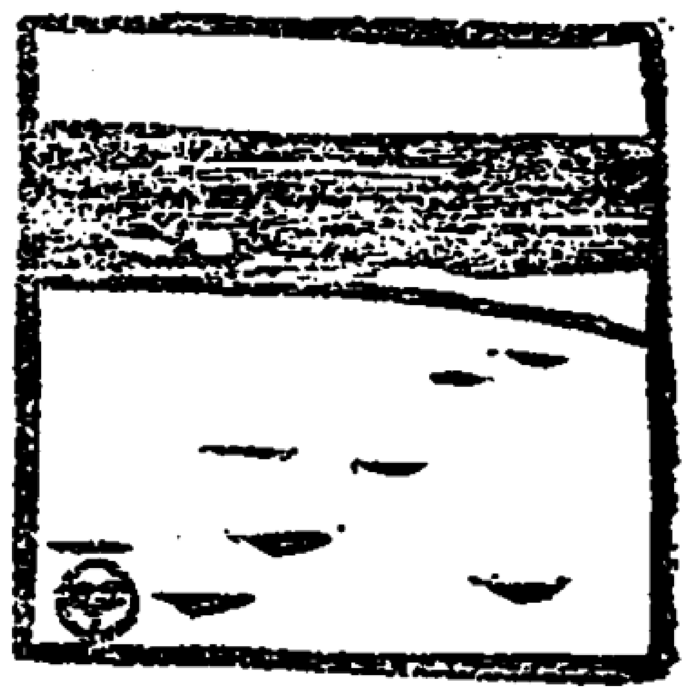
參謀本部編輯横井忠直氏夫人　横井りき子

世の中は何時も春の樣に花咲き鳥歌ふ樂しい時ばかりではないと云ふやうなことは、百も二百も承知で居りましたが、それでも若い時は、實際に當つた今日程深く社會の辛酸を感じませんでした、永らく經驗を致して參りますと事實の上にあり〳〵と、感じて參るのでございます、其の都度、世の中は馬鹿には出來ないとしみ〴〵眞面目な考へが起ります。私の知人の中でも、この運命の手に弄ばれた方が澤山でございます、破鏡の嘆を味はゝれた人やら、また破産に依つて夫婦母子が離散したのもございますれば、事業の失敗で夫の行衛が知れなくなつた方や、早くも寡婦となつて、うたゝ生活の困難を味はれつゝある人もございます。此こそ申分のないと云ふ方は殆んどございません。私の二女もなんでございます、高崎で嫁しましたが夫が日露の役に戰歿いたしまして、今は一人の兒を便りにして居ります、それを思ひましても只もう深く運命の力に驚くのでございます、ことに知人の中に數年ならずして數人までを彼世に送りました、私の長女も伯爵の壬生家に嫁して居りましたが、これも先年彼世の人となりましたことを思ひ出しますと、死は決して遠きに非ざることを深く覺ります。

　富貴は何、貧賤は何、又私共が墮落者と呼び、罪人と名附ける人も、また〳〵決して私共より遠きに居る人ではないのでございます。畢竟それらの人は生れながらに貧困に育ち、敎育なく、宗敎なく、皆その育ちと境遇によつて造られたもので、私共がよく日々

を清く送ることの出來ますのも、要はたゞかゝる好境遇にあかれ、教育を受け、宗教を信じますことによつて別るゝ許りでございます、有と、無と、決して二百歩三百歩の差を隔つるものではございません。もし私共がかゝる境遇におかれたならば、或は墮落し罪人となつたかもしれません、たゞこれも自然に與へられた恩惠とさう思ひますと、かゝる人を見ます毎に、いひしらぬ惻隱の心が起りまして、どうかして助け度いといふ同情が心の底から燃えますのでございます。けれども私共は、もし何時世の運命に弄ばるゝ樣な事に出遇さないとも限りません、殆ど隣の火事の危くわが棟木につきかゝつてゐる有樣なんでございますから、そんな事を思ひまして、慄然する樣に思ひますが、しかしどうせ免れがたき運命でございますから、私共は朝に夕にその運命に供へる用意をしておかねばなりません。先づ毎日私が信じてをりますことは、第一消えざる希望でございます、一體希望とは未來を待ち望みます事で、それと同時に、世の中の面倒な事が起つて參つても、これを呪ふ事なく、眞面目に打ち破つて新しき境に出でる希望なので、困難に處して心を立ず折ることなく、自暴自棄に陷らず、摯實に眞面目に今日に勤勉するといふ事が必要でございます。

閑居不善をなすと云ふ言葉があります、この言葉はあながちに小人にはかぎりませず、あらゆる人の守つてよい言葉と思ひます、富貴に居て閑居する人も、貧困に處して爲すなき人も、ともに相隣りするものであります、私共は常に一寸の閑をも作る事なく勤勉にして行かねばなりません。心が空虛になりますと、虛榮が來ます、不平が來ます、僞が來ます、罪が來ます、遂には尊き生涯を無爲に送り去る樣になるのでございます、常に自分の運命と死に隣りすることを、心の底深く考へて、人として消えざる望に滿ち、信じて疑はず身を修めて、貧富に居る方法を考へ、心を練り身體を馴らし、眞摯に勤勉して、眞面目に勞働することが、來るべき運命に供へて最も善い武具でございます。



日本で生れた子やら、上海で生れた子やら倫敦水晶宮の裏で生れた子やら

正金銀行副支配人西巻豊佐久氏夫人　西巻都兒子

私のやうなものはお目にかゝりましても、皆様のやうに利益になるお話もございませんし、それに私共では二十六年から三十四年までは上海に、正金銀行支店長として、其年から三十九年までは倫敦の支店長へ任ぜられ、前後十四年間は外國で暮したものですから、從つて日本の現今の有樣や婦人方の活動振りなんか却つて伺ひたい位ゐでございます。歸朝された方などは、家庭の有樣や、客あしらひ、また日本婦人の交際の腕前は、歐米婦人に比較致しますれば、實に劣てゐて、てんでお話にならないと申さるゝのでございますが、成るほど歐米婦人達から見ますと、交際上の智識や、客あしらひ、家庭の有樣の劣つて居ることは、決して抗辯はいたしませんが、しかし日本婦人は日本婦人に適した樣に、昔から種々の訓戒も、またたしなみもございまして、時としては隨分奥床しく思はれる事もあります。

あながち歐米婦人のみを、よいと申されませぬ、またよいからと申して、それを今日日本婦人に應用する事は六ケ敷いことで、第一家屋からして、西洋風にしてかゝらなければなりませぬ、こゝ五十年や百年の間には、とても出來るものでないと思ひます、するとやはり、現今の日本婦人は日本婦人に適したやうな、客あしらひもし、交際もし、家庭も作るのが、宜しいと思ひます。

例へ音樂するにしても、ピヤノ、オルガンはさうでもありませんが、お座敷で日本服裝で、立ちながらヴ

イオリンを引く様子などは、とても見苦しくて、見られたものでありませぬ、しとやかに座して振袖位で琴を彈くところなどは、外國人をして、日本婦人の優美なる態度は、世界に冠たりとまで賞させたところでございます。

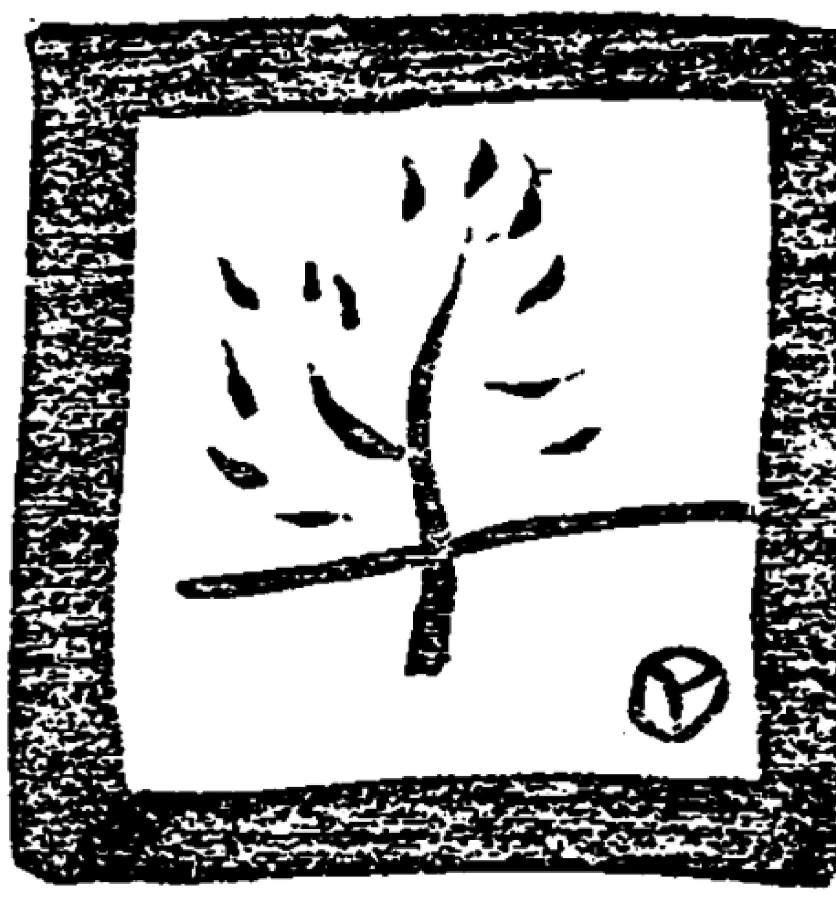
主人などは現今のところ、日本婦人は日本婦人に適したものを、修めもし習ひもするが好いと申して、只今女學館に參つて居ります、十七歳と十五歳の二人は琴を習て居ります。

前に申上げた通り、外國に長く居つたものですから子供も十七を頭に六人居りますが、上海で生れた子やら、倫敦で生れた子やら、日本で生れた子やら、まるで猫の子のやうに、あちらで一人、こちらで一人といふ風でございまして、時々これにはお笑ひするんです子供が喧嘩すると、上海で生れた子にはチヤン〳〵と云ふし、倫敦で生れた子には異人のくせにと、思ひ思ひに惡口をいふて、中では倫敦で生れた子が、一番威張つて居ります、世界の大都會で、それも水晶宮の裏で生れたのだと云ふて、よろこんで居ります。

丁度宅の表門と、水晶宮の裏門とが、向き合つて居つたので、入宮券を買つておきまして、毎日守をつけて遊びにやつて居つたものですから、立派なことを覺えて居りまして、時々兄弟に話するのでございます。

水晶宮の中は誠に立派なところで、私が申すまでもございませぬ、馬車も自働車も通りませず、子供の遊び場所には危くなく至極よいところで、どんな方でも慰安を得る唯一の所でございます。

先年歸朝後、小さい子供を幼稚園に入れましたら、手工の時に高い塔のやうなものを作つて、先生からそれは何ですかと問はれましたところが、クリスタハリスのタワと、日本語を知らないものですから、英語で答へましたので、先生もお困りになつたんでございましたとか、この頃はすつかり忘れて駄目でございますそれに日本語をいつても、外の子供より發音が違つて變でございます。



婦人の體質及び疾病

澤田順次郎

（一）體質とは何ぞ

體質とは身體性のことであつて、禀性或は疾病等と大なる關係を有て居ります。體質は人に由て一樣でありませんが、性の上から云へば女性には女性の體質がありますし、男性には男性の體質があります。例へば甲の婦人は或病氣に對して不感受性なるも、乙の男は感受性なるが如き、又は男は早く癒る病氣も、婦人は長く掛るの類です。斯樣に人に依て體質の異なるのは身體を組成する細胞に基くので、活潑と云ひ又は遲鈍と云ふも、畢竟は其の働きの上に現はるゝ細胞の總和に外ならぬのであります。近時の研究に據れば、男女の體格は細胞からして違ふものであつて、兩者の差異は微細の點まで立入つて居ります。

（二）體質の區別

其は偖て措て、人の體質には四種の區別があります、御承知でもありませうが、話の順序として其を擧げて見ませう。

第一、多血質　早く言へば血の多い人です、此の質の人は身體は一般に强壯にして、血色が善くあります、隨て疾患に抗する性に富で居りますけれども、血の饒多なる爲に是より來る病に罹ること多くあります。肥滿する人は此の質の人に多いです。

第二、淋巴質　淋巴液の多い人です。此の質の人は皮膚白色柔軟にして豐に肥り、膚などは誠に美しいで

すが、精神は活潑でありません。

第三、神經質　能く使つて居る言葉ですからお分りでせう。此の質の人は顔面蒼白くして、筋骨は薄弱ですけれども、動作は敏捷な方です。加之ならず感動至つて銳敏なるが故に、動もすれば神經性の病を發し易いのです。

第四、膽液質　此の膽液質の人は皮膚薄黑く、底に憂鬱の相を帶びて居ります。氣は一般に荒くして怒り易く、且つ憂鬱するので又憂鬱質と申します。

右の四質中婦人に多いものは孰れかと云ふと、淋巴質と神經質とが多い樣です。是は先天的で一旦其の質を享け來た者は、何うしても變更すると云ふ譯に行きませんが、後天的に變じ得られるものは、次の二質です。

第一、強壯質　此の質の人は筋骨の發育十分にして勞働しても疲勞することが少いのです。總ての生活機能が旺盛にして、疾病に抗する力が強いのです。

第二、虛弱質　此の質の人は筋骨の發育不十分で、削つた樣に瘠せて居ります。少しの勞働にも疲れて呼吸を切らし、顔が眞青になつて烈しいと卒倒することがあります。是は腦貧血を起すからで、斯う云ふ人の激動は危險です。勿論病氣に抗する力が弱いのですが然し體を大切にして病氣に掛らなければ、それで健康を得られます。

此の二質は先天的でありませんから變ずることが出來ます。例へば初め強壯な者も不衞生なときは虛弱となり、虛弱な者も攝生を守るときは次第に強壯に赴くの類です、それで強壯と虛弱とは衞生學上或程度までは、人爲に變化せしむることが出來ます。然し多くは體質と伴つて來るので困難です。例へば肥える質の人は瘠せ難く、瘠せる質の者は肥え難い類です。

（三）體質と疾病

多血質の者は血の多い爲に、動もすれば充血、出血、中風、心臟肥大、痔疾等に罹り易く、他の病を發するに於ても炎症に變ずることが多くあります。然るに神經質の者は其神經の薄弱なるに依りて神經病、麻痺、

痙攣、心悸亢進、失神、ヒステリー等に罹り易く、又他の病氣から此れに變ずることも多くあります。又淋巴質の者は腺病、結核病、皮膚病、水腫及び粘液病等を患ふること多く、膽液質の者は胃病、肝臓病、黄疸等に罹り易いのです。斯樣に體質と疾病とは關係して居りますから、自分で自分の體質を考へて注意することが肝要です。

(四) 中毒性

或毒物に感ずる性質を中毒性と申しますが、之も幾分體質に關係するのです。大體男と女とは其感じ方が違ひまして、男にはさ程でもないものも、女には強く中ることがあります。

鉛毒の如きは其例で、平常之に接する機會の多いものは、之を感ずること一般に強い樣です。鉛毒は何から來るかと云ふに鉛白です。鉛白は婦人の七ッ道具の第一ですから、之を廢することは一寸難しいです。それで數年前某々女學校で女學生の鉛白を使用することを禁止したことがあつたと聞いて居りますが、其の結果は何うなりましたらうか、是は言ふべくして行はるべきことでありません。丁度煙草の有害なることを知りつゝ喫煙すると同筆法ですから。女學生でさへ禁止が出來ない位です、況して一般家庭に於て禁止すると云ふことは、百年黄河の清むを俟つと同じことです。我々男子の方から考へても婦人の鉛白を全然禁止するのは殘酷の樣です。其譯は婦人は鉛白を用はずんば、美の五割を失ふからです。是は失敬ですが有體に言はしむれば、實際婦人の鉛白を用はぬときの顔は大變醜いです。男の樣に鉛白なんか用つたことのない者は（イ



上野女學校生徒生花の稽古

ヤ中々薄化粧などして役者然たる者が多いと云ふことですが）平生厚化粧で硏き立てゝ居らるゝ婦人方が、急に鉛白を使はぬとなると、何うも隈が見えて全然見違へる樣です。だから男の方から言へば、婦人は矢張相當に化粧して貰ひたいのです。だがそれは鉛白でなく何か他に衞生上、無害のものにして欲しいです。

偖、鉛白が惡いと申した所で、何んな工合に惡いかと云ふに、普通は月經不調、不姙娠若くは流產等です或學者の調査に據ると、黴毒に罹れる姙婦百人中、流產せる者二十八人なるに、鉛中毒の工女は百人中六十人の流產者を生じました。又或人の常產との比較に於て、常產の千人中死產を三十三とすれば、鉛中毒の千產中には百五十乃至百七十の死產があつたと云ふことです。

之に據つて見ると、鉛中毒の姙娠を害することは、黴毒に優つて居ります。之が一步進めば不治の疾病となります。某俳優が鉛中毒で大患に掛つたことのあるのを見ても、鉛白の恐るべきことが分ります。

次はアルコール中毒ですが、之は婦人よりも男子の方が遙かに多い。婦人は酒を飮む機會が少いからです隨て其感受性も同一でありません。男の酒毒は主に腦を侵して酒狂に陷らしめますけれども、婦人の方は脊髓及び脊髓神經を害して、痲痺症を發せしむることが多くあります。其の他、煙草、水銀、亞鉛銅等皆中毒を起すもので、烈しければ死にます。幸ひ婦人は斯う云ふ有害物に觸るゝ機會が少い爲に、數の上に於ては男よりも少いですが、姙娠中に感じるのは最も危險です。

（五）　遺傳病及び遺傳素因

遺傳とは生物が自己に類似せる形質を、其子孫に傳ふることを申します。是は生物界の通則で其事實の明白なことは誰も知つて居ります。例へば犬から犬の子が生れ、猫から猫の子の生るゝ類で、啻に容貌ばかりでなく、其性質も能く親に似て居ます。健全な父母になりますと、其子も健全に生れて來ますが、若し父母の兩方又は一方に病氣がありますと、其病氣が子に傳

つて生れて來ることがあります。是が即ち遺傳病で又先天病とも云ひますが、大抵は根治の出來ぬものであります。例へば黴病、腺病、痔疾、近遠視眼等の類です。此等は治療に依つては一寸癒りますが癒ると云つても、病氣を押へて、進まない丈のことで、到底根治は出來んのです。其他聾、啞、斜視、晝盲、夜盲、異障眼、萎黄病、結核、神經系諸病の如き、能く遺傳したがるものです。

結婚の際に血統を八釜しく言ふのは是が爲です。若し婿方か嫁方かの中に、たとへ現在の父母でなくとも其祖父母若くは曾祖父母の中に、發狂したものでもあると事です。其血統の傳つて居る間は、何時それが子孫に現はれて來るか知れません。遺傳は妙なもので一代毎に必ず遺傳するものでなく、二代若くは數代を經て突然現はれて來ることがあります。例へば親の酒狂が子には傳はらずして、孫に現はれたり、祖父の近眼が父と子と孫とを置いて、玄孫に至つて生ずることとある類です。それですから嫁に行くにしても婿を取るにしても、其の家の先祖に惡い病氣をした者がないか、能く調べた上でないと、後で取かへしの附かぬことがあります。

それから遺傳病ではありませんが、遺傳素因と云ふものがあります。是は體質が親に似て居るから、或病に罹つた人の子供は矢張其病に罹り易いと云ふことです。例へば父が肺結核であると、其の子が同じ病に罹らぬまでも虛弱で、體が瘦せて居るとか、色が生白いとか、誰が目にも肺病に罹りさうに見えるのです。實際肺病に罹るのは、爾う云ふ質の人に多いのですから遺傳素因のある人は十分注意しなければなりません。併し遺傳病とは違ひますから、攝生を能くすれば之を免るゝことは出來ます。攝生と云へば大抵同じですが體を強壯にすることと、他の眞の肺結核患者に接しないことですから、心掛樣に由つては、出來ないことはないです。此の三つさへ注意すれば、たとへ其の素因のある人でも心配することはありません。

遺傳素因は何んな種類のものであるかと云ふに、遺

傳病は大抵素因を有つて居りますが、遺傳病でなくとも素因のあるものがあります。其は癩病です。癩病は昔は遺傳病として恐れたものですが、今日の醫學説では遺傳病でなくして一種の傳染病です。其病菌は多く鼻腔の粘膜に潜伏して居るものですから、患者の鼻汁紙、手拭などが傳染の媒介をするのです。それでも其素因ない者は傳染し難いのですが、素因のあるものは早く傳染するのです。昔時癩病の血統を引く樣に見えたのは之が爲です。癩病ばかりでなく肺結核も左うです。

話が前に戻りますが、遺傳病の起るのは何年頃であるか、それを知り置く必要があるでせう。婦人は大抵十七八歳から二十二三歳の間です。此の間は素因のある人の、最も注意を拂ふ時期です。婦人に肺結核の多いことは統計で分りますが、其は常に此の時期に多く、此の時期を過ぐればズッと減少するのを見ても、此の妙齡時代が婦人に取つて一番難關であることが分ります。

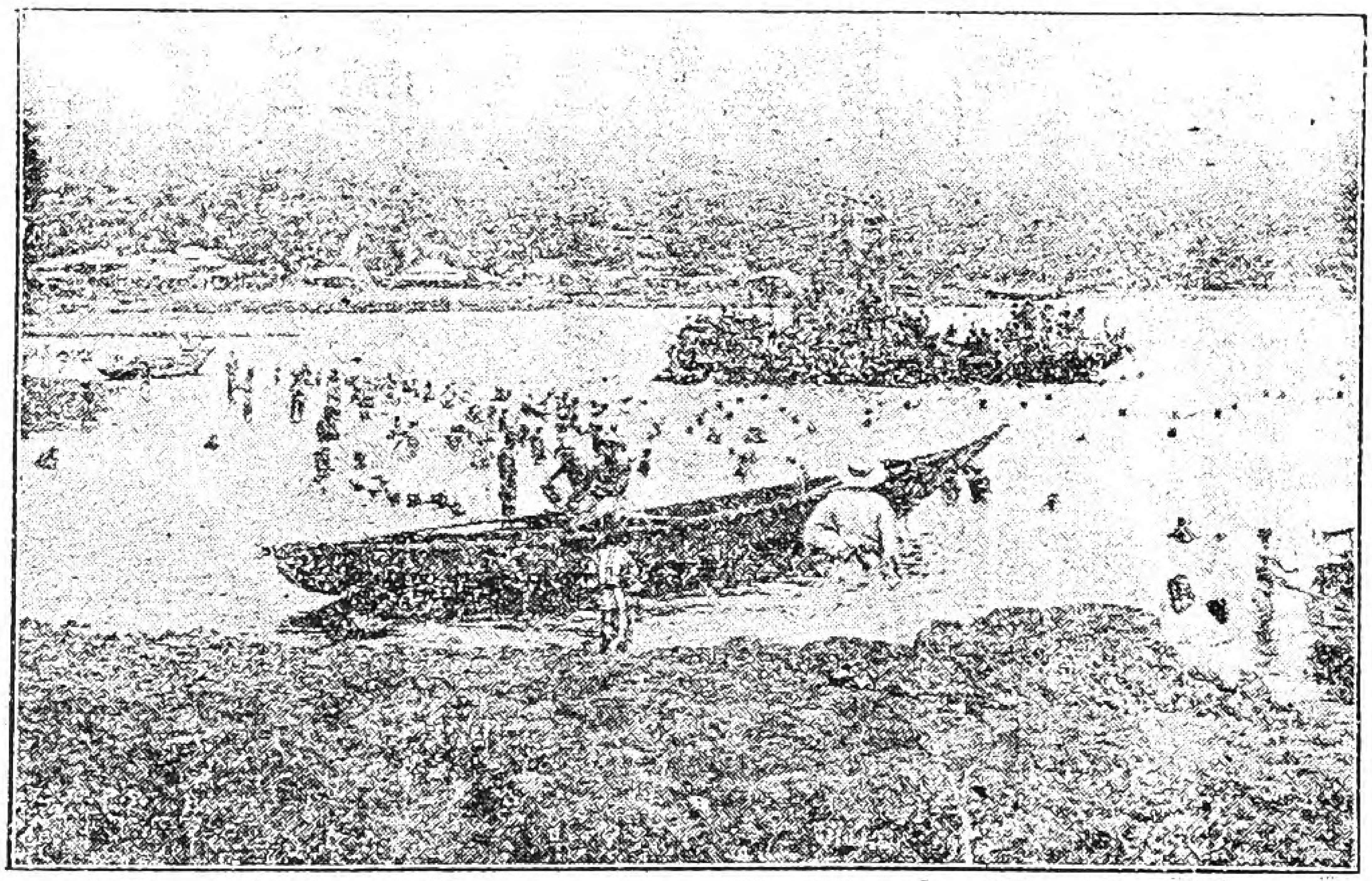
（六）婦人病

婦人病と云つても婦人科のことではありません。男子に比較して婦人に多い病氣のことです。前々も云ふ疾病には男性に多いものと女性に多いものとありますまして同じ病でも發生經過が男女によつて等しくありません。之は畢竟男女の體質が違ふからで、之に對する治療法も同じではありません、それで某醫學者は疾病中婦人に幾んど固有せるものを名づけて女性病と稱へましたが、其の主なるものは生殖器に關する疾病を除いて次ぎの如くです。

萎黄病　是は赤血球の不足から起る病氣で、其の原因は發情期に際し、血液の減少と血行器の障害とから起ります。之れを防ぐには帶や紐を緩くし、運動を適宜にして血液の循環を能くするにあります。年齡から言ひますと、十六七歳から二十四五歳の間に多く、四十五六以後になりますとズッと減少致します。之は月經に關係するので、閉經の後は血液を失ふことはありませんから、それで自ら癒るのです。

ヒステリー　是は最も厄介な病氣です。婦人病と云へば、ヒステリー、ヒステリー卽ち婦人病と云ふ樣に是れ位婦人に因緣の深い病氣はありません。此のヒステリーは俗に血の道と云つて、血から起るものゝ樣に信じて居ますが、近來の說では神經系に關するもので、詰り神經過敏から起るものとしてあります、尤も萎黃病と同じく血液の不足から生ずるものでありますし、食物の不良又は居宅の不適當など〻、關係することがありますが、要するに精神の不安が主なる原因で、取越苦勞をする樣な人に多くあります。

それでヒステリーの起るのは、發情期から二十五六歲までは最も多く三十歲以上になつても尠くはありませんが、然し月經閉止後は頓と減少致します。是は月經と關係するから



長崎海水浴場　長崎市　吉川あい子寄

で、月經の二三日前又月經中婦人の精神の不穩になるのは、ヒステリーの初步と見て差支へないです。して見ればヒステリーは每月起る譯ですが、月經中の精神狀態では未だ病氣と名の附く程のものでなく、一時的發作です。所がヒステリーとなると一時的でなく、繼續してそれから種種に變症するのです。それで月經中の精神狀態は最も注意しなければならんのですが、男はそんなことに氣が附きませんから、月經中も平生と同一に取扱つて細君の感情を惡くしたり、或は胸を痛めさせたりして、それが基でヒステリーになつた婦人の例が多くあるのです。誰でも左樣ですが心配程體に毒なものはありません。別けて婦人は氣が弱いものですから人一倍苦勞をします。若し月經中や姙娠中に激しく心を惱ました

り、或は悲しい口惜しい目にでも逢ふと、忽ち逆せてヒステリーになるなどは能くあります。

ヒステリーも初めの中は氣が塞ぐ、頭が重い位で濟むものもありますが、少し進むと頭痛、耳鳴、眩暈、次ぎは嘔吐、胃痙、胸痛など種々の病氣を誘ひ、仕舞には孰れが本病であるか分らぬ樣になることがありますが、嵩じると危險に陷りますから輕い中に能く療治しなくてはなりません。

統計に據ると、萎黃病とヒステリーとは、田舍よりも都會に多く、又下層社會よりも上層社會に多くあります。新聞を見ても婦人の自殺は二十歲前後に多く而も都會の人に多くあります。其の原因には二つありて一は墮落より來るもの、一はヒステリーと云ふ順序です。第一原因に就ては他日改めてお話をする積ですが、第二原因の方は二十五六歲から三十歲前後の婦人に多いです。何れから考へても都會の生活が、婦人の身心を刺戟して危害を加へつゝあるのが分ります。私は都會生活の虛榮にあこがれて、態々田舍から出て來る女學生方の氣が知れぬと思つて居ります。

體軀の喰附ける双兒

胴體は一つで、顏と、手と、足とが二人別々になつてゐる世にも不思議な女の双兒がある、此畸形兒は成長して、今歐洲各國を見世物に歩いてゐる、一方をローズと呼び、一方をヨセフアと呼んでゐる。玆に又好奇心に富んだ男があつて、此畸形女子に結婚を申込んだ、二人の中の一人、何方でも承諾した方と結婚すると云ふのであつたが、ローズの方が承諾した、本年四月、一兒を擧げた、然るに法律家の間では、此男を以て、多妻者とすべきや否やといふことが問題になつてゐる、多くの新聞紙は面白い材料として之に關する記事を澤山載せてゐる、寫眞も載せてゐる、生理學上、同體の双兒あることは、敢て非合理なことでもないが人間としては確に破格である、しかもそれが結婚するといふに至りては、喜劇か、悲劇か判斷するに苦むのである、廣い世界にも斯う云ふ人間は先づは少い方であらうと思はれゐから一寸紹介する。（一記者）



住居に就いての注意

東京女學館教授　藤崎つね子

住居に就いての注意は、其の身分、財産、職業の差等にも由ることで、衣服ならば成るべく質素にせよといふやうな事も言へますが、家の事は廣くしてはならぬとも言へず、また狹くする方がよいとも言へませぬ。併し身分の許す限りは、日常必要の設備は欲しいものでございます。設備と云つても程度問題でございまして、注文は何程でも限りのない事でありますが、私の申ます設備はたいしたことでございませぬ。只だ住居を建てるにしても、借りるにしても、成るべく便利のよいのを選ばねばなりませぬ、便利といへば、物置もあり、押入も多いこと、次には椽側や廊下のついて居ること、風通の良いことが第一の要件であります。ところが借家建には、地面の儉約からして、押入や廊下が至て少うでございます。少し位ゐは起臥する所が狹くとも、かういふ所の多い方が、却つて廣くつかへて室内の整頓も出來て、仕事の上にも少からぬ利益があります。また如何ほど押入があつても、物を取片附けることの知らぬ人には却つて邪魔になる位であるから、どこまでも押入を利用して、物が亂雜にならず、置き忘れることのないやうに、隨つて押入の外に、足にひつかゝるものがないやうに、よく物を整理して邪魔にならぬやうにせねばなりません。

室數ばかり有りましても、廊下のない家は駄目です、例へば客がありまして、隣室に行くのに客間を通らなければ行けないやうな住居をして居られる方がいくらもあります、若し廊下や椽側がございましたら、そん

な客の居る處を通らずにすみます。宅では階下は玄關と女中部屋と、食堂と、併せて六間、二階は二間ありますが、五組の來客があつても、何れの部屋に行くにしても、廊下越しに導かれることが出來るやうになつて居ります。

室内の裝飾も、これも日本建と西洋建とで違ひますし、いろ〳〵家屋によつて趣向もありますが、日本式ならば、床の間に閑雅な掛物一軸に香爐一つ、違ひ棚に料紙硯など置いた所位が奥床しく、あまり勸工場のやうに、無闇に物を並べぬ方がよろしい、額なども理髪店流にならぬやうに、これも取合せよく品のよいものを掛けるのがようございます。學者などが書物を床の間一ぱいに積んである如きは例外で、要するに輕薄の裝飾は謹むやうにしたいものでございます。

御覽の通り、臺所もたつた四疊半でございますが、相當に客のある家で、十人や二十人の來客がありまして、料理するにしても別に狹いとも思ひませず、十分に間に合ひます、日本式の臺所では、大概坐つてお料理するやうになつて居りますが、私どものやうに四疊半位ですと、一人に坐られると他の者は寄り付く事も出來ず、又一寸退かうと思つても、退くことも出來ない、それに食物を足元で取り扱ふと云ふ始末で、あまり良い氣持もいたしませんし、また不便なことも、多うございますので、立つて居てする樣に、割烹臺を考案して、この上で料理は一節やります、不用のときは、はづしておきますから場所も取りません。

臺所も室内も凡て瓦斯を使用して居ります、長い間臺所の煤を氣にして居りましたが、瓦斯を使用するやうになつてから、おかげで燻ぶることもなく、塵もたゝなくなり、比較的費用も要らないし、第一手數を省くのみならず、臺所も廣く場を取らないから之位經濟な事はありませぬ。

府下ですから、市の水道を使用することが出來ませぬので、地下百尺程堀下げた井戸の水を用ゐて居ります。臺所へも湯殿へも便所へも此の自家水道を引いて居りますので、不自由なく使用が出來ます。



崖壊れで九死の中に一生を得たる當時の慘状

尾島菊子

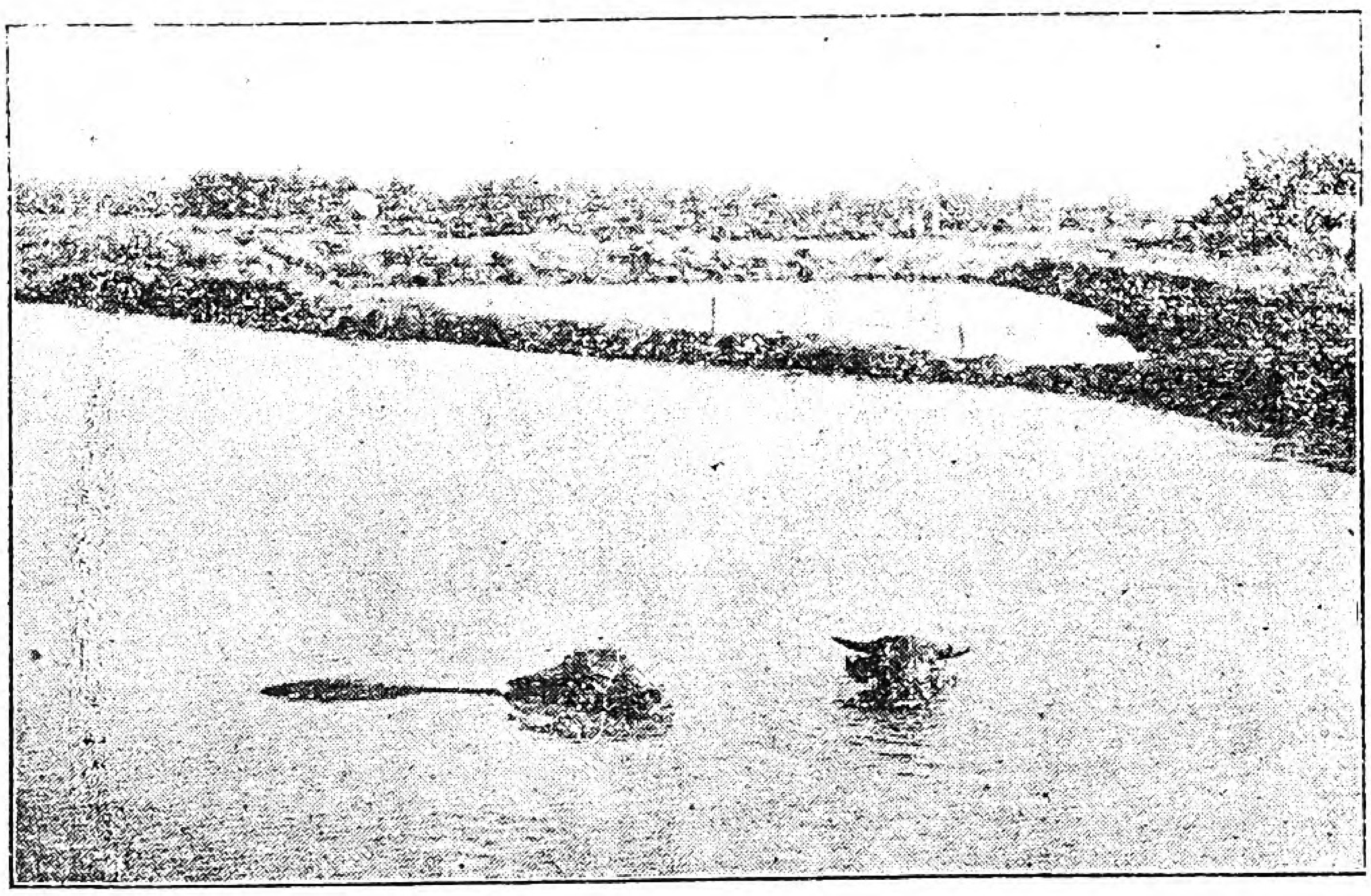
其時の事は宛然夢中でございましたから、何が何だか一向覺えがございません。

然うでございます、彼の大變事の起る少し前、夜の十二時頃でもゞございましたらうか、凄じい雨の音に交つて、何だか變な音がする、音がすると母が申しますので、眠らないで氣を付けて居りますと、どしりと地響きがいたしましたから、驚いて外へ出ました、直ぐお寺の方を叩き起して、男の方に來て頂きますと、低い崖の一部が崩壊れて、垣根の傍まで土が押寄せて來てゐるやうです、何分黒暗々たる眞の闇夜の事ですし、雨は瀑布のやうに降り頻る最中なので、能くは分らないのでございます、若し晝間であつたら、見上るやうな高い懸崖ではございましたけれど、此時樹の根が緩んでゐるとか、地面に間罅が入つて居るとか、多少は危險を豫知することが出來たのでございませうけれど、よもや彼の高い懸崖が上から崩壊れ落ちるとは思ひませんものでしたから、只、雨の水がどん／＼浸入して來るのを恐れまして、蒲團や、手近の調度を高い處へ揚げたり何かして、彼此一時間も經つたでせうか、然ういたしますと俄然、天地も震動するやうな、それは／＼恐ろしい響動が轟然としてきたのです、何とも彼とも言ひやうのない甚い悽じい響動でございましたから、あッと言つたまゝ我を忘れて逃出したのでございます。其時玄關の地面には五六寸の水がござい

ましたらう、私は其處へ轉び落ちたのでございます、妹も、母も私に續いて逃出して、三人とも其處へ轉んだなり起上ることが出來ないのでございます、もう死んで了つたと思ひましたね、何か斯う大きな重いものに壓迫されたやうな感じがして、身動きが出來ないのでございますよ、それでも兎に角生氣がございましたから、三人とも繋がるやうにして地上を匍匐ひながらお寺の方へ逃て參りました。何處を何うして撲つたものでございますか、其時三人とも身體中を怪我したのでございます。外に家族と云つては弟一人だけでございまして、之も大震動のした一刹那に、本函を抱へて飛出さうとした處が、玄關には私等三人の女どもが轉倒て居るものですから、勝手口の戸を蹴破つて飛出したさうです、夢中で井戸端まで駈出した時に、電光一閃、數十間の懸崖の上から大木が根こそぎ倒れ落ちて來る處を、其稻妻の一閃光の裡に見たと申しましたもう少し出るのが遲かつたら弟は生埋になつた筈です逃出した勝手元はメチヤ〳〵に崩潰れたのですから。

勝手元と、私の書齋にしてゐた室とは、全く破壞して了ひましたけれど、其他の座敷は潰れると云ふ處までは參りませんでした。小さい家でございましたから幾本かの大木の枝や、または墓地の大きな石碑に支へられて、全潰しなかつたのでございませう。石碑と云へば、御承知の通　私の宅は愛宕山の裏の和合院と言ふお寺の境内にございまして、直ぐ隣は天德寺の墓地でございます、其御寺には德川家のお大名の立派なお墓が澤山ございまして、それが皆懸崖崩れと同時に埋まりました。勢ひといふものは大したもので、何丈とあるやうな高い石碑が微塵に碎けて、私の方の勝手元の壁を貫通けて、飛んで來たものと見えます、石碑の碎片が勝手元に泥と一緒に埋まつて居るのを後で發見して、實に慄然としたのでございますよ。けども又、其石碑が澤山あつた爲に、一氣に家が潰れなかつたのでございませう、幾許か土塊を支へたものと思ひます。
全體彼處の懸崖は危險な處であつたに相違ございません、近所の人に聞きますと、何でも從來に、四囘と

か崩壊れたさうでございます、愛宕山の塔の眞下に當るのでございます、別に石垣にはなつて居りませんけれど、急な處でした。能く子供や男の方などは、面白半分に樹根につかまつたり、草を便りにしたりして登るのでございますが、然うすれば愛宕山へ登れたのでございます、高さは然うですね、何十間ありませうか兎に角見上るほど高いのでございますよ、けどもね、夏などはそりや涼しいのです、風通しは宜し、樹木は上から被さつて居りますし、それに第一私共が彼の家を離れかねたことは、閑靜なからでございまして、晝間でも人聲や跫音は、聞かうと思つても聞かれないのでございます、お寺の奥でございますからでせう、少々は危險だと思つても、よもや此んな大破壊が起らうとは存じませんから、つい他へ移る氣にもならなかつたのでございます。



水牛　京城　高宮千惠寄

怪我でございますか、何、大したこともないのでございます、併し未だ家族は繃帶などして居りますが、幸ひに顔などは撲ちませんでした、手とか、足とか、方々が紫色に膨脹りまして、血が出ますやら、血が浸滲ますやら、何處となしに痛いのでございます、未だ一歩も外へは出ませんが、妹は昨日も壊れた家を見に參りまして、お鍋や庖丁が潰れた勝手元の泥土の中に埋れて其まゝあつてよと、歸つてから申して居りました。マア怪我はいたしましても、お陰樣で命だけは拾つたやうなものだと悦んで居るのでございますよ、お見舞下さいましてありがたうございます。

對話　別れませう

"Let us part"

森川葵村

貞雄。
靜子。



貞雄「靜さん、最早おだまんなさい、え、幾何泣いたッて泣いて別れずに濟むものぢやなし…………」

靜子『……はい』

貞雄『本統に最早泣き止みなさい、そしてお別れの名殘りに、夢のやうな三月の間の二人のノートを最早一度繰り返して見ましようよ、え丶』

靜子『え丶……今更ですがまるで夢のやうでしたわね、ではお名殘にそのなつかしい夢を繰り返して、そして綺麗にお別れとしましよう……』

貞雄『え丶と、僕のから始めるよ、「ひらめき」と言ふ題だ』

ひらめきぬ……
濡れ葉を外れて
せ丶らぎの水脉のうねりに
亂れ入る月光の、また
しのび音の心の聲の
その絲のひらめき顫ふ。

忘れめや、
楠の木蔭に
ふと見たる
濡れ葉の、水脉の、

はた初戀の
眸のひらめき……

いとかすか……
かすかに、さはれ
狂ひつゝ、また縺れつゝ
せゝらぎの絲の咽びよ
疲れたる心の底に
今もなほひらめき顫ふ。

貞雄『あのひらめきです、あのひらめきに僕の詩も戀も生命もみんな含まれて居る』

靜子無言で首肯く。

貞雄『あ、鶺鴒が飛ぶ、見給へ池の水を掠めて……』

靜子『ほんに……やはらかく曇つた水の上を、眼にとまらない者の、かすかなタッチが――』

貞雄『あのタッチ、あのすうつと曳いた、微かな……匂ひと言ふか、響と言ふか、あのか纖い搖曳が詩の氣分ですね、鶺鴒でも無ければ、水でも無い、あのタッチ、あの搖曳そのものが詩なのだ。それを世の文學者は徒らに鶺鴒を解剖して居る、水を分析して居る、甚しきは水底の泥土を掻き廻して深酷だと喜むで居る。彼等は食はなければ味はれない、攫まなければ感ずることが出來ない、併し僕等はそむな感じの鈍い文藝には何の興味をも持たない、僕等は飽く迄質材(Stoff)を脱化した情調(Stimmung)に惑溺する。詩に於てもまた戀愛に於ても……』

靜子『議論が難かしくなりましたね、大層激して入らしやる……』

貞雄『最早止めましよう、えゝと、次は靜さんのですよ、「雨後の朝」か、一寸象徴的だね』

雨後の朝

日はきらゝかに
照りさしつ
片岡に

露ぞ輝く
草の笑

靜子『そうそう、貴樣彼の日を覺えて入らしつて？奈良に宿つた彼の日の朝を、銀の雨が太陽に輝きながら、二た線三線こぼれて居た、それも晴れ上つた三笠山を、欄干から二人で眺めて居たのを』

貞雄『さうでしたね、なんでも外光の薄い綠が白地の浴衣になつかしく顫へて、何となく永遠と言ふやうな感じがしたね』

「青き空
オルガンの譜の
つたひ行く、
雨後の朝
窓に明るき
虹の音も
君吾の
よろこびも、はた
かなしみも
とはの譜ぞ
なべての鍵に
つたひゆく。

貞雄『何だか「宇宙の意志」と言つたやうな調子がありますね』

靜子感に激したやうに無言、やゝありて

靜子『逢へるわね、逢へるわね、屹度逢ッてよ、逢へなくッてどうしましよう、この世界は二人の愛を歌ふ鍵盤ですわ、二人の愛は鳥ともなり、花ともなッて永久に………』

やがて呟くやうに

『The world of imagination is the world of eternity....
（幻想の世界こそ永久の世界なれ……）

貞雄、續けて

『…Oak dies as well as the lettuce; but its eternal image or individuality never dies, but renews by it's seed.
（樫も萵苣も共に滅ぶ、然れどもそが永久の相卽箇性は決して滅びずして、其が種によりて毎に再び更めらる）

言ひ終らずして、かろ〳〵嗟嘆す、何知れぬ涙睫毛に輝く。

靜子『うれしいわ、うれしいわ、木や草の相さへ不滅ですもの、二人の愛は、二人の相は未來の未來まで滅びないわ貞雄さんも何時か妾にお話しになつたわね、亡くなられたお姉樣のことを……』

貞雄『姉のことッて？何でしたか』

靜子『病氣になる少し前毎晩連けて、昔の亡い戀夫を夢に見て入らしたッて』

貞雄『えゝ、そして毎晩うなされて、夫に起されたさうでした、フロックを着た姿が毎晩手招をしたんですとさ……』

靜子、聞くに堪えざるやうに耳を抑えて

靜子『心にも無い結婚——妾と同じ身の上だわね』

貞雄『それは丁度病院で亡くなッて、未宅へ引取らないうちでした、嫁くにも一所に伴れて行ッて、死ぬ迄傍を離さなかッた腹心の女中と父と僕と三人で枕下を守ッて居ました、すると夜が白々と明けて來てカーテンの弱々しい光が白い夜着の上にふはり〳〵と動いて、何だか夜着に輕い息が通ッて居るやうぢやありませんか、念佛を唱へて居た父は幾度も未息が絶えないのぢやないかと立ち上ッた位です、その時初めて私は、その事を女中から聞かされました、何しろ突然の病氣で宛然夢のやうでしたが、それを聞いて父も僕も、あゝそれではあれまでの壽命だッたかと太い息をつきました』

靜子『まッたくですわ、一心こめた人の思が通じなくて怎しましよう、逢へるわね、屹度逢へるわね、二人のうち、何らが先きになッても』

貞雄『僕の終焉には靜さんが』

靜子『妾の死ぬ枕下には屹度、貞雄さん逢ひに來て下さ

るでしようね』

貞雄『…………』

暫し無言

貞雄『併しですね、その時靜さんは僕に遇ッてると思ッても僕は靜さんに遇ッて居ないかも知れない、僕は靜さんに遇ッてると思ッても、靜さんは僕に遇ッて居ないかも知れない』

靜子『何と仰るのですか』

貞雄獨語するやうに

貞雄『無關係、無關係(indifference)――無窮の進路無窮の會はざる進路、永劫の過去から永劫の未來に至るまで、終に會はざる道――あゝ悲しいが靜さん……』

靜子『何と仰るのですか、ちつとも解りませんわ』

貞雄『止めやう、まあ、僕の詩を最早一とつ讀みましよう』

行き行きぬ、月の磯
かく二人、只行きぬ

白き月、波の上を
白き泡、眞砂地を、

その明き心を君は
その暗き心を吾は、

行き行けど月の磯
あゝつひに通ひ得ぬ
心と心…………

貞雄『靜さん、僕の胸には、……胸には、いひぞ解けない氷のやうな冷いものが、………泣くにも泣かれない悲しみが……あゝつひに通ひ得ぬ心と心――、靜さんお別れと言ふに何時まで誇張した情緒を樂しむで居ましよう』

靜子無言

貞雄、投げるやうに

貞雄『無關係(indifference)……』

靜子、驚いた眼を視張り

靜子『無關係、何がですか』

疑と恐怖に満ちた眼から熱い涙がこぼれる…

貞雄、あらぬ方に視線を外らして、瞼を拭ひながら

貞雄『貴女は、さつき未來の未來までと云ひましたね』

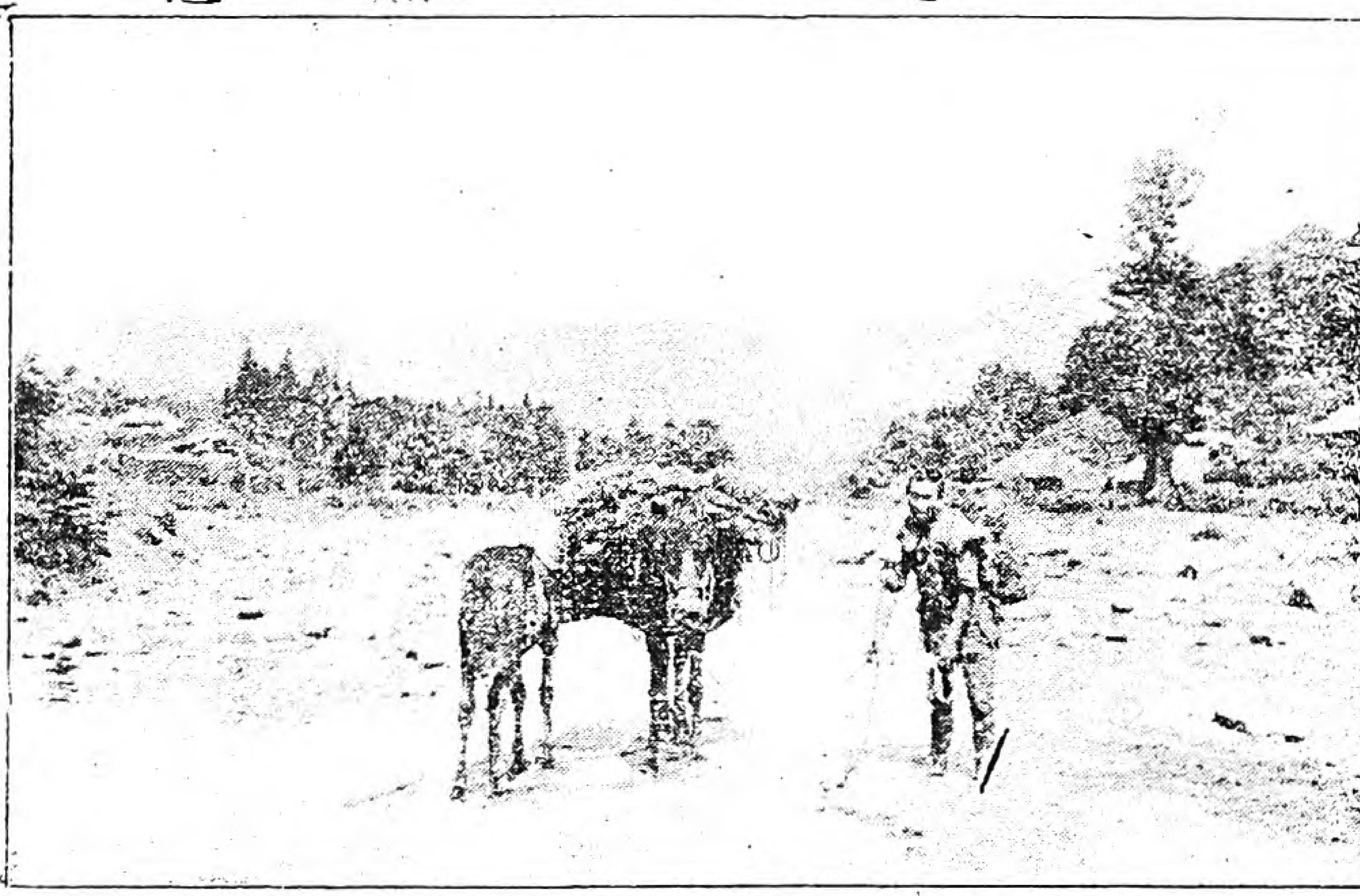
靜子『はい……』

貞雄『死ぬ枕邊にと言ひましたね』

靜子『はい』

貞雄『併し靜さん、貴女の逢ふ私は到底「貴女の私」ですよ、それと同じに、私の逢ふ貴女も到底「私の貴女」に過ぎません、ヴエルテルの見たシヤーロツテは、ヴエルテル自身の虚像でした』

靜子『貞……貞雄さん、それでは貴様は眞から妾を愛して居て下さつたのではないのですね、あゝ口惜しいわ、貴様は靜子、靜子は貴様、では無かつたのですか』



鹽原　下谷　麻布初子寄

貞雄『誤解しちや嫌ですよ、靜さん氣をおちつけて聞いて下さい、僕は未來の未來まで貴女を愛します、そして貴女も僕を愛して下さるでしよう』

靜子『そして二人の愛は不滅の鍵盤に不滅の譜を響かせるのでしよう、鳥になり花になり、象徴は轉換するも、二人の相は變りません』

貞雄『それだから、と言つて私と云ふものが貴女に何の關係を有ちましよう、貴女が私に何の關係を有ちましよう』

靜子『關係を!?』

貞雄『左様、愛は一方的の行爲です、決して關係ではありません、貴女は貴女の進路を歩むに過ぎません、私は私の進路を歩むに過ぎません、人口統計學者は人の命を水平線上の垂直線になぞらへて計算します、その運命づけられた垂直線ですよ、吾々の歩むの

は、一の平行線の一點から一點までを私と言ひ他の平行線の一點から一點までを貴女と言ひます』

靜子『そして、二つの平行線は接合することが無いとお言ひなのでしよう』

貞雄『永劫の過去から、永劫の未來まで』

　靜子泣き崩る

貞雄『怎おしです』

靜子『でもあんまりですわ……』

貞雄『併し此の悲しい自覺を誰が僕に與へました、靜さん貴女は僕にとつては義理ある人の妻ですよ』

靜子『最早言ッて下さいますな』

貞雄『バウロを斬つた劍、ヴエルエルを打つた拳銃が、僕には鋭い、酷い、皮肉な理性の刃となりました』

靜子『それで、貴樣は事實を捨てゝ情調の雰氣に溺れるやうとするので……』

貞雄『貴女と云ふ標的に依つて、自分の愛を愛するのです』

靜子『では貴樣は、貴樣は妾を愛するのでは無くて、手段にするのです、道具にするのです、妾は貴樣にとつて一とつの偶像に過ぎません』

貞雄『偶像、左樣偶像です、――少くとも「私の貴女」は偶像でいゝぢやありませんか、私の愛を無限に受入れて呉れる最愛の戀人は偶像です、併し偶像崇拜者のやはらかい悲しみを知る者は今の世の中にありません。人は皆實質に飢ゑて居ます、文學者も宗教家も神にあこがれて居ます、――パンを呉れ暖い着物を呉れる親切な神樣に』

靜子『偶像、偶像崇拜者と――』

　と呟くやうにしながら

靜子『して見ると今の別離は？』

貞雄『雨です、風です、偶像の破壞です』

靜子『併し雨は降らずとも、風は吹かずとも、繪具は何時か剝げますわ、木や金は何時かは朽ちましよう』

　貞雄低い聲で

　二人暫らく無言

Let us pant, ere the season of passion forgetus, Hith a
Kiss and a tear on thy drooping brow.

（別れなむ、情熱の季過ぎぬ間に、
汝がうらぶれの額に涙とキッスもて）



強者に對する同情

一色醒川

私は且て本誌に於いて、新時代女性の立脚地に就いて論じた時一箇の宿題を遺しておいた。其れは強者に對する同情と云ふ事であつたが、圖らずも其の後かの論文に就いて所感を寄せられた篤志の讀者を二三見る事が出來た、就いては更らに之を詳論せねばならぬ、何となればあれを其の儘にしては却て誤解を喚ばないとも限らぬからである。

強者又大者と云つても宜い、此の強者大者に對する同情とは一體何を意味するものか、其れからして先づ考へねばならぬ、中には弱者であるから同情も受け得らやうが、強者に對する同情など云ふものは無いと云ふ人があるかも知れぬ、いかにも同情と云ふものを唯一片の惻隱の情と丈けに解釋するならば左樣でもあらう、又長いものには卷かれと云つた考などから見れば、強者には唯屈從の一途より外に無いものとしか思はれぬのも尤もである。

併しながら同情と云ふ事は、果して其樣な低いものに限られて居るものであらうか、例へば乞食の類に同情して衣食を與ふる如き事のみを云ふものだらうか、是れは善い事には相違ないが、同情の消極的一面に過ぎない、若し同情と云ふものが、單に同等以下の弱者に對するものに限られてゐるならば、同情は德として餘り香ばしきものでは無いかも知れぬ、却て又同情を蒙る者の獨立心を害する事が無いとも限らない、更に又同情を與ふる者に取ても、徒らに慈悲をしたと云ふ自負心が生ずるばかりで、其れが爲め何等品性を高むる所以ともならぬ。

善き同情は人の高き處に同情する事である、消極的慰藉以上積極的奬勵を含めるもので無くてはならぬ例へば或る弱點を有して、其の匡正を圖らんとするも

力及ばず、煩悶苦闘せる上などに力を與ふる如き積極的の態度こそ眞の力ある同情である。同情は唯上面を撫でて止むべきものでは無い、しみじみと心情の底より同感しなければならぬ、又其の要素には憐みの心と相並びて一味の敬ひの念をも有すべきである。

大者强者の心情に同情する時は、即ち自己の精神を廓大し、躍如として心靈が高擧さるゝ所以である、而して斯かる精神の鍛錬が同情者の品性を高め、亦被同情者の能力を強うする、つまりは社會の進運ともなるのである。

斯く抽象的に云つた丈けでは或はまだ分らぬかも知れないが、よく考へると、實は大者或は强者に對する同情の氣分なるものは、誰しも夙に知て居る筈だと思ふ、其の一例として、畏れ多き事ながら、草莽の臣民が、至尊陛下の宸襟を拜察し奉る如き消息がある、不省の身にもその實驗はあつた、かの日露戰役中戰勝毎に、多數の國民と共に歡呼すると同時に、上御一人の大御心は如何ならんかと察しまつつて、一念其處に及ぶ毎に何とも知らず涙催さるゝ事があつた、其の刹那は實に高き感興を覺えたのである。

昨秋伊藤公のハルピンに於ける不慮の逝去の時などにも、一わたり哀惜の情以上に、申すも畏き事ですが此御親賴一方ならざりし重臣を失ひ給ひし、大御心を察し奉つた時、初めて黯然として銷魂する思ひがありました、是等は大者强者に對する同情の一例で、是れはひとり私ばかりでなく、皆さんも夙に御承知の消息だらうと思ふ。

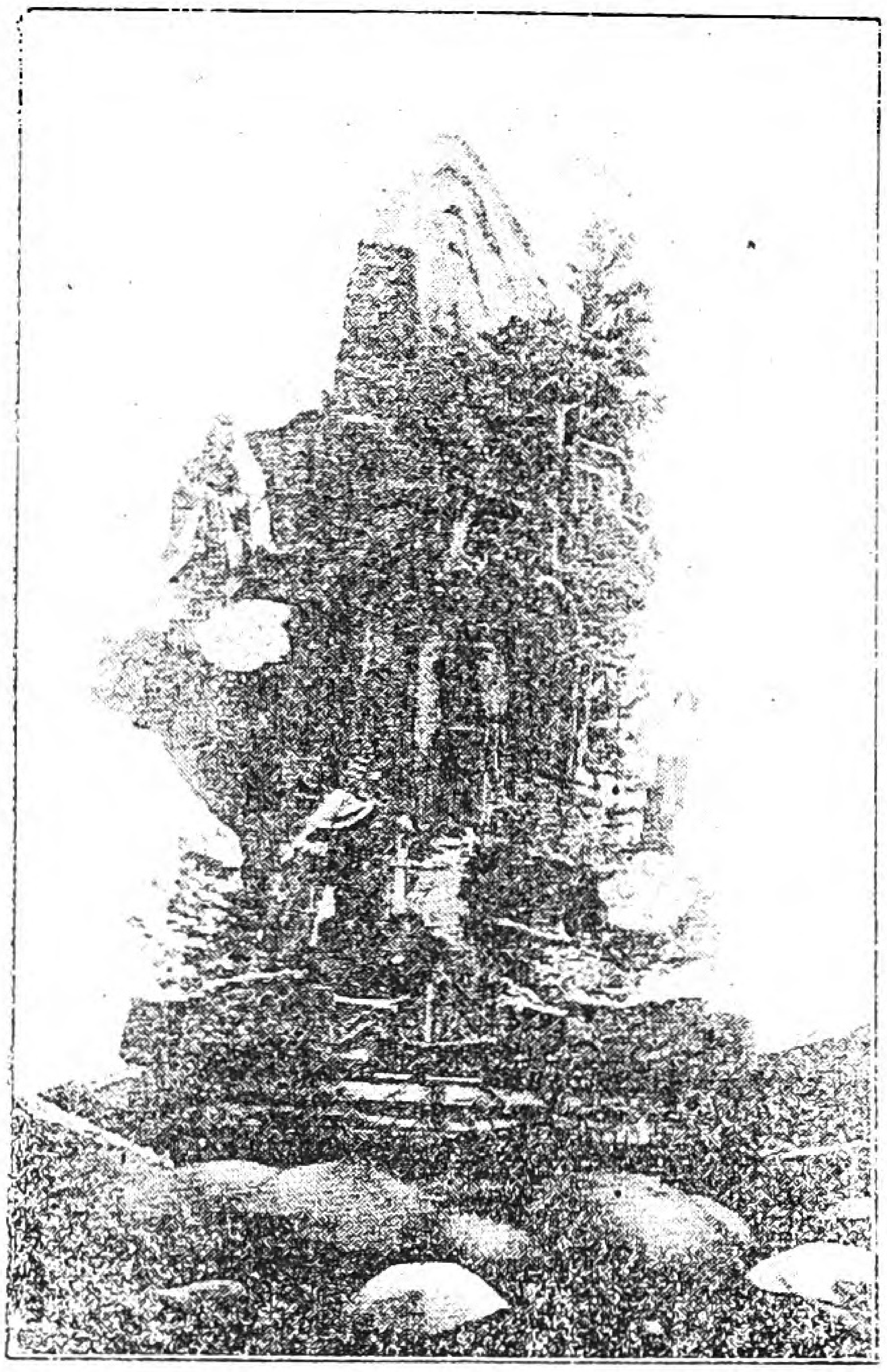
島崎藤村氏の作に『常磐木』と題する詩がある、其の中に「あら雄々しきかな、常磐木の枯れざるは、百千の草の枯るるより、いたましきかな」云々と歌つてある、是れ等も亦强者に對する同情の聲でありますまいか。

甲州の御坂峠と云ふのに登ると、天の一方には所謂日本アルプス系の雄峻なる山々が、郡雄割居の如く其肩を聳やかし、山脈は波濤の如く走てゐる、見るところ如何にも賑やかに又暖かさうだ、而も更らに又一を見ると富士山が、ひとり孤高の姿を抽いて、白い沈默を保つてゐる、其の寂しさ深さ、實に何とも云ひ得ない感がしたと、或人の話されたのを聞いたが、聞いた丈けでも私の心は動くのである、古來聖賢皆寂寞とある如く、測り難き强者のローンリネスは洵に同情を

拂はざるを得ない。

よく考へて見れば、世の中の事、微者弱者は素より強者大者おしなべて同情の表示である、啻に人のみならず、宇宙の神も亦同情の圏内に有るものと言ひ得られる、吾人は神に對しても亦同情し得るものである、斯くして初めて世に霑ひあり匂ひあるのである。

エマーソンの語に『我若し傑出せる他の影に蔽はれて色を失するの感あらんとも、我れはなほ彼れを愛するを得る也、彼れを容るゝを得る也、斯くして彼を愛するものは其の愛の偉大を自己の有となす』と云ふがある、實に味深き語ではありませんか、いかなる強者にも壓せらるゝのでは無い、大者の中に沒して亡くなるのでは無い、其中に有て自我の個性を失はず、我として彼を愛し、彼を容るるのである、徒らに長いものに卷かれるのではない、わが能力の限りを以て同情するのである、人に對して



酒田日枝神社の祭禮

然り、神に對しても猶ほ更である、爰に至れば同情なるものは、其低きところの測隱の情より高きは崇拜の念に至るものである。

往古ナザレの聖が『矜恤あるものは幸なり其の人は矜恤を受くべければ也』と云つたのも亦此の同情の消息にして此處に至つてこそ敵を愛するの餘裕も生ずべく一切平和の世界を現出し得る。

さればとて所以ある憤懣を唯押へよと云ふのではない、けれどもいかなる時と雖も同情の眼を有して欲しい、諸孃若し家庭に於いて不滿ありとせば、少しく考へて家長たり戶主たるものの責任の大に同情するところあつて欲しい、若し學校に於いて不平あらば、又校長敎師の任務を考へて見る事も必要である、斯くして社會の不調和の中に調和を求むる和平の態度は、やがて「神の子と稱へらるべし」と云ふ大訓と合致するので、之を倫理的に云へば

同情の力を以て意志を鍛錬するのであると思ふ。

近代人が最も痛切に感ずる現實思想なるものも、近頃は一時の如く只管に地上に匍匐してゐたやうなところより、頭を天上に揭ぐると云ふ傾向に推移して來たやうだ、この地に立脚しながら、而も天上を忘れざる精神的餘裕に依て、人生に於いての强弱が分れ勝敗が定まるのである、如何にせば常に强く、どうすれば常に勝つか、此解案は略ぼ二つ提供されてゐる、其の一は卽ち藝術一は卽ち宗敎である。

藝術卽ち趣味の道はおろそかにはならぬ、しかし其れ丈では現實の苦患は依然として同じく、暗らい冷たい氣分は去らぬ。さらば宗敎かと云ふに、是れは藝術よりも猶ほ一層人と人との間は沒交涉で孤立的である元來宗敎は斯く藝術と相對して言ふには、餘りに複雜と單一との矛盾的要素を有してゐる。自分一個の事を言へば、此の宗敎生活は確かに樞要なる大部分を占めて居る、是れ無くんば現實生活のドライに堪へざるものである、而も猶ほ直ちに以て人に奬める事は出來ぬどうしても個人々々の本心の要求の起るを待たねばならぬ、人間は遂に孤獨である。

私は宗敎其のものは貴いものでは無いかも知れぬと思ふ、少くとも宗敎的儀式信條を誨へるものに何の價値をも認め得ないが、しかし宗敎的要求の無い者が生活の眞を得やうと期するのは噓である、所謂宗敎は無くても宜いかも知れぬが、宗敎の要求は無くてはならぬ、猶ほ眞理を求むる態度が眞理其ものよりも高しとするのと同じである、宗敎の要求、心情の底より湧出し來つた時、卽ち鏗爾として新生活の鍵に觸れた時である、勿論其の生活と雖も決して平安づくめなものではない、其う云ふ平安は地上には無い、又空漠の見を以て天上に期する事は出來なからう、或は人間の能力に無い事かも知れぬ、しかし此要求に依つて未知の新氣分を知る事は出來る、少くとも、同情卽ち崇拜と云ふ高興は此處に源して發揮されやうと思ふ。

▲火傷の手當　火傷をした時は、患部に料理曹達（ジウソー）を塗りつけ、其上に布片を當て其布片の上を浸し（凡そ十五分）置けば、痛みもとれ、又水脹れにもなりません。今一つは玉子の白味と同量の橄欖油を交ぜて、其患部にぬりつけ、其上を布片で卷いて置けば水脹れになりません。

▲指を挾んだ時　若し指を戶の間に挾みたる時は堪へ得られるだけの熱湯に其指を入れ、湯の冷えたる時は取り換へ、十五分間位持續して浸けて置けばよろしい。

▲牛乳の保存　牛乳の中に山葵の根を少し切りて入れ置けば永く保ちます。



富士山の印象



山田邦子

富士へ登ると言ふ樣な事、もつと自分は自分を驚きの目で見たかつた、怪訝みたかつた、奇をあさつて飢ゑてゐる自分は、かう言ふ事の味もわからず、呑み込んでしまふのかと淺ましくも淋しかつた何の事はない富士と眉とすれ〳〵に居ながら自分はたゞ茫然として裾野の夕を小さい馬車で運ばれてゆく。

都會に居て、頻りになつかしんでゐた灌木の叢生其下を流れて居る水の響、みんな、みんな目の前に迫つて居るのにたゞ、茫然と其れを見、茫然と其れを聞くばかりである。

其うちに合歡の花が夕の風に吹かれて淡く咲いて居たこれが、自分の心を一ばん驚かせ喜ばせ活々とさせたものであつた。

馬車は合歡の花をうしろにガラ〳〵ガラとしきに走つた、其音は單調な樣で單調ではなかつた。

富士に連れた山脈は、緑のまゝにくれてゆく、大きい景色だと思つた何んとか言ひたかつた。

富士の根に連る青き山脈は靜かに暮れぬ大空の下仁杉に着いたのが六時であつた、靜かな寺、水の音する寺。暗い冷い空氣なつかし。

馬に乘つても驚かない、笠を被つても不思議ではなかつた、昨日とかける裾野道、野薔薇の花と撫子が限りも知らず咲いて居る、美しいと思つた。

裾野道撫子などが一生のわすれぬものゝ一つなるらん。

七合五勺に宿つた夜さすがに、富士の心を感じた、高い高い上に宿つて居ると言ふ事が心の一方を妙にそゝつた、雲の海、あゝ雲の海、既にいろ〳〵の形容は舊い、此寂然たる大自然の夜を、最も正當に傳へる言葉がほしかつた、月に照されて自分は峰をあふぎ星を眺め更に遠く廣大きく無言に更けてゆく下界の夜の深さを思つてむしろ、胸に張り裂けよとまで充ち溢れた感情に醉ふた、然し自分は胸を抱いたきり、聲一つ洩しもなかつした。

無言つて、無言つて、たゞ空や雲や山や海と一緒に、更けてゆくにまかせてゐる一人であつた、唯涙がほろ

ほろと流れて居たゞけ自分は動物であつたのであつた詩人でもない歌人でもない……あゝ……。

御來光は平凡なものであつた、唯雲の色、雲の位置を面白いと思つた。

頂上に着したのが午前八時、二十一年目で始めてホッとした樣な氣もした、幼い時から姉妹三人で金明水、銀明水と言つてなつかしんで居つた水をほんとに、口に觸れた時には姉や妹に對して不思議なかすかな誇りのやうなものを感じた、水は冷たかつた。透きたうつてゐた。

もう一生に二度とはあるまいと思つて、淋しくなつてもつと人知れず頂上の社の板に自分の名を鉛筆で書いてみたてれは、未來永却人の目にかくれて、かすかな自分の影を止めるであらうと思つた。

劍が峰の上で見た雲、圓い地球の中空にふわり〳〵と浮んで居る所、如何に不思議な象と、不思議な力を持つて居るやうに、自分の心は雲に吸はれて居つたから言ふ樣な廣大きい景色、物珍らしい眺め、もう一生にも無からうと思つた時、三保の松原のあたりが淋しかつた。

野中到氏の石室を見た、乾割れの見えるおまる穢の錆びた据ゑ風呂、戸、雪、濕つた空氣、あゝ十五年の昔此所に人が有つたのだ、男と女と……朝が有つて晝が有つて夜があつて、雲が卷き込めた日、太陽が今日の樣に輝いた日、風が吹いた日、これらの日に連れて行つた其生活。

親不知、釋迦の石割、石に驚いた大いなる石に。十一時半下山、頂上の神主の息子がボールを、頂上から落してあはてゝ、五勺程それを追ひかけて飛び下りて漸くひろつたら又頂上へ登つて行つた。砂走りは無趣味たゞ面白かつたばかり小供のやうに、五合五勺以下は深い樹立に成つて折から麓から見れば雲の帶と見えるあたり、黑ずんだ樹の青に、白い霧がこめて來て我れも人も樹も鳥も茫然として繪の中のもの〻樣に靜かな心になつた、靜かに……いと靜かに、霧はなほも漂ふた、自分も人も通らぬ時の此所の今頃と言ふ事を思つて自分にホッと息をついた、午後三時すぎ……石楠の花が濕つた空氣に重々しく咲いて居たゞ水の樣に時に追はれて心ゆくまで止まつて居る事も思ふ事も出來ずに、向ふへ向ふへと觀るだけ、聞くだけで行かねばならぬ人間が飽き足らなかつた。

四時半三合目の茶屋に着いた、親切さうな主人、優しさうな息子は年頃二十四五、志郎さんと言つて峰から私たちを助けてくれた人である、中學まで濟ませたとか田舍の青年にしては活々として居る。家は間口が六間、奥行は三間ばかりしかない。出入口にも座敷にも戸障子は一枚もおかずに、家の中は見え過ぎる程見える、何講何講として淺黄や茶色の札がぢや〳〵と下つた軒、裏には山から水が引いてあつて、其れが臺所兼裏椽のながしに、どん〳〵どん〳〵落ちて居る、竹の筧はまだ青かつた。

「いつからお山にのぼる人があるの」

「七月の一日が山びらきです」

「そしていつまでなの大てい」

「九月の始めまで」

「七月の一日まであなたの家では戸を締て置くでせう」

「淋しくて困ります七月まで」

志郎さんと私とは太郎坊から吉田へゆく馬車の中でこんな話をした。

サア七月が近づいた、となると今までもが〳〵と生活して居た彼れ等の家の人の心もちが、急にせはしい様に成つて、蜘蛛の巣の澤山かゝつて鼠の糞などころがつて居る物置きから茶碗だのお椀だの、笊だのもつれただの取り出される、どす黑く成つた竹の筧ははづされて、キラ〳〵する太陽にはしやいで、そりかへるままに捨てられて了つて、新に青い竹で筧がかゝる、水の音が急に勢がよくなつて、どん〳〵〳〵と目のさめる程すが〳〵しくなつた家の中の人の耳に響く、間もなくチリン〳〵と鈴の音がして白い淨服を着た一組が「ヤアお久しぶりで御座います」とはいつてくる「お久しぶりで……又エライお信心な、早いお山で」と、昨年用ゐたまゝの言葉を一年ぶりで愛想よく、心もちも此日からさう云ふやうになつて了ふ。

私は一人默然とこんな事を考へて、富士の茶屋の其活活とした一日を思ひつゞけた。

ふと氣がつくと馬車は裾野の花の咲いた草の中を、夕の風に吹かれながらゆく山で取つてきた花を澤山飾つてある馬車の窓から、首を出して先の一行の馬車はとみると、右と左の叢生の中に一筋つゞいた、あら〳〵しい道をガラ〳〵と走つてゆく。

あゝ茫漠たる、而かも美しい印象よ！と、私の心は強く叫んだ、夜になつて暗い吉田の旅籠屋へ着いた。

市中の女の商ひ振り

白木いと子



勸工場の女

　勸工場へ出る女にはさう年寄は見かけない。そして勸工場は大概女より男の方が多く店を番して居る。

　これは勸工場は尠くも普通の店構へしてゐる家よりは搔浚ひなどに、都合がよい具合に出來てるので、よほど目端が利かなければ不可ないのと、さういふ場合また女では不便なのとが原因でもあらう。

　勸工場の繁昌するのは仍且春の花見時とか、さういふ人の出盛る時期にあるらしい。また夏ならば夜の散歩がてらの素見客もあるでせう。何れにしても一箇の商店としての店先に坐つて居る女よりはいくらか隨氣のあるのが勸工場の女ではないでせうか。多く小瀟洒とした姿態をして閑な時には退屈相に新聞や貸本をよんでゐる、若い女が二三人固まつて何か下らない話に

客の通路を妨げてゐることもよくあれば、前を通る人にも氣が付ず居眠つてゐるのも珍らしくはない。鬼灯をギユウ〳〵鳴らして居たりする女は小面が憎いけれど、然し勸工場の女は人には慣れてゐる。通路が狹いだけ客の姿態やなんかを近く注視されるので客があればあるほど、彼等の單調の生活の上にある好奇心は幾萬の滿足をされるのかも知れない。

　購ふ意の有無ともに關らず陳列してある品物を鳥渡手に取つてみてご覽なさい。彼等はすぐに傍に寄つて來る。けれど多くは强ひない。

　この間市内の勸工場の上位にある、ある大きいのへ這入つて見たとき、とある店で買物をしたら、私のとつた品物は並べてあるのゝ上層にあつたので、一寸氣がつかなかつたけれど、汚れて居た。其店番はまだ若い娘であつたが、それを風呂敷に包んで呉れやうとし

て稍汚れ目がついて居るのに氣がつくと、又並べてある中から一番綺麗さうなのを選つて取更へてくれたのでした。これらは商賈が上手なのだ。
男ならば氣がつかないでせう。又狹いものなら或は知つても默つて其儘寄越したかも知れないけれど。

女店員

三越、白木には及ばないけれど市内で有名な大きい呉服店の二階である。
賣出時でないから綺麗に陳列した多くの品物のみ目に立つて、廣い場内に客の影はちらほらと計り、同じやうに束髮にした顏の白い帶の紅い賣子達は閑さうに自分の持場を離れて話したり、硝子窓から戶外を眺めたりしてゐる。
今し方梯子段を上つて來てお召や縮緬の陳列場を見巡つてゐた一人の客は、やがて隅の見切場の處へ入つて來た。
暫く色々と見巡つてゐたが更紗や紬などの寄切の前で立止ると、あれかこれかと手にとつて見出したのである。中肉の格好の可い賣子の一人は窓際から歩寄つたが、大きからぬ丸髷結つて左程よくない容態をした此客の、頭の先から足の端れまで見てとると、默つて後の方に立つてゐた、客は迷つたやうにあちこち手にして見てゐたが、
「更紗や何かはこれだけなんですか」と振向いてきく。
「は、見切物のは此處だけで御座いますが、何にかお使ひになるので御座います？」
「男の半胴着にするんですがね」
「男物のお胴召なら仍且こゝいらでございますね、これなんかは如何樣で……」
と中柄の更紗を手にして見せたが客には氣に入らなかつたのか、



上野女學校生徒茶の湯の稽古

「さうですね」といつたきり可いとは云はないので賣子も一寸手持無沙汰になつたが、やがて見下した樣な風で何時か客の傍を離れて了つた。客は色々と迷つた揚句、半反物の一つを取上げたが傍を見ると賣子がゐないので、斯ういふ處へ來慣れないやうな場怯ぢのした調子で、

「あの是をお貰ひ申しますよ」と賣子の方に向て云ふと、今の賣子は又傍へ來たが、

「は、これを、畏りました、他には何ぞ御用になりますものは……」と客の胸から帶の邊に目を走らせてゐる。

「まあ是だけでようござんす」

「では何卒此方へ」と勘定場の方へ導いた。

これは日外實見したまゝを書てみたのにすぎないけれど、女店員の多くは客の服裝を見るといふことが、一の缺點のやうに思はれる。女店員は普通商買する女に比べては、やゝお高く止まつてゐる、といふやうな處がありはしないだらうか。誠實といふ事が尠いやうに思はれはしないでせうか。

雜沓する賣出の時の賣子は必死です、女店員の商賣振りの眞の巧拙を知らうとするには、常の日の閑な時に行つて見るのが可い。

一番客に親しげにするのが仍且三越あたりの女店員である。しかし女店員は裏面はともかく客に對しては一體に言葉附なり動作が叮嚀で餘り無駄口は利かないやうだ。

飲食店の女

飲食店と云つても大きい料理屋なんかの女には所謂茶屋女といふやうな一種の型があつて、粹に地味な容態をして、着物の着付なり髪の結振りなり、何處か垢拔けてゐる處、そこにちやんと型が出來て居る。さういふ型に嵌まつたのは別として、下つて色々の飲食店になると女もさま〴〵である。

ビヤホール、蕎麥屋、天ぷら屋、汁粉屋（汁粉屋には少女が多い）壽司屋、小料理屋、鳥屋、牛肉屋、氷屋などまだ〳〵飲食店も此外に種類が多いけれど、是等の女の商買振は概して上つ調子だ。何の氣もなさゝうに只疳高い調子で客を送りむかへしてゐる。

飲食店の女を知るには、東京中で一番飲食店の多い淺草公園にいつてご覧なさい。

露店の女

商買する女のうちでは露店の女は一番活氣がない。ランプの光は明るくても、其明るい光に映出された彼等の背後には寂しい影が見える。

都會の夏の趣を深からしめる縁日の其露店に見かける女は、大抵中年者が多いやうだ、さうして彼等は一體に愛想が尠い。夏でもよく腰蒲團を當てゝ僅に蓆一枚の冷を淩いでゐるが、冷易い女の身に少しばかりの商買をよすがとして、半夜を地上に座してゐる露店の女、そこに何かしらず都會の一面は窺はれるやうに思ふ。

ところで總括した處の東京女の商買振はすべて如才がない、一體に何處か親しみ易いといふ風がある。東京女の商買振はつまり上手といふのでせう。

小賣商店の女

折箱や鑵は體裁よく隅の棚に積まれて、幾つかの硝子棚の中には並んだ菓子の種々、美しい紅白の色そゞろに人の食慾をそゝる菓子屋の店頭。

午後の日光は戸外に白く照りつけて風もない暑さ、往來の人足も尠い折からこゝへは入つて來た客がある

「いらつしやい」と物蔭から子僧が出て來て客を迎へたが、

「あのデセールはありますか？」と客は束髪に水色の夏リボン挿した若い人。

「デセールでございますか」と應へた小僧は奥の方に向つて何か云ふと、黒繻子と何かの晝夜帯を締めた小粋なお内儀さんが襷掛で出て來たが、

「被入いまし」と愛相よく挨拶すると、

「デセールは、お生憎樣只今切れて居りますが……何ぞ他の物では……」

「さうですか、ぢやあビスケットでよう御座んすから一斤ばかり」

小賣商店でもいろ〳〵ある。それに同じ小賣商店でも大きいのと小さいのとはまた少し違ふ。こゝに書いたのは中位の所ですが、どうしても小さい店の方が一層親しみ易いやうに思へる。不可ませんお天氣でございますとか、お暑う御座いますとか一寸した言葉に花を持たせるのは仍且小さい店の方に多いやうである。そして夫も男の客に對する場合よりは、女が女客に對する場合の方が、この所謂お世辭が多いやうに思ふ。



祭と衣裳見物

石川縣社、能登神社、一に生國玉比古神社と申しまして素盞嗚尊、大已貴命、奇稻田姫の神をお祭りしてあります。此社には毎年二月初午の日に神幸祭が行はれます、此所から七里離れて一の宮村、氣多神社といふがあります、此處にも、素盞嗚命、大已貴命、奇稻田姫の神を配祀してあります、もとこの氣多神社と、生國、玉比古神社とは夫婦神樣ださうで一年一回、二月廿二日に御幸なさるのです、其お祭には近村の神主方を御招待になるのです、其時神主方の御乘りものは御馬でありまして、此お馬はみくじによつて、召されるのださうで、其年赤毛の馬の多く召された年は、火難があると申し、黑毛の馬の多い年は平年で、白毛の馬の多い年、其年生れる女の子は緣遠いと申し傳へて居ります。

廿二日の午后一時、御輿は靜かにお宮に御着きになります、御迭の神主招かれた神主の方々は神社が間近になりますと、トツト御馬を走らせます、そしてその境內の石の玉橋をお渡りになる所を、見物人の一同が異樣の聲を發して、馬を、おびえさせ、神主を引き落す、赤毛の馬なら火をつけるなどの、おそろしい亂暴がはじまります。けどこれが本日のお祭りで町人、村人の最も快とするところなのです、もし此時白毛の馬ですと、娘達は齒を見せると、いつまでも、永く永く、齒墨が附かぬといつて、しかと口をつぐんでしまひます、かうして神主方がからく、橋をお渡りになつて、お宮に入られて、お祭がはじまると、娘達は一寸お詣りして先た歸ります、其歸路の兩側にはずらりと見物人が立つてをます、此時娘達は決して足早に通りません、おそく、ゆるく、首垂れて、それは其時の衣裳が最も力入れられてあるからです、立つてゐる人は、衣裳見物です、尤も此祭は「御幸祭は兩場の鏡、親のならぬは子で知れる」と謠つて、娘にはりこむ事になつてをります。（能登七尾、近江加能惠）

積薪の火

舊六月十四日夜、瀨良田の（群馬縣）天王祭の太皷の音が拍子よく鳴り出すと、戶毎につまれた薪は一度に火がついて、藏の二戶前もある家は家根程も高く積む。

待ちもうけた若者は、森をさして驅けつける。皆裸だ。錆びた神輿は神主の手に拔らはれて若者の手に渡ると、もまれ始めて、二時間の後には錆がスツカリ落ちてしまふ。郡集は神輿に向つて胡瓜をパラく投げる、近邊の者は若者に水をあびせる。汗にねばつた身體は水にうるほされて、もまれくても傷をうけない。投げられた胡瓜は忽ち若者の汗となつて流れる。町を一廻すると社に收まる。越えて十五日も食物店や小屋掛の見世物は、廣い境內に幾つも掛つて一年ためた財布は綺麗にはたかれてしまふ。積薪は翌日まで燃えつゞいて居る（平塚白百合）

アイヌの熊踊り

當村の鎭守樣は、山の中途で、落葉松だの檜の木の一面に繁つて居る晝でも小暗い樣な所に祠てあるのです。神樣は熊野神社です、熊が出て畑を荒らさぬやうにと祠つたのださうです、お祭は秋の彼岸五日前ときまつて居ります、お祭

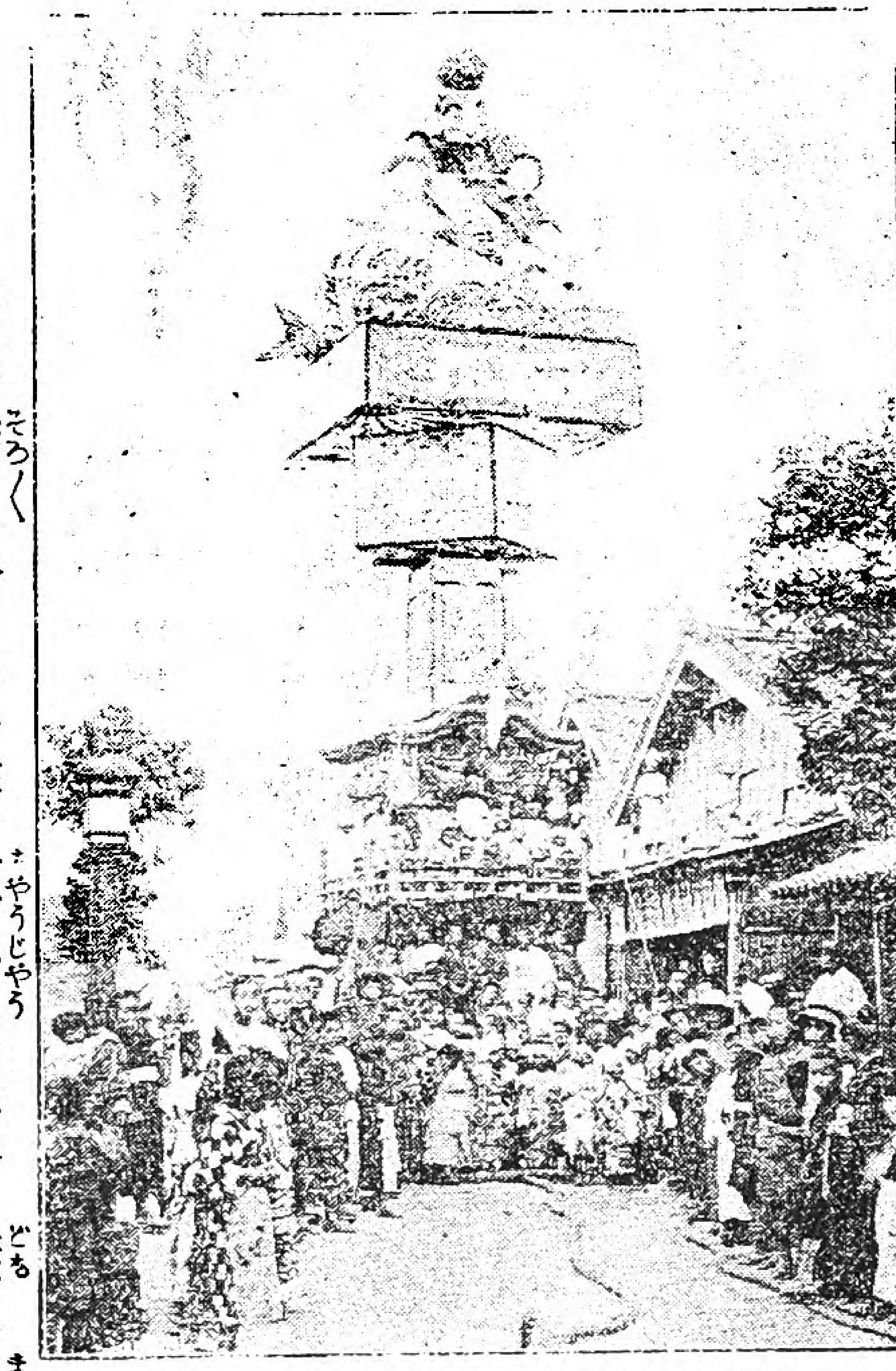
の御馳走は、何しろ諸國の人の集つた村ですから、千差萬別で一定しません、私の生國は尾張ですから土地の習慣は拔けません、まづ祭の前日にお鮨を作ります、稻荷鮨、鰊ずし、まぐろ鮨、赤飯に御豆腐位が關の山です、晩は村の青年で二三十位燈籠を點じて夜ごもりをします、祭禮の當日は、餘興として競馬、相撲、擊劍などがあつて他村から見物やら、飛入りに參りますから、隨分山里の祭としてはにぎやかです、家々では隣村の親類緣者を招て家內揃て見物に行きます、祭式は神主が神酒を供へ、一人で神樂を執行しますから、其時は、餘興全部中止して、一同參詣するのです。

祭式が終ると、アイヌの熊踊りとて、小熊を連れて妙な手眞似をして、踊るので、見物を笑はせます、是が終ると又餘興を始めて撰手の競爭試合等で終りをつげます。(後志、平手溪子)

矢を四方に放つ

珍らしいと云ふ程でもありませんが、當町にも鎭守祭の時には、昔から必ず行つて居る「ツクマヒ」と申すものがあります。毎年致します人は定つてをるので、其の人は藝をやる時に赤や青の布で體を飾ります、これが丁度蛙に似て居るので、世間の人は雨蛙といつて居ります。さて當日になりますと、雨蛙は神前で身を清めて藝にとりかゝります。二三丈もある柱には、白い布がぐるぐると巻きつけてありまして、雨蛙は其布を足かけにして種々の珍しい藝當をしながら、徐々に上ります、柱の頂上には三尺四方位の座り場所が造へて有つて、雨蛙はそこまで上りつきますと、又其上でシャチホコ立やトンボ返り、有りと有らゆる危險な藝を致します、しばらくして雨蛙は見物人を靜に見渡して、矢を四方に放ちます、此の矢の落ちた家には幸ひが來るといつて、昔から大層喜びます矢を放つと同時に「ツクマヒ」も終ります。いくら商賣人といひながら、雨蛙先生時としてそこから落ちて命を失ふ事もあります、此の樣な時には其の人を其の柱の下に埋めるのださうです。

さて祭日にはこの「ツクマヒ」を見ようとて、近國近在から老若男女の區別なく飾り立てゝ、中には面をかぶつたり鬚をつけたり、異樣な風粧をして來る者も有つて、其のにぎやかさは別段です。(茨城縣龍ケ崎町靜花)



能登飯田町の園祭り　同地鹽梅榮寄

有名な神樂

毎年十月二十四日から二十八日までは、平戸町村の氏神たる縣社龜岡神社のお祭日であります。此時分になりますと、最う何日するとお祭りだ、といつて樂しく待つ子供、お祭着縫ふに忙しい娘、御馳走の八百屋、物買ひに出掛ける主婦、皆樂しい中に用意をして居ます。之は一個人についての事ですが、此祭りにはお神のお通りがあるのでして、二十五日の朝八時頃、御宮をお神輿はお立ちになります。そして平戸町六町の町を（新町、魚之棚、

木引田、宮之町、浦之町、崎方町）巡幸して夕方御歸宮になります。

此お供には町内一軒の家から一人以上、又村民の方は昔の武裝をして、大名の行列をしながら神輿の後先を守護して町内を練つて行きます。それに神輿の一番後からは毎年六町の中の一町（廻り〳〵）が山町となつて、費用をかけて山を造て（山とは、他所では何んと云ふか存じませんけれども、當地では種々の造り物の事です）其の町の少年少女が對の衣裝をして引いて行きます。此山が非常に見事に出來ます。で、二三里も田舍からわざ〳〵見に參ります。そして此山は龜岡神社内に奉納してあります。お宮では宿の祭といつて前日から神樂があります。

大神樂のあるのは此祭の時一度です、日本の神樂つて有名の物ですが、又平戸のも有名のだそうです。

二十五日が御神幸、六七日は其大神樂、二十八日は神社境内で、矢放走馬があります。（九州平戸、伊知子）

夜市と三韓をどり

毎年七月卅一日は大鳥神社の夏祭りで八月一日は住吉神社の大祭禮です。氏神樣の夏祭りは所々にあるが、此卅一日と一日の兩日を當地では「おはらひ」と云ふて、當地の諸祭禮中で一ばん賑やかな日です。卅一日夜半より翌一日へ掛けて、大濱の海岸に魚市がある、之を夜市と云ふて、大阪其他近國からも見物に來る、市立つ前になると海岸の漁船から生魚を運搬する其中に市が始まる、魚屋やら見物人やらでそこらは一ぱい、籠やたらひの中の魚がはねるやら、あちらや、こちらで、市立つ聲の勇ましき東天明け朝日の顔出す頃市はお終ひです。お祭りの御馳走も色々あるが「祭りだこ」と云ふて、たこを食べます。次は三韓をどり、一日の午後に鯨だんじりと云ふて、昔の龍頭の船、みたいな物に、神功皇后武内宿禰の人形を乘せ、之を繩で引張る、其人等は後八卷にたすき掛けと云ふ出で立ち、之に先立ち赤鬼と青鬼が鐵棒を持て逃げる樣に、後退りしつゝ先へ進む。之を追懸けて又後八卷の人等が竹で製へた一尺計りの物を、シャツ〳〵〳〵とならす。其拍子に鬼等は棒を持ち直して退く、ブーとほら貝の音がする。シャツ〳〵〳〵と追掛ける。鬼が逃げる斯うして市内目ぬきの場所を廻るのです。之等の人々は魚屋に關係ある人々です。（堺、中島白菊）

佐渡小木町の祭

上品なのが、神輿のお通りと、小獅子の舞とです、神輿には、さがりやと云つて、男兒四人、陣笠に麻上下で、鼓を鳴らしながら。又、女兒六人、天冠に、緋の袴で、太鼓を打ながら、共にお供として從ひます。小獅子は牝牡三匹で、歌、笛、太鼓に、合せて、舞出すので、其節が何とも云はれないほど奧床しいのです。

恐いのが大獅子と。鬼とです。大獅子は、木で造らへた頭に、脊を青い布にして、そこへ若衆が廿人位入つて、町内をあばれ、廻るのです鬼は、お面を被つて、大きな珠數の樣なものを脊にかけ、鐵棒を振廻して歩くのです。可笑しいが豆撒です、變な踊をしながら、桝から豆を撒くのです。

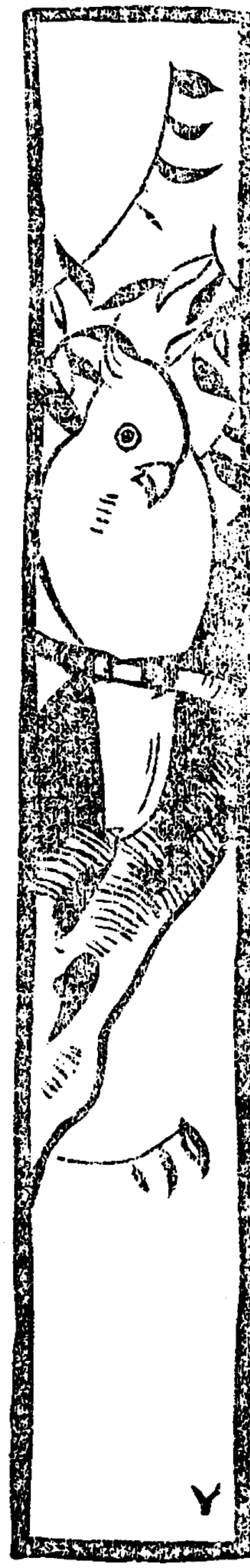
美麗しいのが山車の上の芝居と、御太鼓とです山車は藝者が芝居を演るので、御太鼓はやはり藝者が男髷に結んで揃の衣裝で、代る〳〵、大太皷を打ながら、町内を練つて歩くのです

（橫濱、小田切錦子）

＊　＊＊　＊＊　＊＊　＊

短篇小説

水野葉舟選



○おちゑ（天賞）

牛込　小笠原ゆり子

爐の火がカツ〳〵とおこつて勢よく御湯がわき立つて居る。御母さんも作男も野良に行つたのか影も見えない、めづらしく人氣のない爐ばたにおちゑは一人ポツネンと庭に餌をあさつて居る鷄を眺めた。つゝじや色々の草の若葉の上には淺い日光がさして浮雲が流れる度に地の上にウッスラ影が動いて居る。

シイーンとした此靜な家の中にかうして居る事すらおちゑは不安でならなかつた。

納戸のからかみが一枚開いて居て眞暗な室に夜具やら衣類やらおいて有るのが暗い中からボンヤリ見えるのも何んだかうす氣味惡く厭やでたまらなかつた。

此頃おちゑの暗を厭ふ念は殊にはげしくなつた。恐しい暗の力は自分の胸に浸潤して此弱い心をくさらして終ふのではあるまいかとまでうたぐつた。

「おつ母さアはどこさ行つたのだべなアー」

おちゑはやるせなさにつぶやいて見たがふと膝の上の我手をなでゝ見る、思ひなしか日毎にやせてゆく樣でいつ惡くなるとも知らぬ間に體の感覺が狂て終て死んだ父の樣になるのではあるまいか、すでにかうしてボンヤリして居る事からして不安心でならぬ。

御父さアはあの樣にして死んだ。御祖父さまは私が生れぬさきに死んで終つた、そしてどんな風に死んだのか御父さアも御母さアも口をつぐんで敎へてはくれなかつた、考へると何んだかそこに黒いにごつた血が祖父樣から御父樣、御父樣からわたしと外の人とは違

つたけがれた體に流れて居る樣にも思はれて。

おちゑは自分がのがるゝ事の出來ない恐しい運命をもつて生れた事をおぼろげに思つた、そして重い心を一層重らした。

おちゑはこんな事を思ふとやたらにいら〳〵しい心もちになつて「ア、」と氣が揉る樣に體をゆすぶつた。

そして「御母さアは未だなア」と云ふ樣な風に門口を眺めた。久らくすると、

「ア、どつこいしよ」

と云ふ聲がしておちゑの母親が歸つて來た。

「芋畑さ行つて見たがチットの間にでかくなつたのには驚いたぞよ、ナアおちゑ、ちつと野良さ出て見ろよ氣が晴々して好いぞ」

足をふき〳〵母親は云つた、そして水で手拭をすゝいで日に燒けた顏をふいたり髮をかきあげたりしてさておいしさうに煙草を二三服たてつゞけにすつた。

肩幅のあるつや〳〵しい母を見るとおちゑはうらやましくもねたましくもなつてくる、大きな乳房のあるあの平和な胸にもう一度いだかれたいと思つた。

「御母さア、いまゝで何してさつたア、おら、さつきから淋しくつて」

子供らしくあまつたれた樣におちゑは云つたが急にうれしい樣な悲しい樣な思が胸をふさげて涙が自然でに出てくる。

「おちゑ、どうしたまた頭がいたくなつたのかー」

母親は涙ぐんだおちゑの顏を母親らしい慈悲深い目をして眺めた。

「御母さアおら、どうしても御父さアみた樣になるんぢやねーべかなア」

思ひ入つた樣に云ふ。

「馬鹿ア、またそんな事、おめへ心配してるだか、なぜさう心配性に生れたゞかなア」

母親は青白い我子の顏を眺めながら、どうして此頃こんな事許り云ふだらうと思つた。そしてあんなすなほな子がどうして母の云ふ事を信じなくなつたらう、まつげの長い大きな目が死んだ父親にだん〳〵にてくるのも何んだか心がゝりに思はれた。

「おちゑさうだ馬鹿事、心配するでねーぞなア、此間も御醫者樣もさう云つたべなア、あんまり針仕事許りしたので根がつかれたのだつて、御父さアと御めへの病氣はまるつきり違てるのだぞー、なア心配するでねーぞ」

母親はさとす樣に云つてソツとうつむいて居る我子のびんのほつれ毛をかき上げてやつた。

おちゑの胸はそんな事では中々をさまらなかつた。もつともつと別の事をきゝたゞしたかつた、さうだ、母の胸に秘してある或る者をきゝたかつた。

おちゑは默して居た母親は氣づかはしげにおちゑを見つめて居たがこんな時には氣を外へまぎらすより外仕樣がないと思つた。

「おちゑ、芋でも燒て食つて見ろよ、おらも腹がへつた」母親は甲斐〳〵しく土のついたほりたての芋を爐の中にくべたり戶棚から豆のにたのや香の物なぞを出して來て爐のふちにならべた。

しばらくすると芋が燒けたらしくプス〳〵と灰の中から白いけむが出ておいしさうな芋の香が二人の鼻をそゝつた。

おちゑはやはり青白い面をして、灰色の空氣におされる樣な氣持で爐の火の赤いのを眺めた。



（天賞）露店　福井市　岸本てつ子

先づいゝ作と思はれる。短い中に可成深みのある心理描寫も出來て居る。この人の才は伸びて行く可きものらしく、自分には思はれる。

・たゞまだこの作では作者のオリヂナリチーといふものが見えない。それが自分にはもの足りぬ、小說と言つて何の型もありはせぬ、自由な目で見た人生の斷片、未完成のもので澤

山だ。たゞ新らしい發見——自然を見て新しく發見したものが、その中に含まれて居さへすれば、いゝのだ。しつかりした作は氣まぐれでは出來ない。それとも一言つげて置く。うまずに作をせられたいものだ。（評）

○お小夜　（地賞）

神奈川町　妙子

此日も朝から鈴木の家へ出かけて、うか〳〵と長い日を終日遊で了た。歸てみるとすつかりと掃除が出來て座敷には電氣が明るく光つてた。お小夜は落ちてた夕刊を格子の內からひろつて、涼しげな座敷の椽端で脚をのばして讀みにかゝつた。「お小夜さん、お風呂が明きましたつて。」女中の聲をきいてお小夜は立つて行た。三十分も經つと眞白な素顏を艶々させて上つて來た。嫂のお金は狹い茶の間で六つになる自分の娘のお君と云ふのと晩食を始めてた。馬鹿げた派手な藍絞の浴衣が目立て見えた。「まあ—小夜ちやんもう出たの？何て早いんだらう……あ小夜ちやん私先へ始めちまつてよ。君がやかましくつてね。」お金はテカ〳〵光る湯上りの額を上げて云譯らしくお小夜を眺めた。身體は隨分肥滿てゝ嚴丈な方だが、細い眼で、赤い唇から小さな金歯をチラ〳〵見せて笑ふ顏なぞ如何にも優しい可愛い女だつた。「サア〳〵何卒、よろしう召あがりまして。」お小夜はわざと不面眞目な調子をしてお金等を笑はせた。「あの鈴木ぢや毎日遊で計し居るの？皆？」お小夜が食卓につくと直ぐお金は斯うきいてみた。「えゝ〳〵遊でるのですつて。主人が亡くつてもあれだけの財產、不動產つて持つてるんですもの、其の利息だけでも月々樂に暮してゆけるんでせう。本統にあすこの家は面白いのよ、其れに女世帶つてものは又どこか斯う暢氣らしくつて好いものね。」其れから鈴木の家の暮向の派手やかな事、勝手放題な事して遊んでると云ふ事なぞ、實際も想像も打まぜて大げさに話してきかせた。お金は眞面目な顏で一々羨まし想な返事をしてきいてた。

お小夜は興に乘つて始めから其事計りは云ふまいときめてた、獨り息子の操と云ふのが中々の好男子で、慶應の理財科へ毎日自轉車で通學してると云ふ事まで喋つて了つた。「エヽー其ぢやその息子さんは毎日留守なの？」「否え、だつて此頃は暑中休暇でせう。其れあ中中捌けた人なの。」と斯う若い男の噂なぞ持出しても、何とも思はず平氣できいてくれる此の相手を、お小夜は此上もなく愉快で滿足だつた。と同時に自分の故鄉

の鹿爪らしい、窮屈な家庭を思おこして急に厭な淋しい思が強く胸をカスめるやうに感じた。兄が社用で地方へ出張してる間、嫂の相手にと云ふ口實で久々で上京した。そしてもう二ヶ月餘りになる、其の間暢氣でお人好の嫂ときまつた用もなく、ブラ〳〵遊で朝晩を暮すと云ふ事がお小夜には如何にも氣樂でのびのびと感じられてた。如何な事をしてゝもいゝ、誰一人壓迫る人のない此頃を何よりうれしい、得意な事に感じてた。處が近所の有福らしい未亡人の家庭と同國の處からか、恐ろしく懇意になつて了て此頃では毎日々課のやうにして遊びに行く。胃病で青白い顔色した、頭髪の濃い當家の息子、操と云ふのをお小夜は苦走つた好男子だと思つて居た。操はいつも倦怠る想な容子をしてた、大抵の日は座敷の眞中へ寢そべつて俳句の本を澤山並べて代り〳〵に眺めてた。其傍で未亡人の云ふ事をきいたり自分でも喋つたりしてるだけでお小夜には少なからず樂しかつた。時々此人が月並な文句で二人の話をまぜ返したりするとお小夜はいつまでも面白想な顔して笑つてた。そして其日の日記には「操さんが斯うしたとかあゝしたとか」其人の印象だけを事細かに記入しておいた。何となく樂のしかつた。だが時々には痛切に自分のしてる事が餘り放縦過ぎてやしまいかと、何となく惡い事でもしてるやうに、ひどく不安な思になやむ事もあつたが、又罪も苦勞もしらぬ樣な氣樂なお金の顔など見ると、其麼心も消えて了つて、矢張り自分も氣樂者になつてた。暑い夜など二人はよくお君を引張つて近所の縁日を歩きまはつた、お小夜は其な時には押合ふ樣な人込の中を黒い眼を生き生き張つて唇を輕く結んで、お金にもお君にも餘り構はず、サッサと氣取つて歩いた。而して勞れて歸て來ると、いつも自分の室は寢る計しに支度がしてあつた。お小夜は廣々とした蚊帳の中で思さま身體を伸ばして氣まゝな寢方をした。そしていつもの癖で寢つくまで種々な思に耽つた。母から歸國を促がした手紙の來てる事についてはかなり長く思なやんだ、歸ると云ふ事を考ると何もかも打捨てゝ仕舞樣な淋しい、つらい感がされた。然し其内にいつのまにか思は明日の操さんに移つて了つてた。

この作者も近頃上手になつた。
この作も別に細胞が一つ一つ動いて居るやうなものではないが、全體におさよといふ人間が描けてると思はれる處がある、そこがいゝ。尙ほも少し鋭い心に成つたらよからう。（評）

○山の家（入賞）

草葉の露

私はふと、思立つて西國の山の家に、一人淋しく病んで居る從妹を訪問した。丁度夫は、一月の豫定で、出張する事となつたので、一月の留居――其間を無意味に過して仕舞ふのも馬鹿らしいし、又一ツには、一年許前から病んで居る、從妹の近況をも知り度いと思つて。

其は丁度五月の末の或日、初夏の風が新綠の葉末を渡つて、空の高く澄み切つた、心持のよい日であつた。××停車場で汽車を棄て、約三里の田舍道をガタ〱と俥にゆられて、漸く何某村と云ふ小さな村の町に這入つた時、時計はもう午後の二時を過ぐる事、正に三十五分、片々の道の側、古い石碑の四五本並んだ、木立の奧では、ジー〱と幾つかの蟬が鳴いて居た。

今迄晝寢でもして居たらしい、茶店の神さんの眠むさうな顏を眺め乍ら、疲れた身體にホッと、一息入れて居た時、自分も一度會つた事のある、從妹の義弟の義さんが、紺飛白の單衣を肌ぬぎに、薄よごれたシヤツを出して、二里の道を迎に來てくれた。

「どうも御暑い處をすみません」と、聲をかけると、「大分御待ちに成つたでせう、もつと早く來る積りでしたけれど」と、義さんは額の汗をふき〱何杯もお茶を啜つた。

其處からは約二里、俥もなければ、田舍に特有の馬車すらもない。二人は話し乍らボツ〱歩く事にした。

義さんは私が可と云ふのに、無理に小さなカバンを持て呉れて、道々從妹の病狀の事や、山の中で何も御構ひも出來なければ、又今は農家が一番忙がしい時で、充分の御とりもちも出來ないなど〻、くど〱と並べ立つた。

私は町の中にすんで又山よりは海の方が好きなので、單調な平和と云ふよりも、寧ろ平々凡々な、景色を見る氣もなく、自然と眠氣のさして來る樣な氣持に成り乍ら、空氣草履を引ずつて居た。

然し其時、一度は來て見たいと思つた家、どんな所に、何麼生活をして居るだらうと云ふ、一種の好奇心は、ともすれば疲れきつた私の精神を勵まして、早く行て見たいと思はせた。

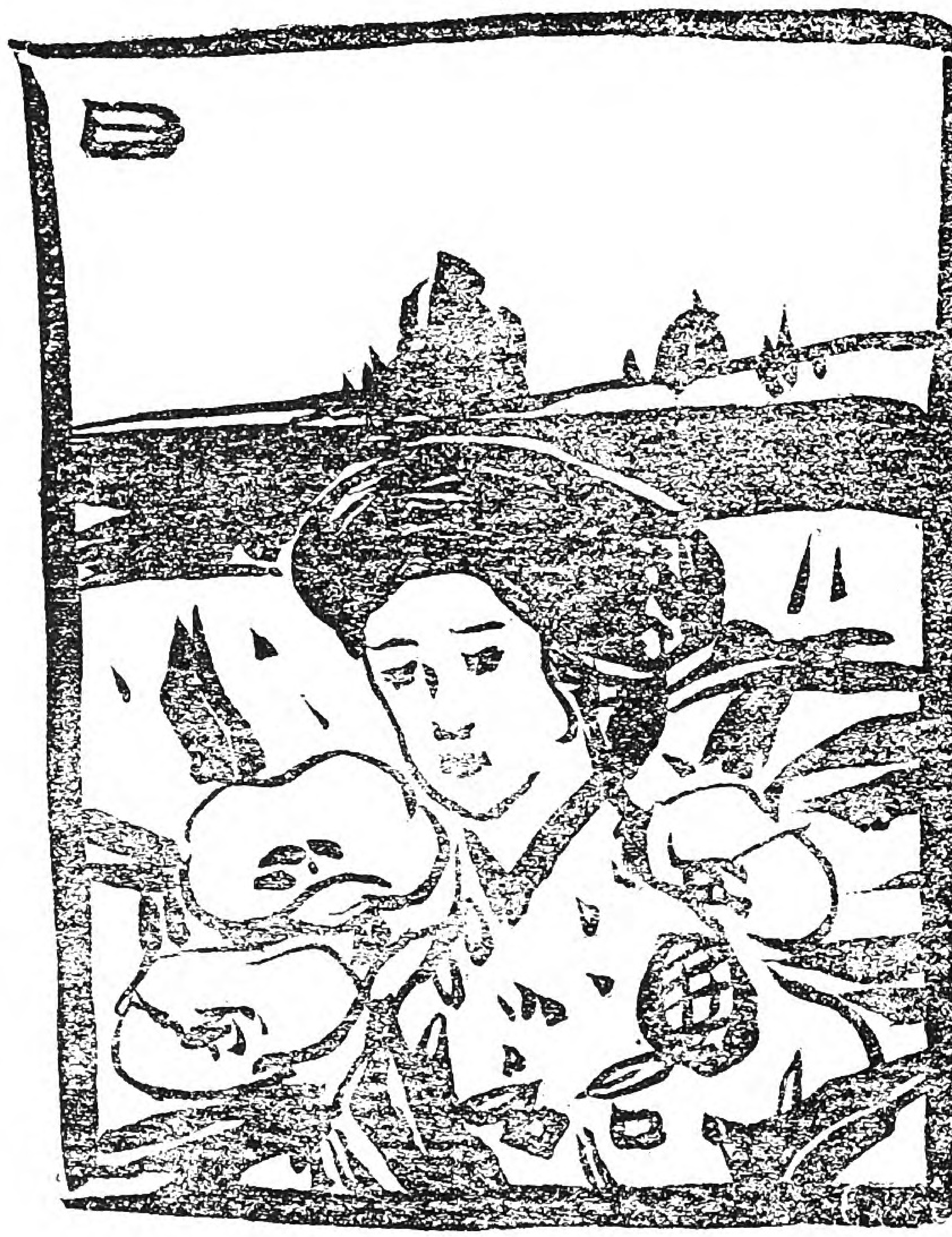
やがて、山の中腹に、萱屋根の僅に現はれて居る家を指さし乍ら、

「あれが私の家です、義姉は待くたびれて、何處かで見て居るかも知れませんよ」と、義さんが云つた時、最早其家に、着いた樣な氣に成つて、私は足の重くなるのを覺えた。

道の兩側は皆田に成つて居て、所々に一軒二軒と、まばらに家が並んで居た。小間物、雜貨、荒物、所謂萬屋の前に來ると、義さんは其邊に遊んで居た、四五人の若い男の人達に挨拶をした。其人達――中には、赤子を抱いた、髮の赤ちやけた其店の神さんらしいのも交つて、一樣に好奇の眼を見開いて私の顏を覗いた。

斯云ふ田舍に御極りの土橋を渡つて、急な坂になつた山の道を五町許りも登ると、直ぐ其處の青々として、芝生の野に切り倒された松の切株に、腰をかけた、從妹の蒼白い顏が眼に付いた。

＊　＊　＊　＊



（地賞）入江より金澤　蜂須賀正

從妹の病を養ふ爲に、特に新築されたと云ふ、未だ木の匂ひの高い、小ざつぱりとした家に宿つてから、五日目の夕方、私はとても歩けないと云ふ從妹を、無理に引ぱり出して、家よりは少し小高くなつた山の上に登つて見た。

其處からは名は知らぬが、幾重も重なり合つた連山の氣高い姿？生々と新綠の若葉にもゆる、初夏の森の木立、眼下には黃ろく色付いて、半ば刈りかけられた麥や、苗代田の青々として涼しさうな樣などが眼に入つて、流石の私も思はず自然の美と叫びたくなる樣な氣がした。斜に低く横はつた丘の向ふに、白い煙のゆら〳〵と

立昇るさまを見乍ら、二人は暮れる迄語り合つた。

夫は朝鮮の或會社に勤めて居るので、新築の家には、從妹が一人淋しく病を養ふて居るのである。新婚二年の名殘りの夢未だ細やかなるの時、はからずも病魔の爲に捕へられた從妹の、弱々しい、働きのない眼の表情を見て、私は思はず暗涙をのんだ。其と共に自分の幸福なる生涯を思浮べて、何だか此麼にして遊んで歩くのも從妹に氣の毒の樣にも思はれた。

元來あまり快濶でない、どつちかと云へば女らしい沈んだ氣の人であつたが、此度會つて見て一層の小心者となつて居るのに驚ろいた。一つは病氣の爲でもあらう、又一つは其境遇が然らしめた爲でもあらうが、何事に付けても小さくなつて居る。

其時私は思切つて云つた。

「あなたは、もつと氣を大きく持たねば駄目よ、誰れが何と云つても、知らぬ顔で自分の思ふ通りにおやりなさいよ、夫が居なくたつて長男の嫁には違ひない。一體自分から卑下して仕舞ふから不可いのよ、無教育の田舍の人達に、新代の教育をうけたものが負けてどうします。馬鹿々々しい、泣いて暮すも、笑つて暮すも同じ人間の一生ぢやありませんか。」

從妹は淋しく笑つた。

「矢張り性分でね、私にはどうしても其が出來ないのですわ、今の家だつて左樣よ、つまり傳染すると云ふので新らしく建てたのよ。隔離病棟!! あゝ、私も隔離病棟に入る樣になつて仕舞つたのね。」

ゴーンと悲哀の音を帶びて、山の寺の入相の鐘が聞えた時、私はつく〳〵と淋しさうに瞑想にふけつて居る、從妹の蒼白い生氣のない顔を見て、自分も何だか地の底にでも引込まれる樣に感じた。其時の從妹の顔おそらく私の生涯を通じて忘れ得ぬ面影であらう。

＊　＊　＊　＊

滯在十數日、明日〳〵と引とむる淋しさうな從妹の聲をあとに、私が山の家を辭したのは、梅雨に間もない頃、母家では盛んに麥を叩いて居た。

從妹は始めの日に見た松の木の所迄送つてくれた。降りかけの岩影から、ふと振向くと、力なげにハンカチーフをふつた。

けふも亦、しと〳〵と五月雨が降る。淋しい山の家で、美しく植つた田の面を見つめて、從妹は一人、涙ぐんで居るのではあるまいか。

悠々と伸びて書いてある。その周圍よりは『私』といふ人の心持がよく味はれる。(評)

口に言へないことは筆にお書きなさい

女子文壇第四増刊

今の婦人

報酬贈呈寄稿歡迎

今の婦人は今の婦人の書いた優れた文章を載せます、何んな文章を望むかと言ひますと、先づ諸孃の周圍をお書きなさい、告白をお書きなさい、經驗をお書きなさい、苦痛や不平をお訴へなさい、何處まで自由を欲するか、何處まで解放を欲するかお書きなさい、心の動搖をありのまゝにお書きなさい、空想をお書きない、欺かざる日記をお書きなさい、結婚の前後をお書きなさい、家庭の現在をお書きなさい、職業と生活の實際をお書きなさい、記者は何等の制肘を加へませんから、思ひ〳〵に善く書いて下さい、それを材料として、**女子文壇**獨得の現代婦人の代表的雜誌を編輯しようと思ひます、此外に創作として小品文、詩、和歌、俳句を募ります

投稿規則

▲文章一篇の長さは二十四字詰百行以上二百行以内とす▲文章には總振假名をつけること▲紙上の匿名は自由なれど原稿には必ず姓名を明かに記し置くこと▲創作は小品文二十行以内、詩は隨意、和歌俳句は各十首以内とす▲原稿及び封筒には必ず『今の婦人原稿』と記すこと。

報酬

▲一等金拾五圓(正金)一人
▲二等金七圓(同)二人
▲三等金五圓(物品)三人
▲四等金參圓(物品)五人
▲五等金壹圓(同)廿人

創作は小品文△詩△和歌△俳句各種とも天賞金二圓。地賞金一圓。人賞金五十錢の價格に相當する物品を呈す

▲興味ある交換

『今の婦人』には特に記者の案出したる新方法に依り興味ある交換を紹介いたしませう、つまり例號の誌友くらぶを一層進歩させ、記者の監督の下に責任ある交換を實行して頂くのです、詳しい方法は、女子文壇九月號に發表いたしますから、熟覽の上誠實なる諸孃の加入を願ます

◉**投稿締切** 九月廿五日最終便

◉**發表** 十一月十日の第四増刊號として

◉投稿募集 發行所 女子文壇社 東京市京橋大鋸町

（七ノ二）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

好評 女子文壇第二増刊 製本發賣

都會の婦人

表紙口繪插畫 竹久夢二氏筆

◀五月十五日發行▶

定價金貳拾錢 郵稅壹錢五厘

女の見たる東京印象記……執筆婦人十餘名
日比谷▲上野▲不忍▲神田▲神樂坂▲芝公園▲西片町▲根津▲洲崎▲谷中▲銀座▲魚河岸▲深川其他

都會の渦捲に漂ふ若き女の眞情……婦人執筆
▲濁つた室に輝く電燈▲入京記▲鬪ひ疲れて▲熱涙冷涙▲造物主は何故私の鼻の土を儉約したのでせう▲心の活動寫眞

都會の實際的生活
▲生活の階級▲卒業式の當日▲某子爵邸に遊ぶ▲お孃樣のお供の前▲バザー

東京の地と東京の女……諸大家談

▲暗愁に囚はれたる女性……澤村文學士
▲詩に表はれたる都會……河井醉茗
▲婦人席にて……さわらび女
▲東海道線……一色醒川
▲西の郊外より……水野千枝子
▲南の郊外より……荒川澄子
▲上野より(對話)——うす雪
▲湯屋の三助に不快を感ず▲開放されたのか落伍したのか▲欺かれたる工女の懺悔▲東京、大阪、京都

創作 小說。散文。詩。和歌。俳句。

都會を歩める女の印象
▲植物園で逢つた女(北原白秋)▲僅に殘れる印象(水野葉舟)▲街の夕月(森川葵村)▲三人の女(吉井勇)▲油繪に入る女(木下杢太郎)

日比谷大神宮結婚式の記事……

◀東京市京橋大鋸町 女子文壇社發行 (振替口座東京一七二九) 最寄雜誌書店品切ならば發行所へ申込を乞ふ▶

◀婦人雑誌中に嘗て見ざりし新しき材料に滿つ▶

女子文壇 八月十日 第三增刊 好評

地方の婦人

紙數二百餘頁 挿畫澤山 **定價貳拾錢** 郵税壹錢五厘

▲地方婦人の自重を望む……下田文學士
▲女が中心になつて働く……横井農學博士
▲行ける處まで行き得ない……田山花袋
▲女性の自然の觀かた……小島烏水
▲天然の美と婦人の美……大下藤次郎
▲海豹島の婦人生活……岩野泡鳴

◎下京の女……兒玉花外
◎杉坂峠……澤村文學士
◎私の故郷……尾上文學士
◎伊豆の海岸より……中村文學士
◎色彩的區分したる大阪市の婦人……みどり女
◎東京近縣の女の特色……遊蝶花
◎神戸……羅漢柏
◎岡山……よし子

◎琵琶湖……しのぶ
◎雲雀鳴く野より……横瀬夜雨
◎淡路の生活……一色醒川
◎海岸……河井醉茗
◎旅より友へ……川路柳虹
◎富山と岡山の女……下枝子
◎五年以前……山田邦子
◎都會より地方へ……きく子
◎橇の旅日記……町田靜江

▲小説 漁父の母……小栗籌子
▲小説 賣り桑……水野仙子

● **煽風器** 目賀田男爵夫人、仲小路遞信次官夫人、中野武營氏夫人、辻村靖子、岸すみ子、中村若子、遠山稻子、武田貢、松岡いと子、其他名流婦人の地方婦人話、旅行談など

● **都會に憧憬るゝ若き女の叫び**……數篇

▲ **山岳、海岸、町村** △石油の噴出△橇の旅△熱海△房州△秩父△高尾△揚梅の里△大江山の麓△山城の北△善光寺△岐阜△山形△裏日本の一部△越後の海△越後甚句△北海道の一漁村△浪花節△外數項
◎本州の南北兩端より（薩摩の村落より、北見の漁村より）
◎農村の處女が最も活動する田植時（伊豆、伯耆、近江）

▲諸國通信

發行所 東京京橋區大鋸町 **女子文壇社** （振替口座東京第壹七貳九番）
最寄書店に無くば直接御申込を乞ふ

【秀逸】

○狸！

神奈川　梅子

忘れもしない私が十五歳の五月でした。母と姉は親戚へ行ての留守です。弟と二人ぎりで、私はぼんやりと椽へ腰を下ろして、初夏らしいふツわりした浮雲の動くのを眺めて、何となく心が遠くへ引き入れられると云ふ氣持ちでゐました。すると、何處からともなく、漂ふ樣に、引きしまつた三絃の音がして來るのです。それを聞くでもなく、聞かぬでもなく、只耳にして居ました。するとそれがだん〳〵近づいて來て、此度は我家の門口邊りで立ちどまつて、やつてゐる事が解りました。弟は、足を長く出して寢そべつて、雜誌か何か、よみふけつてゐましたが、その音をきいて、眼をあげて私の方を見ました。私も弟の顔を見ました。「御無用と云ておしまへよ姉さん――。」と弟が云ふのを、「いゝから默つてゝ御覽行て了ふよ。」と小聲で云て、私は微笑しました。すると、其三絃の間々に、咽喉の底の底からでも出す樣な、ギシ〳〵した聲で、歌ふ歌――浪花節と云ふのでしようか――これが親子別れになるとは神ならぬ身の――とか何とか、よくは覺えてゐませんが、語てゐました。私は何となく好奇心にかられて、窃と窓から其男の樣子を見樣と覗きました。窓には障子が明いて、簾がかけてあつたのでした。其處から覗いて見ると、まア色の赤黑い、額の廣い唇の上反た――何處かで私は此種の顔を見た事があります――而して羊羹色の袷の紋付を着て、それに白い木綿の帶をしめて、大きな扇子が横つちよにさゝれてありました。私は何となく薄氣味わるく思ひまして、窃と抜き足の樣にして、弟を椽の隅の方へ引張て行て、「氣味のわるい人だよ」と囁く樣に云ひました。弟は、「だから早くことわつてしまへなさいよ、姉さん」と、其時弟は、十三歳でした。「だつて今迄知らん顔をしてゝさ、變だね。」と私は少し不安になつて來ました。「もう少し、默て居ると行て了ふだらう。」と云たものの、何となく、わるい事をして了た樣な氣がしてならなかつたのです。そして私は弟と二人で、靜と身動きもせずに顔を見合せて立てゐたのです。と門附けの男は、ます〳〵熱心に語てゐて、なか〳〵立ち去る樣子もないので、私はもう一度、窃と窓から覗きました……と私は、はつとして愕ろきました。何故と云て、もう門口には、其男をとりまいて、多勢の人が立て聞

いてゐるぢやありませんか。私はもう、取て返しのつかぬ、飛んだ事を仕でかして了つたと思ひ乍ら、弟の方を見ると、弟は、「何うした？」と眼できく樣な風をしたので、私は、そつちへ行てゐでと、手と眼で制し乍ら、又椽の隅へ行て、「大變……人だかりしてゐるのだもの……」私はもう、小供心にも、云ひ樣のない、不安と恐怖で、小さな胸は、密に閉したのです。今更ら何とことわり樣も知りません、と云て、十錢とか二十錢とか、あれ丈けに相當した金は持てゐなかつたのでした。其中にも、其男が、時々に、烈しい鋭い聲で「おい、お前さん何をぐづ／＼してゐるんだい？」等と無論、歌の文句ではありましたが、かうした場合、何だか、自分等に、けんつくでも食らはされた樣で、はらはらせずにはゐられませんでした。

「困て了たね！宗ちやん」

「だから早く云て了へばよかつたのに……ぢや姉さん新さんの小母さんに、賴んでね、この家は留守だとか何とか、云て貰つたら何う？」此場合、一生懸命な智惠でした。それで私は、窃と、庭の方からぬけ出してお隣りの臺所へ行て、小母さんを呼び、其事を泣く樣にして賴んだのです。小母さんは「困た人達ね、何故始めに」とか何とか云てゐるので、私は泣き出したくなりました。でも小母さんは臺所から出て行てくれました。が未だ安心したと申す譯にはゆかないのです。もし彼がぐづ／＼云たらと云ふ不安が殘つてゐます。で私は路次へすくんで、ぢつと氣勢を伺つたのです。と小母さんの聲で、「あの此家は先刻皆出て行て留守の樣ですよ……」え丶誰れも……私は、それを聞いた男の恨めしげに、怒た顏を想ひ浮べて、慄然として身體が冷たくなりました。何うなることかと、尙もぢつと立ちすくんでゐますと、聞いてゐた人々が、「オヤ／＼可哀想に、留守だとさ。」等と口々に云つてゆくのを聞いた私は、犯罪者か何かの樣に身がすくみました。と故意か偶然か其男が、路次に立てる私の方を睨と見て「狸つ」と、忌ま／＼し氣に、どやして行たぢやありませんか。私は實に、ずーんと胸を刺された思ひでした。家へ入ると、庭の隅にゐた弟が「行た？」と恐怖した聲なのです。私は默て肯首いて、何となく、窓の障子を隙なく閉めきりました。そして仄の暗くなつた、茶の間へ膝を突合せて弟と座りました。狸と云はれた事を今弟に咄すのが、薄氣味惡くて堪りませんでした。

「狸！」と言ふ一言が面白い。生きて居る。（評）

○小森さん

牛込　流水女

偶然！眞に偶然！私は今日ゆくりなく、しかも電車の中で會つた小森さんの事を種々と思ひながら床の中へ這入つた。

大柄な白がすりに、水色に白牡丹を大きく出した帶を品好く結んだすうつとした姿、それよりも懷かしかつたのはあの引つける樣な黒め勝の眼！生際が少し薄くなつて、學校に居た時の樣な娘々した所は何處にも見られなかつたが聲は元の儘の透つた淸しい聲だつた。「いらつしやいな、母ひとり限りなんですから」と云つたのがまだ耳の底に殘つてる。——明日は行かう——、と思ふと、一緒にゐた頃の事が判然と胸に浮ぶ。「——私あなた一人限りよ、いつまでもく姉妹の樣につきあつて下さいね」とあの涼しい眼に少し涙を浮べて、運動場の隅の梧桐の下へ行つてはよく言つた。入學した初、言葉が可笑しいと冷笑れて、其次にはあんまりハイカラ過る、白粉をべつたりつけて、と耳から耳に囁やかれた。一週間程どうしたのか無届で缺席した事があつた時皆大事件でも起つた樣に騷いだ、「下宿屋にゐるんだつてぢやありませんか」と憎まれ者のMさんが疑はし相に私の方向くと、一齊に「まあ然う」と嘲笑の眼を向ける、私は堪らない程口惜しかつた。上田の女學校を三年終へて來たんだとやら、當校



（入賞）　小さき母　　新潟縣　村田けん子

の四年へ入學した、席順がいろは順なので丁度私と一緒になつた。

其頃寄宿にゐた私は、一度も小森さんの家へは行つたことはないが、下宿屋の裏の貸間を借りて自炊してるんだと語つた。

夢の樣な夏暇休業の二月が終つて間もなくの九月の末、誰が言ふともなく傳へるともなく、又もや小森さんの噂があちこちに起つた、「……お腹が大きいんだつてぢやありませんか……」餘な言葉！隨分ひどいとひとり憤慨しては見たものゝ、小森さんを見ると、まつたく疑がはずにゐられなかつた。とう〳〵十月の末何も言はずに退校して終つた。

修身の時間に、小森さんの事をMさんがあまりはげしく言ふとて、K先生に叱られた事や、HさんやTさんの憤慨したらしい口吻、小森さんについての色々の事が走馬燈の樣に走る。もう今月で丁度九ヶ月、今の彼人、甚麽ライフを送つてるんだらう？と思ふと堪らない程見度い！聞き度い！…………。

＊　＊　＊　＊

翌日は日曜日、曇つては居たが降り相でもないので早速行つた。

直ぐ前は火藥庫の堤になつてゝ、赤土や芝草やが見上げられる、其の中程の赤土の中から、清水がさらさらと流れ出してゐた。小森さんの家は新しい二軒長屋の左の家、格子の中に蘭や花菖蒲の半ば枯れたのが三鉢許り並べてあつた、格子を開けると、すぐすだれ障子を開けた小森さんは「まあ……」と少し赤くなつた、私は室の中一目みて、豫想はしてたものゝハッとした、彼方此方に襁褓が散ばつてる、小森さんは「まあ這麽に散して……」と言ひながらそれを丸めて椽側に出した。——這うなつては構はぬ!!!と度胸をすゑた樣な風がすぐ見えた。

「靜かで好いはね、お母樣は！」何氣ない樣にきく、「えゝ、一寸使に」「ほんとに靜かで好いは」と清水に聞き惚るゝ樣な風をして室を見た、壁の隅に友禪メレンスに入れられたヴヰオリンがかゝつて、その下のテーブルの上には薔薇の造花がさゝれて、ノートが二三冊、化粧道具が籠に入れられてのつてゐる、前には椅子が横向に置かれてあつた。

「……丁度叔父の所へ赤兒が出きてね、叔母が病氣だもので連れてきたんですの、名古屋から」「名古屋から、然う、女の子？男？」「男よ、私面倒だから母が一切見

てるんですの」「まあ……にぎやかで好いでせう、いつお生れになつたの？」「三月、三月でせう……」ハッとしたらしく言ふ、十九の母樣と思ふと淡い哀しみが浮いた。

「今何處へも行らつしやらないの？」と言ふと「えゝ……九月から音樂學校へ行かうと思つて、神田の」と晴れた顏をした。音樂！此人に一番適してると思ふ此眼を少しうつ向けて透つた聲で唱ふのが見える樣。

よし〱とゆるい聲を先に立てゝ母樣つて人が歸へつてきた、急いで立上つた小森さんは外へ出て何か言つたと思ふと赤兒を抱いて元の所へ座る、ひと目見て可愛いと思つた。あやすとにて〱と笑ふ、そうつと取つて抱いて見た、色は赤いが小森さんにそつくりの顏立「可愛いでせう？」思はず小森さんを見ると下向いて凝つとしてるのでハッと思つた。

をばさんが歸つて西洋菓子を皿へ盛つて出す、赤ら顏のをばさんはもう古い友達の樣に、大きな聲で話す、「ほんとに人は何か樂しみが無くつちや駄目ですからね、私も之れ育てるのを樂みにしてるんですよ、まあ此子が嫁でも取る頃まで生きてるつもりだけんど」言ひながら牛乳の瓶を湯わかしから取つて傍へ寢かせた赤兒にふくませた、兒はすう〱と甘味相に吸ふ、半分頃になつた時は、眼を薄目に開けて、すや〱と寢てゐた。

「よく新聞なんかへ墮胎したとか殺したとかつて出るけんど皆金が無いからですよ、金さへ男が出して呉れればちやんと育てますよ」

「何お母樣云ふのよ!!!淺井さん其麼話嫌ひよ！」と投げ出す樣に小森さんが言つた。

「淺井さん護國寺へ行かなくて？涼しくて好いは」と此方を向く「えゝ、えゝ、行きませう」と私は輕く答へた。

そして二人は連れ立つて外へ出た。

行きとどいたきのきいた書き方だ。終の處もうまく切つてある。この作者は近來ずッと腕が上つた。（評）

○梅雨

S H 女

梅雨が霽がつたのかしら、それにしては未だ少し早過ぎると、思ふ間もなく、復た、陰鬱な雲は、薄墨を塗り付けたやうになつて、糸のやうな、細い雨がサアサアと降つて來る。併し、其が却て稻作には、適合したものと見えて、近頃めつきり際立つて、眞青に生々して來た、そして丈も俄に二寸許り延びて來た。

何うかすると、空が少し明るくなつたと思ふと、處々雲の裂け目が出

來て、蒼い夏の空が見え出して來る。今朝の按排ぢや、今日は大丈夫だと思つた空模樣も、漸々正午頃に近づいて來るに隨つて、ポツ〳〵白い雲が浮き出して來る。それがまた、何時の間にか一杯に擴がつて、降るともなしに小雨が降つたり照つたりする。

　お民は、寢床にゐて微かに藁葺の屋根を打つ雨の音を聞いてゐた。偶と向き直つて、三寸許り開いてある障子の隙間から、表を見た。さうして、

『おりう、乾物は無かつたかい』

と呼んだ。其聲は、咽喉の底から無理に吐き出したやうに、語尾が、悲しく、力なく切れて仕舞つた。

　おりうは、背戸の井端の側で洗濯をしてゐた。おりうは母の言つた事が、よく聞き取れなかつた。けれども何かなしにはツと思つたが、快活な晴れ〴〵しい聲で『はい』と、お民に聞える丈、成る可く聲を高くして云つた。そして、裏戸を開けて這入つて來た。

『お母さあ、何んか用でも有つたの？』

お民は夜着の中へ顏を突き込んだ儘、

『なあに干物でも有つたかと思つてよ』と云つた。

おりうは、戸口の敷居の上に立つて、掛念と、怖れとを帶びた樣な顏付で、お民の蒼くなつた顏を眺めて、一種の果しない、切ない悲しみが、胸から頭の方へ押し上げて、つひポロ〳〵となつた。

雨は干物を込む程は降らなかつた。

『お母さあ、何處か痛い所はないの？』おりうは訊いた。

『別に痛む所も無いんだがねい、頭が重くつて…………』

『それぢや、頭を冷したら宜いんぢやないの』おりうは復訊いた。

『さうさねい』お民は顏を夜着から出しておりうを見た。

おりうは臺所へ行つて、金盥の中へ水を汲んで、其の中へ古手拭を浸して持つて來た。

『冷たいかね、お母さあ』

　おりうは手拭を絞つて額に載せながら、覗き込むやうにして言つた。おりうは、其手拭の上からお民の頭を暫くの間輕く叩いてやつた。そしてお民が『もういゝよ、大分よくなつたから』と云つてから、十四五分も經つたと思ふ時、手拭を冷し替へて、復たお民の額に載せた。さうして、暫時枕下に座つてゐた。

　二人は言ひ合したやうに表を見た。遠い南の空に、白く塊まつ雲が、だん〳〵西から東へ送られて行くのが二人の目に付いた。そして思ひがけない太陽の光線がスウーツと濕めつた庭先を照して、門側に生えてゐる柿の葉を、鮮かに黃色く見せた。裾を端折つた女が裸足で、窄めた傘の中へ手を突き込んで、滑べるやうに歩いて通つた。

『お母さあ、一寸洗濯物干して來るから…………』

　おりうは此の照りに、少しでも乾す心算で、急いで干竿へ掛けた。

　おりうは復た枕下へ來て座つた。さうしてまた前の手拭を母の額から取つた手拭は最早熱の爲に熱り切つて、何の役にも立たなかつた。おりうは急いで金盥の中へ浸した。けれども其の水も殆んど生温るくなつてゐる。おりうは新しく水を汲み替へて手拭を浸した。さうしてお民の額の上に載せて、再び其上から頭を叩き始めた。

『何うしても梅雨が霽れない内はいけないんだね』

　おりうは獨言のやうに言つて復た表を見た。

　空はまた曇つた。其上風さへ加はつて、何んとなく騷がしくなつて來た。見てゐる内に雨がポツ〳〵降り出して來た。少し強い風が吹くと、障子がガタ〳〵して濕めつぽい風が吹き込んでくる。お民は其の度毎にゾクゾクと寒む氣を感じて、身を慄はせた。

詩

河井醉茗選



○十八歳の春に歌へる（天賞）其三

和泉 金田代志子

月を背にして

ほのかにも柔かき嘆かひの匂ふくめる
病める子の頬の如き、青白き月を背にして
花皆萎えて盲ひたる、野邊にぞ立ちぬ。——
濃霧の如き重く苦しく、はた甘き月の光は夢の如、一人イむ我影を暗き嘆きにうちしめる草々の上に落せり。

哀れ其の我影はほの淡き光の中に
若き日に戀慕ふ君に逢ひける時の如
はたは又夢に蛇に巻かれし如く
美しくはた悩ましくわな〳〵と月光と共にふるへる。

ほの淡く嘆かひのにほひふくめる月の光
重たげに音なく沈みわなゝける暗き我影、
苦悩癈れしたんぽゝのしめれる匂、
なべて皆、すゝり泣くViolonの夢のかなしみ。

白秋氏の作そつくら、瓜二つとはこのことだらう（評）

悲しき日

何時の間にか風がそよぎ出して
何時の間にかひつそりとなつた。
私は風の吹いて居る時に歩んで居て
風のをさまつた時には此の芝生の上に坐つて居た。
私の前には種々の花が「逝く春」を悲しむ様に咲いて居る。
自分は默つて俯首れた儘、れんげの花を摘み取つて、
無意識に其の花瓣をむしつて見た。
上向きの七ッの花瓣をむしる——見苦しくなる
又下向きのをむしつた、——尚悲し

くなる。
自分は花を前になげ捨てゝ
俯伏して泣いた——。
私は此の悲しい日の事は、大抵忘れ
て了ふたが、
只一つおぼえて居ることがある。
それは、自分は涙にうるんだ目をみ
はつて見た時に
私の捨てたれんげに、
静かに悲しい——てんとう蟲が這ふ
て居た事である。

能く整つて間然する處がない、十八歳の春にして歌へるものとしたら、あまりにませて、大人くしてゐるから嘘のやうだ(評)

青きリボン

吾れは見き、
去年の或る日、
桃匂ふ彼の丘の上に、
佇みし、若き少女子。
そが黒き髪の匂の
ほのめきと、青きリボンと、
夢うつゝ胸をはなれず。
今日もなほ、逢ふことありや
名も知らぬ彼の少女子に。

青きリボンと云ふやうなことも、普通の人には一寸言へない(評)

黄なる憂

風がゆるやかに吹いて、又ひつそり
となつた。
風の吹く儘に櫻の花がこぼれて、
風のをさまるまゝに芝生へ落ちる。
私は無言に俯首れた儘、
涙に濡れた眼を瞬つて、芝生を見廻
した。
冬枯の儘なる淋しい芝生には何の花
も無い
たゞ自分の手のとゞく位の處に
小さなたんぽぽが、只た一つ咲いて
居る。
——然も踏み付けられて
いかにも苦しいと云つた風に——
花瓣も他の花よりは餘程少なかつた
黄なるなげきのたんぽぽと
黄なる憂の我が胸と
其の悲しい日の事が今日も尚胸に殘
つて居て、
黄なる花を見ると、涙が流れる。

憂ひとか、悲みとか云ふことがぼんやりしてゐる、黄なる花を見ると涙が流れるといふのも、只技巧の爲に云つたやうで眞情か何うか疑はしくなる(評)

何故に悲しむ?(七月作)

『何故に汝が悲しむや
惠滿つ此の春の日に。』
『然り身に幸あまる日は
斯く嘆く日をぞ恐れて。』

(四十三年三月—五月作、終り)

「十八歳の春に歌ふ」も此の三を以て終つたやうだから、作者に一言したい、各篇を通じて十八歳の春の歌としては驚くべく巧みである併しながら、選者は此作者よりも此作者の後ろにある影法師の本尊に敬服する、巧みは巧みだが、各篇殆んど摸倣の外に作者の人格を見出し難い、摸倣時代は誰しもある事で、強ち咎めない、また之れあるが故に作物も進歩

するので、摸倣は藝術家たる第一歩である。併しつらく思ふに、餘り摸倣ばかりに長じて居る人は最後の勝利者とな□得ない、つまり才氣が誤らすのである、摸倣のうまい人は屹度才氣がある、怜悧な人だ、或る點までは進むけれど、氣が方方に散つて、根氣よく自家を守ることが出來ない、他の技巧他の思想の寄生蟲となつて、終に自分の生命といふものを見出すことが出來ない、詩歌などには殊に然う云ふ弊がある、若い間は實に詩の上手な人がある、それがいつの間にか世間から忘られて了ふ、摸倣ばかりしてゐるから、人が顧みなくなるのである、或る程度に達したら、早く自分といふものを發揮して、獨立した態度を取らぬといけない、一時上手だといはれたのが却つて身の仇となる、私は然う云ふ人を澤山知つてゐるから深く懸念する、少くも詩で以て、人から注意されるやうになりたいと思つたら、摸倣は好い加減にやめねばならぬ、苦しくとも自個の生存ある歌はねばならぬ、此作者の未來は遽に判斷は出來ないが、以上の苦言は決してむだにはなるまいと思ふ。

選者が三回とも天位に推した所以は、「邪宗門」一冊を神妙に熟讀した功勞に對してゞある、前途極めて永遠、得意の時代に於て自重あれ。（評）

附言、『邪宗門』は北原白秋氏の詩集である。



お月様　福井市　紙谷ます子

○葉陰の實（地賞）

神戸市　田中落葉子

光——光——
靜に〳〵降りそゝぐ光
虛空な遠空から
歎を含むだ大空から——
おりて來る光——
紫——紅——白
細い〳〵絲の樣に
輝きながら亂れて
降つて來る
あゝ朝の光は悲し
さうな儚さうな歌
をうたつて
廣い野の面におり
て來て淚ぐんだ草を押しわけて
草の下に沈默して居る地の中へもぐ
り込み

私の心の中へも事もなう這入て行く
さうすると私の口から故のわからな
い小唄がもれる
恐怖か――歡樂か――
立ち竝んだ無花果の葉はふるへて居
る
私は目を開けてぢつと見て居ると
緑の葉がくれに半熟した實が只一つ
恐しさうに、しかも甘さうに朝の光
を吸つて居る
只一つだ――
春には澤山花がさいた
けれども、花のまゝ地に落ちた
まだ實の固い時に落ちた
さうして、野の土とくちはてたのに
只一つ殘つた實、今に熟すだらう
あゝ、幸福だと
思ふ、瞬間、梢に――
烏が一羽
今朝もまた來た
毎朝この烏は梢から、一つの實を見
て居るのだ
憎い烏よ
屹度、啄み去らうと思つて居るのだ
らう
今朝は私がいくら追つても逃げない
私はぢつとこゝに居てこの實を見守
つてやらう
烏はまだ去らない
實よ――あはれな實よ
はやくこの地におちてこの葉の影で
たのしい夢を見よ
烏に啄み去られるよりか
はやくこの柔草の上に落ちよ
あゝ葉かげの實よ――
あはれな無花果よ――

以前に柿の實を歌つた此作者の詩に、此れと同じ傾向があつた、いくら好きでも同じ題材を扱ふのは苦しい、やはり異つたことを歌はねば進歩が見えない(評)

○追ひゆく魂（入賞）

霞子

ふと見出した小さな〳〵強い光を、
其光はたえず動搖して居る。
やにはに私の魂はぬけ出して、そ
れを追うて行つた、
光は遠く〳〵かすかになつた。
魂は疲れたけれど、なほ焦て居る
いくら止めても〳〵追ふて行くのだ
道端の花は灰色に嘲笑つて居るけれ
ど、魂は依然、光を求め樣とあせつ
て居る、
光はまだ〳〵遠い、終に魂は疲れ
て〳〵はたと倒れた。
道端のすべてのものは、どつと聲を
あげて笑つた、光は遠いけれど強く
〳〵輝いてゐる。
魂は起き上つて、又走り出した、
あゝかうして〳〵何所まで走つて行
くのだらう、あゝ道端の萬物は嘲笑
つて居るのに……。

力は弱いけれど、讀んでゐるうちに、つれてゆかれるやうに思はれるのは、詩がすつきりとして雜りものがないせいであらう(評)

【佳作】

○鎖せる扉

麻布　草雲雀

固く鎖せし扉仰げど、
扉の影は思ひの儘に泣けと云ふ。
距られし魂の行方、あゝいづこ
あゝ歎かひの痛ましき
森の葉ずれを、水の囁きを
疲れし足のやりばなく、暫しの
いこひ求めんと、辿りきし夕闇に
扉は固く鎖されて、
叩けど開ぬ詫びしさよ。

我れをいたむかはら〳〵と
鮮緑の木の葉は地に敷きぬ。

扉の外に佇みて、月落つる
之れ迄でも、唯泣きて
涙の跡を數へなむ。

魂の行方を逐ふて扉の外に佇むといふ材料はわるくないが、未だ散漫で引締める力が足りない(評)

○夏のくさ

京都市　要司村扁子

あれ御らん、小さい夏草を。
小さい花が三日前に咲きました、
牡丹色して青い庭に……

あれ御らん、小さい夏草を。
小さい花が三日前に咲きました、
黒い大きい蝶が止まつてはなれませんわ
さも誇つたらしう。
かあいさうにねえ。
取つてやりたいね、
あの蝶を、怪我のせぬやうに……

口語を自由に使つて、詩らしい心の動いてゐるところを表はさうとするには、こんなのが宜い(評)

○兄樣がほしい

越後　枯尾花

ふら〳〵と出ましたの、
廣い廣い見渡す限り緑の天地、
あゝ夏ですわ、夏、夏、うれしいですね。
あの緑の涯には、きつとうるはしい快樂がある。
夢の樣に、私は緑の野を、さまよつて居ます、
一人ですわ。
さびしいのだけどね、あすこには、
なつかしい、兄樣がいらつしやる、
樣でね――。
おや紫の花がありますわ、
紫の、何のはなでせう。
私すきな花、可愛い花、
兄樣も、こんな花の樣な方でせうよ
まだ見ぬ人、兄さん――
花に口づけたまゝ、思はず叫びました。
あゝ大切な花瓣は破ぶれて、
花粉が私の口へはいりました。
あゝ苦しい。

「お前の寶の兄樣なんてないんですよ、おあきらめなさい。」
やさしい樣な、するどいやうな、聲がどこからともなくいたしますよ。
あれ〳〵神樣の聲ですつて、
情ない神さまぢやありませんか？ああ兄さま、兄さま、夢に見た、あのやさしい、兄樣のやうな兄樣がほしい。

人なつかしい情が滾々と溢れてゐる（評）

○離別

信濃　矢崎俊子

赤い月が
ほの白い空に
だんだんと、すはれて行く。
あかつきを知らねば
風もまだ目覺めいでぬか――
悲しき思す
停車場につゞく寂しき路よ。
闇淡な空――
思出で多き停車場の
プラットホームに
立てるせつなの淋しみ
我れにもくしぬ――
君も――もくせる。
さらば……さらば……
君よ此の手をゆるめ給へ
さらば君よ……
ながるゝそが涙早くぬぐいて
……別れ行く我等……
君よもろとも
君よ瞳を！
やがて汽笛のまゝに
しきりだす窓によりて
「さらば」と云へば――
君はさみしきゑみに答へぬ。

前半はよし、別れは平凡（評）

○知らぬ鳥

伊知子

鳥が鳴く〳〵！
何と云ふ鳥だか名は知らぬ、
毎夜〳〵時刻を定めて鳴く、
ギヤツ〳〵と、
水ぎはからならアヒルかと思はれるけれど、
まさか此の山中にはアヒルが居る筈はなし。
又鳴き出した、哀れな聲で。
もう嫌だ、尚私の悲しみを増すばかりだもの、
だけど矢張り鳴く時刻が來ると鳴くのだから。
私も矢張り初めは聞き度い。
そしてぢいつと聞いて居るとだん〳〵哀な聲になつて仕舞ふ。
聞く私もつい〳〵悲しくなる。
此鳥が鳴かずになる時は私の運命も其れ迄ではないかと思つて居る。
で悲しくはなるけれども毎夜鳴くまでを樂しみにして居る。

語つてゐる態度である、歌つてゐる態度ではない（評）

○初めて蚊帳をつりて

歌子

樟腦の香いと高き、
蚊帳は今宵ぞつられけり、
夏は青葉のその色よ、
深紅のへりもなつかしき。
垂幕とばかり引ける裾を、
そと上げて、つと入れば、
ゆら〳〵搖るゝ波のごと、
蚊帳の外なるともしびの
光りはゆる〳〵流れ來て
腹這ひつゝも夫がよむ
書の文字の青くゆるゝ。
ともし火避けてふとみれば
閉め忘れたる丸窓の
かなたに青き星一つ
そのまばたきのはげしさよ、
あゝ又一つ……かくて今
水無月の空の晴れゆくをみる。

調子はついてゐるが、詩想は後れてゐる（評）

新詩句

○落日！落日！あゝ胸が燃ゆる　麻布　美耶

○夏の夜、物の音の行方に憧憬た　美濃　蔦の葉

原作單に「音の行方にあこがれた」とあつた、何の音か分らない

○あの人は嫌だ、けれど何處が厭なのか言へない　兵庫　紅螢

○にぎやかな町を淋しい女が通る　京都　要司村禮子

原作「淋しい女はにぎやかな町を通る」

○美しい人だけれど倦き初めた　備中　小見山春子

○眞白い月よ、汝の面に此の黑髪をかけたら　高崎　清水貞子

傑作、今回の新詩句中では第一等の價値があります

○手紙ほどでない言葉を聞いて淋しかつた　羽後　三浦ふみえ

原作「言葉に」、此作も好い

○月の良い晩、あの女が三度通つた　愛知　佐分華影

原作「月に光る瞳」は餘けいなことだ

○夢が尾を引く、彗星のやうに　三島　幽香

○うるさい人、おくれ毛のやうな　府下　三ケ島葭子

○いつ見ても寂しい力ない女よ　霞子

○雨がふる、小さい雨が、白い花が落ちた　羽後　英美子

○獸の眼した男の前に唇が顫へた　仙臺　琴子

○遠野のはてを見てゐた瞳の疲れ　下關　松山瀧子

原作「遠野はて雰圍氣を見つけた瞳の疲れ」とあつた、雰圍氣を見つけたは何う云ふことだらう、雰圍氣といふものは、太陽の周圍にある光線のやうなもので、野のはてにそんなものゝなびいてゐるのは未だ可いとして、見つけたは滑稽だ、字義も知らずにむやみに新しい文字を人まねに使ふと斯ういふ失敗をやる

○月が私の姿と心を淋しくした　古島はな子

原作「私の姿心を淋しくしてゆく月」とあつた、なほした方にしても何れにしても、理に落ちる

○白い霧の中へ黑い鳥が逃げて行つた　廣島　佐藤壽美枝

○いやだわ、いつのまにそんな所へ來たのだらう　福井　片山里

○潮の遠鳴、失戀の少女が泣く　伊豆　土谷すゞ子

○森から女が出て來た、人がゐたのだらう　大和　吉松よし枝

原作「五月雨の日」とあつた、五月雨と森から女の出ることは關係が茫漠すぎる

○灯がゆれる、ゆれる、消えさうに　土佐　ゑびな

原作「あツあツ消えてしまつた」では興味がない

○萎れた花、私の身に似てゐる　金澤　文子

○海の上に日が痛む　淡路　はなえ

○でもねえ、やつぱし止しませう　東京　ゆめの人

○いゝえ、いけません、觸ると　楠枝

○街道の柳が一列に風に靡いた　ゆき子

○雨が降る、腐つた胸の上へ　やすよ子



散文　編輯局選

○お金さんお銀さん（天賞）

徳島縣　吉田紫花

いづれをいづれ、わが敎へ子の可愛いさ懐かしさに隔はないけれど、ない其中に私はお金さんとお銀さんといふ二人が不思議な程懐かしかつた。

お金さん、お銀さん、丁度お伽噺の中からぬけて來た樣な二人の女の子は双子であつた、いつも二人は同じものを着て、下駄から學校用品までも大抵は揃ひで毎日必ず一しよに往き歸りしてゐた、初めから二人は一つの机に並でゐて、運動場にゐる時も丁度繫れてでもゐる樣に必ず影は二つで、それをこちらから島さん…………と呼ぶと、四つの同じ瞳がキロリと一齊にそゝぎ來る可憐さ、同じ花を二輪手に入れて見る樣に、とこにも見わけのつかぬ程似てゐる姿、無理に見わけをつけるなら姉分のお金さんの顔立ちが少し神經質らしくて、妹分のお銀さんの方がどこかおほ樣なかと思ふて見る位で後姿などではとてもわからぬ、二人共唱歌のチャンピオンなので、時々二人で唱はしたが、二人もそれを樂みにしてゐる樣子で喜んで歌つた。

同じ姿で同じ顔を振り上げて、同じ表情の四つの瞳をかゞやかして、二羽の小鳥がさへづる樣に同じ聲で歌ふ可愛さ、私はいつも夢見る樣な懐かしい思ひで聞いては憧憬れた、それで二人の内どつちかゞ惡戯をして私が怒りでもすると、二の眼から一しよに涙が湧き出る、きやうだいといふ以上當り前ではあるけれど、普通の姉妹以上に近い二つの體は、別れてこそゐるけれど、或は嬉しさや悲しさやの樣々の思などは二人の間を細い脈となつて通ふのではあるまいかとつくぐ思ふのである、けれども別軀のはかなさには時々「先

生金さんが私の石筆折りました、………………「先生銀ちやんが私の………など訴る事がある、私はそれを聞くと、何だか「あさましい」と言た樣な思で胸が塞るので、其時には默つて二人の顔を見つめてゐると、やがて二人が顔を見合してニッコリ笑つて仕舞ふ罪なさ、いづれ親達は双子といふ運命を歎いて居らう、人も指さう、自身にも愁いと思ふ事もあらう、然し乍ら世界にはどれだけ願つたとて渇望したとて焦れたとて兄弟姉妹の得られぬ人が澤山ある、それ等の人にくらぶれば、我身の半身である事は云ふ迄もない、思つて見れば彼れと我との觀念に迷ふ程の深い緣、賴母しい契の二人、どこに歎く所があらう、愁いとでも思ふなら手を握つて見るが好い、其肉、其血は互に同じものではないか、然し私は只一つ思ふ事がある、此れ程深い緣の二人の長い前途の運命をどうぞ隔のない樣に、同じ幸運に生きて呉れよと、それを切に思ふので、退職して歸る時であつた、右の手に金さん、左の手に銀さん、兩手に二人の手を取上げて、　金さん銀さん仲よくなさいよ、いへばうなづく瓜二つ………アヽ今更ながら名殘惜しい、はかなき運命は賴みがたけれど、どうぞ此の手と手の同じき樣に、せめては命數なりとも同じに生きて呉れよと念じたが脆い涙は二人の赤いリボンを濡れるまで………。

あなたは材料を捉へることが他より勝れてゐます、何か他の言はない、書かない處を見つけようとしてゐるやうです、女性にしては良い心掛です、文章はまだ練れませんが、其心がけと共にます〳〵助長なさい（評）

○植物園（地賞）

東京　ふみを

ぼつさりと上から被さつた木、濕つた苔の香が漂ふて來る。何處からか、淡い〳〵地の中からでも響く樣な蟬の聲を聞いた。何ともいへぬよわ〳〵しい哀愁をおびてゐる。睡蓮が、美くしく赤味をおびたパレット形の葉のかげから白い、夢見る樣な花がそつと顏を出して水に浮いてゐた。池の中の飛び石を傳つてゆく。先ゆく人たちの褪紅色、ひわ藤紫などの帶の影は水すましのゆく度に美くしい波紋を織つてゐる。よくあの、若い女書家の、畫材になる蓮池、土橋、つゝじの中を山の上にとのぼつた。青々した草原に書生が二人、蛇をおひかけてゐた。うつくしい紋を日にかゞやかして、かんざうの花の、樺色に一かたまり咲いた中に、する〳〵と逃げてんでいつた。みどりの色が、目をいる樣な木かげから、白服の軍樂隊の人が、五六人現れてすれちがつた。夏といふ感じがひしと迫る。思ひ思ひのパラソルひろげて、時々、花やかに笑ひ聲を立てながら私たちは、枯れかゝつたロベリヤや、ゼラニウ

ムや、金鷄草や、名も知れない花の咲いてる園の間をさまよつてゐた。きつい花の香に醉ひながら。ふと木かげに筆を走らせてゐる、若い畵家を見つけた。何となくなつかしい樣で、そうつといつて、のぞいて見たかつた。恐らく畵家自分が畵中の人なのを知らないのであらう。溫室の硝子戶は、所々あけてあつたが大抵はしめてあつた、くもつた硝子ごしに、眞赤なひなげし、毒々しい西洋花が咲いてゐた。入口に、靑いかほした女が下足を番してゐる、何といふ淋しい顏付なのだらう。坂を降りかけた時に、五時の閉園をしらせる鐘がなり出して、園丁が下から上がつて來た。君が代蘭の白い氣高い花と、しゆろの立ち木とが暮れゆく中に殘されて、七月の植物園は靜かだつた。

ことさららしい誇張した文字もないのに、物足らぬ感じがしないのは、此一文、充實した力があるからでせう、植物園の描寫としては佳い方です（評）

○武藏野の夕べ（人賞）

東京　章子

湯がたつたらしい。

煙突から灰白色の瓦斯が夕風になびけてちる、ちる、輕いものだ、自由なものだ。

醬油倉をぬけ出して、何のきまりもない茗荷畑の柵の處に立つてゐる。過去世に捨られて海に走り、現在人の情にみづからそむいて、つちにひとりたつ自分は世の謀叛者であると思つた。

畑を見まはしても人は居ない、靜かに靜かに夕暮は來らんとしてゐる。

活動するのは夕日ばかりだ。

年代をほこる納屋のたてものゝ裏は、高く／＼大根の赤くしなびた葉が積まれてある。玉苗が植ゑらるゝ頃には水田にしづむのだ、かれてゐても。

すゝとほこりとに包まれた、腐れなわと梯子の幾本かゞかゝつてある。入亂れた、蜘蛛の巢。

ぱつと黃に、夕照が今もてつてゐる。なつかしい色だ。古い家の裏、雜なる畑、すてがたい處だ。

白晝すべてのものが活動する時に弱くもたふるゝ吾こゝろは、ものみな安息に息づかうとする時、唯一つ落日の力のみなぎつたのを仰いで、吾心は何處迄もどこまでもいきづきつゝ、生の力をおぼえ、若く若くかけ出さうとするのである――あゝ今夜も――。

茶畑の空氣は靑く涼しく若いと思つて好になつた。

摘む手がてんで早くなつてきた……プチプチプチ、たえまのない音だ。

一つ一つ音に力がほとばしる、嬉しい。若い男と若い女と向あつて幾組かになつて茶畑を朝からめぐる。

新らしい生氣の漲つた若芽をつまれた茶の木は、一

株一株と捨られてゆく、古い顔をゆがめて、にらんでゐる樣な氣がする。

蟬がぢーんとないた、初耳だと云つて、皆はたゞ上を仰いだ眼のかゞやきは大きく美しかつた。

自分は柿の太幹に倚つて、色彩の好い此畑を、いゝ心持でみてゐる。

高くない茶の並木と、疎らな柿の太木と、白い淡泊な姿の男女と、赤く赤くてる夕照と。

天然の對照の美のかゞやきは今吾胸にながれつゝあるのである。

去年の五月南の國でみた夕照は、高き山頂より西の國へと落たが、廣い〳〵むさしのゝ夕照は、いづくの地平で消ゆるのであらうか。



瞳をしばたゝいて行へを見守つてゐる——黃を帶びた赤き色と、其光を吸ふものは何？覺りたいと心は叫んで夕照に強くむかつてゐる——。

二階より　下谷　服部てる子

深く考へてゐる事と、善く觀てゐる心と、うつかりしてゐる心と淺い考とが交つてゐます（評）

【佳作】

○夕の窓より

牛込　流水女

私はいつもの樣に窓に寄つた。

七月の初だと云ふのに、此風の冷たさ！丁度うら枯れ初めた十月の末の、庭から、庭へと、傳へ行くうすい哀しみを含んだ風の樣な——。

二三日茫然と狐につまゝれた樣だつた私は、此風が顔に身體にふれると、ハッと夢から醒めた樣に、すだれを捲いて、眼を見開いて凝つと眺めた。すぐ窓の外は人の家の屋根に續いて、灰色の空が遠く廣がつてゐる。その亞鉛屋根の中程に、二寸許り先を見せて槽欒の木が見える、鮮かな綠の色が、彼方へ、此方へ、たえず動搖してる。――灰色の空に孤り震へつゝ立てる樹の姿！私もそれぢやないか、とぢつと考へて見たけど分らなかつた、――私は自分を樹なぞと一緒にしたくないと思つた。

當家へきてから、もう一月過ぎた。甘いキスに醉はされた身！若い胸の血を躍らせた身!!! あゝ次第に冷えて行く、明けても、暮れても寂しい灰色の流れた室にゐるんだもの。一つも一つとして私の眼を刺戟するものが無いんだもの。隣りの若い人は「緣日へいらつしやいな。神樂坂隨分にぎやかですよ」と言つてくれた。行つたつて駄目!!! 私の眼には、暗い空や、油煙の下に鈍い目を開いて、明日のお米をきづかつてる商人などの外は何にもうつらないんだもの。美しい面に若い血を漲らせて、輕やかな涼しい衣つけて、若い男とぴつたりと付いて行く女など、幾人會つても後から〳〵すうつと消えて終ふ。――あゝ私は本統に少女の血が逝つて終つたんだらうか…………。

ひと月前の夜、こゝへ來てその次から、毎夕〳〵此窓に寄つた、此窓によつて、遠く浮んでる雲や、夕燒の色やを色々の思ひで眺めた。最初の日は小雨がしとしとと降つてゐた、卷紙を出して義兄樣に手紙を書いた、雨が降つて淋しうございます…………と冒頭に書いて、――私は新しき家に入りました、とつけた、熱い淚が止めどもなく流れる、書きつゞけた字の上にも二つ三つ落ちた。――此悲しい淋しさを早く救つて下さい!!! と止めて此窓に寄つた。あの時の私、只一色の淸い〳〵心しか無かつた、兄樣の懷しいみ姿を只空中に書いてみた、次の日も雨、その次は曇り、雨や曇りの鈍い日が幾日か續いて美しく晴れた日がきた、其夕此窓によつて、靑いみ星のきらめきを見た時、あゝ私の胸は甚麽に躍つたらう!!! いつまでも〳〵眺めて、晩春の靜寂の天地に只二人甘いキスに醉つた宵を思ひ堪らなくなつてハンケチを當てゝ泣いた…………私は淚脆いと人にも言はれ、自らも然う思ふ、淚を作つて吳れた神を呪つた事もあつた、然ど此頃の冷たい私の心！あゝどうしたのだらう――昨日も一昨日も茫然と暮して終つた。

誰かゞ、私を呪つてるんぢやないかと思つた、屹度屹度然うかもしれぬ!!!

あゝもう一度胸の血を躍らせて見たい!!!

冷たい理性の女も多くなつたが、多情多感の女も多くなつた、一つ附けても澤山な！を三つも附ける、女は何かにつけて、多くを望むやうに生れたのかも知れぬ　（評）

○新開町

牛込　平塚白百合

私は槐の水際に生えた江戸川べりを歩いた。水分の蒸發し切つた土はカラ〳〵に黄色い埃がポッポと立つ。草をふむとまだポーつと微温が素足に通ふ。金魚の鱗そのまゝだつた夕ばえの雲も收まつて、川向ひの黒い木立から闇の糸はスル〳〵と、新開の火の町、せばめられた田の面とベールのやうな薄靄がさまよつてゐる。

グッタリ勞れ切つた様な工事服の胸ボタンはづした男が血と油とを絞り出された骸ばかりのやうな細い乾干びた身體してトボ〳〵と堤の上をゆく。

何といふ薄い影なんだらう。

赤黄色い渦巻の中にまかれてゐる人!!

クッキリ白い堤道をまだゆくまだ行く………。

早稲田ときくとすぐ蛙を連想する。過去三年の間に(私が覺えてから)半分にもせばめられたもうほんの〳〵申わけ許。終焉の時はせまつた。

パッと目がくるめくやうになると、冷たさうに田を埋めて建てた大煉瓦の大建築に、電氣の光が煌々と點いた、どの窓もどの窓も皆あかるい。

あの窓の一つ一つから出る光は、田の水にピチャ〳〵影をゆすぶつて、皆喰つてしまふぞとおどかしてゐるやうだ。

埋め地には白木の高い新建の家が二三軒、骨組計建つてゐる。くすんだ蛙の音が弱々しく妙に氣がめ入る。なぜこんなに都會は足早に押しよせて田や畑や森を開いてしまふのであらう。

畦に切り倒された何の木か切り口から汁が流れて木の香がボーヤリとにほふ。

駒塚橋を渡つて來た學生の一群がハーモニカ吹きながら火影のあざやかな町の方へと傳つてゆく。

私も重い足を引ずつて新開町へ出ると、うすぐらい横町からシク〳〵泣きながらくる三十餘の女をみた。

後から追つてくる子供は口々に、

お民の狂人〳〵。と叫んでゐる。

一人の子供は棒でつゝついた。

と袖からはづれた顔、筋のゆるんだ口、にごつた眼、また袖をあてゝ泣いてゆく。

私は只もうおそろしくなつてかけ出した。支那料理の濃厚な匂ひと、お民をのゝしるこゑとがこんがらかつて追つてくるやうだ………。

例に依つて才筆、近頃一段の精彩を加ふ　（評）

○深い底

羽前　あらゝぎ

淡曇の眞晝の空が大い池に映つてゐる。水は少しも動搖がないので、俯向いてみる空とは、たゞ少しく明暗を異にしてゐるだけで深さはかへつて映つてゐる方にうかゞはれる。その深い底を掌にも載せたい白い玉のやうに日輪がくる〱と雲をくゞつてゐる。

私はどうしてもこの雲も日輪も池の底のものゝやうな氣がしてならない。ヂッと見てゐると深くて、深くて、——ふと、幼さい時いく度か夢に見た苦痛、——何處からともなく、ふつと宙にあげられる、落ちようと、もがいても足が地につかぬ、吸込まれたやうに宙にふら〱して、叫びたいに聲もたゝぬ苦しさに目がさめる。それを思つて、私はこの深さにも吸込まれるやうな危さを感じた。

懶き眠り

灰色の室の向ふに花の咲いた栗の大木が搖れてゐる、ゆらり〱と。私もあの梢にすがつて、一しよに搖られてゐたいやうな氣がする。

だるくて立つたら眩暈がしさうな心地に、重い呼吸をすると、青臭いやうな花の香ほのかに匂つてくる。眼を開いてるのさへ懶くて、机に突伏してしまふと、さや〱と遠い葉ずれの音が聞える。蠅の鳴音があたりをめぐる。——と、溫な柔い手が肩一ぱいにひろがつて、ぐら〱としたかと思ふと、壓せられるやうに氣が遠のいてゆく——。

かうして懶い晝の眠りに陷ちてゆく心持が、かたはらはつきりと感じられた。

何うしても散文詩ですね（評）

○花の棺

赤坂　靜江

道樣は大好な百合の花の咲く時只一人、母樣と兄樣の御手に抱かれて南湖院の一室に逝つて終ふた。僅十九年、何と云ふ短い旅だつたらう。夢の樣な心地に御門で車下りて玄關に立つた時、同じ年同じ背丈の私を見て小母樣のお胸は破れたらう。

おゝ……室の眞中のお棺に眠つた樣にとぢたお眼、口、胸の上に組んだお手、長い髮は下げた儘に肩の邊りお顏も隱れる許り白百合が香つて居る。

道、靜樣が被居たよ道、と小母樣はのし掛る樣に空く閉ぢたお眼を見守つて、哲夫樣とお棺の側に跪きせぐり上る淚をおさへて默禱した。牧師は曇つた眼を上げて「神の與へ給ふ試です、辛らくとも忍ばねばなりません」と仰有つた。「先生、何と云ふ重い試でせう母は死にはせぬかと思ひます」と仰せた哲夫樣のお

聲はしぼり出した樣だつた。棺は紫の布に覆れて教會について。「我等は何をも携へて世に來らず、又何をも携へて往く事能はざるは明かなり」と牧師の聲は胸の底迄響く。終に道さんの好きな讃美を歌ふた時、「いざ上りて主よ御許に近づきん」と云ふ邊小母樣は立つに堪へず倚子に倒れてしまはれた。檜町の通を靜に練つて列は青山に着いた。やがて小母樣哲樣次々にお棺に土をお掛け遊した、私も心に「道樣さよなら次の世は別れも死もない國で」と云ふて其れを落した、あゝ其の音！響！



海邊　本鄉　佐藤靜枝

雨がしとく降つて來た、心ない人夫は一時に土を落して終つた、小母樣は道子とお呼び遊してよろくと哲樣のお手に倒れ掛つて伏沈みなされた。小母樣のお流し遊すのはもう涙ぢやない、小母樣の心がとけて流れるのだ。哲樣の御手はしつかり小母さまをかゝへて今にも溢れおち相な露がお眼に一杯になつて居る。新しい墓を廻つてうづ高く花輪がつまれた、音のない雨は靜に白い花にそゝいでうなだれて見送りの人も歸つて行つた。

大人ぶつた健實な筆の運びが一貫して、びくともしないやうです（評）

○會心

屋根のくさ

小學時代からの親友なるT様はそこ迄用達に來たから一寸よつたと云つて、にこ〳〵此九窓からのぞいた、强いても〳〵、有難うと云ふばかりで座敷には上らない、——例の如く罪なき談話を約二十分間も交して、また來てよと笑顏を後に友は歸つた、例によつて私は裏庭づたひに桑畑の中まで見送りした、けれど時によるとこゝで復立話を一息する、今日もついこゝで計らずA様の事が出て對話がつきず、漸く午砲に解決をあたへられたやうな始末で、左樣ならとほゝゑみ交して別れた、——ほゝゑみの餘波は座敷に歸つても猶消滅しない、と案の定たちまちお小言頂戴だ。

「そりやいくら高女卒業した人だと云つてもちつたあお前もお考へなさい、彼女は魚屋の娘ではないか、ねーお前は彼女といふとさも嬉しさうにお話をする、いくら上べはおとなしやかに見えても町家の娘の心と云ふものはお前達とは違つてるよ——またいつも〳〵お見送りとはなんて云ふぶさいくな眞似です、これからはちやんとあんな事はよして下さい、お座敷で左樣ならしたらもう澤山だ」お定り文句の小言をこちらでもお定りのだんまりこみでさきかぬといふふりで居て聞えるものは仕方がないから聞いて居た、「親友ですもの、さうはゆきません」とは齒の根迄は出て居たけど、こゝだ〳〵と齒を喰ひしばつてがまんした、けれど私はあくまでもはがゆい殘念な、Y樣みたいに人からありやちつとぼんやりの方だなどと公言を自然とゆるしてるやうな方の處へなどは、こちらからお話にでもあがれかしのやうに時々云はれる、そりや身分こそよけれ、高位の家から家へ嫁がれたのだもの、一面からは仕合せな人だ、羨ましい事だと賞めも仕樣けど、私の目からはY樣はちつとも美人とは見えない、だからと云つて露遠ざけはしないけど、親友とするには不必要だ、それを家の者はみんな前者を排斥して後者を歡迎してる、けれどいくら私は惡しざまに云はれても、にくまれてもみんなの味方とは死してもならない、とは云へ情けないぢあありませんか、弱者の意志は殘念に思ひ乍らも、うはべは、服從の樣をよそふて、仕方はない無言で居なくてはならないので御座いますもの…………。

友情の道皆は能くあることです、反抗が激しくないだけ引き立ちませんけれど、ほんたうの事はほんたうに聞えます（評）

○夢のたゝり

四谷　荒木むら雨

「すゞ子何をぼんやりして居るのです、さつさと顏を洗つていらつしやい」とだしぬけに云はれてビクッとした、あわてゝ湯殿へ飛込んだ拍子に桶に躓いてスッテンコロリン見事ペタンとしり餅つく。とあいにく金盥にぶつかつてガンガラン。さすがの私もはじめて夢の妄想からさめたでも未だ本心には返らなかつたと見え、水道の栓をひねるのを忘れてわざ〳〵瓶の水くんで顏洗つた。處へ兄様が手拭ブラ下げて入つしつたが、かめの中を覗いて、頓狂な聲を出して「ヤーねずみの奴身投げをしたよ」つておつしやる「エ、ッ」とよく見れば成程死んでる。夜中に足踏みはづして落ちたのだらう「あゝ厭だ、私今日に限つて何だつてかめの水で洗つたのだらう、而も口をガブ〳〵……」「ワハ……ペストたる事受合」なんてにくらしい、それにしても氣持ちが惡くて耐らない、ペッ〳〵ッ。水道から出たての淸水で濟めたけれど、矢張り駄目、おまけに兄様がしやべつたので皆に笑はれた。

裁縫仕乍ら心が靜まると、又候夢の妄想にふける。曉の夢は正夢だつて？見たかつたあの眼で見られたかつた、それなのに武夫様つては……あら私はおくみを裏返しにつけちやつたわ、チョッ寸法まで違へて。さつきから間違つてばかり居る、頭がモヤ〳〵して來た。そこいらの物一緒に丸めておつぽり出したくなる。あゝ又夢が氣になる。

夕方姉様お臺所で女中相手に御飯のお仕度。よせばよかつたのにちよつと料理通を氣取つて、赤いたすき斜にかけお手傳ひをした、までは上

出來たつたが、例の夢を思ひ出したから耐らない。覺えずパン粉をうどん粉の中へザブッと……アッ失敗つたと氣がついた頃はもうおそい、六日のあやめ處ぢやなくて七日位になつちやつた。「すうちやんはおこしやして駄目よ、あつちへ行つてらつしやい」て姉樣が……今日はまあ朝つから失敗ばかりしてる、よつぽど夢がたゝつてると見えて……。

夢の祟りも此位なら罪がなくて宜うござんす（評）

○わが涙

小石川　しらはぎ女

淋しい、もだえの胸をいだいで、私はしづかに教會を出た、空には一つの星も見えない、靜な暗い神社の前を通つて行く〳〵、罪に付ての說教をきく時の苦痛、吉田先生の兩手をあげ、天を仰いだ時の異樣の光をはなつ目、肺腑より出る樣な感激した聲でいのりを上げた時、私の胸はおのゝいてはら〳〵と涙が落ちた、あゝいふ時に、人は罪を悔ゆるのであらう罪、私に今にくむべき罪を犯さうとしてゐるのではないか、冬枯れの樣な淋しい野に立つた私は、美しく暖かい春の香に醉はふとしてゐるけれ共、其間には恐ろしい義理といふ垣があつて、私の行く道をさへぎつてゐる、無理にもとびこえて行かうとすれば、忽ち鐵のくさりに引止められてしまふのだ。青春にもゆる血潮は熱い涙になつてやさしい人の袖にそゝがうとしてゐるのに、優しい人も涙をうけ樣とあせつてゐるのに、あゝ、刻一刻と二人の間は遠ざかつてしまふのですもの、泉の樣にわき出る涙はいたづらに秋のしみとなつてしまふ、私の命、私の若い血は此義理てふ恐ろしい垣に束縛されてしまつたのだ、此垣の犧牲となつて私は生涯偽の笑を浮べ、暗に泣く涙の子となり終るのであらうか、たとへ暖かい情の雫をそゝがれて花を開く時があらうとも、其はきつと色あせたしほれた花に違ひない、あゝ、此思ひをすてたい、此もだえを去りたい、そして昔の樣な純潔な少女に返つて奮鬪の巷に活動したい、つかれきつた魂を呼起しみ神の力を仰いで新天地に入らうとあせつてゐるのだけれど、いまはしい涙、罪惡の纖に勇氣も何もくぢかれてしまふのですもの、あゝ弱い私の涙のかわくのはいつ、天父のみ許パラダイスに歸る時であらう、けれど其時は、其時は、此血冷え、ひとみ曇り舌を失ふ時なのではないか、あゝ限りない此涙を、神樣つと思はずさけんでいのるより外はなかつた。

純情、愛すべし（評）

○生死の境

麻布　草雲雀

「誠にお氣の毒ですが、もうとても――お永くも有りません」と先刻醫師より宣告されたので有つた。

振分髮を肩にして可憐の幼子は……桃から生れた桃太郎……と調子はづれに椽側を歩いてゐる、胸の奥の底からえぐられる樣な悲しみが寄せてくる、お前も程無く母のない子だと無心の幼子を抱きしめて目を閉ぢてぢつと怺へても迫る涙は遠慮なく頰につたふ、

今離れの一間には呻吟く人に「今日はお熱も低うございますから此の分ならぢきお宜しいでせう」と醫師は氣休を云ふ、何故本人に僞りを！あゝ知らぬはお前と母ちやんばかりですよ、血肉の中で有ながら永のお別れを知らさずに引離す、兩親も兄弟も他人も、短き命は朝夕に迫つて近くのを知てゐる。又來る七月六日は有りますがもう再び來た時は意識なき冷たき土の下に眠るかと思ふた、骨肉の仲では無いが一度伯母と呼んだ人、「まだ八月一ぱいは持ちませう！」と云ふた人の顏を見て伯父は男ながらも涙に目をしばたゝいた、助かる物なら……口迄つて、助からぬと決たら出來るだけ本人の氣の向く樣にするより爲方は無いと聲は潤て低く顫へた…… 反抗して出た涙の樣に止度無く流るゝ、まだ呼吸ある人と思ふても橫たなつて居るは早晩冷たき物になるか、明らかに物云ふ伯母はあしたにはただ閉づる冷たき眼と思はずにゐられなかつた。

枕元に膝をついて見守つた顏は僅の中にひど〳〵變つた面影は、生の疲があり〳〵と讀まれる、見る影も無いけれども頰に上る紅を、もしやも

しやゝ思はれて、「伯母様お好きな水菓子よ」、例によつて差上た、「本統においしさうね!」、伯父を見返つて、「でも毒だ」と訴へる様に口込つた時は、胸も心も千々に砕られた様、胸の動悸は強く波うつ、悲しと痛苦と劇しく迫つて浮きつ沈みつ漂ふた、目と目と合ふた刹那!「好きならお喰りよ大丈夫だとも」、伯父の言葉は胸をえぐつた。無器用な手に取り上げてむいた、りんごは小さく削られた、もつと小さくして下さい、低いけれども胸に泌み入る、私も割て下さい、伯父様のお心も二つにも三つにもして割つて砕いて悲哀と痛苦と分つたら、あゝ私は、今日の前に生死の境を辿る苦痛を見せられて居るのであらう。

こんな材料を扱ふ時にまで、作者は主觀的な理智に弄らうとするのはわるい、例の如く讀みづらい、單純も考へものだが、原作の如くもつれてもいけない(評)

○蛇の巣

南千住　吉田清子

じり〱と照り返す日に三河島の小川のところまで來て、ふつと思ひ出した、蛇の巣と心に浮んだ、草は、去年の様に色もかはらず、折からの風に靡いて居る、季雄さんをつれて筆子さんと三木子さんと私と四人で丁度此處まで來て草の上に休んだ季雄さんがたんぽゝの花を取つてと云つたので私が其隣のふさ〱とした、稻の様な草の上に手を突くと冷く〱て嫌やにぐにやりとした、憶病の私びつくりして急いで立つてパラソルの先で草を分けながら筆さんと三木子さんを呼んだ、三人で氣味惡る〱草を分けて見ると、道理、鮨の様な形の鼠色がかつた物が何十疋か知れぬ程うよ〱と動いて居た、申し合せた様に三人は手を引いた、其の時私の顔色と云つたらなかつたとあとで筆子さんに云はれた、皆何んでせう、私初めてよと云ふより外に出なかつた、まつたく今まで見た事もないもの、其の時通りかゝりの百姓さんに聞くと、平氣で笑ひながら、お前方蛇の巣取つただなあつて云ふ、蛇の巣と聞いて二度嫌やな心持がした、其の人は草の中を手で分けて、何やら云つて見て居る、筆さんも三木さんも覗いて居る、恐い物見たさで、私も少し離れて見た、此う思ひ出すと急に其の蛇でも出て來さうに思はれる、小川の水は風に小波をよせて日に光つて、いかにも生ま温るさうに見えて、半分を水に浸して、たゞよふ草、蛙が一疋ぽこんと水音さしてとび込んだ。

蛇の巣とは大變なものを見つけたものです(評)

○深夜の入浴

京橋　千代子

アゝ眠られない、どうしても、あせればあせる程愈々眼がさえてしまつて眠られない、無理に眼をつむつて見ても駄止!蚤には攻められるやら氣がいら〱して來た、尙更眠られない、ふと思ひ付いてお湯殿に這入つて湯加減を見た、おゝ丁度好い加減!早速寢衣をぬいで這入つた、深夜の入浴なんてしやれてるはなんて思ひながら――、おやツまあ下の方がまるで水のやう、まあ厭!、こんなお湯に這入つてぐづ〱して居たら忽ち風邪を引いてしまふは、じーツと沈んでゆつたりと瞑想にふけらうなんて、とても〱、急いで飛び出した。前よりも餘計に目がさえてしまつたやうだ、仕方なしに電燈の下に女子文壇を繰りひろげる、ぱら〱ツと頁を繰つて作家の進境を再讀する、私の好きな佐藤ます子様も――、おゝお懐かしいます子様!私何故か貴女がおなつかしくつて〱――。いつぞや妹が學校の歸りに電車の中で、かねて誌友の面影で拜見した貴女のお寫眞に似た方をお見かけしたので、もしやと思つて居たらばやつぱり室町で下車遊ばしたので確かに彼の方がます子様!、まあお寫眞の通りの方ですよと話しましたので、私も其方がます子様ときめてしまひましたの!。

ます子様!!私も貴女と似た場所に住つて、そしてやつぱり文學に憧れて…。けれども〱私には貴女のやうに自由の才筆を神様は授けては下

さらなかつたの！ます子様御羨ましいわ、貴き自由の御才筆が………。

オヤ今のは三時、まあ私夢中になつてこんな事かきはじめてしまひました、また朝が早いから、もう無理にも眠ませうよ、さらば〳〵、慕しのます子様よ、今後ますます御振ひ遊ばせや。

ます子さんの知己は恐らく一二人にして止まらない、千代子さんの妹さんも亦其一人でせう（評）

○青山墓地

松本葉子

霞町へ行くのに青山墓地を抜けて見た。霧の様に細かい雨の降る朝である。墓地を一直線に横切つた可成り廣い路は、降るともなき今朝の雨にシットリとして氣持が宜い。兩側に何所までも、限り無く列んだ石碑には何の位多くの涙がそゝがれて有らうと、側らに小さい石の目じるしがある――一等の一號として――。あゝ此處は表通りだから一等なのだ、もつと奥の方の人目に付かない不便な處は二等三等となつて地代が安く成つて行くのだらう？………。あゝ人生は、此樣な石に成つてまで、金力によつて等級を付けられるのだ。――と思つて思はずも自分は、あたりのいかめしく鐵矢來結ひ廻した大きい石碑や、生垣のさゝやかなのや、古い石碑や、新らしい石碑を見くらべた。………

あつ、向から女が二人來る、二十四五の――下品なが、何が可笑くつてか無暗と笑ひながら來る。



いたづら　柳田君子

其れが此悲哀を含んだ墓地に、あまりに不調和なので、私はぬれる程降りもしないのに傘を片向けて通り過ぎた。

こんな時に………かう――病になやむ――青白い顔の、若い女が、シキミでも下げて來しやないかしら？………、何だか其樣に思はれてならない………が、遂うく遇はなかつた。

大凡三四丁も來たかと思ふ處からだら〳〵と坂に成つて居る、其坂の下り口に立つと實に〳〵見晴が宜い。遙か向に麻布三聯隊の兵營が見える、青々とした草むらの中に赤れんがの兵營が――。坂を下りると間も無く霞町の停留所だ、何だかまるで汽車の踏切見た樣な處だ。草と草との間のせまい道を電車が通つて居るのだ。

地圖で見たら電車の停留所が有るから、定めしにぎやかな處であらうと思つたら、すつかりはづれて仕舞つた。私にはどうしても電車は都會の

物の樣に思はれる。

あの邊ゝ樣子が少しは表はれてゐます（評）

○お鍋島

備中　山の女

貴女は婦人の事に就てとのお尋ですから、男子に就ては總て除け物にして申上ますが、性質は一般質朴だと申て差支ないでせう、妙な事には結婚は大概土地の者同士で、多く自由結婚だ相です、惡く申せば愚に義理固くて、兩夫に見ゆなんて事は無いさうですから、若い後家さんが澤山居る相です、服裝でムいますか、平生は皆筒袖で、長い襦袢見たいなんです、別に變つた衿を掛けてるんですが、衿の地質で中流下流の見分けを付けるんですつて、隨分でせう、帶は男帶位の細い布を卷いて居ますけどね一年に二度のお祭りの衣裳たら中々振つてる相です、年中足袋を離さないんです、妙でせう、私の處と僅か海上四里計ですから、どうしてそんな事は無い筈なのに習慣て可笑ものです、言葉たら一等面白いんですよ、可愛らしい處もあり強い處もありで全く分らないんですもの、私も始は宿の主婦の申事頓と分らないで不自由で困りましたよ、そうそう私が島に着いた翌る日、二階の欄干に倚つてましたら、眼の下で騷しい聲するので、其聲の方に眼をやりますと、四十位の女が二人口論してるんでせう、一人の女が大きな聲して（うらーげぅさん悲しいわいのう）てんな事云ひましたの、どんな意味だか何事だか分らなかつたんですが、どちらも小供を一人づゝ連れて、其樣子から見たので、多分小供がけんかでもしたので、遂親同士の口論になつたんだらうと察したんです、一寸こんな風でどちらかと申せば多辯な方ですよ、して不思議に聲の好いのに吃驚しますよ、小學校で唱歌だけは九分迄甲ださうです、氣候と土地の具合だろと思ふですが、美聲には羨みましたよ、親も夫も、兄弟も孫も漁師たものですから婦人でも力の強い元氣な事たらこれも習慣で肩に擔がないで頭の上にかつぐんださうです、十四五貫の肥たごでも容易にかついで濟ました顔で歩いてるつて聞きましたから、一度見たいと思ふたんですが、とうとう見る事をしないで歸りましたが、まー男女とも神佛を信仰する事があついので、今ではそんな事はないでせうが、むかしむかしは女が不祥の時は穢れてはと申て、山に小屋を設けて、一週間乃至十日位一人で寢起きして居たさうで、今でも小屋丈殘つてますがねまだ面白い變な事もあるでせうが、何しろ一ケ月足らず遊んだ計りで、見聞はせまいし、ざつと私が知つてる事は、今申上げただけなんですもの、では御免蒙ります。

島の風俗は面白く讀みましたが、お鍋島といふのは何處の島でせう（評）

○逝く春の暮友と語る

麻布　美耶子

「あらあんなに櫻が」A樣はクルリと庭の方を向いた福やかな頰、黑い髮、白いリボン、私は美しとA樣を見た、幼い時から綺麗な人だつたが、此の頃は一層艷やかさをました、君は○○校一の運動家だと聞く。美しい顔、涼しい聲、可愛い姿でテニスに熱注さるゝ樣子は確に校庭の花であらうと思つた。

母樣がお手製の鹿兒島餅、それも少しお酒のきゝ過ぎだのを、二人は醉ふて語る約束で母樣の驚かれるほど食べた、身内の血汐は温かに融和されて、胸の底から春の風が吹き起るやうで快く、知らず／＼笑みが唇にのぼつて來る。君が頰のあたりも一際紅ゐをました。

「ねえ美子さん、しつこい樣ですけれど枉げて御出席遊ばして頂戴な」

「そりあ私も他ならぬ母校の同窓會の事ですもの行きたいと思ふ。愛校心の常ゝ燃てる一人なんです、しかしあの八とせの圓らかなる夢を包んだ校舍を思ふさへ、今、私に取つては言樣ない苦痛なんです、貴女も知つていらつしやるでせう、さういふ樣な時共に手を取つて行くべき秀ちあんも又T先生も今は答へなき面影となつて終つたんですもの、私は其思ひ出で多き母校の庭を迚も踏べき勇氣を持つて居りません、泣きに行く

樣なものですもの魅みに行く樣なものですもの、行きたくつて行かれないの辛いわ、弱虫て言はれても何て言はれてもかまはないの、K先生にもよろしく仰つて頂戴ね。先刻言つた事は水に流して、是れが私の行きかねる眞實の叫びよ。

葬らう忘れよう捨てようとつとめて居た懷しい悲しい記憶は今更にほどけて泣いた、泣きながら涙ぐめる君を門前まで送つた。おぼろ夜にうすれ行く君の姿。人懷しさのしみ〴〵胸に迫つて、T先生のみ名を秀ちあんの名を小さく強く幾度びか呼んだ。

お鮓の酒に醉つたのは好かつた、お話は其割に振はない（評）

○古い手紙

さくら子

あゝ何だかかうしては居られない樣な氣がする後から後から絕えず何者かが追つてくる樣で、混亂した私の腦はまるで鐵のメめ板でメめ付けられてる樣だ、自分の頭ながら人のか自分のか分らない、痛いのか苦しいのか其れさへ云ひ現はすのに苦しむ、其れでゐてぢつとして居られない、机の上の紙はいつまでも白い、はてはじれて頭をかきむしりたくなる、やけに筆を投げて何か他の事をして見ようと思ふ矢張駄目だ、つまらない、はては立上るのも面倒になつて片つぱじから筆のぢくを嚙み始める。

ふつと本箱の引出を拔いて見た、左の奧に原稿の下書や書いたまゝ出さなかつた手紙やら種々の物がごつちやに丸めて赤いリボンでしばつて這入つてる、一つ拔いて見る、えらい物が出て來た。

今考へても口惜しいもの其時死ぬ氣になつたのも無理はない、でもあんまり大膽すぎた自分ながら驚く、あの時はもうすつかり死ぬ積だつたもの、人が見てたら氣遊ひに見えたらうとをかしくなる、だけど死ななないでよかつたに、其れはそうと死んでも居ないのに書置が出たら大變だ、よく今まで見附からなかつた、冷汗かいて引破つた、今度は手紙だ、角封筒で三色菫のカードがしつかり張つてある、一體私には妙な癖があつて、手紙を書いといて出さない事がある、開いて見ると、前略「私の近狀をちつと御話しませうか、別に變つた事はありませんわ、相も變らぬ催眠狀態に居りますのよ、或る人は不生產的動物だつて云ひました、至極の名言だと思ますわ、私は或る人の樣に交換局へも小學校へも出やしません、たゞいたづらに喰べては寢、起きては喰べ、同じ事を三百六十五度くり返して長いとも短いとも思はないまに其れでも一人前に一つ年を拾つてしまひますの、だから立派な職業をもつた御方の前で威張るとは申しはしませんわ。でもね文子樣考へたと同じ事ですわ、ちび筆かぢつて詩に歌に醉ふて暮しても要するに一年は一年ですわ、時計の樣にこつ〳〵動いても三百六十五日は同じく三百六十五日ですよ、老いてしまふ一生にせめては若い中なりと若い心の醉ふだけの自由を筆に與へてほしいと思ひます」下略、かう書いてある、あゝ求むる自由を悉く與へられた今、若も醉ふ事の出來なくなた今、「あゝ泣かずに居られようか、しみ〴〵昔が戀しい、自由を望んで泣いた時分が戀しい、しめやかにふる春雨の夜、桃の花の匂ひに醉ひ白酒にうかれた時分がなつかしい、私は思ひなりとも其時分に返つて見たくしつかり抱いて目をつぶつた。

不思議！涸れて無い筈の涙がほろりと落ちた。

稍、自暴自棄しながらも、自覺してゐる女性の心持が見えるやうです（評）

○薪割爺の花

越後　曉

每年山吹の花の咲く頃から「薪割らう〳〵」と呼んで來る爺さんがあつた。私の家でも割つて貰ふて居た、今年は今に其聲を聽かない！！

それで私の家は裏の三吉爺に割らせた。ストーン〳〵と地の下までも泌みこむ重い響が四五日も續いた、梅の木の下にはまだ白い生薪が規律よく築かれて米の空俵は其上に蔽はされてある、床しい木のかほりが僅に散つて居る。今日からは入梅だといふ。人の心を貫ぬくやうな六月の梅の枝が其上にばつさりとしだれて居る、しめつた空氣は堪へがたい情緖を想はせる。薪割りの爺さんは死んで了つたんだらアあるまいか、あゝ…………



和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　北海道　草川葎草

薄暮の灯にほど近き虚空より沁み來る香あり白罌粟の花

○（地賞）　能登　柳るり

あたゝかき國に逐はれて來しつばめわが黒髪に羽すりて行く

○（人賞）　石川縣　むらさき女

つばなの穂白くほゝけて初夏のときめく風の吹く日となりぬ

【佳作】

○　牛込　平塚白百合

九萬尺の火の髪なびけくるひゆく彗星ともならましものを

○　神戸　綠髮子

十人の男の甘き言葉きくよその少女をねたみそめてき

○　丹後　伊志子

おほらかに文などかけばことさらにさびしくなりぬいかにすべきぞ

○　福井市　白百合

聲もなく小鳥は飛べり灰色の淋しさを吸ふ窓のたれ幕

○　麻布　中村操子

夜もすがら黑のつばさの鳥あまた目に舞ひ落ちぬ熱を病むとき

○　松江　清き花

なつかしき戀しき人と御名よびて誰をたづねんあはれ夢の子

○ 三河 中川撫子

永久にさめなときゝし契さへうたがふ人となりにけるかな

○ 能登 金森夢垣

幾時か默せる君と對ひゐて足らぬこゝろも持たぬわが幸

○ 愼子

海原にふりつる雨のごと空し三とせのほどのわがまごころも

○ 長野縣 宮坂明子

この君をコスモスとしも言ひ初めし初秋の日はまためぐりきぬ

○ 播磨 藤井梢

妹ら若葉の椽にたはむれて芝居ごとする夏の夕暮

○ 徳島市 登川秋野

花めけるむらさきいろのふりそでに涙おとしぬ初秋にして

○ 長野縣 玉川星子

栗の花こぼれちるでゝ悲しきは今日が昨日にまさるおとろへ

○ 麹町 牧野銀杏庵

心てふうつくしき鳥えてましと日でと夕でと網はりあれど

○ 日本橋 三上辰子

こゝろなく涙あふるゝ弱き子の面をうつす春の鏡

○ 近江 鈴蘭

漸くに戀知りそめし十七の乙女の如しダアリヤの花

○ 鳥取市 粂澤鐵子

小き時君の賜ひし歌反古を繰りかへし讀む五月雨の窓

○ 小桃

水無月や京のなまりの佳き人に隣りてありぬ晝顔の花

○ 佐倉ゆかり

おくつきの萩のしづくのこぼれつゝ妹がむかしのうつり香匂ふ

○ 羽後國 失名

七月の眞晝の夏を田草取る村の少女は戀知らぬごと

○ 伊豫 萩子

我れをとめ胸にけがれはあらざれど時折人のしたはしきかな

○ 名古屋 鹿鳴草

ますかゞみ清きみ神のおほまへにこの少女子は何をかいのる

○ 伊豫 黒田操子

美しく庭に咲きたる花あふひ一枝手折り彼の子にやりぬ

○ 下關市 松岡千鶴子

ふと君が御名など筆に走りきて用なき時に同じ字をかく

○ 廣島縣 梢月

盆栽に水やる時が命なれ心のもだへとみに忘れて

○ 北海道 安達葩女

煙突のけぶりもはかずあまた立つ眞晝の街をとんぼのとべる

○ 長岡仙子

日盛りの赤土山を越ゆるときダイナマイトの響きをきく

○ 田野しか子

來し島の男は我をなぐさみやはしたなめるときくぞ悲しき
○　日本橋　松岡千代子

現世をやよなげかずや紫陽花の變り變りて散り行く時に
○　秋田　ふみ子

今日もまた昨日も同じ賴みなきことば賴みて生くるわれかな
○　福井市　縄谷ます子

なく人となかるゝ人と手をひきて月見草咲く野べ行きにけり
○　筑前　笹つゆ

三ケ月の柳に匂ふ夕まぐれ僧の君行く何所ともなく
○　京都市　平井ちよ子

雨の庭小窓に寄りて打見ればわが捨し花うなだれてあり
○　常陸　古島花子

寶石も土くれのごと思ふわれ戀しき君を手に得しのちは
○　淡路　留子

燃る頰を君が御胸に押しあてゝ若き血潮のひゞききくかな
○　香川縣　藤村木の間

時鳥あはれに鳴ける月かげをみつむる我も淚こぼるゝ
○　兵庫縣　宮浦久惠

ふるさとはしづかにくれて青柳のほとりよりする船歌の聲
○　長崎市　永井圭子

窓近き芭蕉に雨のそぼ降りて淋しき庭に蛙なくなり
○　茨城縣　桔梗女

製絲場の汽笛の音の冴えてゆくゆふ暮の街我れ獨り行く
○　宮城　阿部よしえ

われ二十情あるなる戀人に思はれぬ程さびしきはなし
○　出雲　長崎百合子

誰かきてわが眼蔽へよわが心あらぬ方にも往かむとする日
○　千葉縣　七五三野菊枝

月みなば思ひも出でよもろ共にみし影やどる別路の胸
○　下總　小名木惠子

あすありと思ふ心にひかされて佛たのまず男たのまず
○　伊豫　渡邊文子

乙女子は君の御姿見し夜よりかなしきことも失せぬと言ひぬ
○　東京　華香

美しき小傘かたむけ三人ほど芙蓉のかげを語らひてゆく
○　岡山市　立岡房野

かの君と心おきなく語らひし堤に立ちぬ五つ年ののち
○　三島　村瀬常月

唯一人渡る大橋月冴えて死人の如く河原の白き
○　兵庫　阿山とし子

わが指をのばさば足らむばかりにてなまめかしけれ君が小扇
○　三島　幽喜

暑ければ暑しと國を思ふ時母思ふ時湧くさびしさよ
○　みつ子

しばしだにかたらば心ゆくべきをくるしく人目つゝむわが戀
○　京都　三宅壽賀子

わが胸にわだかまりたるこの謎をとくべき人は誰にかあらむ
○　常陸　初澤さく子

蟲はみし葡萄の樹かや日にまして莖より葉よりしほるゝわれは
○　京城　中尾艶子

處女てふ小ひさき誇りもつ人はどよめく街をうつむきて行く
○　陸中　小笠原千代子

春雨に苔は春みて我庭の燈籠淡し夕暮の窓
○　京都市　町田てる子

蟬の聲降るごと聞ゆ下加茂や大樹の蔭に君とかたれば
○　名古屋　逼子

吾死ぬとつくづく思ひ淚しぬ人と人とが分れ居るころ
○　福島　白百合

五月雨のみどりの中のかきつばたかざさして見る君さらによし
○　大阪　波花子

君とふたりゆくにいとよし小松原磯の砂路に月てる夜など
○　熊本　金子苺子

美くしき高き心とよそながらたゞほめあへるさびしきふたり

○　廣島市　田坂芳溪子

煙突の煤煙かなしゆく春の都の空を墨染にして

○　あづま菊

我が涙小野のゆふべの雨となり若草ぬらし春ともなりぬ

○　臺北　梢子

春の夜は都の君のいとこひしおぼろ月夜に笛をふきつゝ

○　松江　しらはぎ

遠方にほとゝぎすなく川沿を君と歩みぬゆめの如くに

○　羽後　三浦ふみえ

おしろいの花はきすにもふるへたるわがわかき日の夢に似たれり

○　備中　篠原繁子

我思ひ君が思ひと相よりてみ空に上り緋の雲となる

○　愛知縣　佐藤華影

云ひ知らぬ美くしかりし赤き花そののち彼れを毒草と聞く

○　伯耆　足立春子

我一人家に殘してゆかんとずその御心は鬼にまされり

○　新潟市　吉田ひな子

おん君は戀てふことをいと輕く宣ふ故にさびしうなりぬ

○　福岡　建部巨久子

思ふこと十のひとつも口にせぬよわき女をあはれとおもふ

○　三重　菫の花

物つくる神にてあらばこのおもひ花ともなして君におくらむ

○　札幌　由喜子

あかしやの根元によりて物思ふくろ髪の子は美くしきかな

○　遠江　富永雪子

黄昏の名古屋の街を君と我逃ぐるが如くすごくとこし

○　千葉縣　岡部もと子

美しう花にふりたるしら露もよき秋の野の朝ぼらけかな

○　小樽　矢木りつ

君病みて死なんときかば我もまた切りて捨てまし千筋の髮も

○　丹後　壺内文子

蛇の肉食みし男とさゝやきぬその夜の友の言葉忘れず

○　京都市　紅狂女

水涸れし河原に咲ける月見草われに似たるが悲しかりける

○　府下　佐藤みつ

我が胸のすべてを君に語らひて泣かむと思ふ少女となりぬ

○　會津　靜香

目のあたり君がことをば忘れむと云ふ人ながら胸のとゞろく

○　信濃　下枝よし子

悲しみをたれにかたらふ人もなくなげくは母のおくつきにのみ

○　佐渡　美穗子

長き袖風にゆられて夕すゞみする君見れば波の立つ胸

○　丹波　隅田れい子

我が心獣となりぬ恐ろしき君をほりするほゝゑみを見よ

○　秋田　愛子

我が胸は青き憂ひにとらはれて幾夜泣きけむこの初夏に

○　飛驒　眞砂子

熱やみし彼の苦しさにくらぶべき言葉をわれはきけるものかな

○　能登　柳周子

戀と云ふ眞の心問はれけりまだはづかしき十九のわれに

○　伊知子

君と我肩をならべて思ふこと語り合ひつゝ夕となりぬ

○　失名

みせばやな都の友にこのあさげ淺みどりなる門田のさまを

○　新潟縣　齋川幸子

わがこゝろひでりののちの夏菊の露得し如き喜びにゐぬ

○　神戸市　清水みどり

森いでて八月雲の空ながめ高きこゝろをおぼゆるわれに

○　大阪　波那子

かの時になぞの樣にものたまひし君が一言忘れかねつも

○　豐後　安倍白雨子

あたゝかう胸に血汐のめぐる夜は鏡にむかひものをこそ思へ　神田　よし子

○

雨すぎし小川のほとり清うして螢追ふ子の聲の聞ゆる　徳島縣　鈴木すみ子

○

ことごとにものゝあはれを覺ゆてふ二十となりぬ阿波の少女は　備後　近藤たつ子

○

いさゝ川渡る翁の杖とめて銀の波見る涼しさよ　本郷區　夢見る花

○

星見れば君は云ひけり後の世は二ツならびて生れてましと　羽前　野口菊美

○

黒髪のくしき力は魔の國へはせゆく君をつなぎとめずや　豐後　吉良靜子

○

思ふこと多きを悔いて泣く事もしばしばなりき二十こす年　志美津　貞子

○

ふるさとの夕の森の靜かなる中にしらしら煙溶けゆく　熊本縣　堀川千代子

○

夕されば池のほとりにさまよひてつれなき君を思ふくせかな　札幌　幸坂隆子

○

そばの花遠くつゞける畑の道美しき人傘さしてきぬ　下谷　田代房尾子

○

白き星三つ四つ光りきざはしにほとゝぎすきく山の寺かな　靜岡縣　蔚賀

○

夕立のすぎたるあとにうなだれてたゞ一つ立つひなげしあはれ　下谷　林久榮子

○

病める子は花の面影色あせぬ黒髪のみが美くしくして　岐阜縣　日下部咲子

○

少女われおもひし如き花あらぬ青葉のみなる森になげきぬ　伊豆　土谷すゞ子

○

夏の月欄干によりうつむきて淋しう笑める君を照らしぬ　兵庫　ろの人

○

水夫ら皆歌ひあひつゝ船と船あひだ遠のき日のくれてゆく　美濃　葛の葉

○

われいまだ戀の涙はながさねど其味はひはよく知りてあり　兵庫　ちぐさ

○

我戀ふと書きし文をば見つむれば何とも知らずいきどほろしく　茨城縣　越ケ谷　秋水子

○

功名の心にかられ若き日に戀せざりしを口惜しと思ふ　淡路　加藤菊子

○

戀の子は二人ねむれり悲しみに終るがさとく恐れながらに　霞子

○

我が息は火焔となりぬ今こゝにくる人みなを燒きつくすべく　三島　遠山雪子

○

日記くれば五月雨暗き夏の日の午後の三時に泣くとあるかな　丹波　田中まし水

○

朝な朝な君のふむとしきける野かさきて捨ててきそのかみの文　奈良縣　中富よしみ

○

終列車比丘尼が語る怪談に笠置もすぎぬ五月雨のふる　大阪　松山花枝

○

暖かき戀より醒めて病めるころ心細くも五月雨の降る　わくら葉

○

たとふれば椰子の實かめる黒人が其くちびるの色か吾が戀　深川　みか月

○

くろき蝶あださゐの花したひきぬ夏の夕はものうとましき　屋根の草

○

君思ひよきつばくらの巣つくるをほゝゑみて見る朝のわれかな　福井　片山里

○

人は皆かへりて君と吾ればかり離きゝて居ぬふと驚きぬ　靜岡縣　長野まつ子

○

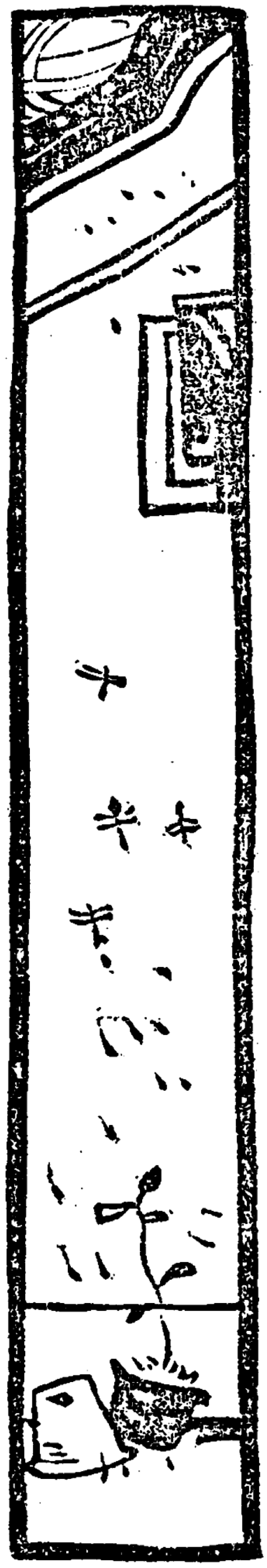
初夏やみどりに暗き谷かげに白百合の花人の如立つ　久留米　野瀬冬子

○

比頃はとふ人もなし音づれも絶えてさびしき五月雨のふる　岩代　木下春子

いと青き池に黄色の花さきぬ君と逢ひける日の數ほども
○　能登　攝田清枝子
梅の實は夕日に照りて玉のごと若葉に光る君が家かな
○　大阪　橋本久惠
連れ立ちしかの夜の月は上の方いさゝか缺けておはしたるかな
○　備前　落月子
琴の音の遠方にして夏木たつ廊を行く人のけはいす
○　草子
ゆら〱と白き花ちり水の輪の我面影をふと〱だきぬる
○　栃木縣　丸山房子
世に惡き男なりしが新妻の身まかりてよりやゝおとろへぬ
○　岡山　曙子
くり返し〱見つ君が文少なからざる涙ながして
○　しば　梅村喚子
白絣ふとしもわれの目に入りてみちの小石をかぞへつゝゆく
○　丹波　小草
夕立に洗ひたるごと新月の顔のをかしさそよ風のして
○　德島市　升田福子
うらまちと表通りを同じ時夜番の人が打つ太鼓かな
○　大阪市　美矢つぎ子
こゝろよくわが住むくにか大空にひとつかゞやく宵の明星
○　熊本縣　金子かたえ
かの君とあはむ一夜のさまざまのはかりごとなどひとり思へる
○　常陸　田村初子
かばかりの事になやめる君ならじとしもよそなる友の語らく
○　札幌　中原登美
あな淋しはてなき森を只獨通ふ心地す歌を讀めども
○　麻布　伊藤みき
涙よりはなるゝ事の能はざるあはれ悲しく生れたる人
○　松山　都喜子
わが胸に電光の如きらめきぬ君の面影その夜の館
○　備前　佐久間綠女
かげうすき片破月を横ぎりてほとゝぎす啼く西の空かな
○　京都市　要司村福子
つく〱と世のつめたさを恨むなる親なき人も人をし戀ふる
○　藤浪
鈴のごとふさふさなれる唐ぐみの紅きをふくむ妹の顔
○　千鳥子
月出でぬ須磨の夕の汀ゆく少女二人を淸う照して
○　廣島　後藤壽美枝
君ませる遠き都の夏いかにかくとしとひぬ唯それはかり
○　東京市　佐藤いつ子
月の夜を君ある家に訪ねきて垣根づたひに芥子の花ふむ
○　信濃　紅百合子
ひなげしの音なく落つる寂しみを切に思ひぬ二十二にして
○　茨城　川和田初子
赤き日の黄色き土を照らすとき庭の空地に緋葵咲く
○　伊勢　田中みね子
しろがねの笛吹きすさむ彼の君に戀ふる少女は琴いだきつゝ
○　信濃　淺田千代子
惜きまでこひしき君が笑む時の髭をおもひ涙ながしぬ
○　越後　波奈子
蛙なく水のほとりを唯一人夢心地して君があと追ふ
○　松江　白菊子
嬉しさに夕の空を仰ぎ見て月の淸きに歌思ふわれ
○　備中　小見山春子
くちなしの花のにほひをかぎながら待ち參らせん君が消息
○　宮城　沼倉馥子
青葉陰草のむしろにやすらひて田のくさ取りの歌聞く夕
○　信州　ひなげし女
つゝましう髮を分けたるなで肩の都の君を見るをよろこぶ
○　麻布　草雲雀

積み上げしほこりの塚もなげうたむ斯くとし言ひて涙する姉
○　能登　近江加能惠
ゆるしねと三度交してひたすらになげく心は神も知らなく
○　大阪市　植村艶子
野を過ぎて橋を渡りて町に行く三年の前の少女恋よ
○　會津　白井美江
さながらに白布のごと登り立つ夕煙こそかなしかりけれ
○　因幡　野　英子
ふる里の小雨の夕若菜賣る少女の聲のうらなつかしき
○　德島縣　紫
待つ人に心奪はれある一日なでしこもうし摘もつまず
○　足利　君子
戀人の來まさむ道は紫にかすみたなびきすみれ花さく
○　和泉　金田夏蝶
うはべのみ少し冷たくさからひし昨日の心悲しむ日記に
○　伯耆　新田文子
なき母をしのびて泣くと暇き戀に泣けるといづれ美し
○　越後　枯尾ばな
夏の宵わが知らぬ子をひた戀ひし昔をかたる人の憎くかり
○　西多摩　三ケ島葭子
今われの泣くより更につらかりし涙ながせし君ときくかな
○　長岡市　秋月すゞ子
歌もみな燒きて淋びしくなりにけり秋の木の葉の落ち果てし如
○　よう子
祭の日よき衣着けし子等を見てわれにもほしと思ひし少女
○　千葉縣　西郡光
夜半の雨戀にやつれし女きて語らふ樣にふりしきるかな
○　後志　溪子
去りし夏逝きにし姉の歌見つゝなほ書そふる七夕のうた
○　牛込　流水女
寂しさに君がみ名呼び戀しさに君がみ姿かく人はわれ
○　德島　あをなみ
十六の少女子なれば盲ひし目を掩ひて泣きぬ青葉の森に
○　下谷　谷口桂子
けだものゝ如き君故火のごとき紅き舌もて詐りをいふ
○　遠江　川瀬宮子
はなやかにともし火並ぶ下京や朧ろ月夜に六條を行く
○　根室　富美子
病める身はまた思ひでの樣々に悲しかりけり春雨の宵
○　常州　ふたば
桑の實に浴衣の袖を黒うして妹かへりきぬ月のぼる時
○　美濃　酒井蝶子
何故か二十歳の上を越しながら母とし云へば涙ぐむ人
○　陸前　琴子
鉛色の雲立つ夕胸抱き少女子なれば咽ひくゝ泣く
○　渡島　田山きよ子
風流男は笛など吹きてまたも來ぬ少女の我のもの思ふべく
○　兵庫　紅雀
朝顔の萎れし花は初戀に泣ける少女を見る心地する
○　上總　鶴岡一二三
けふも行く君とつれたちふるさとの鹽やく濱の露草の道
○　下谷　舟葉女
御姿を見ぬことのなし初夏のあはれみじかき夜の夢にも
○　岩代　大竹ちきの
夕ぐれに采り戸開けてたゝずめば野に誘ふごと風袖を吹く
○　京都　目黒須美禮
五月雨の庭のあやめのいろめでてわが梳く髪のかざしに給ふ
○　備前　板崎藤花
夕顔も咲きてはかなき花なれど物思ふ子はなほいとからし
○　備中　山のをんな
我胸はかの重盛がためらひしおもひのごとき苦しみに泣く



日記

横瀬夜雨選

○針（天）

夕ほし

雨に煙る南部様の明屋敷へ、我ともなく眼をやる。次第々々に茫として、果てはオペラグラスを逆さに見るやう、霞の森は遠く、小さくはつきり、みえて來る。と、わけもなく顔がほてつて、緩んだ全身の血が一時に張りつめる、わなゝく胸よ、なつかしき思。

おもはず突伏した。「あゝ痛つ、いた……」「どうしたの？」母様は落ちつき拂つて新聞の眼をこなたへ向けられる。「イゝエどうも……」とは云つたものゝ、浴衣の衿へ刺して置いた待ち針が、左の乳房へ刺さつたのだ、引き裂いた手紙の反古の罫紙を通して、胸落ちへよつた所が赤く……ま白い肌着はにじんでゐた。「だからいつも抜いたらすぐ針さしへやつてお置きといふのに、危いのは分り切つてるぢやないか、針を粗末にすると、死んでから針の山へ上るといひますよ」。

針山へも上らう、針山へも上らう、死なゝい内に火の山へ上つて終ふかも知れないと、言はうとしてまた口を噤む、可なり刺さつたのか、後がしくしく痛んでならない。「母様、まだ何だか針の先が殘つてゐるやうな氣がいたしますのよ」と、右の手を抱へるやうに當てた。母様は不安の眉をよせられる。「何ともないでせうわね」と云ひつゝ縫ひさしの縞モスリンをわきへよせる刹那、觸つた肌着のその所が、ヒヤリとする。私は……私は命を奪れるのかと驚いた。母様は、それ許のことを、と仰やるけれど……綠葉に咽ぶ雨の音をまのあたり聞くにえ堪へずはたと障子を閉めた。そら豆！そら豆！そら豆はようござんすか、窓の下をぬれ聲出して呼び歩く。柔かい皮の青々した蠶豆も、もう赤くなつたら、赤くなつた蠶豆は私きらひ！何となく四十女を見るやうに、嫌な氣持がして……。

圖書館位へ行くのにきれいにお化粧するから、そと膝を突ついて母には聞えぬやうに「誰に見せるの」ときくと、「あなたに見せる爲なのよ」とにつこりする。「また針を衿へさす、あぶなくてよれない」「よくつて

ま、鐵條網だわ！」小說を書くつもりでこんな腹案を立てゝゐたら、針だけは夕ほしさんに先鞭をつけられてしまつた。

○ある日（地）

牛込　平塚白百合

日まはりがまた二寸ものびた。此頃が一番丈の伸びる生氣の盛な時期なんだらう。妹なんかも十七といふせいかズル〳〵と飴を引のばすやうにのびて私より五分も高い。二人揃ふ時は妹は千代田草履で私は香取屋の新形の下駄。

如露に水を汲んで花壇の花から葉へと細い水線を走らせると、青い音がして水が初めは玉に結ばつてだんだん綠が葉面を流れる。

朝顏はまだ蕾ばつかり。あんまりこり過ぎた獅子咲や牡丹咲より私は只一輪水色の極平凡な花がほんのり露の朝咲いたのが好き。

その頃は唐辛子賣の引しまつた江戸つ子的の賣聲がよく調和する。

朝もいゝが都會の夏は夕ぐれがいゝ。

藝妓町の一區劃を通ると湯上りの美しい襟元を大模樣の浴衣からスィとぬいて、紅をぬらない口にほうづきをならしながら塗柄の絹うちわをゆるくつかつて。遠くから蟲うりのふるへつきたいやうな聲がする。

私はこんな時が一番すき。避暑地はまた格別だけれど、こんな事を思つてゐるうちにもうお父樣のお出掛。玄關に皆ズラリつと並んでご挨拶を申し上げると、ゴム輪の車が音もなくすべつて、要の丸形にかつた立木にパナナの帽子がかくれる。葉卷の細い烟が白絹絲を亂したやうにもや〳〵して消えてしまつた。

空をあふぐと心地よい紺色の深い空。そろ〳〵伊香保の夏がこひしくなつた。

都會の人、都會の文。こゝまであくが拔けてくればも一息だ、けれど輕々に筆を下して、若き女の情緒を織り入るゝことを忘れては、いつまでたつたつて行きづまりになつてゐよう、御注意遊ばせ。

○火曜日（人）

神戸　綠髮子

今朝始めて裏の朝顏が一つ咲いた、同じ日に植ゑたのに表のは中々咲きさうもない、然し裏のよりはずつと葉が茂つて外を通る人の足が見える塀の節穴を隱して仕舞ふた。珍らしくMさんが誘つて下すつた、畑道を二人ブラ〳〵行く、常よりも早いので誰も通る人はないからMさんに詩を歌うてもらふ、今日は學校にいつても無性に氣が浮いて騷ぐもんだから口惡の花さん「おや貴女病船はもう出帆したの」つてそりやあ昨日は少々工合が惡かつたから靜かだつたんですもの仕方がないわ、三時間目の國語の時間に先生の御出陣が約十五分遲れた、今日は時間が何ですから出ませんと云つたけど無理に連れだされる。無しやくしや紛れに色

んな質問をして少々テーを困らして意氣揚々と引き上げる、夜、二階で讀書してると兄さんが來て「お前は讀書の人で創作の人じやないんだなそんな奴は大嫌だ」つて怒つたけれど知らん顔して本を机の上にふせた。

ふと窓から頸を出す、漂泊者が數多漂うてゐるあれを見ると何ともいへぬ淋しさに泣く、一緒になつたかと思ふと又散りぢりになる、私には彼等が何をかたつてるのか聞く事が出來ない、あゝ自分も彼の樣になつて夢に見た何處かの原を漂ふたい。

バツトよバツトよ私はおまへ等の爲めに涙の泉のかれる迄泣いてやるよ、と只一言。

窓から漂泊者を見る一段、新



をどり　　松江清き花

しくかなしく人の胸に入りて忘られぬ情緒をそゝのかす、南歐のふるき都の夜ふけをおもはせる文だ。惜いかな下手だ「くびを出すと漂泊者がゐる」とだけでは、どこに何があるといふのかわからない。外には人家があるのか、木があるのか、夜が歩いてゐるのか、一向たわいが無いぢやないか。

落し水

夜雨

△說教の歸りに名新社の店へよる、電話がかゝると七重さんすぐ立つ、評判の應對ぶり、生きたやうな、夜雨先生に見せたいなあ。(蔦)

なぜですか。七重さんがプリンセス、アレキサンドラ其處退けといふ絕世の君ならば見たうはない。美人には當分面會謝絕也。

△無期徒計は何時なの。死時に一秒前よ。違ふわ

苦時で留つてるわ。あなたも違つてよ、慘時過ぢやなくて。(と)

そんな一週忌も前の死んだしやれなどほつとけい、下らない。註に曰く、一週忌は一世紀と聞えようけれど、ほつとけは、ほつ時計にも、佛にも通ずる。わかるかい。

△佐渡の父母が、お前だちの新世帶を窓から覗いて見たいと言つてるが(錦)

見られたら、お二人でたべてる福豆などとり上げられてしまはう、ろくろ首は御めんなさいつて仰しやい。

△醉茗先生がお寄り下すつた、四國へ行く吉田紫花をたづねるとおつしやつて、机の前へ堂とお坐り遊ばす。私はなぜか恥しくて。(吉備の子)

醉茗は蒲柳の質、人の家へよつて堂とお座り遊ばし得る柄ではない、尤も夢だから吉備の中山は越えたらうけれど、鳴門を越えることだけは一生のうちに出來さうもない。

△學校で卒倒して下妻から叔母に護られて歸つて、それなり弟はねた、枕元には藤村詩集と花守が看護してゐる、心地よい時には筆をとつて、自分の薄命をなげく詩を作つては姉を泣かせるのだ。(隆)

下妻中學校ではこの前も、かけ足をやる中途心臟麻痺で卽死した生徒があつた、弱い人に體操はまつたく無理だ、さて女の方にはどうあらう。

△過にし春の大運動會を想ふ、奏するピアノに合しつつ、さす手ひく手のあざやかさ、春の胡蝶のまふが如き、太平洋の怒濤の、岩に崩れてかへるが如き(緋桃)

前には體操中たふれてうなつてる中學生があるのに、これはまたどうした事ぞ、蝶の如きダンスはまたよい、「踏十字に綾どつて長刀小わきにかいこんだ」姫ごぜの怒濤ぶりには恐れ入る。

△大分腹が大きい、苦しいかといつても猫だ、ニヤンともいはずにフンゾリ反つてねる(つゆ)

フンゾリ反るといふは仰向になつて手足をウンとのばし大の字にねることである、あなたには出來ても猫には出來る筈がない。

△あなたの妹はラツキヨウをたべてよつて人にいはれたら大いに兄さんの人格に及ぼすだらうと思つて、口の臭みを消すために香水位默つてつけて出たつていゝぢやありませんか(笹)

それが何だいとあくたいをついてるのだ、のみならずこの孃さんは醫師へ行つては代診先生の鼻めどへ紙よりをつツこんだり、花壯の花を默つて持つてかへつたりしてゐる、數罪倶發のがるまじきはめにゐながら新刑法に問はれざるは、たゞそれ美人なるが故か。

△母さま「さつきは大分話したね、狸だのえんまだのやかんだのといつてたが、あれは何のことだい」とおつしやる(しか子)

「皆先生の雅號よ、お母さんは野暮だわ」

△兄さま夢二さんはどんな方と思つてゐて？「さうさ髮をわけてハイカラな若い夢二式の人「ホヽ、ぢや、冒險世界に何か書いてる皎島大浪さんは？「せの大きい髯の中に目ばかり光つてるてはい人さ」つていふ(松蟲)

夢二君の寫眞が出てからあちらこちらで、ガツカリして腹のへつた若い孃さんがいくらもある、皎島君の顏と顏だけスゲかへて貰へばよかつた、もつともさうするには大浪先生がいやだといふかも知れぬ。

△これ動いちやいかん。ホヽ、畫の上手な旦那樣はもつものぢやでざいませんわ。女子文壇原稿の材料に夫の

事をかく文章家を奥さんに持た旦那さまは一すの間もゆだんは出來んね。あれ又あんな。(ましを)

山法師と賽の目と鴨川の水とぢやないが、あてられまいと思つても思ふ通りにならないので僻際弱る。この、ち旦那樣のことを書かうとする方は、小說か美文かにものして水野、河井の二人に見せて下すたらいいでせう、二人は奥さん組だから、喜んでいたゞくだらうと思ふ。

△押入を明けようとするとたん、中にかくれた旦那さま、ばアあと大きな聲をして出なすつたので、どすんと尻餅をついた。何だい春までまだお歸りになりませんなんて人をだまして。それにしても今までこんなあつ苦しい中に、御苦勞さま、よくむし死をなさいませんでしたこと。(靜)

たゞ日ふ、よく根太がぬけませんでしたこと。"Home! Home! Sweet Home!"大屋から立退きをくはされずんば幸なり。

△やさしく言つてはおきないから、朝顔に水をやる時そりたての頭に如露の水をしゆうと少しかけてやつた、お小僧さんはねおきて「せつせうやな」つてころものはしでふいてゐた。(草)

『風流織法』の一念を思ひ出させる。びつくりした顏してせつせうやなあとおこつたところがよかつた。これを東京ぶつておんまりでせうとかひどいなとか書いてはちつとも京の寺らしくない。さるにてもこの人が髷をゆつてるのに驚いた自分は、こんなてんごうもするのに二度おどろいた。

△背廣の腕になよくとからむ蔦かつら、派出な浴衣に眞紅の帶のしめぶりは言はずと知れる傾城殿、男は、まあ鹽井さん、私に肱鐵を喰はされた逆襲だらうか?(伊奈少女)

鐘の凡人ばらが絡景がつてやつて來るのがうるさいともある。あとで尼さんが來て誰とかさんへせわずるといふのをはねつけて、喰へん娘御やといはれたとある。肱は鹽井さん一人だけでは喰はせ足りなんだと見える。

△冷たい手を握つて雪さんが死ねば、僕は武夫になつてしまふ、一生無妻で暮しますと男泣に泣いた義兄が、一年後の今日この頃は(久江)

不如歸中毒もくさりが入つては救ふことができない、僕は武夫になつてしまふとは本郷座以上の愁嘆だつたらうと察する。そんな芝居氣のある男だもの、事實は第二の三島子爵(川島武夫)たることはわかり切つてゐたものを。

醉茗兄　　病骨

霖雨やうやくたけなはならんとする夏六月、はじめわれ病みて、八男介亦病み、父ついで病み、祖母新たに病みて、闔家母の手をのみ恃めるころなり、七月十八日母と共に、病める祖母の枕頭を守りて夜を起き明しかたはら女子文壇の選評をなしをほせり。

久しく去らんことを思うて、なほ留まるべからざる地に留まる、わが任も亦悲しきかな。

むかしは、若き婦人の眞を認め、善を認め、美を認めて、惝怳のうちに未來を樂みしが、一切は「空」なり。わが性は矛盾に富みて多く前後に撞着すれど、いまだ心を賣らず、いまだ厚顔無恥ならず、師を罵る敢へ子たる能はず、夫をあざむく妻たるあたはず。彼等をしてその「純潔」を誇らしめよ、わが見たる人の子のうちにわが欺かれざる女ありや。わが欺かれざる文有りや。

「劍は不平の爲に寶匣を離る」

たゞ一句君に呈す、ねがはくは、冷腸熱腸のうちに含めるわが絶望のかなしみを嘲る勿れ。

七月十九日

○雨後

眞萩

ゆうべ一夜で急に青葉が繁つてしまつた、重り合つた楓の間から差入れた妾の手が幽靈の樣一寸美しい、バラ〳〵ッ、オヽ冷いでもおいしさうだ事、蜘蛛が嬉ぶだらうと籠に一パイ摘んだ、今日は暖いから壽堂の鮎の籠へ床替へして居たら、御早うと三雲の御用聞きが來る、御孃樣そんな食べ遅れなんか育ちやしせまむ、歸りに流して參りませう、いやよ此限りないんですもの、全體床替へするには上に網を載せて其上に這ひ上つたの許り選るのですそんな御箸でなんか一々挾んでは面倒くさくて仕樣がありませんと頻りに説明する、自然淘汰？オヽいや、之は御姫樣ですもの小ざかしい人間の干渉するものではないのよ、御氣にめした葉を御宜しい丈召し上れとハンケチで露をすつかり拭いて中へ入れると、皆首をもたげて忽よつて來る、スルスル〳〵端から丸い穴があく兎に角小僧さんは數へて呉たから何か買ませうねと、幸ひにして半切の端へ母樣バナヽ買つて頂戴なと書いて御客樣にみえない樣に上げて頂戴と花に頼む、三雲は承て歸つた、淋しい、御父樣早く御歸りになつて頂戴な、小枝は今神經痛で悩むで居ります、若し兄樣があつたら御一處に連れて：：：：とかいた、誰方も受取つて下さる方はないのだと思ふと、ボロ〳〵泪がこぼれる、上手な字で御手紙書いて上たらひよつと何處からか御便りがある樣の氣がして、急に机に向つてせつせと習ふ、御淸書かゝうと改るとさあ手がズキズキ痛む苛々してきゆつとかくと染む震へるどうしてから出來ないのだらうボン〳〵けしてしまふさて一帖なくなつたのを見ると急に自分と云ふ者が哀れになつて來て其悲しさの遣り場がないから又紙に當る墨痕淋漓と云へば好いが亂暴なかきなぐり劍客者の樣な字もし字に人格を與へて考へたら妾を見限つて出て行つてしまつたと云ふかも知れぬ「又こると惡いから御寢み」と母樣が仰しやる胸が一パイになつた。

鮎の籠へ二十四ばかりのかひこをやるのもいゝが、一つ一つ箸で挾むのはあまりに大時代で、どつちがお姫さまだか頗あやしいものだ。あてなき手紙を亡き父ぎみに書くあはれさはさることながら、字は暗に自負してる通りうまい。神よよき人に幸あれ。

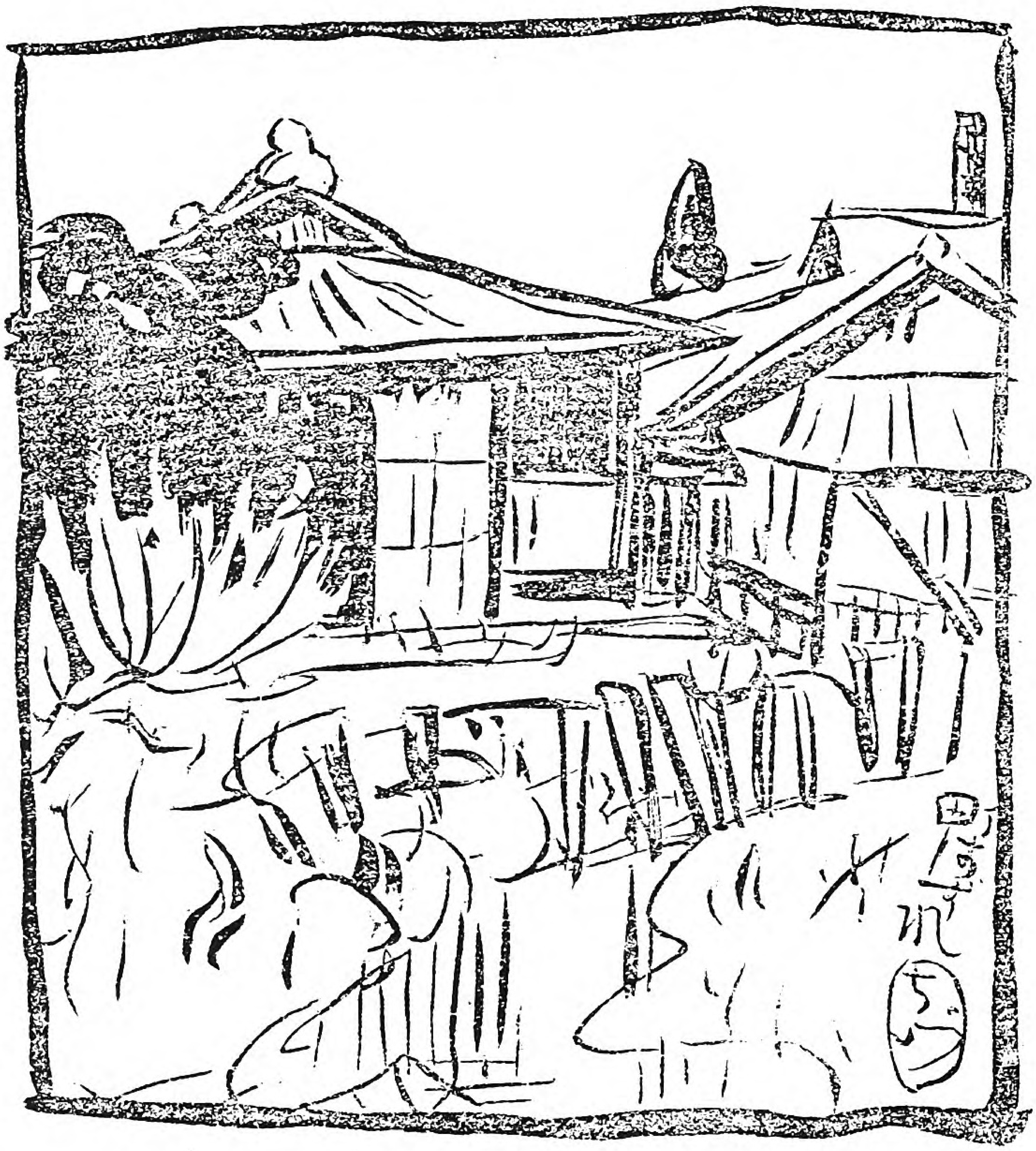
○雨の日

上野元代

ふと吾に歸つた時にはもう涙ぐんで居た、七日目で來た兄樣からの御返事を讀んで來た時心の奥底から、いひしらぬ悲しさと、嬉しい樣な侘しさとが止め度なく湧いて來て、兩眼は思はず潤つた、何して涙など出たらうと思ふが、それも事實であつて仕方がない。あゝ、兄樣は最早七ヶ月の月日を軍隊生活に御過ごし被成つた。今は候補者になつて居るとの事。特別教育を

受けて居ると、先日知らせがあつた。私は兄樣の性質が羨しい。

始めて田の麥刈をした時だつた。何處を見ても、白手拭を冠つた女の人は一人も居なかつた。機業地のせいでもあらうが、私と母樣計りだつた。何も職業に高下は無いのだと思つて居ても、何となく心細い樣な、情無い樣な氣がして、其の夜は一人で泣いたつけ。此樣な仕事は可厭だと思つて居ても、他家よりも後れると、口惜しくつてならない。「此の位の事が出來なくては仕方がない、少しは家の事情も考へて見るがいい」と父樣に言はれると、あゝ世の中は何でも、眞面目に着實に働いて居ればよいのだと、思ひ返へしては、又どんな事でもする氣になる。



野はづれ　名古屋　大久保靜子

未だ畑の草引も終ないし、蕎麥も刈らねばならないのだが、毎日〱、雨ばかり降つて居て中々形づかない、此の霖雨にはどこでも困らせられて居る。此の分で幾日も降り續けば、畑の蕎麥も、取り込んである麥も皆腐つて了ふ。けれども、雨が晴れると、何だか恐ろしい事でもせねばならない樣な氣がする、やつぱり降つて居る中が、私の爲にはいゝのかも知れない。私は自分の性質を恥ぢて泣いた。

あゝ、一日靜に泣いて見たい。悲しめるだけ悲しんで見たいと、私は思つた。日頃のあこがれ――悲みに對する憧憬が滿足される樣に……

上州の名物は長脇差が第一で、女房天下にからつ風ともいふ、蠶を飼

ふ機を織る、亭主先生は懐手でおられるかどうかは知らないが、この君の文によつても一斑はうかゞひ得られる、尊むべき勞動よ君何ぞ泣く。

○人　梅

愛知縣　佐分華影

二十七日曇、琴の師匠様からお萩を貰ふ、お年は七十有餘のオールドミス今も尚代理して敎へてらつしやる、隣りの間で聞いてると聲が若々しいから知らぬ人は若い人と思ふ、集まつて戴く可愛さうに雄さんは學校で今頃は冷たい辨當を、此團にはづれて、お萩のまどゐぢや氣がきかないわ無くなつて了つてから甘しかつたのねと名殘惜しさうに誰やらが、本家の上女中がきて靜浦「沼津に近くの」の話が出た時に「夏書生さんが多く被來るが奇麗な顔して見えますよ朝起ると……學校の學生は水白粉を塗つて湯には入ると磨き込みして居ますでね……」と靜浦の人が話したと云つた白粉男に白粉甚麼顔して澄して居るのか知ら、女の目を引く爲？何だかなぞの様で、本を讀んでも解りやすくない、床についてからも、だらく書生、俳優書生、しやれ書生と幾度かのゝしつた。

七月二日曇、髪結ひの都合で母様の切下げを結ぶ房房とした黒髪二十一で長い六尺の髪を切られた、悲しき哉罪深き私……後で束髪に結ぶ紛失して居た朱の櫛が出て來たのを思ひ出してもう一度見る一寸頭へ束髪ぢや詰らない息をかけて紙に包んで藏ふ夜椽の柱によつて空を見る星一つ見せない様に神秘な空をもゆるさない様に十重八重に包んで居る雲が憎らしい。

花なる人の、戀しとて、月に泣いたは、夢なるものたて綻びし、ころも手に、涙の痕の、しるくともしみ／＼と其月さへ、日さへ、あゝ大寶か水戸か知らないけども私と同じ死ぬまで？病に愁ふる詩人がなつかしい悲しい、指の爪に四ツも五ツも福星があるのに私は何故かういぢけたか、亡き兄様よ若い兄様父様と星の中に被在るわキットあゝ二十年の兄様が欲しい、泪が後から／＼、何故二人の中の一人へ身がはりしなかつたか、かくなる身を、私は泪の子になりたくないけど心で泣いてもまだ目で泣かなければ人は知らぬ。暗い風、葉ずれの音、夜は寂しい。

ただ生きよ。

○雨の日

仙臺　琴子

七月一日、何時迄で此の雨が降るつもりだらう、頭の底から腐りさうだと云ふのに――何だか黒い夢の中に浸つて居る様に窓へ腰掛けて默つて外の方を眺めて居る。太古からの續きぢやないか知ら？庭の水溜りに波紋が追かけ／＼出來る、それをかぞへて心が靜つたと思つたら、地をかすめて燕がスーと人を馬鹿にするやうに通つた。あれあの死んだ様な痩犬がノソリ／＼と歩くよ、もつと早く歩けばいゝに、癪に觸る、頭がズキン／＼痛む、體中がカツたるい。

今度は兄さんが昇つて來た様た。來なくもいゝに。

「琴、脚氣にはな乳だの卵はいけないんだつて。麥飯に糠が一番いゝつ

てさ、なあ晩から參だ〳〵」と頭の上で云ふ。
「脚氣にはねあなた御灸がほんによろしいんで御座んすの……」
「アハヽヽ、寥ちやん如何です」又あんな事を云ふ。參だの糠だの灸だのと、よく腹の立つ事ばかり謂ふ人達だ、わけもなく涙が零れる。あの笑つたのは臥城だ、よく御茶を好く人、いつ筆を執るんだらう、人の事でも氣がもめる、文學者で御座いと銘打つても傑作も出さずに終るならつまらないものさ。
何だつて向ふの下宿屋から蒼い顔を出すんだらう、勉强もせずに人の顔ばかりのぞいて居る、口惜しい。あゝ今日は咀はれた日！胸のあたりがむづ痒い。
何だつてあなたはさうぶりぶりしてるのだらう。

○七月七日

小山　櫻子

朝誰も起きない中にと柴折戸を開けて外へ出た、未だ日は出ない、文月の風は涼しう頰にあたる、青草に踏み所もない小道を芋畑へ急ぐ、ふと足が冷たいので氣が付いて見ると朱色の鼻緒はべつたり眞白な足にへばり着いて水晶の樣な玉が紅さした甲に光つて居る、まあ美しいと思はず呼んだ、と少女が夢の樣に立つて居る、絞り模樣の長い袂を抱いて何物をかあこがれて止まないと云ふ樣な目はぢつとコバルトの空を見入つて居る、長い眉、細い肩、どうしても知つてる女だ、私はよく知つて居る朱色の鼻緒も白い足も、あゝじれつたい、誰れだ〳〵、少女の紅い唇はほころびて齒がもれた、とたんにギヽツ……とはねつるべの音がする、はつと吾に返へると誰れも居ない、あゝさうだ其れは私の姿見の女だつた。
私はいつの間にか芋畑へ來て居る、兄樣の御土產の赤間が關の硯を受けて芋の葉をゆするとシルバー色の珠がほろりと落ちる、淨明寺の鐘樓は眠さうに老松の影からのぞいて居る。
家歸るともう御飯、あわてゝすまして人の居ない間にと筆を取つた、勿論墨はすらずに、私は未だ黒々と自分の思ふ其れを書く勇氣はない、書いてしまつてあたり見廻した、誰れも居ない、でも私の胸は動悸が高い、私はどうしてかう臆病なんだらう。
姉樣が被來つた、綱をつくり始めなさる、弟はこよりを通す、妹は笹に結ひつける、私始終安からぬ心を抱いて歌を書く、どうも手がふるふ、まゝよ五百枚半夢中でなすりとほした、筆を置くと丁度八時、「皆樣御精が出ますね」乳母が山桃を御盆に乘せて持つて來た。
芋畠で見かけた幽靈は自分の姿見の女だつたとあるので狐につまれた感がする、芋畑に鏡が立つてあつたのなら勘忍するが、それとも幻視か知らん。

○七月二日の記

信州　ひなげし女

待ち焦れて居た女子文壇が、今日の午後に着いた、坊の寢て居る中と急いで短文和歌俳句散文と、投書家の名前だけ目を通した。
又、沒書。それにしても、皆樣のゝは何故して、掲載されるのでしよう。忙しい時間を盜手間して、夜の二三時頃迄、一生懸命に腦を絞り出した匕句、矢張、妾は修養がたりないのだワ。などつい愚痴が出た。
坊は寢て居るし、良人の歸りは四時頃、逸も來ない中にと、居間の机に向て三行許り、樣々の思ひでを書た「あの奥樣、八百屋が參りました」「さうかい……あのネ里芋にネ蓮根、……マ妾が行くから好いよ」八百屋が歸いつたので、急いで十字許り。
「ワーッ」
「オヽヽ好い子だ、好い子だ。坊やは好い子だ寢ンネシヨー」、惡夢にでも襲れたのだらう、又スヤ〳〵と寢入た。マア好かツたと思ふと、
「坊は如何したエ、寢て居るかエ、ナーニネ、今ネ、お寺參りでも仕樣かと思つてネ」
「エ、アノー今好く寢んで居ます」
「ア、さうかい、わしは又、連て居かうかと思てネ、マ、それじや行つてくるよ」
「エ有難ございます、ではお早くお返り遊ばせ」

阿母様を送り申した。机に寄り掛つた、けれども今迄の思想が、皆な何處かへ散て了た。目を閉ぢて靜に考へて居ると、
「あの奥様魚屋が參りました。それから戸田様がお見えに成つて、一寸お目に掛り……」
「ア、さうかい、戸田様にお茶を出してお呉れ」
魚屋に三品許り注文して、應接間へ這入た。
戸田様は、三十分許りして、お返りに成つた。次手に、昨日の漬物の水如減を見て來た。斯度こそは、と筆を持つか持たぬに、それらしき、人の車の音、しまつた思ふ間も無く、
「お歸り！」
おしめを洗ふだけでもウンザリしませう、追つかけ突つかけ、八百屋魚屋に來られては焦心の程お察し申します。あなたの村には山田邦子さんの姉さんがかたづいて居られます、そのお噂なりとかいて見せて下さい。

○卒業後のある日

信濃　蘭　子

日曜だから兄様に手紙書かう。
レターペーパーひろげて「……兄様ロンドンシーズンに入りましたのね、ボートレースが盛んでせう。
もう諸方の學校が休暇になつて昨日あたり柏葉の徽章がぽつ〳〵見え初めました私これ見ると五年前小諸の停車場で兄様の御歸省まつてゐた時のことが思ひ出されます、兄様お變りないこと?……」店から清が、××屋の孃さんがこられたと知らせて來る。
かまはずペンを走らせて居ると母様が先に立てはいつていらして「何ですねきいさんがお出でなのに」つて叱られた、あわてゝ机おしかたづけてKさんと顔見合せて思はずにつこり。
Kさん今日は桃われにして、いつ見ても美しい、表情の乏しいお眼はしかたがないとして田舎にはこんな人少ないと思ふ。
御自分のお召を幾枚縫つて母様のを何枚、誰様のをいくつと數へていらつしやる、お花のお始め、お茶も大そう御上達遊ばしたつて、私は卒業後何をしたか。
あれも學びたい、之も習ひたいと氣ばかりあせつて裁縫はいや〳〵ながらだし、究屈でいやだと、お茶もやめてしまつたし、語學なんか獨りで辭書をひつくり返してゐるばかり、急に考へ付いて机に向つて筆をとり始めると夢中になつて書いて見たり、琴も先月柱をはづしたきり、何も望まず、女らしく仕事しておらつしやるKさんは着々成功?に近づいてゆく、私は敗けたのだ、二時頃Kさんが歸られた、お前けふは何をそんなにおこつてゐたんですつて母様あきれていらしつた、東の窓によつて重苦しく生ひ被さつた緑の八幡森を眺めてわけもなく涙がこぼれる。封書の表書して自分で出しにゆく、明日は船の出る日だと思つた。
明日は船の出る日だとある力あるべき掉尾の一句がわからない、横濱出帆の郵船に托して洋行中の人にやるのならだがロンドンシーズンに入りましたのね位では自分のやうな鈍根の人はあやまる外はない。

○お寺の宿

越後　曉　花

「何んでも野菜は採りたてが美味しうございますよ、私なんぞお寺ではお魚一つ頂かないけれど實際お魚よりおいしく頂きます事よ」とおふくろ様は眼を細くして云ふた、「眞實に、左樣で」と猶洗ひ續けた、「あなた、もう澤山、耳念さんや、お鍋の下をどんと燃やしてお呉れよ」ハッと返事した小僧さんは大急ぎで杉の葉を投げ込んでブー〳〵とふきつけた、白い煙がもや〳〵と立つてパチ〳〵と火はもえた、火棚につるした自然生が煙つたがつて居るだらう、お經はすんだし廣いお寺のうちは物靜かである、洗ひと上て終つたらお湯がぐら〳〵と沸え立つた、阿母樣は大急ぎて湯出て被在る、――せた〳〵とつまさき上りの胡摩畑を婆やさんは登つて來た、「ばアーやさん、お稼ぎね」と私は云ふた、「貴女方にお潮湯沸かして上げやうと思ふて、ひえ性の方にはお藥でございやすつて」とまだ太陽も出ないに小鼻へ細かい汗をひつたりかいて居た、兩肩の桶に滿々と汲まれた潮は、ザブーッと据風呂の中へうつされた、「まア、ほんとにすみませんね」「何んの、あんた」とまた大急ぎで汲みにいつた、あゝと私は思ひもよらぬ人の情けにホロリとした。胡摩の花は紅藤色に

咲き亂れて美しい、やがて花も實になつて了ふ、美しい姿は夢のやうである。

その(一)を捨て〻(二)を採る。この人も方言を避けてゐるので、切角の文が氣の拔けたビールのやうになつてる、地方の人は地方の人でありのまゝを書いて、うすつぺらな東京の連中に對抗すればいゝぢやないか。

○私の日記

とよ子

五千枚の掩袋を持つて、山の林檎畑に行く。暑い思して漸と番小屋に着くと若い叔父様は「ヤアよくよく」と優しく迎へて下さる。すぐ歸ると云つたけれど、暑いから、夕方まで遊んで行けと御仰つて歸さない。で私もその氣になつて入つて休む。

十五疊位一間ぐるり廻して四方五尺巾の椽側。御簾をかけてゐる何方を見ても只青い林檎樹ばかり行儀よく正列して美しい、絕えず涼風がスースーと入つて心地よい。お晝すぎ叔父様と果てないやうに廣い林檎畑をくまなく步いて見る。忠吉と隆やとが一生懸命。ふつくりした實に私の持て來た袋を掩せてゐる、叔父様もやるので私も手つだつた、ふと葉に小さい一匹の毛蟲が付いてゐるので私は飛んで小屋に戻つた。

つゞいて叔父様もお歸りになつて、曰く。

「あんな小さい蟲の何處が恐い、滑稽なやつだな。他家の林檎にはあんな蟲がずゞなりに付いて居るんだ」

と叱られる、だつて私蟲は厭だわ恐いですもの。

私歸ますと云つても、も少しお待ち忠吉に送らせてやるからつて……箱から持つて來てゐる本を有丈だとて廣げるそして私には冒險世界計り見せて御自分では「寄生木」、人の惡い、くやしかつたけれど負惜熱心に見てゐると急に空が曇つて大粒の雨がザアザアと降つてくる叔父様は大聲に「内に入れ休め」と山が裂けるやうに叫ぶ私は御簾を外して障子をはめてゐると隆やが火を起こす、忠吉は大急ぎで町の家まで走らした。

林檎並木より外に何物もない番小屋は寂しくをかしく心配であつた夜に入つてから雨は益々強くなる。

盜難はこんな晩に限ると番に馴れた隆やが呼燈に硝子の掩して所々に光らせた。時々廻つてみる。

誰も寢ずに夜があける(七月四日)

盜難はこんな晩に限るとあるが、どろ棒するにはこんな晩が一番いいといふのですか。なぜ方言そのまゝに書かないのですか、學校へ入らした方らしいから私ムスはいやあだとは仰しやるまいけど、聲の大きい伯父さんはも少しお待ちといふ風でもないと思ふ。

○寂寥

宮城馥子

七月二日。

茫然して嫌な日だ。庭の草取りする心算であつたが止めて机の前に座る。境の杉で雀が喧しい。

光村さんより御手紙頂いてもう十日、まだ返事も上げない、屹度怒つて居るだろうと思うて進まぬ乍ら筆を取る、けれどもなかなか此の返事は私にはひどくて書けない。彼の人の樣な地位も富も充分な身分なら華やかな緣談がいくらもあるので理想の夫は？等と吹聽してもよからうが私はゼロだ。で、下女でさへも角帽の風の好いのに憧れて本郷邊の下宿屋に住みたがるとか況や――と云へば大袈裟だけれども――多少は新時代の空氣にふれてる身、光明の赫々たる人と苦樂を共にし度いは限りないが御存じの如く落魄した今、加ふるに花ならば南瓜の花の如き私、望みを叶はして吳れる醉狂の士もありますまい、昔は昔、今は今、口惜しいけれど仕方がない、縱や山間の赤毛布でも精神の高尙なる人ならば一生を捧ぐる心、然して我が青春の不滿は子孫によりて滿たすつもりである、と云ふ樣な意味で書いては見たが急に嫌になつたのでビリビリと裂て了ふ。○○さんの御手紙を裂いてから以來やゝもすると手紙は裂き度くなる。我がともだちの上を思ふと、寂しくなる、泣き度くなる、あゝされど我は逆境の不運兒、到底順境の人の眞似は出來ないではないか――。

靜かな夜。手風琴でも彈いて見度い。

この人の使つてる半紙はひとのよりはずつと大きいので初から覺えてゐる、おまけに大きな字をなぐりつけてあるので、正直のところ十五か十六の田舍の方だと思つてた、豈はからんや(と霞子さんのまねをするのではないが)況んやには愍いちまつた。

○五月雨頃

うもれ木

六月十三日。早朝から夕立の樣に、バラ〳〵つと板廂をうつてけたゝましい雨が降るかと思ふと、すぐ止む。暫く經つと時雨の樣にしと〳〵と軒をめぐつては、庭の葉蘭にさゝやかな音を立てる。又止むといふ樣に終日神經的に五月雨が降る。飛沫を避けて細目に開けた障子近くで、昨日のしかけの小さい紅い被布を縫ふ一人で眞綿をひいて綿を入れたので全身汗びつしよりになつた。併し八ツ口や立衿が、しつくり合つてたので嬉しくて心は靜かであつた。夕暮雨の小止みの間を、秋ならでバラバラに破れた芭蕉葉の、ザラ〳〵と音する籬の下を、野川の岸へさまよふた。

湯浴みしてうるみを持つた櫛の跡鮮かな髮の、心の心まで冷い夕風が吹き入れて身も心もひきしまつた。

野川の流れに耳すましした岸の小草を踏みしだいて仰いだ空には、あし早き雨雲が何事をか計畫せんとする樣な勢を見せて、肥筑の連山がひとしく凝視せる中を、東の方蘇山の噴煙を指して走つた。

夕闇に迫られて家に入り、はゝき木の君の、まばら木の原を逍遥ひてを讀む。再、三度、四度………

庭の所緣をくゞりて螢が飛ぶ。此夕!遥かなる信濃の空は、雨か風か。はた美しき女詩人の胸に通ふ輝ける星の夜か。

六月十四日。すべりの惡くなつた雨戸を開けると庭は濁水にひたされて、栗の落花がバラリ〳〵と音する。今日もお裁縫。絕間なく降り續く大雨に、草も木も花も實も、野も山も手を叉いて、その自然の威嚇の前に、立つてるのが小氣味よい。日暮れて我心も亦暗くなつた、ア、何故?十二年前の今夜こそ、熱涙、辛酸の塊であつた母樣三十三年の御生涯の、最後の夢をお結びなすつた夜である。日頃は今の母樣を憚りてかくしなれた涙も、落ちた!落ちた!ア、愛弟が此うたゝ寢の夢にも……。

落ちた!落ちた!とある書きざまが、芝居でやる聞いたか坊主のせりふ、奴の尻ふり踊のうたのやうでいやだけれど。

○淋しき日

小石川　青木たか子

今朝も烏の聲に目をさました此頃每朝烏が騷ぐのねと云ふと文さんはほんとに私氣になるわ母樣の病氣が惡いんではないかと思つてと又悄れる、そんな事ある物ですかと云つたものゝ心の中は矢張淋しい、文さんは役所へ行かれる、私は單物を縫初めた斯うしてじつと座つて居ると何やかと思ひ出しては氣が沈んでしまふので、植木でも買つてきやうと思つて外へ出た、お盆が近いので何處の店も共同賣出しで賑はしい植木屋にも澤山に客がゐる、まづ目に付たのは花よりも美しい十六七の令孃である、荒い矢絣に燃立つ樣な緋の帶をやの字に結んで母樣らしい人と美しい花を指してはほゝ笑を交してゐる、人の目は皆此少女にそゝがれた愛の光を輝かして、私もじつとみつめたが何とはなしに自分を顧た、そして淋しくうら悲しくなつて何も買はずに歸つてしまつた。

夕飯をすましてから二階へ上つて暗いしづかな夜に立つて心ゆくまで思に耽つた、紅一點ぱつと彼方の黑雲の中より輝いた、何であらうと目をすゑてゐると、月、鏡の樣な月がしづ〳〵と上つてくる、と何處からともなく靜なオルガンの音が聞える其が恰ど月を仰へる夜の讚美の樣に、私もハモニカを取出して「さまよへるものよたちかへりて」オルガンに合して吹いた、いつもより音がさえて胸がすうとしてくる「こぼるる涙を」此處まできて胸が一ぱいになつてふけない、オルガンの音も絕えた、月は黑雲の中より逃れ出青い光を放つて美しく輝いてゐたが、又大きな黑雲がよせきて月の光を奪つてしまふと四邊は茫としてしまつた、と何か望みを失つた樣な暗やみに引込まれた樣な淋しい、淋しい感じがした自分の行路も此月の樣なのではないかと思はれて。

あたまごなしにケナシつけるとどうやら泣かれさうでおつかなくて

せうが無い、といつてこの文が惡い出來だといふのではない。

○額の字

西多摩　よし子

六月六日。五日目で少し日が照りはじめた。ジーと松蟲が後ろの林で鳴き出した。たつた二輪咲いてゐた四季咲ばらの花びらがのこらず落ちてうすいのが一層淡い白に近い色になつてそれでも萎えずにゐる。今日こそ從兄さんの所へ行かうと思つて麥畑の所々刈つてある道を人家をはづれて六丁筏流しも見ずに歩いた。庭まで來ると八重さつきが眞紅に咲いてゐるばかりで何となく淋しい、奥の方は戸が閉めてある。變だと思つて臺所へ入つて見ると誰もゐないで下駄一足見えない、暫くぽかんとしてゐたが一寸考へついたからすぐに出て裏の栗林をぬけて低い石垣を登つた、小さいお寺の様な先生の住宅位な家がある、表の椽へまはると仰向に寝てゐらした顔を――私は悚然とするほど痩せた――のをそつと向けて笑ひなされた。「御無沙汰致しました」と、いつたきり何ともいへずにゐるとふくさん(妻)が大急に洗つたといふやうな様子してネルの寝巻を干してゐたが、私の聲に氣がついてなほ急いで黄色な石鹸を持ちながら傍へくるや否や「あれからだめなのよ寝こんでしまはれて」と座りきらぬうちにいはれたのでなほ返事が出來ないで困つてゐると從兄さんが「おれはあの字が讀めないで、氣がかりでしかたがない」といふから三人がなげしを見る、誠といふ字が一つあるわきに○客金湘號として朱印が押してある小さな額「金湘號なんて朝鮮人の名のやうですね！」とふくさんがいふと「さうさなあ」と暫く考へてゐたが「わかつた韓の字のくづしたのだね！よつちやん！」といはれた。私も氣がついた所で「あゝさうですねさうです」といふとさも氣が輕くなつたやうな顔をなさる、と又眉をひそめて「息苦しいからあつちへいつ



夕のつとめ　　ひなげし

て二人でお話し」ふくさんについて次の間に入ると、「住みよい家ですよあんな家相ぃわるいぼろ家なんか大きくばかりあつて何もならない、一昨日皆引越したの」といつた、私にお茶を汲んで垣根の外の守の名を呼び去年生れた安雄さんにお乳をやるとてひろげたつぶ袷の襟の孺子がすつかり切れて、おくれ毛のちつともない髪も束髪がこけて、肥つてこそおるが暗い哀愁に襲はれておるふくさんの顏を見るに忍びなかつた。外にはほろ〳〵と柿の花がこぼれる音がして、栗の古木の長い青葉が悲しげな花房とともにさわ〳〵と搖れておた。

一時にめざましき進歩をする者がある一歩一歩地道に踏んで上達する者がある、山田邦子は最初の投稿から捨てられたことがなかつた、長曾我部菊子は幾度か沒書の憂き目を忍んで今日あるに至つた。此君もよく忍んだ、忍びがひありて漸く頭角を現はし來れるを祝す。

○惡戲

本所　しづ子

六日、何だか鬱陶しいねむたい日、何氣なく離れへ行くと障子の蔭でく す〳〵笑聲がする、おやとみるとお貞ちやん一生懸命になつて安樂椅子に心持ちよさそうに午睡しておる茂さんの顏へお皿の上にお團子が乘ておる繪を書いてる、私も目鏡とカイゼル髭を書くまあ立派になつた事、辰が呼びに來たので仕方がないをしい筆を置いてお座敷で叔母樣のお合手していたけど心はとうに離へ行ておて帶へあの大鈴をつければよかつたなぞと心こゝにあらざればお話がとんちんかになりかけた時椽側でお貞ちやんがおいで〳〵しておる相變らず落付かないと云はれ樣がかまやしない後は母樣にお讓りして急いで來てみると、團扇が柱から障子に渡したたすきや帶止の綱にぶらさがつておて茂さんの顏の上で動いておる、足の方の毛布を捲てみると親指につながつていて如露や帶にむすばつておる鈴やら何所に結ひてあるのだか十呂盤まで隱れておる、此な惡戲されるまでよく目が覺めなかつたと思て顏を見たらカイゼル髭の立派なお顏を横むきにして左の頰のお團子に蠅が止ておる、笑ふお貞ちやんを制して簾ごしに見ておてもなか〳〵目が覺めない、すると堅川の交番で二つぱんを打出したけど何所にも煙がみえないお貞ちやんいきなり義さんの耳元で火事だと大聲だすと驚ろいてとび起きるとたんに團扇で顏を打ち腰の方では、ヂラン〳〵ガタ〳〵、アハヽヽヽと笑ふやう何やら大騷ぎなので母樣も叔母樣も出ていらしやつたお茂さんをみてまああなたの顏はといつて大笑ひ、今まで氣付かなかつた茂さん顏がと云はれて急いで足の如露を引きずりながら、此んな惡戲して置きながら笑ふなんて失敬なつてプン〳〵して鏡みておる風がをかしくつて又アハヽヽヽオホヽヽヽと大笑ひ。私もう涙が出るやらお腹がいたいやらでくるしくつて……。

「頭ヲ尋ネ面ヲ摸チ、袖ニ入リ裳ヲ穿ツ、或ハ眉端ニ集リ、或ハ眼眶ニ沿フ、蠅ヤ蠅ヤ吾レ爾ヲ憎ム」。うるさいたら無い。

○Tさん、Oさん、Kさん

福井　片　山　里

六月二十七日、午前十一時頃ニ毛作のヂャガ芋を堀つてしまつて、柳橋の所まで來ると、鳥井崎の方から、令孃風の人が來る、誰れだらう、Sさんには丈が高すぎるしKさんではなし、と思つて段々近よつて見ると、知らぬ人であつたが、又見覺えのあるやうな氣もするが思ひ出せない、向ふの人も自分を見つめていらつしやつたが、すれ違はうとする時、おや！まあお久しう、と丁寧にお辭儀をなさつたので、自分も無意識にお辭儀を返して、五六間行き過ぎてからふり返つて見た、向ふの人もふり返つて見られたが、其時ふと、自分等と一級下だつたTさんだと、やつと思ひ出せた、よくもこんな姿をして居るものに、と何となうゆかしくなつて、又見返した。

午後、武生へ動物を見に行つたが、前に來たのよりは獅子が多いだけだが、非常な人氣で、毎日數千の觀客があるさうだ、自分が入つた時もあまりたくさんな人で、說明を聞くどころか見るのもやつとだつた、歸へりに紺屋へよつて染物をとつて來ると、師範の二部へはいつて、武生の小學校の先生をして居られる、Oさんと其お連らしい人に逢つたので、Oさんですか、と言を掛けやうとしたら、知らぬふりをして横を向いて

しまはれたので、耳たぶまで赤くなつたやうな氣がして、胸がつまつたやうになつた。

それから一町程來ると、お里がへりらしい供の者に大きな荷を負はせて來る人に逢つた、それが自分等と一級上だつたKさんだつた、そしてお向からCさんですのと御挨拶をなさつて、三十分程も學生時代の話をして分かれた。

胸のつかへは、いつのまにか下りてしまつた。

との君は交際家と見える、如才なく上下のクラスの人と折衝していらしたらしい樣子が見える。

○青葉日記

孤雲

六月二十七日　晴

朝早く起きた三時頃であらう裏へ出ると何とも言へない風がなま溫く頬をなでる向うの草叢でチヂと今にも消えさうな蟲の聲がするふとみ上げた空くろい雲にかくれて居た月が出た汲み上げた手水に弱い弱い光をなげたそれが風が吹く度にきらきらとくだかれるあんずの葉が茂つて居るあゝ自分はこのまゝ常世の國へ行きたいと思つた學窓からみた世の中は美しかつたすぎ去つた過去を懷ふと夢のやうである三年間苦しんだ女子師範今夏ながらなつかしい高師受驗も不成功に終つたあゝ自分はどこまでも運命の神の手に飜弄されて居るのかはかない空想が妄想になる長田野をこずと學校がみえるつとやぶかげから先生お早うと五つの可愛いあたまが下つた不平も煩悶もすつかり消えた生れて二十有年五十八名の母樣である。

二十八日　晴

嵐山によく似た庵戸山にほとゝぎすの聲がたえまなく聞えるカケタカカケタカ言つて居るがおしまひはホチヨンカケタカと上手にしかも氣取つて歌ふ○○樣のやうねととなりの專科の先生が○○樣の氣取つたスタイルを横目にそつとみて囁かれる其樣子の　笑しさ○○樣はことしの師範二部の卒業生であるコスメチツクで分けたあたまぴかぴか光つてゐるついさき頃までは眞面目な師範の窓に居りながらと思ふとつい可笑しくなつた、こどもは可愛ゆゑ一年と四年の合級であるから中々骨が折れる夕方母樣から手紙を戴いた例の問題であるあゝいつかは家庭の人とならねばならぬか、月の淸い夕である紫野の學舍なつかしい。

二十九日　雨

五月雨がしとしと降る靑葉の梢が美くしい小さい雨蛙が一ぴきとんで露の玉がはらはらと散つた今日の敎材四年は犬である三十七の可愛い口許に無邪氣な微笑みのうかぶのがみえるやうである二百有餘の健兒が降る五月雨にとぢこめられてせまい控所に遊んで居る籠の鳥のやうで可愛さうであるそとはいま植付でいそがしい空はまだまだ雨氣をふくんで居る颯と一しきり雨を横ざまに風が吹いて少女のはかまをふくらまして南天の白い花を散らしたそれが雨だれの水におくられて流れて行く今日擦筆畫をかいた下手なものであるけれども敎育史の中からロックをかいた兒童には分るまいが昔を忘れまいと正面のかべにはつたみだれ行く心の絲を溫顏玉の樣な君に勵まされて可憐な天使のまへに立つのであるあゝ此一瞬時！

この君も亦規定に背いて住所も姓名も書き添へてない、たゞ一くだりだけ欄外へかけばすむのに、何處の者とも知れぬ人のを選評するのは愚だ、とは思つたが、靑葉の匂ひ時鳥の聲、山城の京に遠き山國の人が目に浮ぶ。

○つゆの二日

越後　田中牧子

□月○日　漸く晴れたと思つたら又すぐ曇つて來た急いでお襁褓を取り込んだ。約三十餘枚のお襁褓は過半迄洗濯のまゝ。遂に火鉢にほす。

午後旦那樣からのお手紙。無事松本へお着きとの事何んと無く安心する。夜、小夜さん處からあんず梅貰ふ。お媼さんのたんと召上る事。そして昔話が始つて「若い時、なまのきうり、五六本も一時に食べたものだ」と仰言る。小夜さんのお母さんも此間ぐみの實を一升程召上つたとの事。田舍の女は男のやうだと思ふ。夜ぴて雨が降る。

市か町か、かう田舍へかたづいて事々物々膽を潰してる奧さんらしいが、茱萸を一升食つた女はちとお負けらしい馬ちやあるまいし。



論　文　　編輯局選

○幅廣の帶に就て（地賞）

伯耆　新田文子

近來衛生とか、體育とかいふことが餘程喧しくなつて來ましたのは、まことに、喜ばしい次第です。文明になるに從ひ、さもあるべきことゝ思ひます。つきまして日本の女子の帶についても、種々雜多なお説を見たり聞いたりいたします。中には日本の女子の帶は衛生上、害があるから、全然廢してしまつたらなど、おつしやる方もあります。妾は、之れは餘りに極端な、沒常識な話ではなからうかと思ひます。

そもく日本の女子の幅廣の帶は、一朝一夕に流行したものでは、ありません。遠く、古來から漸々進化して、こゝ迄なつたのです。それを一寸した衛生思想や西洋崇拜などから、種々な理由をつけて、攻撃するなんて、餘り輕々しいではありますまいか。第一、日本の女の帶は、そんなに衛生上害あるものでせうか、妾はそんなに、害を認めぬ一人です。胸を狹くするとか、姿勢を惡くするとかは、多少ありませうけれど、帶の締め樣によつては、之れらも、まぬがれられるのです。まして、織物などの帶を、きちんと結びますと、自然容姿が整つて、姿勢まで、正しくなります。そして、外觀上から見ても、壯嚴にして、品格が高いのです。又、メレンス友仙の帶など、若い乙女の可愛く結んで居るのは、ほんとに、ふるいつきたい程美なものです。とても、日本婦人に不似合な洋裝などの、及ぶところではありません。やつぱり日本婦人の身體には、幅廣き帶が、最も配合が好いのです。

ですから、餘りに、世の奇をのみ好まず、此の美的な我が日本婦人に、最も適したるこの帶を、益々美的に且つ衛生的に、改良進化せしめねばなりません。

帶だけ攻撃する人も間違つておますが、帶だけ廣いのを採用するのもをかしいでせう、配合の上から然う云ふお說だらうと察します、

今のところでは、フハ／＼した日本服には何うしても、帯をキチンと締める必要があります、帯が健康上にわるいと云ふことになつたら、服裝全體を改良せねばならぬことになります

（評）

○髪に就て

（入賞）

大和　靜子

髪容といつて髪の大切な事は今更事々しく申さないでもですが、どうも此頃は此本旨に悖つて居る樣に存じます元より髪はいゝ恰好に結ふのが能でありませうが、假令髪そのものが、いゝ恰好でありましても、それがその人にとつて似付かなかつたら、果していゝ恰好といはれるでせうか、恐らくはいはれないだらうと存じます、で今私の申上げるのは、髪は其人に似合ふ樣に結へといふことです。日本髪には割合に甚しい事はありませんが、彼の束髪に至つては笑止なのがあります、ひさし髪が流行るとて萬人が萬人だつたらどうでせう、必ずや似付かない人もあるでせう、又たぼの出すのが流行るとて人毎にかうしてもいけないでせう、いや今どんな結ひ方が流行てるの、誰某が結ふたのはいゝ恰好だ、ハイカラだ、どうか自分も一つ眞似を爲樣とて、結ふた髪は、屹度似付かないものです、稀には似合ふ人もありますが、其時の流行に投じないでも宜しい、自らが自らに似合ふ樣結んでありたいと存じます、さればとて、又甚しく時世後れした十九世紀式でもいけますまいが、ひどく滑稽、田舍臭くならない範圍に於て今申上げた樣にして欲しいと存じます。隨分多勢の中



日永　長野縣　下枝よし子

には滑稽なのがあります、頸が短いのにたぼを澤さん出して一見首なしの様なのがあり、又大變なひさしで眉迄被つたのがあり夫は〳〵種々です、も一つは美人の亂髪ハイカラの水髪なんかいひますが、之も程度もの、亂髪がよいとて此暑苦しい時節柄顔やら首やらに毛のまとひかゝつてるのを見るに尚更暑い感がします又油つけぬ洗髪は氣持よささうですが、さりとてバシヤ〳〵として風吹けば忽起す戰鬪の巷といふ様なのがあります、いくら油つけぬがいゝつたつて程をこえてはいけません。

私はやはり油もつけすきもして艶々してそして鬘でおさへた様でないのが好ましう存じます、勿論草深い田舍の私ですから、果して流行髪がよいか亂髪がよいか水髪がよいか都會の風は一向に存じませんから、必ずや偏見に陥つてるでせうが、一寸私の感じただけを！御氣に障つたら御許し下さい。

實際の髪の恰好のことを、もつと言つてもらひたいやうですね、お說の主意には無論反對はございません(評)

選者曰、本號また天位を缺く、論文の書き工合が少し皆様にもお分りのやうに思ひます、今一息ですから、しつかり〳〵。

【秀　逸】

○七月號批評

草葉の露

本欄、裏の家――巧い。母親が大變能く出て居ると思つた。けれど私はかうした作にはあまり興味がない。夜雨先生の黒百合――此前の百合子さんの手紙では、思はず泣かされた。先生あんまりおいぢめ遊ばすな、？さんも屹度寢ざめが惡いでせう。

投書欄、小說――車――御上手。此方の作には一種犯す可らざる強い深酷なところがある。不平――靜子のませた口上なんか、能く東京の女の子を表現して居るけれど、此前の轉宿の方が好きだ。娘――大變面白いと思ひます。或程度の家庭には、一度は必ず起るべき問題です。詩、雨の池面が好きです。一體に淋しい事の好きな私は、詩でも此麽のが嬉しい。散文、武藏野より靜かに流るゝ川面をすべつて、空想にふけりつゝうつとりと兩岸の新緑をながむる女詩人の有様が、眼に見える様です。此方は落付いてゐらつしやる。地賞の方は可愛想。和歌――此月はとび離れていゝと思つたのはありませんでした。山村さんは悟つた様な歌が御上手です。日記――柴井やよ子、一寸見當がつかない。八重子様ぢやないかしら？地――手拭も被らず畑に出るよし子さんは、きかぬ氣の方と見えます。人――「すてんてんではないかいな」一讀思はず吹出しました。全く夜雨先生の評は天下一品ですね。日記其

ものよりも評の方が面白い。短文、母不知——勿體ない。繁榛とやらに罰が當らなければいゝけれど。琴のけいこは平凡。誌友作家の進境——面白い興味あるものです。雜報の誇張されたる美人法——思はず微笑、苦笑を禁じ得ませんでした。以上安評多謝。

これから本誌の例號の批評を本欄に載せますから何うぞ澤山に書いて下さい、此評者は要領を得ております(評)

○雜誌を整理して

伊豆　白光女

此頃思ひついて雜誌をそれ〴〵分類して、表紙を取り口繪は口繪で卷頭に集め、一冊づゝに製本して居ります。少女界が二卷、これは十三から十五六まで愛讀したものですが、その頃はこれが唯一の少女雜誌なので初等投書學校とでもいひませうか、服部貞子を初めとして現在本誌に居られる鈴木春子等いくらも居られました。その頃のを讀んでみますと、懐しくて堪りません。次に三卷出來たのは、女子文壇一卷一號から五年終號まで。(尤も全部揃つて居ないけれど)から別けたのは、大體調子の上から三段に發展して來たやうに思つたからなのです。現今卽ち六年號に至つて第四期に入りつつあると思ひます。さて第一期卽ち創刊早々の選者は鹽井文學士が中心になつてゐたので、從つて總てが雨江式——形式的抒情文とでもいふやうなのがタイプとなつて居りました。有力な投書家は服部貞子、萓廿春子、安孫子美子、太田樂子、後期末に佐久間芳子、山田邦枝などが加はつたのでございます。第二期卽ち三年號からは、沼波文學士が選者となつた故でもありますまいが、叙事文特に鏡花式が持ちはやされました。こゝに一言して置くのは、詩の選者が現在の醉茗氏で、小說が風葉氏であつたことです。作家として新に房枝高仲菊子を迎へましたが、この前期はまた、安孫子美子更に太田重田佐久間高仲の諸姉を相前後して送り、後期に水野仙子の貞子、邦枝を寄稿家として送りました。とにかく二期は作家の一大更迭をしたといつてよろしいのでせう。さて第三期卽ち五年號は全く形式內容共に一變して了つて今日に至つたのですが、最近の消息は皆樣已に御承知のことですから、こゝでは申し上げません。

要するに本誌の變遷發達は文壇一般の趨勢によるのでございませう。本誌も六年の努力により猛烈な勢をもて文壇に接近して來たのですから、今後の發展といふことに於ては多大の望みを屬さねばなりますまい。それには個人の發展を待つより外はありますまいから幸に諸姉の自重を祈ります。

女子文壇の經歷を書くのは、興味のあることです、五六十行に縮めるのは無理でせうけれど、一部分の批評ならいくらでも材料はあります、一年二年と溯つて書くのも善し、或る一人、或る一欄或る體裁に就いて評するのも面白い(評)

○借りたものは大切に

東京　萩代

先日お友達のＳさんが何日ぞやお貸し申しました、本を返しに被來いました、私の方では五冊ほどお貸したつもりですのに、三冊しか持つて被來いません。又、本がお話にならないほど、酷いのです。一冊は表紙一面紫インクでペンの走り書――と、申しましては當人樣に、失禮ですけれど、次の一冊は表紙がとれかゝつて今一冊は何をこぼしたものか、ねばねばしたものが、一冊うち通してしみてをります。私は餘りの事に『まあ怎うなさつて？』と、云ひますと『恁麽に汚して』と、仰有つたきり、氣の毒さうなお顏もせず、笑つて被居る。まあ私は呆れて了ひました。それも私のやうな、學校教育を一度もうけぬものなら兎も角、この向柳原でＳさんと云つたら、評判の教育のあるお方で、小學全科を優等で卒業後は、お茶お花お琴は勿論女一通の藝は、悉皆習つて、今では何所とかの學校で、英語を習つて被居つて、而も私より二つもお年上――とか、聞きましたが、さう云ふおん身が、餘り情けないではありませんか。たとへ雜誌一冊でも、借りたるものは借りたものです。その借りた本へ、忌はしい落書などするとは、何事で御在ませう。淸い本誌の愛讀者たる、滿天下の諸孃さまの中には、其麽事をなさるお方はありますまい。否、聞くだけまちがつてをりますが、若しさう云ふお方が、皆樣のお友達にありましたなら、私は悲しみます。私は社會のために悲しみます。其方の親たちは、何のために、娘を學校へ上げたのでせうか。

もとより教育もない私が、愚言をのべたのですから、何れ理にあはぬ所もあるでせう。たゞ私は他人より借りたものは、丁寧にとりあつかつて、用濟しだい返す事、また他人の物を無だんで貸したりせぬやう、かりそめにも、墨をつけたり、汚したりせぬ事と、注意して頂きたいものです。皆樣に代つてこゝに申上ます。

ひどく眞面目になりましたね、尤もです、誰だつて自分の本を汚されて好い氣持はしませんからね、そんな人にはもう貸さないがようございます（評）

○貞節とは何か

名古屋　鹿鳴草

二三日前、母校へ遊びに行つたら、或先生が、お話しの、ついでに、ふと「此頃、四年に貞節といふ事を、聞いて見たが、一人も、滿足に、答へたものが、なかつた」と笑つて、見えましたが、女學校の四年にもなつて、貞節の說明が、出來ないなんて、一體皆さんは、何しに學校へいらしやるのだらう、と、思ふと不思議で、たまらない、しかし、かういふ私も、その中に、居たら、或は、同じであつたかも知れない、だが、私は、この樣に、思ひます。一度嫁したならば、その夫に對して、身の純潔を保つは、いふまでもなく、一生を共にして、夫のたのしむ時に

は、共に、たのしみ、苦しみある時は、よく、之に同情して心から慰さめる。たとへ、一生の苦樂を、共にしても、身の純潔を保つ事が、出來なかつたり、純潔に保ち得ても、苦樂を共にする事が、出來なかつたならば、決して、貞節とはいへますまい。また、いかなる事情があつても離婚しないは、勿論の事です。たとへば、夫が、不治の病にかゝつた場合、いかに自分の里から、かへれと進められたとて、夫の苦しむ樣を、見すごして行けませうか、自分は、どこまでも、そのあはれな、夫の心を、察して、いつまでも、これが看病に、當つてこそ、誠の貞婦といへるでせう。昔から、貞婦といはれる方々を、見ますと、皆、この三つの事を、守つて居られる樣に思ひます。皆樣はいかゞで御座いますか。

常識の議論ですけれど、千古動かすことの出來ない女の道です（評）

○七月號批評

きく子

七月號口繪寫眞版中、町田しづ子樣奥床しい美しいお方だが何となく愛のないお顏。異彩中、和服姿のお方が一番いゝ、私が男で世に時めく身分で有たらあんな方を夫人に迎へるホ、、、。

割烹實習服着けて被居る方々はなぜあんなに翼のやうに袖をひろげてなさるの——

一寸傷病兵のロスケの樣に見えますよ。

筆子さんと長曾我部さんのお作は今更でなくいつも乍ら感服の外有ません。

むらさきさんの最後の祝福を讀んで知らず知らず涙ぐまれました。

日記文中では澪子さんの染色たづねが面白かつた、よい捉まへ處——霞子さんのは日記でも散文でも耳障りがないスラ〳〵と書けた好きな文章。

都會婦人批評其二中に活字の誤りでせうが東海道樣とは可笑しいでは有ませんか。俳句天賞、藤原樣は四五年も前からの作家では有ますが未だ一度も本名と文章の載つたのを見受ませんが和歌や句位ですと假面を剝がれる恐は有ませんね——。地賞よべの夢は古き本誌中に載つて居たそれも入賞で有た「よべの夢皆朝顏に咲きいでぬ」



雲の峰　青森　松尾千代子

とよく似て居ますのね――

諸友倶樂部中に分り易い手紙として有升お方友人から來た手紙が讀めない位で洋藥の調劑が出來るのですか。皆樣お氣に障つたら御免ですよ。

なかく氣焰が高い(評)

○侮　辱

白　妙

私が先達て小田原に行く朝、一時間ばかり新橋停車場の待合所に居りますと、四人づれの婦人が入つて來ました、皆廿歲ぐらゐの婦人でありました、來るからずぐ私たち三人の方ばかり見て居りましたが、やがてパンをたべながら惡口云ひはじめました。

いづれ私共の事でせう、中の一人が、ごらんよあのハイカラ三人共さと云ふのが耳に入りました、氣早な私はむつとして思はず其の人の方を見ました。

どうせね今の女なんか髮ばかりハイカラで其れで生意氣でおてんばなんだよ……まあ何んと云ふ人でせう三人で、顏見合せて皆赤くなつてしまひました、其の內に切符を買つて汽車にのりました、ずゐぶんひどいわねと友は云ひました、私は何か云はうと思つて居ると、又其の四人が入つて來ました、其なり神奈川まで外の話して居りましたが、隣に居た男と、又も惡口云ひはじめました、家じやあんな髮は結せないとか、女は女らしく日本髮がいゝの、ハイカラは女振りが十段も下るとか、元結ひいらずの德用から初まつたとか、其れはもう聞いて居られない樣な事ばかり申します、車中の人は皆私の方ばかり見てゐる、成る程其の女は皆根下りのいちよう返しに結つて居ります。

折角樂しみに話さうと思つて皆手帖まで持つて居りましたがうかく話も出來ませんので、青々した山や海をむなしく通り過して、實に殘念で忘れる事が出來ないのです。まことにくだらない事ですけれど、他の感情を害して其れで澄まして居てよい物でせうか、此う云ふ方も廣き世の中に居るでせうかしら、皆樣の中にも髮によらず惡口云はれた覺えのある方は御察し下さいまし私は髮や形は見苦しくさへなければ何んでもよいと思ひます。

此文章で見ますと、まだ年のゆかない少女の方らしい、傍若無人に惡口を云つたのは、何れ成上りか何かでせう、もつと詳しく見て置いて、詳しく其人を描寫したら好い材料であつたのに惜しいことをしました(評)

○虻蜂取らず

紀伊　紫　陽　花

よく虻蜂取らずといふ事を言ひますが、世にこれ程馬鹿らしい事がありませうか。私は實にこの虻蜂取らずを實行した一人です、小學校時代に頭から、農業が嫌でく何でも女學校へ行かねば人になれぬ樣に思ひました。處が小學校を卒業すると家事都合から、學校生活を止めねばならぬ樣になりました。あゝこの二箇年程の間私は如何に悲憤の淚を呑んで悶へたでせうか。

てんで農業など手につきませんでした。どうしたはづみか、妙に農業の趣味を覺える樣になつたのは十七の春、けれども、もう遲い！、趣味はあつても鍬持つ術も知らず、何をしても中途半。あゝ今更、私はなぜ農を卑しんだかそれが分りません。事情は違ひませうが、世の多くの處女の中で虻蜂取らずで、後悔してる人が、少くはなからうと考へます。

論●文●五●則●

選者

▲意を達し、筋を明かにし、要を摘むこと。
▲文章は平易を厭はず、むつかしき文字に用なし。
▲平生、眼前の事柄を取つて材題とせよ。
▲ありふれたる修身の講義めきたるものは採らず。
▲誠實と、正當と、確實と、淸新と、力とあれ。



書簡文

編輯局選

○戸隱より（地賞）

長野　優梨子

涼しい戸隱の夏の日は、今靜かに暮れ樣として居ます。中社の森の蟬の聲もいつかやみました。未だ花の咲かない白萩が覆ひ被さつた樣になつて居る瀧壺から、柄杓に一杯汲んでは、宿の男が庭へ打ち水をして居ます。其水霧をふくんだ冷たい風がすーつと吹いて來て、ネル着た肌にも涼しい程です。

榛山木の强い香が、絕えず裏庭から流れて來ます。夕暗にくつきりと白く咲いた、あの大きな花から漂よつて來る、醉ふ樣な强い香を嗅ぎますと、何故か、私は斯うして神さびた靈地に居る事を、犇々と感じます。

此處はあまり人に知れない、靜かな好いところです。それは輕井澤の樣に好い宿も無ければ、何々侯の別莊もありません。其かはり、ゴム輪の車や二頭立の馬車に後から追ひかけられたり、廣くもない道をマネーの人に濶步されて、小さくなつて端を步く樣な、そんな氣のきかない事はありません。

朝など散步に出掛けますと、質朴な村の人は、愛想よく丁寧に言葉を掛けて呉れます。それが私には何となく、嬉しく懷しく思へてなりません。

今朝涼しい內に、奧社から半道許り登つて、口づけしたい樣な可愛い山百合の花を取つて來ました。今床柱の掛け花入れに、投げ込みに挿してあります。

夜は、それこそひつそりして何の音もしません。蚊が居ませんので、燈火親しむべしと云ふ樣な氣がします。重いからと思つて僅か二三冊しか持つて來ない愛讀書はもう讀み倦きました。仕方が無いので每晩くだらない落書許りして居ます。

又あの四里の道を行かなければ歸れないのかと思ふと少々心細くなります。

例の達筆なお手紙いたゞける日をお待ちして居ります

戸隱といふ神秘的な場所のせいか、書いたことが、一入奧深く美しく

感じられる。強く人を刺戟するだけの魔醉力もないが、何處かに惹附ける樣な力のある作だ。(評)

○折りかへし（人賞）

美濃　蔦の葉

妹よ今朝の手紙はたしかに届きました、御申越の件御道理には候へど、さのみ驚きて三度の食事もろくに美味しくないとか、あまりに候はずや、夫の留守中に男子の漂泊客、別に一大事と云ふにも候まじ。よくその人につきて、表から裏から、横にも縱にも御注意なさるべく、歳若きとて主婦の權利もて、夫の留守を預る身、よく尋ねて、可成なれば常々申置きある故定めて持參あるべき筈の小手帖に、きゝとり書きをし、後日のために夫歸宅後何かの話の材料にも、叉子供ある者は物忘れ早き故忘れぬためとをかねて、記しおかるべく候。如何はしき點多ければ留守なればとてはねてよし、理あらん樣なれば四五日位の逗留許されて然るべく、尤もお客と心得粗忽なる取扱無き樣暮々も申進め候。奉公人どもにも留守なればとてあざ笑はれぬ樣、物事はつきり整理をつけて、朝夕火の元とりわけ注意遊ばさるべく候早々、口利かぬ子供風邪にをかされては宜敷からず、ねびえなど致させぬ樣申添へ候ゝ

嚴然たる姉者人の口吻、再誦に値す、蔦の葉さん其人の個性がよく出て居る、まるで戰國時代の武士の妻の手紙を見る樣だ。(評)

【秀逸】

○姉樣へ

横笛

雨は今あがつたばかり、まだ南天の葉の先からはホロホロと涙のやうな雫が落ちてをります。私はなぜこんなに雨が好きなのでしよう、ほんとになぜでしようね。姉樣あなたも御好きでしたのね。

丁度去年の今ごろでしたわ、シトシトとふる雨見ながらいつまでもいつまでも、着物がシットリとぬれるまでお椽で御話した、その夕から姉樣は御熱が出て床に御つきになつた時、私まああんなに心配したことは御ざいませんでしたよ、一日に何度も／＼お部屋のからかみ細目にあけては母樣に「またお出なの」と笑はれましたがほどなく御全快、母樣も御よろこびでしたけれどもきつと家中で一番うれしかつたのは私だつたらうと思ひます。

私は雨のふる日はいつでも姉樣を思ひますそれやあ姉一人妹一人まして今は遠くはなれてゐるのですものね姉樣も私を思ひ出して下さいましね。

今日は雨にさそはれて一寸一筆かきました、御身御大切に遊ばせ。

何がなしにこんな文章は好きだ、作者はまだ肩揚をとつたかとらない位の人らしいが、なか／＼シンミリした情緒が現れて居る。(評)

○ふるさとへ

東京　草子

又雨嫌ですこと、毛蟲見度いな栗の花が濡れた地に散り亂れてゐるのを見ると彼の栗の樹の多い村道を北へく〳〵と學校通ひの傘かたげた絢さんの姿が想はれて成りませまん、又道がぬかるみに成つて困るでせう？私早く晴れゝばいいと日に幾度空を仰ぐか知れませんよ。百里の南でも絢ちやんが同じ事してだらうと思ふと可笑しくなります。よく御勉强ですつてねえ、先日母樣からの御便で嬉しく思つて居ります。之から暑くなるとだるいから逐怠け度く成ますわねえ、學ぶべき事、覺えるべきこと、夫も最早限もないのですから、絶えず眞面目に勉强しなければねえ。皆な自身の爲ですもの怠けては損ですわ。油斷してゐるとすぐ置去りにされますよ御互に氣をつけませう。夫からね絢ちやん御習字はよくするんですよ。實はね私手紙なんか書く度に後悔しますの字の下手程情ないことは無いと思ひますよ。優しく品よく書き流した筆跡は其人柄も偲ばれて床しい感がするものです。女學校の五年にもなると學科がふゑるから忙しくてとても手習なんか仕られません。今の中ですよ絢ちやん！少し位面倒でも筆を屹度お持ちなさいペンの走書は決してなさるな、今日もまあうるさい事計り並べて御免なさいよ其換り來月歸ると面白いことどつさり聞かせますよ。夫迄お預り――嬉しいわねえもうぢき逢へるのですもの、あんまり喜んで勉强忘れたりは仕ないから安心して頂戴ホヽ。以下は雄ちやんに讀んでやつて下さい。

雄ちやん雨で遊びに出られないで、駄々こねて母樣を困らしちやいけませんよ、左樣々々、雄ちやんもう來年學校へ行くのでしたね、ぢや、やんちやしないわね、姉樣逐間違へたの御免なさい。生梅を食べてはいけませんよ、此間ねえ夫を食べて避病院に擔が



庭の秋草　芝みね子

れて行た人が有りましたつけてわいでせう。夫からねお天氣に成つても地面の乾か無い中はしつけを受けると大毒ですから表に長くしやがんで遊んだりするのぢや有りませんよ、おとなしく仕てゐると姉樣がいゝ御土產持つて歸りませう。サア何でせう當てゝ頂戴。其日に又絢子姉樣と停車場へお迎に來て下さい。雄ちやん大きく成つて姉樣に解らなく成りは仕無いこと――さう雄ちやん？もうぢきね。さよなら。

稍一本調子に流れた弊はあるが、全體にしつとりした氣分がある。雄ちやんへの手紙は殊に無邪氣でいゝ、字が下手で後悔するとありましたが、貴女位、優しく品よく字が書ければそんなに情ながらなくともいゝでせう。（評）

○郊外へ移りし友に

西多摩　みよし子

久しぶりでの御手紙をこの雨降りの午後に拜見致したのでございます。以前の御住所は御氣に召さぬとの御ことばでしたから私もつひ御無沙汰致してをりましたのですが（山吹が散つた）（卯の花が咲いた）などと位はどんなに申し上げたかつたかわかりませんでした。まあこの度は御望み通りの新しい御住ひと承り飽き性の私御羨ましうございます。もうこの地にまる〳〵二年居るのですもの、あなた樣が未だ聞かぬと仰つしやる時鳥の初音ですね！それはもう六十日ばかり前に、叔母にいはれて折角床へ入つたばかりのところをはね起き寢卷のまゝで裏の軒ばへ出て聞きました。それからだん〳〵上手に鳴いてきたやうな氣がします、今年は例より澤山鳴くのださうですが今も鳴いてをります、失禮ですがいくら御郊外でひつそりとしてゐても御庭へは覺束ないでせう。そのうち蟲が鳴き出しますわぞれこそよいでせうね！それといへば來月私の歸宅する頃あの南葛へおたづね下さいますつて。ほんとでせうかもし御目にかゝれたら夢のやうなまあどんなに嬉しいでせう。どうかほんとうにね！しかし花子樣私の家は御存じの通り××と××とが少しも氣が合はないのでおまけに私が一人畑違ひなのですから春風和かにといふわけにいかず思ふ存分に御話も出來なかつたらどんなに悲しいでせう、けどゐる氣はないのです、父もあんな人ですから昔小供の時の御心でいらしつて下さい。前の草むらに今青白い蕾持つてゐる山百合が皆咲いてあらましやつれてしまふ頃はこの穴の中のやうな地を出て白蓮の咲いてゐる田のそばでお待ち申してをります。淋しくつてもぜひお出で下さいましね。

『飽き性の私、お羨しう』は記者も同感、轉宅程氣の變る面白いものはありません。併し時鳥の御自慢はお止し遊ばせ、憚乍ら都の空にも一聲二聲は聞き得申候。（評）

○姉樣へ

兵庫　紅雀

姉樣のお好きな夏が參りましたわね、お嬉しいでせう、今ね新家の嫂さんがいらしつて可笑しいのよ、私一々數へてたの、何をつて姉さん、あ

らまだ御存じなかつたのね、ぢやあお話しませうか。

嫂樣は夫は〳〵恐れ入りますつてよく仰有るのよ、口癖になつてらつしやるのでせうよ、ホヽヽヽ。

先づ第一が母樣がお茶をお出しになりましたが、遠かつたものですから中に居た私がお取りつぎしたのよ、すると恐れ入りますつて輕く會釋なさいましたわ、此處では誰れでもいふ處ね、けれど何をいつても二口目にはすぐ『恐れ入ります』ですから私可笑しくてぢつと笑を我慢して下向きましたの、然し何時までもさうして居られませんから、皆代る〳〵に抱こしてらした赤ちやんを負ぶさせて戴いて、逃る樣に庭へ飛び下りて合歡の下で暫く一人で笑つてましたよ、と赤ちやんが如何したんですか泣き出して仕方なく又お座敷へ上りますと嫂樣が又、恐れ入りますおしつこかけやしなくてと仰有るんでせう、漸う少し治つてたのが又急に可笑しくなつて否えどう致しましても口の中で、お書齋へ飛んで來て是を書いてますのよ、姉樣も今度いらしたら貴女ほんとにお若い事ねどうしても十七八にしか見えませんわ、とでもいつて御覽なさいな、直ぐ仰有つてよホヽヽヽ、こんな事書いて、母樣に見付かるとお目玉ですわ、あら母樣が私呼んでらつしやいますからもう是で止しませう、兄樣に宜しくさやうなら。

『ホヽヽ態々お手紙で恐れ入ります』と又姉さんが云ふかも知れない、チヨツと輕妙に出來て居るのが身上だ。(評)

○海の家より

大阪　橋本久惠

今日は雨にて、海に行く砂原道のなでしこが、靜かにゆらぎ居り候。かかる日は妾にふさはしく、しきりに歌の讀み出でられ候。いつぞやおんもと樣が入らせられ候ひし折、奈良のみ寺の柱に似るとて撫でられ候ひし、かのまろ柱にもたれ、椽側に並びて見ゆる船の帆柱を眺めつゝ歌思ひ居り候。さは候へど云ひ知れずわびしく遣る瀬無く、遠き浪の音、幽かなる出船のぞめきなど聞き候へば、ひしと胸のせまるをおぼえ候。夜に入り候へば遠く青海原を越して、淡路島の灯が星にまがひて見え候。もし今宵雨はれ候て、月出づるとせば、おんもと樣と始めて連れ立ち、此海邊をさすらひし夜の如く、上の方いさゝか缺けておはすならめと存じ候。(須磨にて)

向ひのお寺の和尙さまに誘はれ、小舟にて沙魚つりに出で候。うす黃に濁り候「辰巳川」を下り候て、河口に出で行き候ひしが、何處の橋も皆橋板の上に土を置き、橋の杭はセメントにて圓く四斗樽位の大きさに作りあり、蠣のやうな貝が無數にくひつき居り候を見候。昔、浦賀の沖にまゐり候て、其時代の人を騷がせ候黑船の如き、ペンの香高き大なる荷積船の傍に錨を下ろし、日の暮るゝまで釣絲を垂れ居り候ひし處、和尙さまは三十七尾、妾は九尾釣り上げ候。(尼ケ崎にて)

瀟洒とした趣のある書振が床しい、歌人らしい嬉しい、美しい心持が仄めいて居る。(評)

○常陸の野より

初澤さく子

都なる君、野は今大豆の花盛りにて候、ヒヨロ〳〵と、長き蔓なる花の風なきにこぼるゝ光景は、野の人ならでは味ふの幸ひなからん、芋の諸黑き莖さへ面白く候に、薄紫の圓き葉の晝ながら露を抱いて風に吹かるる樣の可笑しさ、さては出臍の南瓜、晝寢の白瓜、以上の光景は敷居を跨ぐ十歩にして到る所に見受けられ候。まして〳〵吾が里は紫匂ふ筑波を軒に、鳥波の湖のさゝ波を西に眺め得て、南の丘に上り候へば夜雨先生のお家もはつきりと見え候。朝日紙上『土』と題して幾十萬の讀者が目を驚かしつゝある長塚節の君が棲める里も川一里距てるのみ餘りに遠く候はず、斯くまで天才を產み出したる常陸の野、花多く水淸き其の野の丘に日每の晝休みを利用して、夜雨先生のお家を近く望み乍ら創作『土』を讀みつゝ、無限の誇りに微笑みつゝある妾を羨しとは思召さずや。梨子の實も早生は赤るみ、桃も色づきて候ぞ、店頭しなびし實を味はんより、露を帶びたるのそれに舌鼓打たんとは思ひ給はずや、茅屋なれど草の香失せぬ蚊帳もあり、庭なる池には鯉も跳ねて候ぞ、願はくは未だ相見ぬ親しき友よ、此暑中休暇を利用して來給はずや、常陸大野の夏を戀ひて、偏に待ち上げはべる。

少々ゴツ〳〵した女性らしくない傾きも見えるが、健實な空虛のない書振である、店頭しなびし實を味はんよりは……云々は、少々キザだ(評)

○磯の先生へ一寸お伺ひ

古島花子

おなつかしい先生よ、戀しい先生よ、只今何していらつしやるの、私あてて見ませうか、あの見はらしのよい海邊に向つたお窓によつて、あのあの可愛人たちのお書きになつた(いろはに)などのお淸書に、リンゴのようなほゝに可愛えくぼをよせておよろこびなさる○○や甲など附けていらつしやるのでせう。あたつたでせうね。それともお琴でも調べていらつしやるのですか、これからは海邊が戀しくなる時ですね、私の戀しいのは先生で御在ます、お暇の時は海のおたよりをして下さいましな、私も山里のお話をよく考へて上手に致しますからね。

淋しさに一寸お伺ひまで　　かしこ。

『少女』への投書が紛れ込んだのかと思つたが、矢張り女子文壇へ來たのらしい、稚氣愛ずべし(評)

○打ち解けし友に

大和靜子

綾さん今日大變の事あつてよ國語の時間には二人の紳士が入つて來ましたの例の參觀だと思つて過ぎましたら晝の休憩に先生がお呼びになつたの、何事かと心配しながら行きましたら『貴孃今來られた若い方の人は如何思ひましたか』つて何だか妙でね『どうつて先生何だかわかりませんか』と申上げたら『風采について』と仰しやるの『私さうですね、充分敎育もうけ又修養も積んだ品位の高い方だと思ひます』と答へました、『夫では貴孃氣に入りましたか』との事益解せなくなりました何と答へしていいか分らない、ぼけた樣して居ましたら『實は貴孃を望んで來られたので本年帝大法科出の秀才です詳しくは御兩親に』との事私先生が憎らしくなりましたわ甚い方ね夫なら夫と先からいふて下さつたら、注意もして見もし又私とてもこんな容儀をしないで來もしますものを、で其方は私をどう思つて、と餘程尋ね樣と思ひましたが控へて置きましたの、ほんとにうつかりは出來ないものね、あなたも此後御注意遊ばせ、今宵はいろんな事想像されてなか〳〵眠くはありません、先はこれだけ。急いで　さよなら

人を馬鹿にして居る、僕はそんな見合は大嫌ひ也、其敎師宜しく免職すべし(評)

○ロンドンの伯父に

鳥取はる子

日英博覽會の繪葉書、澤山にあり難う御座いました。大體は新聞でみて承知してゐますけど、日本の輕うみられる事ばかりだつて事も、大阪每日の菊池氏の通信でみましたけが、それ程とは知りませんでした、いやですわねえ、でもその割に評判はいゝなぞ歐米人の目も低いんですね、洋食的に濃厚にさへあつたらいゝのかも知れませんよ、私も行きたい！今日もね慾は云はぬから三萬圓ばかりでよい、博覽會をみてお土產をどつさり持つて歸るからと云つて、大笑ひしました、靜子もこの頃は中々悧巧になりましてね、お嫁さんは！といふと口に手をあてゝ、ホヽヽヽと笑ふまねをしますしお父樣は？といふと仰向いてハヽヽヽと笑つてみせます先日送つて頂いた洋服を着せて寫眞を撮りましたから出來次第おくりますよ、それから御紹介下さつたローズ孃ね、實にやさしい、いゝお友達でよろこんでゐます、先日も造花と寫眞と送つて下さいましたので、私の方からはリボンと寫眞はわざと、高髷にお模樣のをおくりましたのよ、お逢の折にどうぞよろしく、伯母樣が手紙をかくと仰有つたので大急ぎで之を書きましたこの次にはもつと〳〵面白い事をお知らせ致しませう。

洋食的に濃厚にさへあつたらいゝとは罵り得て痛快だ、併しお嫁さんはと聞かれてホヽヽヽと口に手をあてる靜子さんに、姉さんは？と聞いたら、何と答へるでせう(評)

○御無沙汰して

日本橋　ほの子

この四五日は陽氣がたいそう惡うございますが、旦那樣はじめお子さま方お替りも無くつて、あなたは云はなくつても相變らずおまめでしよう私はなぜかう筆不精なのでせう、自分でさへあきれてゐるのですから、あなたからのお恨みは糠に釘……、と云ふ程ではありませんが、萬事察しのいゝ私ですもの、とうからそういふお手紙の來るのを、お待ちして居りましたわ。

重ね〴〵横着者ですね。こんどお伺ひする時にはおみやげを山ほど、それでお埋め合はせを致します。それでもお聞き濟み下さらなければ、ほらあの寫眞ね、あなたはまだ御らんにならないけれど、先達ってのお手紙で、よく撮れたでせうネつておからかひになつたあの寫眞よ、あれならば必ず〴〵御滿足でしよう。でも私は少々つまりませんわ。その替り御馳走を澤山にお膳に上りきらないほどして下さらなければ、承知いたしませんよ、前からお約束ですよ。あなたもごぞんじの通り、かういふ私ですから、いつお伺ひするか分りませんよ。お待ちなさらずに待つてゐて頂だい、來年までにはお目にかゝれるでせう。

面白い氣分を書いてある、御無沙汰のおわびと云つた樣な手紙にはコンナのが適して居る（評）

○親しき友へ

秋田市　沖口みき



月が今杉の木の上へきました、お別れの晩校舍から見た月とよく似て居ります、彌生の末でしたね。

えみさんと二人で泣いた校舍の窓から今はどんな方がどんな思ひを抱いて月を見てるんでせう。

しつかり抱き合つて泣いて泣いて月を見たあの晩の事は永久に、永久に忘れませんわ、もうあんな美くしい生活が一度だつて出來ないでせうね恥かしいけれど落第をした方がどんなに氣樂だつたでせう、オホ……、まさかね、お別れが否やだつて大切の名譽を捨てまでね。でも過ぎ去つた四年間の事を考へて見ると二人の仲はかうなくつちやあね。

切れ緒

茨城　小堀としこ

あれあの訣別の紀念だなんて私のお庭に二人で植ゑたあやめね、今が眞盛りよ、たつぷり露を含んだ朝などは、振ひ付きたいやうよ、眞白な上にポつと薄く藤色がぼかした樣に付いた、直徑二寸位の花瓣が五つ……と云ひたいが、あまり誇張しすぎるからほんとうの事を申しませう。まさか四ツとも云へないしね、その花びらが三つ集つてるのよ美くしいってまるで繪の樣よ。何時か立派なお手並で寫生して上げませうね。

まあ何故こんな無駄口をきくんでせう、大枚三錢を出してお手紙上げるのに。

ぢやあえみさん夏休みに、きつとね、遠いなんて十五里ばかり汽車で一足飛びよ、きつとね、お待ち申して居りますよ。

さよなら

はじめの方は面白いと思ってよんだ、中程へ來てハテナと思つた、おしまひの大枚三錢で急にギヤフンとなつた。（評）

○食客の妹より都の兄へ

伯耆國　足立春子

兄樣また淋しい秋は音づれました。月のいゝ夜、機關長の窓から死んだ樣な海原を眺めなさる時に、みじめな妹をたまには思ひ出して下さいましようね。私も無事で暮して居ますけど、あの氣むづかしい義姉樣にはいくら私だつて堪りませんは、着物ばかりは大人のをきるくせにつて些つとした事にでも白い瞳で仰しやいますの、昨日は朝からもう〳〵死んだがましだと思ひましたは、元とほんのさゝいな事でしたがどうせお前は車引の御細君位な所だらうと、長煙管を火鉢にピシンと音させなすつた時には頭のデツペン迄響きました。兄樣、私だつて兄樣の妹よそんなに迄なり下る位なら全く死んだがましですわ、こんな事聞かされるにつけ御兩親さへ居なすつたら女一人前の事はどうにかして覺えさして頂いたでしように毎夜泣いてばかり。食客つて隨分みじめな者とは聞いてましたが、こんなに迄とは思ひませんでした。あのね今朝信代樣からの御たよりに、康子樣は緣あつて工藤樣とか言ふ早稻田出の御方へ御嫁しなすつたさうです、私急に兄樣のお身がお寂しい樣に思はれてなりませんの、御許し遊せ、私如何しても御二人を離して考へ度くありませんものけど去る者をいたづらに追ふ兄樣ぢやないはね、もつと〳〵いゝ姉樣をお迎へ遊して下さいね、兄樣私も都會でくらしたいわ！。

最少し物足りない處がある、今一歩……といふところだが惜しいものだ（評）

○田舍敎師となりて

前橋　みどり

たゞ樂しい、面白いと夢の樣に過ぎた一學期、靜に目を閉ぢて顧た私は綾樣…恐しさとはづかしさに、慄へました、少しですが、敎育學や心理學をのぞいたり此の道の人々に色々な話をきいてつく〴〵と柄にもない兒童敎育などゝ云ふ、重い務にたづさはつたのが、恐ろしうございます、此頃受持ちの兒童たちが、氣のせいか、感情的になつたやうに思はれるのも知らず〳〵の中に、私の感化が及んだのではないか、と思ふとどうしたら好いのやら。

綾樣、私はね修身の敎授が一番辛いのよ、親に孝行しろの、勉强しろのつて、そんな事、私には兒童の前で云ふだけの、資格があるでせうか、もつと〳〵修養をつんで、意志をしつかりさせてから、執るべき職ですね、又、例の人生觀が初つたなどゝ、笑はれるか知れないけれど、分れば分る程、むづかしいものは小學兒童の敎育です。

おしまひの方が理窟臭くなつた、併し稍小學敎員といふものゝ内部生活の色が出て居る（評）

○淋しい子より

越後　田中牧子

夏休みがきましたね。み代ちやんはもう滿二年におなりですね。どんなにかおとなにおなりでせう。

ほんとに月日は早いものですね。女學校を出てからもう丸三年。あなたは直ぐお結婚になる、友達の多くも大抵はおかた付きなすつたのに私ばかり相も變らず小學敎員、夏休みもこれで三度目ですわ。いつまで他人の子供を育てゝゐるのかと思ふと、呪はれた運命に思はずほろつとするの。兒童敎育が天職だの、人材陶冶の自覺などとよくお友達が仰言るが、虛僞だと思ひますわ。オールドミスと云ふ名前は自分が作るので無くて自然になるのですわね。餘義なく獨身主義者にもなるんですわね。ホヽヽ——。

今日、夏休みの第一日に當つてつく〴〵さう發見したわ。いづれ行きますわ。行つて染々語りたいと思ふわ。さいなら。

こゝにも又悲觀主義の小學敎員を發見した、天職でない虛僞の自覺だと知りながら敎員をして居るのは罪惡です（評）

短文

編輯局選



○絶交状（地）

浅草橋　ひなげし

絶交状は彼が自筆の洋書を以て表された、それは、濃い、太い、黒線の幾つも〳〵渦巻いてる中に、眞黒々の船が唯一艘！　そして、渦の周圍は毒々しい赤で、すつかり塗り潰されてあつた、見るから黒と赤との配合の恐ろしげな――。裏には小さく「この赤は色が變るぞ!!。」と、自分は思はず慄いた。

評　一寸アンドレーフなどの小説を思はせる、それ程深刻でもないが、黒の獰悪と赤の妄執との配合で、ワツと云はせる、可成恐ろしい絶交状だ。

○冷酷なる第三者（人）

麹町　月待草

「いゝえ違ひます。」つてベルをくるくると廻す。と又けたゝましく鳴る。出ると、矢張り今の人の聲。「あら違ひますの、どうぞおきりになつて……」つて切る。幾度きつても掛かつて來る。「どうして切れんのでせう」つて、しんみりと餘情のある聲、なぜかぶる〳〵つと胸に響いた。返事に困つてゐると、母樣が出てピタリと切つて了はれた。

評　處女の情懷は憧憬に過ぎ、電話の餘韻はあまりに儚なし。

【秀逸】

○蟲の聲

東京　花香

靜かな晩。今年もまた、悲しい聲の蟋蟀が、しきりに秋を知せる頃になつた。胸に染わたるやうな、其聲の寂しさに、思はずも涙ぐまれる。夏も餘程遠ざかつて、外は一夜ましに人通りが少くなつてゆく。何となく、物かなしい夜。

評　街頭の燈、行人の語すべてしめやか。

○蝙蝠傘の骨

西多摩　葭子

家を出るとゝもに無意識に開いた黒い傘の縁が瞼のやうに目の前を離れ

ない。蒲公英の實一つ飛ばない道をとぼとぼゆくと切崖の下に鐘草の花が一つ咲いてゐた。草の中から引き出して長い莖ごと取つたが手に吊しかねて髪の上の八本の骨に挾むと今まで曇つてゐた空から暑い日が照り出した。

評　巧緻。

○病上り　新潟市　吉田ふみ子

何度梳つても、やつぱり髪は脱けて來る、私はもう止さうかと思つた、姉様の少い髪が恁麼に脱けてはなほ少くなるから、幾條か脱た髪を丸めて靜と後へ投げた、姉様は恁麼に髪の脱けたのを知つて被居るのでせうか、そと鏡を見ると姉様は靜かに眸を伏せていらつしやる。

評　秋風庭の芙蓉を吹く。

○淋しい笑ひ　土佐　ゑびな

お祖母樣の笑ひ――ほんとうに淋しうございますの、泣く樣なお顔泣く樣なお聲……此間も、母が私の笑ひは泣く樣なといつたが、よく似るものだ、私も丁度その樣なつて仰言いました。自分にもおわかりなさるか知ら……。

評　筋肉の加減と云つて了へばそれまでだが……。

○水雞の卵　福井　片山　里

この間田の草をとりに出ましたら、苗を二かぶもやくにして、水雞が巣をこしらへて、中へ卵を三つ產んで置いたのを見つけまして、弟の病にこれがたいへんよくきくといふ事だし、このまゝでおけば米も取れない、と思ひましたけれども、前へまはり後へまはりして、啼いて見て居ります親鳥を見ましては、とてもなぶつて見る氣にもなりませんでした。

評　珍らし、やさし。

○變化　つゆ

四とせの間續いた戀が破れてから、私は若い自由な心になつた。かつては互に泣き合つた友も、今見ると、陰氣臭くていやになる。若い華やかな人と語つて居度い、そしてもつと、賑やかな所へ行き度い――

評　凄愴の華やぎ無慘なる若返り。

○二時前後　牛込　平塚白百合

海から歸へると、母屋の人達も留守と見えて入口に笹の付いた竹が横にふさいである。椽側にあつた手紙を見てゐると、庭の戸板に並ばつてねる生魚の臭をかいでドロ猫が戸板の下に覗つてゐる。南の方から小鰯やよがんつかい。房州女の賣ごゑが靜かに渡つてくる。汽船がついたと見えて汽笛のにぶい音が響いた。二時打つとなまけたやうな鈴の音をさせて新聞屋が來た。晝寢からさめた一高生が番的の歌をうたつて通つて行

く。

評　潮氣強い南風、すべて爛し。

○一番鐘　　山口縣　椰良美那子

二頭の牛に引かせた鐘は、逞ましい男等に依りて、五階の鐘樓に釣された。靜々と階段を上つた緋のみ衣は本寺の大和尚、ともう一人は羽織袴の人。鐘見んとおしかけた人皆、寂として呼吸の音もせぬ、嚴なるお經終るや、耳をつんざくあゝ一杵、群集の眼は一齊に樓上、七村の長者にそゝぐのである。

評　吼鯨の第一聲、面白き材なれ共惜い哉描寫足らず。

○夏の夜　　横須賀　君枝

あゝ好い月だお椽に岐阜提灯つるす南天の葉に露がキラ〳〵光つて奇麗な事風鈴は風でチリン〳〵得意に音たてゝ居る、籐椅子に横になつて居ると遠くからお琴の音がする私も急にひきたくなつて出す島田が重くて前に落ちさうで仕方ない。

評　蛾舞ひ螢瞬く。

○野の石　　信濃　淺田千代子

いたく蹉跌たので殘念には思つたけれど、傍の土手に取りのけて置いた



トルコの人　京城　横田月子

野の石、それは去年の事でした。今日てゝを通りかゝつた故、一寸立寄つた、赤や白の草花にかしづかれて、野の石は大へんやさしく見えました。

評　大厦の首石たるは何の日。

注●意●

▲近頃短文が一體に振ひません、平凡なのが多い

▲洗錬の足らないのも尠くない、冗長なのが多い

▲もつと好い所を覗つて、きりつと引〆て、アッと云ふのを見せて下さい　選　者

○眞面目　　横濱　伊藤　三女

眞面目私の此の心をたえずせめるのは眞面目なれ。此一言である然し若い私の心はどうしても私の望まない方面にと走せて行く。妙におど〳〵と何物にか追はれる樣に事もないのに狂ふた人の樣に浮き浮きと上は調子になつたり清い流れの温かい郷を慰ふてはをかしい程沈んだりなぜかう私の心は變化するのでせうか此の若い心を若いなりに眞面目な人となりたいと希ふて居りますに。

評　眞面目は藏れて根にある筈。

○變化の無い身　　横濱　山崎　京子

友達の手紙を讀み盡した時、思はず過去の記憶がこみ上げて來た。「まあ浦竹さんが男の御子さんを……。」と考へはたどりたどる中に廻つて自分の身の上に來た、交は二十二歳と云ふ事が強く悲しくなつて、其の手紙を顏へ當てゝ、熟々變化の無い自分の身の上を味はつた。

評　未だ必ずしも悲むべからず。

○病　床　　下谷　林　久榮子

夜具をスッポリ被つたまゝ目をねむつて居ると嫌な藥の香がプンとする、暗中に五色の玉がぐるく廻つて輪になつたと思ふと靑い線が入つて種々の形になる、見つめてゐると皆一度に失くなつて仕舞た。フッと會ひ度いと思ふとなつかしい亡き勝美樣の面が見える、刹那ニッコリ笑つたまに消えて仕舞た。

評　目さむれば矢張り不思議もない世の中

○殘りの戀　　千葉縣　西郡　光

夕暮の散歩の歸りに里川の石橋の上で足を留める上から茄子の馬が流れて來る笹の葉が來る紅い鬼灯白い百合のこぼれ蟒蜒んな物が流れて來る終に紅と紫の短冊が合ふたり離れたりして流れて行つたもう來ない夕暮の川風が急に身に泌だ。

評　蟬の聲もいたく弱りて。

○途　上　　芝　草　子

毎朝裁縫へ參りますのに、○○坂を歩いてをります時、後から後から來る洋服の男や袴をはいた女の人毎に皆先を越されて了ひます。長い着物に八寸の帶を締めた私は息を切つて上り詰める、ともう黑い板塀に沿ふて曲る方もある左側の石垣をまつ直に行く人もある、凝とそれを見送つてゐると、むらくと妬ましくなつて赫と頰の熱てる時もあれば何とも知れず心淋しくなつてもう泣倒れたいやうな折もございます。

評　かすかに心臟の鼓動がする。

○黑　葵　　前橋　みどり

遠い國の、知らぬ人から、草花の種を貰た。黑葵――と、小さく記した木切の立た鉢の中に、やがて芽が出て、莖がのびて、咲いた――淋しい、黑の花が――。何と云ふ、强い沈んだ色であらう。あゝ、短い草の身の、命も知らないで、此の花は、散てゆく……

評　黑い花は好い、惜い哉少しも振るはず

○哀れな蚊　　德島　あをなみ

何だか氣味惡い蕣れ方、ふと一匹の蚊が細い泣聲で私の前に飛んで來た、是は恐らく此處へ死に來たのであるまいか、常にはあれ程嫌つた蚊でも恁う悲しさうに謙つては流石に殺す氣ではなかつたが憐れく蚊は洋燈の油氣にふれて遂に往生して了つた。

評　盆の月も夜毎に蹲くる頃。

○まどゐ　　名古屋　胡の子

常には淋しい位靜かな家も休日になると、大阪の兄樣も東京の學校へいらしてる兄樣も、濵の兄樣も寄宿に居る弟も皆なかへつてくるので一度に騷がしくなる、夜るなんか食卓をかこんで父樣が、大きうはなつてもまだ子供じや休みになるとこいと言はぬとも皆なきよると、笑はれると可愛い聲でゝも笑ふ事か、狼の遠吠えの樣に皆なワハ……

評　狼の遠吠は宜かつた、大に頼母しいワッハッハ。

○今戸人形　　千住　兜

雨戸の隙から太陽がサーチライトのさし込む樣になつてやつと目がさめた最うい つの間にか蚊帳がはづされてある。長火鉢の上に夕べ弟が緣日で買つて來た今戸人形が三味線を提げてチョコナンと据つて居た、臺所では妹が御味噌をすり初めたやがて掃除が濟むと妹が食臺を出して一週間振りで家内揃つて御茶を飮んだ。

評　明るい家庭

○夏　　大阪　植村　艷子

曳手に紅葉を挾んだ樣の障子も簾に變り美かつた庭も一つの緑に化してしまつた夏、思ひ出多い夏だ住みなれた田舍に名殘を惜んで大阪へ來たのは此夏三年前道子さんと悲しいお別れしたのも此夏去年初めて文樣にお目にかゝつて强い印象を與へられたのも此夏吁思ひ出多い夏だ今年も何かあるやうに思へてなりません。

評　暑いばかりが夏と思ふ人もあらう。

○心の裏　　琴　子

無意識に、只無意識に敏さんの御顏を描いて仕舞つた。ハッとして夜叉の樣な心から、ビリッと破つて丸めて捨てゝ、あのほんの出來心で、花子さんの御寫眞へ御香を上げて拜んだ事が思ひ出された。何故？　私はかうして御二人の仲を咀ふ心の黑い影に、泣き度くなつた。あゝ御二人は私の敵でなかつたに……

評　此時執念の蛇鎌首を擡ぐ。

○雨の日　　越後　美優子

五月雨がしきりに降る日窓をあけて凝乎と雨垂の落るのを見て居る靑い靑い名も知らぬ草が庭一面に活々とかゞやいてるし肌に透通る樣の風が吹いてくる自分は此まゝ其雨垂と一しよに土の底へすひ取られる樣の氣がする。

評　九天の壓迫。

○生の疲れ　麻布　草雲雀

團扇の未成品を自分の丈位まで差したのを兩手についてとぼ〳〵と夕暮の町を、髪を亂して浴衣はいて目ぐるはしい人の行きかひを無意識に歩む、お〻生きんが爲めの仕業か生活の衰へは血色惡しく頰に上る微笑は冷たきもの、あ〻、あゝして一日一日に生の疲れは用捨なく迫てくるでせうに、身の不安を思はないでせうか。

評　そんな事思ふのはまだしも餘裕のある人でせう。

○知らせたい　橫　笛

太い樫の木の下で胡蝶が二疋黑いものをかこんでヒラ〳〵と舞つてゐる。香も色も甘味もある大きい花とまちがへて寄つてきたのではあるまいか。もしも蝶と物云ふことが出來たなら私はそれを昨夜の嵐でこはれた雨傘だと敎へてやりたい。

評　そんな事蝶はちやんと知つてゐる。

○梅雨ばれ　愛媛縣　山口たけ子

ボーと谷間〳〵からたつ霧も消えてしまつて、空は次第に明るい濁りのない華やかな色となつた、波形の白雲が丁度織込まれた模樣のやうだ。雨上りの風は生々とした青葉をそよがせて此上もなく凉しい、何處もこゝも竿掛の着物が出された。

評　山村の小景。

○晴間なき雨　青森縣　野の菊

向ふも見えない樣に、霧のやうな雨が四日つゞいた、卵の花は皆くづれた。小さな弟は、羽織を頭からかぶつて、水溜りの出來た所を〳〵恐々ながらに、足を入れて見て居る。ガアガアと時々鳴屋根にとまつて二羽の烏が、秘密でも囁いてゐる樣だ。

評　お芋がたべたい！　退屈だ！

○空　想　土佐　桃のはな

友等の手紙を見、人々の書いてある物を見、聞いて私は故鄕はなつかしい物だと思つて居た、此んな物と思ひながら戀しい懷しいと、書いてもみた、が今離れてみると懷かしくも戀しくもない、何故だらう。私の頭は總て空だ、思切つて實際に觸れたい。

評　實際に觸れたいとは何んな事です。

○窓によりて　伊勢　露木雅子

半日の閑をぬすんで何か讀まうとすれば、生憎騷々しい蛙の合唱！窓押しあけて見やる西の山山は、すつきりとした夏の姿を惜し氣もなく現はして、其の山の上からでも吹いて來るのか、何とも云へぬ凉しい風が、漸う五寸程にのびた苗の上を渡つて、今し方ほんの數へる位ふつた雨にぬれた向ひの細道は恰度幼な子の泣き顏の樣にしめつて何となう風情が有る。

評　其上駄々を揑ねると泥道に成る。

○呼びやうで　四谷　羽衣

「すゞ」つて父樣に呼ばれるとハイと眞面目になる「すゞ子」と母樣がやさしくお呼びになると、「リボン買つて頂戴な」つて甘へたい。「おいコスモポリタンの先生」なんて兄樣が冷かすと「何んだバンカラ」つて云つてやる。

評　羽衣の君などは

○梅雨晴れ　三島　雪子

梅雨の空も今朝は名殘なく晴れて、樹々の若葉は美くしう洗はれた。小屋を追ひ出された鷄は嬉しさうに羽ばたきして、雛を連れて裏の竹藪へ這入る。垣根には朝顏が一輪開いた「ヤア釣瓶盜棒が咲いてる」と兄は不意に呼んだ、妹は不審さうに花と兄の顏とを見くらべて居る。

評　惡るい洒落を云つたものだ。

○小さきもの　京都市　要司村雁子

裏の笹籔の少しが引ぬかれて、日が照頃になると笹饅頭を食べた後のやうなにほひがする。表を寢せずに若い大工五六人、「梅雨は不可んねえ又降つてらあ」と、わい〳〵騷である、ふつと見ると青々した良い天氣、あつ又○○の小廻りする子が毎日晝休みになると皆に泣かされてゐるのです。

評　一寸面白い筆致。

○多　情　青森　とよ子

人は曰ふ、咲く花は多情にして散る、花は潔白なりと。今私の持てる牡丹一枝上は、もはや色香も失せ、白かりし花は汚れて散りつゝあり下には今咲き出せし雪をもあざむく白く淸く美しい花私は此の下なるを愛す。

評　開花を愛するを多情と云ふ、多情太佳なりと云ふべし矣。

○事務室　茨城縣　K　K　子

一寸其の火鉢をと、同僚のA先生がおつしやるので、はいとさしあげると、チャームする樣なお顏で、有りがたうとそしてきつと握手なすつ

た、私はハッと耳の方まで赤くなった様な心地して、胸の鼓動のたゞならぬを覺えた。

評　一寸御挨拶に苦るしむ。

○山　南千住　吉田　濃子

空は薄黑い雲が動いてゐる箱根山は煙の様な雲がたゞようて居てはつきり見えない近くの山は丁度草餅をならべた様に見える朝風がつよく吹くと高い山の木は皆風にゆられて朝の冷えた光りのある露をぽたくと下の木に又其の下の木にと落して行く。

評　多少の新味。

○女學生　札幌　安達　糸女

何故此頃の女學生はあんなんだらう。紫の袴をズッと下げて穿いて歩く、折目がちよつとどうかして居ると氣をもんで居る。人の家の前を過る時いやにのぞきこむ、溝があればそれまでのぞいて見る。百姓娘にはどうしても解りやせん。

評　溝を覗くのは妙だ、ふるつてる。

○濱家の人　松山　瀧子

初夏風の吹く藻臭い磯に小さな粗末な草家が一軒ある、そこには色の黑い男と女が居る、男は毎日網をつくろひながら淋しい聲で時々歌をうたふ。しかし女はいつ見ても默して小さい鍋で小魚を煮るその消えゆく湯氣を悲しい様な顔をして見てゐる。

評　ちと餘計な苦勞の様だ。

○窓　京城　中尾　艷子

裁縫教授所と看板のかけてある白壁の家の窓から若い女が一人こつちを向いて居る、アラひつこんだと思ふ間もなく三人の顔がニョッと出た私は空色のパラソルなゝめに七八間も行ってそうとふり返って見るとまあ嫌……此度は五六人の顔が重なり合ってこちらを見て居る私は妙に自分は若いと云ふ感じと一種の誇りを覺えました。

評　それは朝鮮の事ですか。

○鏡に向つて　和歌山　緋桃女

實際の處私は美人じやないわしかしさう惡いとも思はないわねえ御覽なさい鏡に映った面影を……色は青い程白いし髮は黑し其上この眼！これが私の唯一の寶よ表情のあるうるみをもつたこの瞳、何物をもチャームせずしては置かぱやと云ふやうな瞳のかゞやき……しかし惜しい事には少々お鼻が直線をはづれてる。

評　隨分と猛烈、如才もあるまいが降鼻術でもやつてはどうです。

○微笑　播磨　紫水女

鏡に向って微笑んだ、痩せたと言はれるのが何より嬉しい。湯上りの頰は光ってゐる。薄化粧をと取り掛った。「あら姉様お化の様だわ。」驚いて振り向いた。妹が莞爾。洋燈の光に眞白く映じたからであらう、何となく面耻かしい心地がした。妹は立つたまゝ微笑んでゐる。

評　これ位はまづ罪の少い方。

○若き尼　伯耆　新田　文子

向ふから、二人づれの若い尼さんが花はづかしき、顔をまる深い笠に隱し、墨染の衣裾短かに白の脚袢をはき、無言の樣で歩んで來る。妾は秋子さんと、又無言の儘で歩を移して居る、遂に妾らは若い尼さんと、摺れ違つて過つた。……暫くして後れふり向いて見ると、尼さんもふり返って、妾ら二人を視た。其時の尼さんの顔はさびしかった。

評　其心相距る一世紀。

○白葵　靜岡　さくら子

新しいライフに御入り遊した君子様のマダムぶり拜見したくつて云つてやつて今日で七日、まだ返事が來ない、怒ったんだらう、此頃私はなぜ妙に人の氣を惡くする様な事が書きたいのだらう、あゝもう自分で自分が嫌やになった、見るともなしに硝子越しに庭を眺めると白い葵の淋しい花がばさりと落ちた。

評　御尤に存じます。

○すみれのお山　長野縣　原　秋代

昨年庭のお山へ五ッ六ッ、すみれが咲いたので大切にして置きましたら、今年は、あのやさしい花が數多咲いて、今は葉ばかり、山一ぱいに茂つて、返り花でもさきさうな勢です、來年はどんなにあのお山を飾ることでせうか。

評　實に素直なゝ文だ。

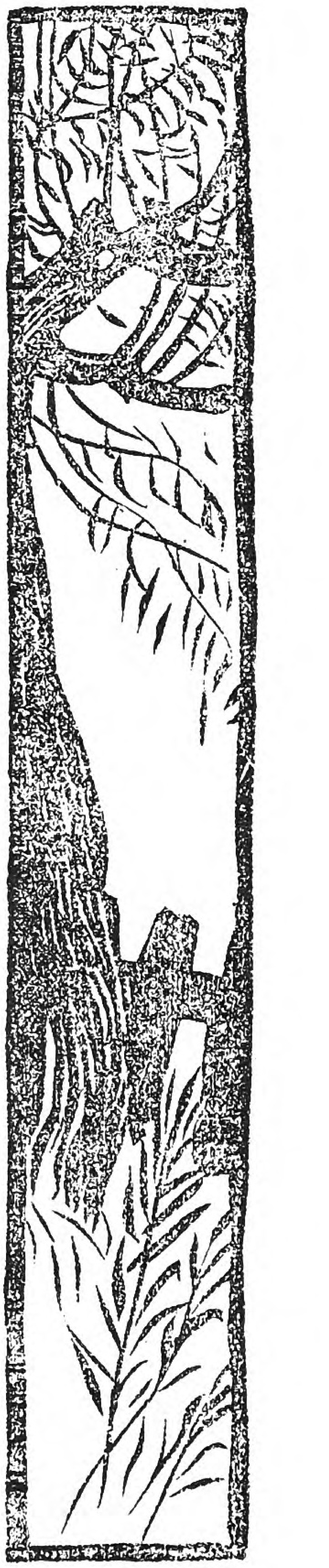
○櫛　淺間野露子

「お俊だらう鏡臺の引出しから櫛出したのは」と甯走った母の聲、私はギヨッとしてふところに手を入れた。俊ちやんは何か云って居るらしい、足音しのんで繼傳ひ部室にはいつて引出しの奥深くわからない様にしてはつと一息何くはぬ顔して裁縫をはじめた。

評　お俊さんこそ飛んだ濡れ衣。

俳句

内藤鳴雪選



○（天賞）

強弓を試す鎧や夏の月　横濱 樋口美都

○（地賞）

宮守の耳からも羽蟻立ちにけん　越後 藤原清子

○（人賞）

蝶一つ手取にしたり今朝の秋　神戸 森本豐子

【秀逸】

戀するも返歌に暑き夜なりけり　横濱 稔子

鶯のゆかりなるらん竹婦人　島根 森千代子

我心螢の火にも似たるかな　出雲 清子

五月雨や軒の雨だれ眠ければ　伊豫 黒田操子

梅の實のおちて聲あり院の庭　無花果

更科や早稲も田毎の月のかげ　ゆかり

繪心の起る夕べよ雲の峰　淺草 若菜子

喪に籠る老いの心や五月雨　秋田縣 紅雲子

秋風に夜明の岩や鳥の糞　京都市 娶司村福子

夏草や捨子の顔に雨細し　奈良縣 中富よしみ

神輿いま青葉の村に入らんとす　深川 生澤きく

三千の宮女集ひぬ今日の月　福井 片山里

水に映る辨天堂や風薫る　伊勢 田中みね子

草の香の窓を忍ぶや五月闇　三島 遠山雪子

夏の夜の白衣に嬉し青葉風　廣島 後藤壽美枝

東山また重なりて霞むなり　麴町區 佐藤いつ子

石地藏たゞ默しけり夏の雨　靜岡縣 壽賀

詩の友を訪ひて語るや夏の雨　本郷 夢見る花

網を干して村靜かなり夏の月　大阪市 植村艷子

長橋のたもとに來たり夏の月　信濃 淺田千代子

山の雨晴て雉子の高音哉　上野 茂木よしゑ

煌々と暗の田面や誘蛾燈　上野 深山白雪

夕立をつらぬく沖の入日かな　足利 君子

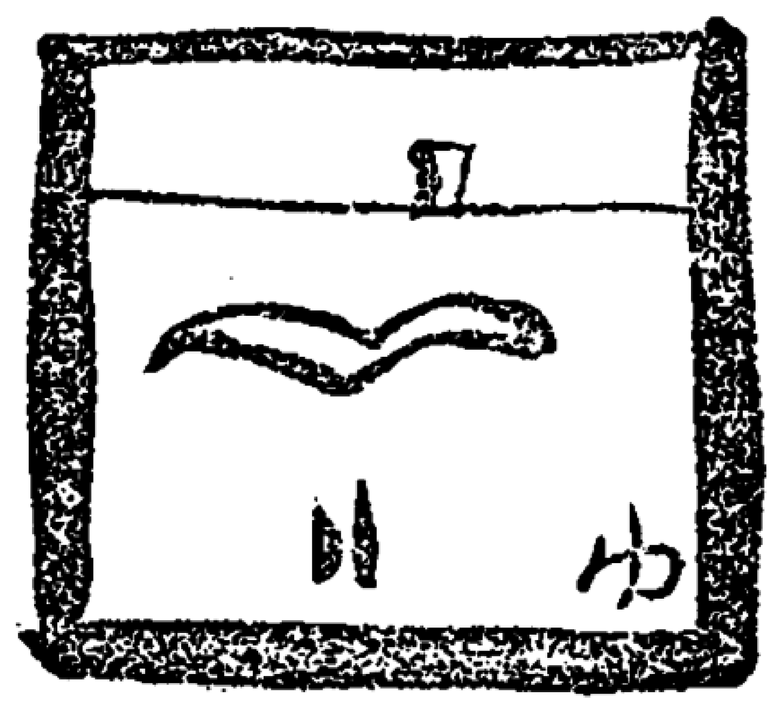
夕顔の花は萎みて蟲の聲　和泉 金田當美子

金魚賣佇む門の茂り哉　京都府 竹村槇子

釣鐘に浪の音あり夜の秋　横濱市 山崎京子

手向けし花に露かも涙かも　岡山　曙子
湯上りに風薫るなり薄化粧　伊豆　土谷すゞ子
紫陽花に喧嘩たえざる長屋哉　兵庫　紅雀
霜がれの野邊吹く風や松の聲　つれ〱草
あふち散る川邊の宿の夏に籠る　前橋　みどり
涼しさや船を數ふる橋の上　常陸　田村初子
時鳥大日山の空を啼く　下谷　吉見八重子
名月に琵琶彈き給ふ和尚かな　下關市　松山灘子
蚊遣すれば物思はしや夏の月　岡山市　立岡房野
夏山に散る遲櫻なつかしき　美濃　あやめ
梅雨霽れて炭掻く音の喧しき　淡路　留子
庵樂し雲立つ庭の岩淸水　宇都宮　松葉
小川ありて木影涼しや夏の山　京都市　平井ちよ子
五月雨やお茶いる人に猫の鳴く　筑前　笹つゆ
湖に水の溢るゝ月夜かな　秋田　すみれ子
羽蟻住む古臼薪に割られけり　出雲　長崎百合子
姉が蒔きし朝顔咲きて懷しき　茨城縣　竹内まさ子
白百合に郷なつかしの想ひ哉　伯耆　足立春子
やり水に青葉ゆかしや夏の月　枯柳
筏やる人のはだかや夏の川　京都　三宅壽賀子
泉水に泡ぶく〱と暑さかな　群馬縣　雪枝
筍や杉の林に伸びて居る　愛媛縣　石川喜代子
人待て來ぬ氣疲れや遠水鷄　京都市　町田てる子
夜の露ふみつゝ野邊の涼み哉　とよこ
夏木立瀧にきはまる一路かな　大阪市　田中たね子
千尋する谷の霞に礫かな　三島　村瀬繁子
遲れじと起きたる床や月明り　伊知子
行春や勿來を越ゆる都人　丹波　隅田れい子
丸窓や人の顔出す春日和　信濃　二枝よし子
青簾曾呂利は近う參りけり　三島　幽富
行く人の紺の蛇の目や花吹雪　兵庫縣　山本あき子

綠陰に一人田植うる女哉　京都市　紅狂女
秋立つと竹に寐覺の眼かな　大阪　不二女
夜泣して疎まるゝ子や郭公　越前　宇佐美民子
夕月に薄の花のゆらぎ哉　麴町　牧野銀杏庵
青桐の下を飛びかふほとゝぎす　松江市　白はぎ
そよ〱と春行く軒の綠かな　伊勢　若林綾子
秋雨や斷橋に立つ鷺一羽　菊地まき
春の日や末の妹と添ひ寢して　札幌　由喜子
菜の花や川をへだてて君の家　遠江　富永雪子
蜩や岩より岩へ丸太橋　丹後　壺内文子
夕すゞみ恥しき人にあひにけり　佐渡　美穗子
夏痩の怨みに曇る鏡哉　千葉縣　石井よし子
山里に更け行く秋の時雨かな　上總　森婦美子
手まくらに現心や蟲の聲　下谷　林久榮子
海の月寢ながらに見る廣間かな　大阪　橋本久惠
夏の人アークの下に集ひけり　長門國　伊藤三重
湯豆腐に紅葉ちりけり峠茶屋　山口縣　椰瓦美那子
蚊やりして浪の音きく濵の家　播磨　藤井梢
奉燈の光薄れて夏の朝　京都　齋藤香野子
五月雨の土産を光る螢かな　大津市　白萩女
句成らず人の聞えや水鷄鳴く　新潟市　吉田かはる
下町や蠅のむらがる牛の宿　上總　鶴岡一二三
瘦せて行く何某の頰や秋の風　遠江　川瀬宮子
少女子の頰吹く風や茨の花　德島縣　あをなみ
落葉して禿げたる山と山と哉　麴町　牧野はん子
夕月の若葉に誰ぞや白き顏　下谷　石山孝子
苗代や筑波の風が吹き下し　麻布　中村操子
女負ふて渡る人あり夏の川　下關　松岡千鶴子
五月雨にまだ珍しき螢哉　大津市　天津女
野の道のうねり〱て梅雨晴るゝ　下谷　松本清子
新茶煮て富士の浮雲見る日哉　東京　田代房尾子



誌友 作家の進境

一記者

下

蒲原早蕨　地方素封家の令孃、他の誌友のやうに周圍の制裁や、壓迫が少く、隨つて作物も光明的であり快活である、主觀的のものより、客觀的の描寫に成功してゐる、主に增刊の時ばかり興味ある原稿を投じて平素は餘り顏を出さぬのは何う云ふ譯か分らぬが、好んで多作する方でないのは確かである。東京の上流生活をしてゐるお孃樣は滅多に文筆に親まないやうだが地方だけに他に氣が散らないのであらう、兎に角境遇が分つてゐると猶本誌の一異彩であることを思ふ。

安木春子　鳥取の人、容易に上達しなかつたが、此二三月以前から、優れて個性を表はしてきた、散文が尤も好い、觀察も細かく、新しく、また女性としては鋭い處もある、願ふは後戻りしないやうに、張りつめた心を緩くしないやうに。

あららぎ　投稿家の大部分は關西であるが、獨り東北に在つて、天然の描寫を縱にするのはあららぎの君である、君の文は甚だ短い、蘆花氏の「自然と人生」から學んだかと思はれるやうな瞬間的の自然描寫が多いけれど、山を描いても、野を描いても、新代人の眼に映つたといふことが明かに出て居る。

三島葭子　葭子さんも能く投稿に努める、圓滿なる思想は其文章を透して窺ふことが出來る、文章には何等の他奇もないが、近者其作る處の和歌には、なかなか侮るべからざる機才が見えるやうだ。

金田代志子　詩壇最近の活動は目覺しいものであるが、選者が本號に於て一鞭を與へたのは强ち無用ではなからう、君は才人である、詩の外に文も行る、文は技巧が災をして、女性らしい情調の流動を見ることが出來ない、やはり詩であらう、今の處詩壇の唯一人であるから自重して宜しからう。

原田琴子　山村龍子の時に批評した通り、歌壇の双璧だが、兩人とも進步がぬるい、近頃の歌壇は大いに賑からしく見えるのに、ちつと振ひたまへ。

伊達まつ子　之も和歌がうまい、增刊に能く顏を出す、此人は何派何派と云ふやうな色合がついてゐない

だけ、將來に發展する餘地がある。

夕ほし　實際的家風と云つたやうな一つの調子に得てゐる處があつて、其文章は多くの人に面白く讀ませる、皮肉、揶揄、到らざる處なく、而かも一味の眞面目なる暗流が、其言葉の底に流れてゐる、一圖に表面だけの文字に眼を注いでゐると、作者の眞意を誤ることがあらう。

常世草　夕ほしより新しく來た人で、何處か似てゐるが、更に、齡も若いらしい、强ち實際的とも限らない、文學的の才能も持つてゐる、今後の活動者の一人であらう。

美耶　まだ何で伸びる人か分らない、比較的和歌が進みさうに想はれる、文章も無邪氣な、雜り氣のない若い文章を書く、此君も齡も若く、修養も淺い、都會式の淺薄な誇張を眞似ないやうに、誠實に根底を築いてゆくやうに願ひたい。

佐分華影　美耶に次いで記者は尾張の佐分華影孃を聯想する、何故であるかと云ふに、あて字が多くて原稿に朱を加へることも多いからである、二君の類似點はそればかりでない、華影君も、天眞爛熳なる少しも僞りのない生れたまゝの文章を書く人だ、字が亂雜な爲と、文脈が顚倒してゐる爲に、善い處がありながら能く落伍するのは、氣の毒だと思つてゐる、少し注意すると確に頭角を表はし得られる。

白光女　都會の婦人の批評に此名を用ゐたが外にも投稿をしてゐる人で、文章は硬い方だ、硬い爲に一寸立脚地を得かねて、眼にはつかないが何か一つ長所を發揮する工夫がありさうなものだ。

若杉とり子　解放されたる若き婦人を代表して、言ふことが放縱であつたが、また忽ち沈痛な調子に變つた、其文章を見たゞけでも、如何に數奇を極めた生活をしてゐるかゞ察せられる、併し生活の窮地に入れば入るほど一個人の反抗といふことが、甲斐なきものであるといふ自覺が來て、服從心も起り、愛他心も起るのが、人間としては上出來の方で、甲斐なきことを知りながら猶ほ反抗を絶叫するのは、多くは上出來の人間ではない、此意味に於て白山吹の一文を重んじて見たのは夜雨一人でなかつたのである。

木村那賀子　若杉と同じく常陸の人だが、才氣は遙に及ばない、併し此君もなか〱根氣よく作る方だから前途はある。

加藤菊子　淡路の人、文章は達者だが未だ一家の長

所を見ない、此君に似て、なほ整はない文章を作る。

沼倉馥子　がある、折々奇拔な觀察をするやうだが未だ心が練れてゐない。

鈴蘭　の君も世間並の婦人よりは、世の中を觀ることとが巧みだけれど、未だ表はし方が淺い。

片山千里　誌上ではかなり舊い方だが、進歩も退歩もない、無事。

新田文子　文子といふ人が、山陰道に二人あつて紛はしいが、論文を書く新田文子君は、論文家の素質はあるやうだが、論題が新しくない。

笹舟　詩に於て田中落葉の君に似て、なほ一つの大いなる溝渠を隔てゝゐる。

野の百合　おとなしい文章を書く人、自然を描寫するにしても、ありのまゝを正直に、ゆつくりと書いて行く質で、あやまちが少い。

木村みしず　越後の人、小主觀に囚はれてゐないだけ、何處かおつとりした處があつて、文章の性質も甚だ善い、或る情を抒べるといふことは不得手らしいが或る事の進行を叙べることは巧い、願はくは、今少し刺戟的の分子が欲しい。

曉花　同じく越後の人、中途から雅號になつたから分らないが、誌友としては知れてゐる人、ハキ〳〵したことを云ふかと思へば、氣が拔けたことを云ふ、出來不出來の著しい人。

要司村福子　京都大阪には文章の上手な人が少い、昨今少し出て來さうに思はれる、此君も誌友會でも開かうと云ふ勢ひのあるだけに、乏しい中では取るべき人であらう、まだ何の方面に發展する人か分らないけれど、文章は癖の少い方だ。

桝崎佐喜子　書くことは眞面目だけれど、頭腦はふるいやうだ、覺醒すべき要あり。

コスモス　文字を今少し叮嚀に書かぬと損だ、一寸世にすねた態度もあるが、醇和な情緒は筆路に見えてゐる。

流水女　小笠原ゆり子と共に小說壇の新進である、二人とも巧みだが流水女の方が、女らしい個性が著しいやうに思ふ、自然、小說といふ技巧を忘れて、散文になつて了ふやうだけれど、今の處は何れでも可い、文章さへ眞であれば發達する。

以上の外に、なほ洩れた投稿家の中で、進境の見えつゝある人も四五にして止まらぬ、けれども書いて行ても際限はないから、一先づ此處に擱筆する、他日更に筆を改めて、目覺しき誌友の進境を語る日の遠からざることを期待するものである。(終)



誌友倶樂部

御見舞を謝す

○時ならぬなが雨に不幸なる大洪水を招き候折から記者樣皆さま御恙もなう在しまし候や、新聞などには京橋區浸水の記事見當らず御社は定めて何の御被害も在さぬ事と陰ながら御喜び申上候八月十四日（青山、町田靜江）

○夕暮のすゞろ歩きにやう〳〵人心地つき候程の候と相成候、折から御一統樣御恙も在しまさず候か、くだりて私先頃より此浦にうつり來候て岸打つ浪の音はた裏山の松翠を樂しと聞きつゝ恙もなく過し居り候まゝ憚りながら御心安う思したまはり度候これよりはなほ一層のきびしさに候はんと存じ候何卒くれ〴〵御自愛たまはり候やう願上候、かしく、八月三日（二見にて、野の百合）

右御兩名を初めとして、今回の洪水に就いての鄭重なる御見舞並に暑中見舞をたまはつた諸孃は左の通りです、出水の爲め本社は直接何等の被害もありませんでしたから、御安心を願ひます、社員一同恙なく編輯に從事して居ります、なほ御見舞を下さつた方の中には美しい繪はがきを送り下さつた方もありますから、其等の方は姓名の上に▲をつけて置きました、併せてお禮申します。

▲山城、文子▲三田、夕ぼし▲越後、井上貞子○越後、安中婦久○神戸、田中落葉子○浜城、田村はつ子○房州にて、とし子○韓國、笑子▲德島、吉田こま▲横濱、鈴木まつ子▲伊豆、土谷すゞ子○大阪、伊藤みさ○神戸、百合香○周防、酒向とし子▲福岡、建部らく子▲須磨にて、三宅壽賀子○大阪、あい○久榮子○大阪、木丁春江○名古屋、胡蝶▲神戸宮本綠髮○喜代子○山本みつ○福岡縣、たか子○夢可子○淡路、加藤菊子○長岡、嘯花○和泉、金田代志子○近江、佐和田芳子○神戸浦上百合香○鳥取、櫻草○麻布、花子▲土佐志毛子

讀者と記者

○橋本いちさんに、各縣下御巡回の由、お尋ねの投稿の件は勿論差支はございません、風景の寫眞お送り下さる由欣んで揭載いたします又誌友くらぶの原稿はハガキに限らないのです（記者）○京都百合花さんに、御熱心なお心がけは分りました、好い作をお出しなさいませ（記者）○UMさんに、四五年間愛讀の上、今回初めて御投稿なさるさうですが、然う云ふ方も少からず御座いませう（記者）○上月玉子さんに、書き方は宜しうございます（記者）○谷川清美さんに姉さんと同封でも結構です（記者）○踏の里さんに、詩はなるべく十六字詰にねがひます、けれども文章と違ひまして字詰は然うながくなる場合が少いでせう（記者）○破竹さんに、何うぞ御投稿して下さい、いつからでも（記者）○山口美代子さんに、和歌俳句等は半紙に限りますハガキではいけません、圖畫は二寸に三寸の大きさといふ規定です（記者）○京都伺ひ女さんに、圖畫切符のことお尋ねですが、成るべく切符面の額正當のものがよろしいので、餘り超過すると都合がわるいでせう、郵税も殖えるでせう、なほ御注意しますが切符に書いてある出版元の書籍に限ります（記者）○ホワイトローズさんに、

和歌を投書なさるのなら其通りでよろしい（記者）○境野逸子さんに、妙義山の繪はがきありがたう（記者）○京都二少女さんに、御注意の事は能く分つて居ります、何うぞあなた方の間では猶は更直接の關係がありますから愼重の態度を取つて下さい（記者）○長瀨しづえさんに、御尋ねのことは一向差支がございません（記者）○此外一々お名前は擧げませんけれど、原稿に添えてあつたお手紙は凡て拜見いたしました（記者）

交際を望む

○成績　愛讀の皆樣に私の交際の成績を御目にかけます

本年七月一ヶ月間の成績表

來　信　數（廿三名）内寫眞十二枚入
　　　　（卅八通）内端書十八葉封書廿通
私發信數（廿五名）内葉書廿一葉封書廿四通
　　　　（四十五通）寫眞十一枚入
交換數（十一名）内小說九部
　　　（十五點）繪葉書廿五枚
無返信人
不人情人　合計九名（内書籍一部書簡八通）
合計　九十八件
　總經費高六圓五十六錢五厘

右の樣なる好成績を得ました是れ親愛なる姉樣方の賜物に外ならず此後も是以上の好成績を得たく存じますから是非御交際を願ます但し男子の御方には返事は出しません（兵庫縣津名郡廣石驛三百十一林光枝子）

○海外より　母國誌友の皆樣よ私は一昨年渡米いたしましたのですが何分當地の風俗に馴れないので誠にさびしく暮して居ります恐へばなつかしき全國の諸嬢樣よ願くは寫眞及びレターを御惠み下さい御禮には洋畫肉筆及び繪端書にて必ず御返禮いたします住所左の通り

坂中文子

F. K. Sakanaka 124½ East St, Third. St
Los angeles. U.S.A. Calif

○米國にて　本誌愛讀の姉樣妾は米國に在ます無學無才の者ですが何卒永遠の交情を願ひたい者です夫れでね！妾は繪葉書を御交換を願ひたいです妾し日本の名所舊跡等の寫眞が何よりなつかしく存じますのよ若しね！諸姉の内にね！英文武士道不如歸外當地發行の日本新聞御好みなれば御一報次第直ちに御送り申します（木村久子）Miss. H. Kimura RFD 101 San Fernand Cal）

○奉天より　皆樣私は日露戰爭で、大會戰のあつた奉天に、友も無く住んでをる者です、これから御交際願ひます、永久に、又エハガキ手紙なども下さい、こちらよりも西洋エハガキや、奉天エハガキを送ります、十餘種の古雜誌、三百冊ほどあります、ハンカチ、リボン、しをりなどゝ交換して下さい（淸國奉天城内大西門、井深彦三郎方爲子）

○東京にて　妾は東京の誠に塵の多い處に友もなく淋しく暮して居りますの、どうか御姉樣方よ御繪葉書や御寫眞の御交換を御願ひ致します屹度御返事すぐいたします地方の風景寫眞ならなほ結構よ（東京日本橋區新乘物町十一寺島内林芳子）

○信濃の奧　私は信濃の山中に淋しく暮しておます妹として可愛がつて下さる方はお交り下さい一時的はお斷りいたします（長野縣北安曇郡松川村一八四櫟葉安子）

○一言　先月交際を求めなさる方に澤山手紙をさしあげても取り切りつで京都の志奈子樣だけしかお返事を下さいませぬ、あんまりなさけないと思ひます（なでしこ）

○本年の八月から　本誌を愛讀いたしましたねがはくは同情ふかき姉君よ今後長久に御交際をねがひます（近江國甲賀郡水口町依坂、小島萩子）

○しばらく　誌友の皆樣、私は或る言ひ難き事情の下に御懷かしき皆樣や本誌に久しうも打絕え申しましたが別して御變りも御座いませんか、以前の如うによろしく御交際を願ひます次に私は最近の方と、悲觀なさる方と、詩、和歌を好む方と、近境に在る御方と御交際を願ひ度う存じます右の御方は住所御芳名を本欄まで（濱松、平岩白菊）

○皆樣　お手紙を頂きたいものです、御見捨なく（近江國蒲生郡苗村山之上寺島代富號里の夕）

○草花の種子　誌友の皆樣毎々御玉章有難誌上にて厚く御禮申します、就きまして皆樣の中に撫子、矢車草、孔雀草、帝王貝細工、金盞花等の種子が御入用でしたら、女子文壇の如き好き雜誌か繪ハガキ（五枚）御送り下さい、右草花五種送ります（大阪市南區天王寺大道三丁目松澤豐

子）

○音樂好き　御懷かしさの皆様私は通學の傍ら文學と音樂に趣味を有しますもので同趣味で御深切な方が有りますれば御交際を願ひたう存じます又お手許に手風琴御不用の方が御座いましたならお讓り下さいお願ひ申します（東京市淺草區老松町六番地高橋倉職方和田しげ子）

○土佐！土佐！　あゝ土佐よ、土佐は私の爲には淋しい悲しい思出の國です友も無い親も無い私の故里は土佐です、あゝ土佐よ淋しい冷い私の故里です、冷い故里は捨て易い故里、今去るに及びましてはさすがに十八年育てられた山や川を思はねではありませんけれど、同じ冷い饑い人々等の中にまじるよりは、冷めたくてもかまはない、おくればせにでも新しい人々の後に從つて行きたいと思ひます、音信は絕えてるけれど二年の間親しく語つた友等よ、私にはなつかしい友等よ、そして私を知らない友等よ永しへに安らかに離れ島の山や川を守つて下さいそれでは私は去ります、永しへにまさきくあれよ、土佐の友等よ、山よ、川よ。（もゝのはな）

○學生の方　都の方へ地方から東京へ出て學校に御通學の方永久に御交りを願ひます……茨城のお方なら尙一層うれしいのよ……（茨城縣新治郡土浦内西町酒井方吉田李都子）

○朝顏種子　皆様の内で珍らしい朝顏を培養して入らつしやる御方は種子をおとりになりましたなら何卒下名へ御送り下さいまし、田舍乙女に相當な御禮はいたします（越後柏崎下町橋本とふ）

○十六歲　誌友の皆様、私は田舍生れの至つて不束者ですが未來永遠玉章の御交際を願ひます、成るべくならば同年の方に私しは十六歲です（土佐國香美郡山田町小松小枝子）

○訪問　八月號に變性といふ見出しで男子でありながら女名を偽るとは何といふいまはしい事でしようねだから私らも思ひますのよ遠方の諸姉は玉章でないといたし方がありませぬが近くの人々はたがひに訪問しあつて思想の交換をすれば淸く美しき親密なる御交りをいたすことが出來るだらうと存じますのよ、もし京阪神地方のかたにて御同感の方は御交りを住所氏名は誌上にて御知らせ下さいませ（大阪、玉川）

○病氣　妾は今は病氣に襲はれて空しく靜養の身となりました、實にわびしいものは病床です、繪はがき其他の交際をねがひます（美濃國加茂郡黑川村遠見場六二加藤宿舍内、一子）

○靜岡縣の御方に　靜岡縣大塚金子様同縣鈴木若草様好古様石川みき子様波多野いち子様袴田さと子様原田山吹子様、私事チト御尋ね申たい事御座いますので御住居を承り度いですが御差しつかへが御座いませんでしたら誌上で御知せ下さいませ（野深の綠子）

○英文　私は近來英文研究中なのよ願くは諸孃様方及び外國人の御方と會話の一節でも御交換を御願ひたう存じます御自筆下さいまし（熊本縣上益城郡大島龄、藤澤方、松浦澄子）

○鈴鹿の關より　私は前號から本誌の新愛讀者となりました誌友の皆様不束者ですが何卒末長く御交際遊ばせ縣下の御方に何より親しく交際を（三重縣鈴鹿郡關町中町ノ二渡邊まさ子）

○ハイカラ　米國に居らつしやる方で交際して下さる方ありませんかしかし英語なぞは出來ませんからそれからリリーオフゼバレーさん音樂が貴女おすきなのでしよ私は音樂と來たら夢中になるのですのよ私はヴアイオリンオールガンは每日やつて居ますのよそしてハーモニカは十四五の年からやつて居ましたの貴女はなんて方か分らないけど早くしらして下さいな昨日（八月十一日）七夕の日に大阪の高等商業にいつてる學生とその學生の妹と合奏したのよ私がヴアイオリンでその學生がハーモニカ妹が箏で千鳥の曲を、記者様あまりぞんざいにかいてあるからいけませんでしようね（吳市吾妻町二ノ二高橋かず子）

○趣味　秋に向ひ勉學の時期になりましたよ本誌御愛讀の諸姉上よ私は非常に文學を好んでおます無學女ですが其の趣味のある事は大したものですよこれから出來るだけ修養して行かうと思つておますから永久に御交際して頂き度いのよ（熊本縣上益城郡上島村、米村友子）

○秀才なる方に　なつかしい皆様方よ私は文學を何より好みますけれど淺學の爲悲しい事に投書も出來ませんのですが親切なお方は御交り下さい秀才なるお方よ何卒御導き下さい（群馬縣山田郡梅田村森下仙子）

○音樂の教師　私は音樂家ですが皆々様に御交際を願ひますよピアノ、オルガンを出教授致してますがハーモニカ、ハンドオルガンも敎へますよリリーオフゼバレー様には是非〳〵御交

際を御願ひ致しますよ（東京市牛込區加賀町二ノ二四與音樂）

○五六人●●●　六月號にて交際をもとめました所たくさんの人から御玉章頂きましたが其內で今尙忘れないで御答を下さる方は只五六人です他の方は返事をさし上げたばかりで其後何の事も御座いませんのどうか皆樣一時的でなく永久に御交際願ひますよ（島取縣西伯郡米子町佐々木とき子）

○田舍少女●●●●　私は昨年六月より本誌を愛讀致して居りますあはれな田舍少女でございますよ御同情ある皆樣私を永久に妹と思し召し御交際下さるお方がありましたら下名へ御玉章おめぐみ下さいよろこんで早速御返事致しますよ（神奈川縣足柄上郡南足柄村、田代伊智子）

○俳句交換●●●●　妾は此頃やつと獨りで作る樣になつたのですが斯の道を研究するには先輩の方々と葉書で交換し評をして頂くのが第一たとのことですから同好の御中にて永久の御交際を願はれる方は御座いませんまいか（市內下谷區御徒士町二ノ十六、谷口梓子）

○何に限らず●●●●　花より織しき全國の孃樣よ寫眞アルバム筆蹟玉章等御惠の御方には私の見苦しき寫眞手製編物水彩畫リボン雜誌等にて御禮致しますから何に限らず御惠を下さい（栃木縣田沼川新吉水奥澤やす子）

○轉居●●　私事水害の爲下記に轉居候間諸姉方よ以來は下記へ御宛てな希ふ又改て親愛なる諸姉方に永遠御交際を願ふ（芝區松本町七長井方神山）

○愛讀者●●●　皆々樣の中に永續的にしかも眞心よりの交をしようと思ふ方はありませんか一時的や利慾的の交はするに足りません永久に眞の友として智識を交換するが有益と存じます（橫濱南太田町一〇一五、さゝ舟）

○轉居●●　兵庫東出町二丁目二〇一足立春子

女子文壇京都愛讀者會の案內

京都及び京都附近の女子文壇を愛讀なさる皆樣方に御案內申ます。

此度、不束ながら私共が發起いたしまして、愛讀者の會を開くことにいたしました、何分斯う云ふ會を開くのは始めのことでございますし、無經驗の者ばかりでございますから、皆樣に充分の御滿足を與へることも出來ますまいけれど、皆樣の中にも集つてみたいと思召す方が、少からずおありのやうであり、且主筆河井醉茗先生初め、本社各位の御賛成もありましたので、愈よ會を開くことに決めたのでございます、何うぞ皆樣、左の各項を御覽の上、お誘ひ合せて御來會をお待ち申ます。

●時日●　九月二十五日　正午半開會、五時半閉會。晴雨不論。

●場所●　北野倶樂部（北野神社畔）電車東廻線ならば堀川下立賣にて乘換西廻線ならば乘換を要せず、何れも北野で降り神社の東側を上ること約一丁。

●會費●　金五拾錢（當日御持參の上、出席者の御姓名と共に受附に御渡し下さい）

●出席●　出席は御婦人方に限ります、係員の外男子の入場は一切お斷り申ます

●來賓●　當日來賓として御出席の承諾を得た方は左の通りです、なほ此外にも御都合伺ひ中の方がございます。

裏千家宗匠今日庵夫人　同　御母堂

上村松園女史　橫山法學士夫人

右何れも席上のお話を願ふてございます。

●餘興●　對話、活人畫、箏、八雲、仕舞、洋樂、朗讀、蓄音器、摸擬店、福引、其他

●申込●　出席希望の方は九月二十日までに京都市堀川通今出川上る要司村方女子文壇愛讀者會幹事宛に御申込下さい

發起者

濱部照子　川田登子

要司村福子　中川志奈子

町田てる子　松木絹子

藤岡ゑい子　三宅壽賀子

明治四十三年九月一日

繪葉書を好む

○水彩畫及び日本畫をお書きなさる 四方の姉上樣方に肉筆の繪葉書交換 お願致ます其外風景繪葉書のおこのみの皆樣方に 何卒交換を御願申ます 返禮は同枚數にて必らず致ますからそれから末永く文通の交換もお願申ます（山形縣北村山郡西鄕村大字名取那須かずを）○誌友の皆樣妾先月の文壇を拜借致しまして 瀧の繪葉書を懇望致しましたら 遠近の皆樣から澤山送つて下さいました信州の高木樣東京府の富澤樣 淺草の三木樣尾張の佐藤樣越後の中條樣 羽後の大塚樣其他數ある皆樣澤山送つて下すつてほんとうに 嬉しう存じます 改めて誌上でお禮申します、 尙誌友の皆樣一枚なりとも瀧の繪葉書が お有りでしたら送つて下さい お禮は例の會津の名所繪葉書でいたします（會津、 伊勢子）○持合の上田名所三組ほどありますから、 お早いお方にはさし上げます（長野縣小縣郡上田町天神町齋藤たみ子）○誌友の諸姉樣方の內に神社、 舊城、學校、銅像、寶物有名なる瀑布 及岩石等の寫眞はがき夢二畫集、 鏑木淸方畫、小說繪はがき、 同先生畫癖十種文學圖書等御所有の御方は私の宇和島風景 はがき、和洋肉筆はがき、紀念はがき、舶來はがき、 及樂器、圖書、雜誌等と御交換を願ます （伊豫宇和島裏町貳丁目武村內にて、武村芳花）○滿天下の御姉上樣方よ妾は或る事情の爲めに 二ケ年ばかり購讀を止めて居たのでしたが 又々皆樣の御仲間入りを致しますから 宜しく御願申しますそして繪葉書や御玉章の交際したいのよ 妾の里は海岸ではほんとに景色の好い所なのよ 地方の繪葉書ドツサリありますから 皆さんも早く送つて下さいすぐ御返しします （茨城縣那珂郡石神村竹瓦五の四仲田百合子）○誠實に繪葉書の交換をお望みの御方樣なれば 妾しも繪葉書狂で姉妹共もに笑はれて居る者ですから 其中妾しは諸國の名所繪葉書が一番に望みますから 名所繪葉書にて五枚以上ならば何枚お送り被下ても 必ず御送り被下たたけの枚數にてやはり名所繪葉書にて御返し 致しますから 是非〳〵 交換して 頂戴よ（岐阜縣加茂郡三和村廿屋 柴田鐵四郞樣方にて青木みよゑ）○只今當地の風景繪葉書三十枚ほどありますから御送り申し升 場合によりてはみにくき妾の寫眞も付そへ 品物相當の御禮を致しますから何卒御交換下さいね （千葉縣長生郡二宮本鄕村新町加曾利よし子）○四十三年一月中に上野公園美術協會內で 國民新聞の主催による維新志士遺墨展覽會の紀念端書御持ちの方は 私は美人、 風景はがき、早稻田文學、三田文學、飯森の物理全書、吾輩は猫、 吾輩はフロツクコートなどと情願か交換願ます （淺草北富坂町十七增野方新井南風）

○德島縣麻殖郡牛島村、 鈴木爵美子
○長崎縣南高郡島原村、 山本鈴子
○橫須賀市湊町六十三石井方、 猪狩すゞ子
○伊勢宇治山田市常磐町龜谷病院內、 岡田てる子（伊勢名所神宮の分を送る）
○東京下谷區谷中淸水町三、 佐藤俊子（舶來の子供又は花を望む、 御禮は安房名勝又はハンケチ）
○東京日本橋區小網町二ノ十二山本方、 白百合（私の鄕里近江八景を懇望す）
○京都市室町五條上ル松山作次郞方玉子（名所風景を所持す）
○大阪府西成郡粉濱村 大阪合同紡績住吉支店受附係、 湯川幸子（住吉公園を送る）
○上野長野原町、 茂木百合子（美人と風景）
○京都府相樂郡瓶原村字西、 山岡半右衞門方雪子

個人消息

○リリーオフゼバレー樣 私音樂は何でも好きで御座いますから 何卒御交際をお願ひ申ます （淡路三原郡賀集村、 加藤美香子）○君香樣今何所に居しやるの誌友會後ちとも お遊びにいらつしやらないのねお忘れ遊ばしたの ちよい〳〵上がるつて仰つた事を 私のもとの家ねー貴女の懷しい母校の長○○○子樣の お妹さんがお這入遊ばしてよ正しそうな方よ、 お遊びにね待つてる事よ。（美子）○平塚白百合樣へ、 先程御逢ひ申しましてからと云ふもの眞實に私 あの御美〳〵しいお姿を明暮目に浮べて 居りますの、 こんな遠い處にまゐりましたもんで御ざいますから御なつかしう御ざいますただ 本誌のみを友として樂んで居りますから何卒勉めて御投書遊ばして 下さいませ、 私の在所はあれで差支はございませんの今日も御手紙で 直接差上る處ではございましたが承まはれば 今度溫泉場とかにいらしやいますつてね 若しや御留守の處になど屆きましたら却て失禮と思ひまして 誌上を拜借いたしました次第でございますどうぞ御歸りになり ましたら御知らせ下さいませさようなら （熊本縣上益城郡木山町緖ヨシヲ樣方、 橋本いち）○宮城縣相馬郡神路町の草野信子樣、 紹交狀態も恰度半

年、長いと言へば長いやうなものゝ、私は未だ昨日のやうに思つてゝよ、私は惡かつたのよ許して下さい、すまない〳〵とは思つてゐましたが今の御住所が知れないものですからつい失禮いたしました、これをごらんになつたらすぐ誌上でお知らせ下さい。（東京市小石川區大塚坂下町一三六赤尾方阿部霧子）

○大阪の村上春江樣お懐かしうございます、其後、如何？毎日おうつしゑ拜見して樂しかつた過去の夢を語つて居ます！御近況お洩らし下さいませ（筑紫にて柴田百枝）

○岐阜の楯粧子樣——ハーモニカ至急送つて下さいな、妾ほんとに、一日千秋の思をして、日々待つて居ますの？送つて下さらなければ懐中時計を返して下さいな、一寸誌上を拜借して。（因幡春江子）

○京都の松尾露子樣ほんにお懐しうございます先月の誌上でお便り有りがたうよ、貴女も其後お變りありませんつてね、私も幸ひ無事よ、それから御待兼ねの妾の寫眞がやう〳〵出來ましたお送りいたしませうか早速書面で申し越して下さいな。（岡山曉花子）

○丹後の壺内文子樣！おなつかしう御座います、私も御同感和歌や俳句が非常に好きでなりませんがまだ初心なので如何仕てもよいものが作れないので困つてますのよ、どうぞ永久に親しく御交り下さいましな、尚は絵葉書や御玉章の交換も願ひます、折角お大切に。（丹波何鹿郡志賀郷村字西方、大槻幸子）

○尾張郡井君子さん廣島手島まさ子さん、越後志賀睦子さん御すこやかの御事と以上の方の住所御存知の方は御知下さい御禮は屹度致します（周防國田布施村藤井しらつゆ女）

○夕ほし樣お懐しさにいつも美子樣とお噂しておますお本名も承知してをります誌友會の折は是非御目にかゝりたくて幾度も先生を責めました同區の方は誠に慕はしうございます若し御交際をお許し下さればうれしく存じます、今は御家を離れて却つて御自由な生活なさるやうに傳承いたしましたが、如何でございます（麻布、花子）

○米國紐育に御いでの愛讀女さま貴女は故國を離れて異國にある御身故故國の有樣など知りたい爲めに玉章の交換や繪葉書交換を誌友の皆々樣へ願ふのに何と薄情な人達でしよう私も繪葉書の交換を願ひましたが大阪の方の方は一人も御返事がないのですもの實に驚きましたこれからは姉上樣何卒〳〵此後親密の交際を願ます（府下、三河島、三四、保坂方、一枝子）

○長野縣の本誌愛讀者下枝よし子さま失禮ですが次號で御住所御知下さいませ御手紙上たいのですが村の名がよく分りません（信濃上諏訪伊藤あさへ）

○青森縣青森市浦町にをつて女學校に通つてをられた淺井たけ子さんは私の親友でしたが、二三年前より便りがさらにないのです今は青森にをらない樣ですが何卒諸姉樣お知りの方は下名までお知らせ下さい御禮は必ずいたします。（長野縣小縣郡上田町天神町齋藤みさを子）

○大阪の方にお願ひ致します、十年程前に西區新町アコヤ町とかにサトノ樣（姓は忘れましたが五十歳位な方）と仰有るお學の先生がいらつしやいましたが現在の御住處がわからなくて困つて居ます何卒御存じの方はお知らせ下さい、いつか江戸堀へ轉宅なすつたとも承りましたが……（播磨赤穂町上假屋田淵祥子）

○御尋ね致します森本のぶ子樣其後は失禮許して終ふは上京なさいましてよ淋しゝつてよ御身御大切にネほんとうに御懐かしいのネ歸國の上は一層はらからの交りを願ひますよ。（奈良縣高市郡高取町湯川政子）

○ホアイトローズ樣御同情下さいましてうれしう存じましたわ貴女もたまされたお一人だつてねほんとに酷い方もたくさんあるのね、私かなしくて仕方がないわ、私大勢の方に御交際願つたら、たま〳〵お返事下さる方もあるのでもそんな方一時的よ、度々こんな目にあつてるのだからこりましたわ、でも貴女の樣な御同感の方とは永久にお交り致したいの不束者ですが何卒お願ひ申ますよ（讃岐白萩）

○靜岡の壽賀子樣六月號で和歌拜見致しました御同名で何んとなく御なつかしいわ靜岡の田舍者ですが御交際願ひます（高知市種崎町山崎壽賀）

○安木はる子樣へ夢二畫集御不用のよし私の故紅葉先生の多情多恨と御交換遊ばしては下さいませんか、御返事なければもうだめだと存じて居りますからはやく御かへしちやうだい失禮をもかへり見ずとりいそいで……（大阪北區澤上江町氏神西、中島つね子）

○夏子樣先日は御手紙ありがとう御座いました、まあ東京の御話しおもしろく拜見致しました、そして貴女の御實家は中洲のミドリかと思つてましたが、ちがつて居りましたつてね……只今は朝倉の方と

かに御轉居遊したのですか其後あの方より御手紙がまおりました、ほんとにいけない方です事早速返事差上げますつもりでしたが、ケシインのため東京本郷まではあきらかですがあとの字がさつぱりわかりませんので此誌上にて御手紙の御禮致します、此上とも親しき御交際の程をオフゼバレー樣妾も貴女と同感よ不束ながら(住吉村花園建部畏久子)○御なつかしきリリーもへたな横好なのでハーモニカに趣味を持て居りますの何卒此の可憐な姿と淸き御交際を永久に願ひます レター頂戴なおよばずながら妾も差し上げ申しますから(東京深川區東元町一 鈴木美喜子)○金澤むらさき女樣 おなつかしう存じます、貴孃を知つて居られる友人から御姓名をも聞きました私も御地の高等女學校を了へて此草深き里に女子文壇を友として遊んで居ります どうぞ御交際遊ばして下さい 尙其地の誌友の方方も相變らず御交りを願ひます(能登國鹿島郡能登部村近江加能惠)○秋田の小川琴子樣熊本の澄子樣度々レター下さいまして有難うどうぞ誌上で御交際をね 茨木の初子樣非常の御無沙汰ね私誰れたか御わかりになつて?(仙臺ＵＴ子)

持つてゐる書物
讀みたい書物

○御願ひ申した歌集など御貸し下された方にあつく御禮申しあげます さて私のところに東京音樂學校編纂の中等唱歌といふのがありますが不要ですから小さい言海ととりかへていたたきたうござ いますどなた樣とでも(西多摩郡小宮村森屋方よし)

紹介

▲注意 此欄を見て雇ひたき方、雇はれたき方、何れの人も本社紹介係宛に往復ハガキで問合せあれば、住所本名を詳細にお答へすべし、其後は直接双方に於て往復の事、本誌掲載は凡て無手數料(記者)

【應ずる方】

一七　群馬　月見草
年齢　十六歲
學歴　高等小學卒業
希望　神田區内の學校に通ひたき故、女書生として學資を支給し下さる家に行きたし

一八　芝　佐藤
年齢　二十三歲
學齢　戸板裁縫學校卒業
希望　東京市内中流以上の家庭に裁縫方として雇はれたし

一九　常陸　なでしこ
年齢　十八歲(初奉公)
略歴　高等小學校卒業後私立裁縫所に通ふ
希望　東京市内中流以上の軍人又は醫師の家に小間使か仲働きに雇はれたし

二〇　廣島　あや子
年齢　二十歲
略歴　高等小學校卒業後、某女學校二學年修了、禮式、生花、點茶の心得あり
希望　東京又は京都の中流以上の家庭に小間使として家政見習ひかたぐ雇はれたし

二一　兵庫　そよ枝
年齢　十八歲
學歴　高等小學校卒業
希望　行儀見習ひと、少しは勉强を許さる子供ある家庭に雇はれたし、目下某家に奉公中

二二　能登　たづえ
年齢　二十一歲
略歴　高等女學校卒業、目下小學教員
希望　體操學校又は美術學校に入學したき故女書生として學費支給下さる家なきや

二三　吉備　一女
年齢　十九歲
略歴　高等小學校及專修學校卒業、高等女學校技藝科二年修了
希望　東京市内の華族に行儀見習ひとして附添若しくは小間使として雇はれたし但し少しは勉强を許されたし

【求むる方】

四　神戸　靜子
一免狀を有する看護婦入用
一患家へ派遣せしむ
一寄宿舍あり

▲編輯通信

○出水に就いて　今回の出水に就いて、各地の交通機關に障害を生じた折柄、恰かも本誌投稿の締切前後に相當しましたから、前月に限り特に投稿締切日を繰延べて、二十日としました郵便物は殆んど平常に復した後ですから、投稿諸孃にも御安心を願ひます。

『今の婦人』に發表する　特別交換

毎號本誌の誌友倶樂部で圖書、繪はがきなどの交換が行はれてゐますが、中には横着な人があつて、取りつ放しにするので、往々其不正を記者に訴へられますけれど、此欄は諸孃の爲に解放してあるので、記者も其制裁には少し困るのです、各自に公徳を重んじて、誠實にやつて頂くより外ないのです、處で増刊『今の婦人』に限り確實なる交換を行ひたいと思ひますが、何うしても或る制限を立てないと確實に行へませんから左の方法を設けました。

一、交換．記者の指定したる書物、雜誌、及び繪葉書に限る

一、交換したいと思ふ者は、記者の指定したる品名の中から、持つてゐる物と、見たい物とを選み出すこと

一、持つてゐる物は持つてゐる物で別に書き見たいものは見たい物で別の紙に書き、何れにも住所姓名を明かに書き添えること

一、持つてゐる物も、見たい物も書く場合には多少を問はないが、成るべく最も見たい物は區別して置く方が便宜である

一、記者は持つてゐる物と、見たい物とを調べた上で、出來得る丈け双方の滿足を計るやうにして、甲者と乙者の交換を紙上に明示すること

一、紙上に發表されたる人は、双方とも誠意を以て直ちに交換を實行すること（萬一實行せざる時は相當の制裁を加ふ）

一、記者の指定は左の如し（今回は指定以外の物は無効とす）

書籍　不如歸　思出の記　寄生木　一葉全集　小公子　虞美人草　鶉籠　吾輩は猫である　三四郎　夢二畫集（春、夏、旅、花）藤村集　藤村詩集　春　破戒　みだれ髪　舞姫　夢の花　常夏　佐保姫　自然と人然　紅葉全集　二葉亭全集　女流俳句集　響花袋集（一、二）　青果集　紅塵　己が罪　鏡花集　金色夜叉　魔風戀風　名著文庫（冨山房發行　書名を記す事）　覺めたる歌　相聞　別離　收穫　煤烟　男女と天才　食道樂（春、夏、秋、冬）　通俗作文全書（博文館出版、書名を記す事）　二十八宿　花守　花守日記　あめりか物語　病間録　新約物語

文學入門　女學生訓　新女大學

雜誌　女子文壇　秀才文壇　婦人世界　女學世界　婦人畫報　婦人くらぶ　文章世界　早稻田文學　スバル　趣味　新小説　新潮　文藝倶樂部　創作（發行年月と號數を明記すること、増刊は其名を明記すべし）

繪葉書　各地名所（一組ならば一組、一枚ならば一枚を明記し、併せて地名も必要なり）　花　寺院　海　山　美人　船來　紀念スタンプ附（何々の紀念と書くこと）　美術　公園風俗　女學校　肉筆水彩

一、右申込者は『今の婦人特別交換』といふ題を忘れぬやうに附けて置くこと

一、投稿締切は拾月拾日とす

餘興課題　我家の動物

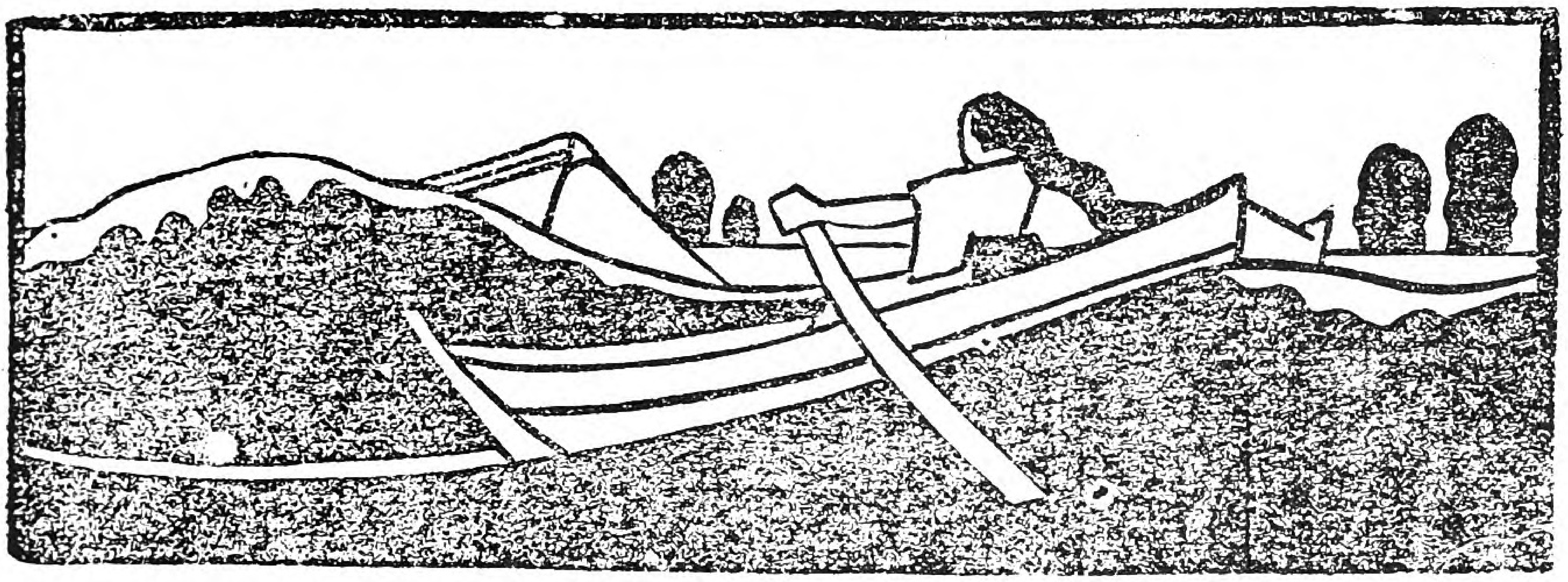
犬、猫、鷄、牛、馬、豚、兎、南京鼠其他一切の家畜に就いての記事を募る、文章は十六字詰二十行まで、締切は本月十五日、懸賞は例の通り（因に云ふ、お祭は本欄に發表せり）

○黒百合のつゞき　横瀬夜雨氏の黒百合の續稿は、紙面の都合で次號に載せます。

○寫眞　本欄挿入用の風景又は風俗等の寫眞を募る　誌友諸孃の寫眞も盛んに寄贈を乞ふ、逐次紙上に揭出します。

○今の婦人　第四増刊『今の婦人』原稿締切は本月二十五日ですから、氣を付けて下さい、今回も範圍は廣いのですから、書かうと思ふことは何でも書いて下さい。

○塔　其後又各地の諸孃から異つた珍しい塔を送つて下さいましたが、紙面の都合で次號の紙上に報告します。（醉茗）



洪水記

一記者

水の出花

今回の洪水は、八月七日頃から始まつてゐた、七日には群馬、埼玉の二縣に早くも出水を報じた。

八日には東海道濱松以東に大雨あり、九日に渉りて諸川一時に溢水し、九日午前八時頃より東海道線の汽車は上下とも不通となつた汽車は静岡と濱松との間の各驛に停滯した、つまり此區間の出水は最も猛烈を極めた、而かも今回の大洪水の率先者であつた。

九日は東京には未ださしたる出水もなかつた、市内極く低地の一少部分に浸水した位なものであつた。連日の降雨は、十日になつて更に大豪雨を東京方面に降らした、其結果、全市は一時に災害を蒙つた。十日の午後には六郷川決潰して、川崎大森邊は一帶の泥海となつた。

夜に入つては市内に崖壊れが多く、低地にはどしどし浸水する、就中早稲田を流るゝ舊神田上水が俄に増水して、下戸塚側の堤防潰れ早稲田、鶴巻町、山吹町一圓に浸水し下流の江戸川筋へ氾濫した。

刻一刻、東京を包圍して、洪水の範圍は擴大せられた、十一日は晴天なるに拘はらず、荒川筋は頓に水量を増し來りて、須崎町堤防決潰し、次で綾瀬堤も決潰した、向島は忽ち水中に沒した、千住は云ふに及ばず、餘波は遠く本所、淺草、下谷に及んだ。

十二、十三、十四と各日に渉つて水は少しも減じな

い許りか、次第に本所、深川、龜戸方面に押寄せ來り深きは軒に達し、多くは床上數尺と云ふ大慘狀を呈した。

東京の北、及び東は宛然一の大湖水を現出した。一時、避難民三十萬人と注せられた。

▲汽車中の生活●●●●●●　記者の一知人は、僅か一時間餘りのことで東海道の洪水に遭ひ、汽車の中で二晝夜を暮らした、町へ降りた處が泊る家も往來も水が浸してゐる、遂には水流が汽車の中までも及んでくる、窓から見てゐると、田舍の家が幾軒となく繫がつて大水の中を流れて行く全く生きた心地がなかつたさうである。

崖壞れ

都會としては土地に高低の多い東京市のことだから自然石垣、懸崖も多い、大雨ある毎に多少の崩壞を見るが、今回十日の夜より十一日拂曉にかけての大崩壞は、近年稀なる出來事である、而かも神田明神、日枝神社（山王）、愛宕山などの有名な神社の崖が壞れたのも不思議である。

愛宕山裏の崩壞に就いては、本誌に寄稿せらるゝ尾島菊子女史も遭難者の一人であつて、當時の模樣は本欄の談話に依つて窺ふことが出來る。

山王の崖崩れの爲に敢なき最期を遂げた梅村氏も、文學に緣故のある人だ、元來は通俗佛敎の傳導者であるが、俳句を嗜み、雅號を宇皎と云つて俳句集の著述もあり、『きさらぎ』といふ小雜誌を發行してゐたこともあつた、溫厚の靑年であつたが惜しい事をした。

次に崖壞れの爲に命拾ひをしたのは『煤煙』の作者、文學士森田草平君である、君は嘗て本鄕丸山福山町に居た、其家は西片町の高臺の下で、大雨の時には危險らしく思はれたが、果して其家も今回全潰れとなつた君は他に轉じて居た筈だが、或は居つたかも知れない併し危險を慮つて家人は早く逃出したから君も勿論無事であつた。此家は元來故樋口一葉女史の舊棲であつて、晩年の作は多く此家で執筆した、臨終を遂げたのも此家であつた、女史の歿後、一葉會は屢々此家に開かれた。一朝、崖壞れの爲に閨秀作家の遺蹟を埋沒して了つた。

▲下は泣き上は笑ふ●●●●●●●●　四谷鮫ヶ橋谷町一丁目の貧民窟は高さ六間の小崖を隔てゝ四谷仲之町の富家と境して居る其崖は降雨每に崩落して貧民を壓殺し人家を毀ち一昨年の九月にも二ヶ所崩壞して三人を壓殺し今回も二ケ所崩落して二人を壓殺し家二軒を土中に埋め數軒を押し曲た其一つは齋藤海相の新築中の住宅の崖で幅七間許り落ち他の一つは蜂須賀侯爵の崖で貧民の家を捻つた樣に押し曲げたのである崖下では泣つ喚きつして居るのを崖の上から華奢な婦人がキヤア〳〵と面白半

分に見物して居る

溫泉の埋沒

東京では崖壞れだが、地方では山壞れである、山岳崩壞は出水に伴つて各地に起つた、其爲に家を壓し、人命を損した數も尠少ではない。

就中、尤も悲慘なるは宮城縣玉造郡溫泉村地方の山崩れで、十三日の夜暴風雨の爲め山岳破壞し、溫泉地は土中に埋れて、壓死者約二百名を生じた、多くは其地方の人であらうが、中に福來文學博士の令夫人も交つてゐたが幸ひにも危難を免れたさうである。

箱根の各溫泉も一時危急に迫り、人心恟々たるものがあつた、十日の夕方、溪流一時に暴溢して、山上より濁水を落下し來り、みるく\湯本福住樓を流失した、六十餘名の浴客は殆んど身を以て免れたが、日本橋の紳商川尻寶岑氏夫妻は遂に溺歿した。其他大小の山崩れは數ふるに遑がない。

▲筑波の崩壞　男體、女體と並び立つ筑波の頂上は、男體の方が數十間壞れて山の容姿が變つたさうだ。

▲碓氷の崩壞　碓氷峠も崩壞した個所があつて、近藤廉平氏の別莊は埋沒し、子息は壓死す、貨物列車埋まり、熊の平停車場も埋沒して跡方なし。

▲御嶽の崩壞　甲州御嶽金櫻神社附近も一大鳴動と共に崩壞し、華表倒れ、家流る、御嶽の奇勝、愈よ奇。

天明以來の洪水

江戸時代の變災史は、火事を以て最とし、地震、洪水之に次ぐ、大洪水は天明六年の夏にあつた、氣候寒冷にして七月十日より霖雨つゞき、十三四日頃には深川、本所、下谷、淺草、千住、向島一帶に出水し、小石川、牛込の一部低地も浸水した、千葉、茨城等の近在は勿論である、水量も略今回の出水と似てゐる。

江戸の火災は殆と歷史になつた、大火災は漸く豫防し得るやうになつた、治水の歷史は今日再び之を繰返さなければならぬことゝなつた。

關西地方で出水難の木曾川、淀川は改修後大いに治水の功が擧つた、坂東太郎の稱ある利根川も目下改修期中である、獨り東京に注ぐ荒川は未だ改修の手を經ない、若し隅田川を其上流(乃ち荒川)に於て制限し、別に新川を堀るか、其水を江戸川に放流するかしたら東京の水難は殆んど減滅することが出來るさうだ。

▲後世の歷史家　明治四十三庚戌歲初夏夜々彗星現はる、光芒天半に曳く、晩夏八月東海道東山道大洪水、東京市中浸水軒に達す、諸國死

傷約三千物價騰貴すといふやうなことを、前世紀の歴史家なら書く處だらう、後世の歴史家は如何。

市中地勢の高低

他の都會と違つて、東京は隨分土地に高低がある、今最近の其筋の調査になつた東京市の最高低地表を左に示す。

區名	最高地	海拔	最低地	海拔
麹町	麹町一丁目	一一二尺	飯田町堀留	一二尺
神田	駿河臺袋町	七七	佐久間町	一三
日本橋	本石町二、三丁目	一三	濱町二丁目	九
京橋	尾張町 南傳馬町	一九	靈岸島町	九
芝	三田功運町	九三	汐留町	一〇
麻布	材木町	一一二	芝森元町	一九
赤坂	青山北町	一二〇	溜池、葵町	一七
四谷	鹽町一丁目	一二〇	本村町 鮫ヶ橋	五五
牛込	若松町	一二九	新小川町	一五
小石川	巣鴨宮下町	九〇	舩河原河岸	一六
本郷	森川町	八四	湯島三組町	一八
下谷	上野公園	七〇	山伏町	八
淺草	諏訪町	一二	光月町	八
本所	兩國橋詰	一五	柳島町 梅森町	五
深川	相川町	一一	千田町	四

東京でも山の手と云ふ方面は高く、下町といふ方面は低いことは、表を見るまでもなく分つてゐるが、右の表に據ると、市中の最高地は牛込若松町の海拔百二十九尺で、最低地は深川千田町の海拔四尺である、最高地の若松町は極く少部分である、四谷鹽町、赤坂青山の高地は面積が廣さうである、麻布、麹町、三田など高いのも然もあらうと思ふ、淺草、本所、深川は最高地ですら十二三尺だから自然浸水の害も大きかつたのであらう。

出水御見舞

今回の洪水は區域が廣いだけ、本誌愛讀者の諸嬢の中にも、遭難された方が澤山であらうと存じます、社員一同滿腔の同情を以て、是等遭難の諸嬢及び其御家族方に、御見舞を申上ます、敬具

九月二日　社員一同

▲●●●●●● 婦人團體の活動　東京稀有の大洪水に警官も、市吏も、區吏も、市民も新聞記者も救護其他に大活動をなし、遂に軍隊の運動とまでなつたが、其わりに婦人團體の活動は機敏を缺いた、婦人矯風會が慰問を初めたのは、洪水後五六日のことであるが、それすら早い方で、愛國婦人會の如きは、なほ後に義捐金を募集し初めた。

▲前田侯爵家●●●が金一萬五千圓を救恤費に出したのは、恐らく義捐金の筆頭であらう。

地方の慘狀

如何ほど水害の慘狀が甚しくても、東京に住んでゐる者は未だしも、不幸中の幸ひである、一度地方の狀況を聞くと、慄然として天然の威壓力に驚愕せねばならぬ、東京は浸水家屋の夥多しきに反し、人命は死者二十七名傷者四十二名の損

害に過ぎぬ、地方の統計を見ると宮城縣が三百十八名群馬縣が二百四十五名、埼玉縣が百九十六名の死者を出してゐる、千葉縣の七十二名、靜岡縣の五十五名之に次ぐ、各水害地を通じて合計一千〇六十一名の死者がある。

水は強く、家は脆く、村と村とは離れ、食糧には乏しく、救護の力普からず、數日に渉つて水退かず、地方農民の困苦窮狀は實に同情すべき極であらう。

▲一府十七縣　今回の洪水に罹つた地は東京、神奈川、埼玉、群馬、千葉、茨城、栃木、山梨、宮城、福島、岩手、山形、秋田、長野、新潟、愛知、鳥取各府縣である。

行動郵便船

市内浸水地の郵便物は、初め水中又は舟中から竹の先に挿んで配達してゐたが、水嵩は増るばかりで、容易に減じない、受取るより出すに困る、そこで遞信省では行動郵便船といふものを一時浸水地に實行した。各一艘毎に、吏員二名、集配人一名乘込み、郵便切手、葉書などを卽賣し、電信の賴信紙も備へ、小包郵便の引受もする、墨汁及び文房具も具へてあるから、其場で郵便を書いて出すことが出來るので、水難地の市民は大いに便宜を得た、船には旗を揭げ、チリンチリンとリンを鳴らしてゆくので、彼方の廂から郵便屋さん、此方の屋根の上から郵便屋さんと呼ばれて、一時は大繁昌した。

▲暗黑の東京　電氣の發電所、瓦斯の供給所とも浸水して、機械に故障を生じたため、電氣も、瓦斯も、一時送量を減じたり、又全然供給を絕つたので、只さへ洪水の爲に悽慘なる光景を演出しつゝある夜の東京市は、燈火暗く、光明絕えて一層荒凉の氣を感ぜしめた。

市中の混亂

十日頃から十四五日頃までの市中は、混亂に混亂を重ね、水難地の武裝するに至りては宛として戰場の觀があつた。

上野の山の彼方、大川の對岸一帶は、全然百鬼夜行の有樣である、水見舞の人は皆足袋裸足に、尻端折りの四五尺の竹切や棒切を手に手に携へて、水中の探り歩きの用意となし着物は濡れても闘はぬやうな木綿の浴衣か、又は合羽を被り、吾一と浸水地さして押出してゆく、火事のやうに景氣は好くない、水といふと何となく陰氣くさい、そして火事よりも一層悲慘の感が痛切である。

投稿規定

▲原稿は一切女子文壇社宛に送ること▲原稿には女子文壇原稿の文字を書添えて下さい▲文字は能く分るやうに書くこと▲小説と詩と短文には振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は同字詰三十行以內、日記、論文も同上、書簡文は同字詰二十行以內、詩は行數制限なし、和歌と俳句とは一人一首限り、短文は十六字詰七行限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、凡て半紙、原稿紙、罫紙等に限る▲圖畫は二寸に三寸の大きさにて蒔き日本紙に限る▲投稿は凡て女子に限る▲定期號の投稿は毎月十五日堅く締切る

○女子文壇投稿各種懸賞定額

（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲特別賞金五圓

▲甲種（短篇小說、散文）
天賞金參圓。地賞金壹圓五拾錢。人賞金七拾錢。

▲乙種（家庭日記、論文、書簡文、詩）
天賞金貳圓。地賞金七拾錢。人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、圖畫）
天賞金壹圓。地賞金五拾錢。人賞金貳拾錢。

◎各種とも金壹圓以上の價格の當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す。
壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◎賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽窃したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

○定期發行分

一冊（一回分）定價金拾五錢…郵税一錢五厘 計金拾六錢五厘
三冊（三月分）前金四拾三錢五厘……同四錢五厘 計金四拾八錢
六冊（半年分）前金八拾四錢……同九錢 計金九拾三錢
十二冊（壹年分）前金壹圓五拾六錢……同拾八錢 計金壹圓七拾四錢

▲毎月一回（一日定期發行）

○臨時增刊分

一冊（一回分）定價金貳拾錢…郵税一錢五厘 計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）前金三拾八錢……同三錢 計金四拾壹錢
四冊（壹年分）前金七拾二錢……同六錢 計金七拾八錢

▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

○定期發行及び臨時增刊とも全部――十六回

四冊（三月分）定價金六拾三錢五厘…郵税六錢 計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）前金壹圓二拾二錢……同拾貳錢 計金壹圓三拾四錢
十六冊（壹年分）前金貳圓二拾八錢……同二拾四錢 計金貳圓五拾二錢

▲申込注意（振替にて拂込む時は誌代の外に壹錢登記料増すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割増（收入印紙謝絶）、凡て前金拂込に限る。

明治四十三年八月廿五日印刷
明治四十三年九月一日發行

定價金拾五錢

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區宗十郎町十五番地　松本魁
印刷所　東京市京橋區宗十郎町十五番地　國文社

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

女子文壇 定價金拾五錢 郵税壹錢五厘